

漢詩からみた平安時代初期の庭園 ―特に嵯峨朝を中心として―

廣安 春華

【目次】

序章

第一節 研究の背景と目的	2
第二節 研究の構成と方法	4

第一章 平安時代初期の庭園をめぐる諸相

第一節 自然環境	
第一項 平安京の地形	6
第二項 気候と天災	6
第三項 京都盆地の植生と庭園植栽	7
第二節 政治情勢と社会状況	8
第三節 邸宅と庭園	10

第二章 漢詩からみた嵯峨朝の庭園

第一節 神泉苑の庭	13
第二節 冷然院の庭	48
第三節 嵯峨院の庭	60
第四節 河陽離宮の庭	70
第五節 淳和院の庭	100
第六節 閑院の庭	115

第三章 考察

第二節 漢詩からみた「平安京内の庭」と「平安京外の庭」	
一 平安京内の庭	
― 神泉苑・冷然院・淳和院・閑院の庭―	124
二 平安京外の庭	
― 嵯峨院・河陽離宮の庭―	126
三 小括	127
第一節 漢詩からみた「天皇の庭」と「臣下の庭」	
一 天皇の庭	
― 神泉苑・冷然院・嵯峨院・河陽離宮の庭―	128
二 臣下の庭	
― 淳和院・閑院の庭―	129
三 小括	130

終章

小括	132
----	-----

注釈

	135
--	-----

序章

第一節 研究の背景と目的

平安時代初期の庭園の姿は、未だ解明されていない部分が多い。その原因として挙げられるのは資料の少なさである。平安時代の庭園史研究は主に中期以降の寝殿造系庭園の研究を中心に成果が積み重ねられてきており、本研究が対象とする初期については、文献資料や発掘調査成果の乏しさから、研究が停滞している状況にある。さらに、こうした事情から、平安時代初期の庭園はあくまでも「寝殿造庭園」成立の過渡期の一形態として捉えられるに止まっている。発掘調査によって部分的に遺構を検出した例はあるが、現存するのは嵯峨天皇の京外離宮「嵯峨院」の大沢池（現・大覚寺）と桓武朝に遡る京内離宮「神泉苑」の一部分だけである。また、庭園に関連する文献資料としては、六国史に記載の行幸記録のほかに庭園に関連する漢詩文などがあるとはいえず、漢詩文は、描写された内容について信憑性の懸念があるとして、これまで主要な資料としての利用はなされてこなかった。こうしたことから、平安時代初期庭園の全体における形態や機能について概観はできるにしても、それぞれの庭園の具体的な様子を想定することは困難であった。

こうしたなかで、平安時代初期の庭園に関していくらかでも論じた研究として以下のものが挙げられる。まず森蘊の『平安時代庭園の研究』^一である。森は庭園史の見地から、平安時代を前期（七八六―九六〇）・後期（九六一―一九二）に二分した上で、『作庭記』や『山水並野形図』に記載された当時の作庭法を丹念に読み解き、平安時代庭園の構成・意匠を総括した。森は、前期庭園は寝殿造庭園へと遷移する過渡期であると指摘するも、前期のなかでも平安京遷都後暫くの初期庭園^二の様相についてはほとんど言及していない。また、森は『寝殿造庭園の立地的考察』^三を著し、土地条件と園池配置の関係を検証した。しかし、多くが中期以降に造営された庭園を例に取っており、初期の

例としてとりあげたのは嵯峨天皇の造営した「嵯峨院」のみであった。さらに森は『日本庭園史話』^四を著し、平安時代前期の庭園、なかでも神泉苑、嵯峨院、淳和院を挙げ、文献資料および発掘調査成果をもとに、それぞれの庭園の様相について言及し、平安時代前期の庭園を概観した。その結果、前期には対を伴った寝殿造が常体化してきており、それに伴い殿前に池庭が整備されるようになったことを指摘し、その例として閑院（藤原冬嗣）や河原院（源融）、染殿（藤原良房）の雄大な園池を挙げている。また、小野健吉は「平安時代庭園史の概観と研究の現状」^五のなかで、平安時代前期の庭園は平安京の豊かな水脈を活かし、大規模な池庭が築造されたことを指摘した。なかでも、神泉苑と嵯峨院に着目した「平安時代初期における離宮の庭園―神泉苑と嵯峨院をめぐる―」^六において、神泉苑は渤海の上京龍泉府禁苑を直接のモデルとしながら、実はそのモデルとなった唐長安城の興慶宮を模範とした可能性を示唆し、造営の経緯のなかにも唐風への志向がみられることを指摘している。また、嵯峨院が立地する北嵯峨地域は、東・北・西の三方を山に囲まれ、南が開けた立地環境が平安京と相似することから、嵯峨院自体が平安京における大内裏、大沢池が神泉苑と対応する意識の可能性についても言及した。さらに、飛田範夫は『日本庭園の植栽史』^七を著し、平安時代初期には、園池の岸にシダレヤナギやマツ、場合によってはキク、タケ、タチバナもあり、池中にはハス、アシ、中島にはススキ、園路に沿ってはタケ、シダレヤナギ、築山辺にはマツ、平地部分にはサクラ、アオギリ、建物近くにはナシ、ノイバラなどが存在していた可能性を示した。また、貞観十六年（八六四）に紫宸殿前のウメがサクラに替わった記録を示し、九世紀前半から植栽の国風化が始まった可能性を指摘した。そして、建築史の立場からは、太田静六が『寝殿造の研究』^八を著した。ここでは、詳細な文献資料研究から、個々の邸宅の歴史の変遷を辿り、時代背景と形態変容の相関関係に言及している。最終的には建造物平面の復原を行い、一部の邸宅に関して庭園も含めた復原図を示している。しかし、初期の庭園に関しての記述は少なく、文献資料からうかがえる庭園の様相について検討が行われているにすぎない。以上が、主たる先行研究であるが、平安時代初期の庭園に関しては多くの部分が明らかになっていないことがわかる。

一方で、六国史の記録からみると、平安時代初期は多くの行幸があったことがわかる。行幸で詠まれた漢詩には、庭園の描写があることから、そうした邸宅には立派な庭園が造営されていたことが推察できる。平安時代初期には、神泉苑、冷然院、朱雀院、河陽離宮、嵯峨院など、天皇の離宮が次々と創建されている。特に、嵯峨朝では、上記のうち神泉苑を除く、四邸もの離宮が創建され、しばしばそれらへの行幸があり、行幸に伴って催される詩宴の際に、庭園に関連する漢詩が詠まれている。こうしたことから、行幸先の邸宅の庭園において儀式や遊興などが行われたことが推察できる。すなわち、平安時代初期においても、「庭園」という施設が重要なものであったことは疑う余地はない。

こうした状況に鑑み、平安時代初期の庭園の様相を少しでも明らかにするため、本研究では漢詩を資料として用いたい。前述したように、漢詩はその描写内容の信憑性に懸念がもたれてきたが故に、従来の庭園史研究では部分的に引用されることはあっても、全体的に整理・検討されることはなかった。しかし、筆者は漢詩がこの時代の庭園を研究するにあたって、重要かつ有用な資料となり得ると考える。平安時代初期の漢詩集『凌雲集』の序文冒頭において「文章経国之大業、不朽之盛事……」とある。これは魏文帝曹丕の『典論』「論文」に記された文言で、文学の意義を国家経営に結びつけ、そこに価値と不朽性を見出すようとする経国的文学観である。後藤昭雄は「こうした文章経国理念のもとでは、文遊に列なつての賦詩詠作もそれはそのまま「経国」の行為たり得る。」と指摘する⁹。さらに、後藤は、嵯峨文壇を構成する宮廷詩人らの中には、廟堂を構成する上層政治家も含まれており、宮廷詩人としての詩作も、それが持つ政治的効用性のゆえに、律令官人としての立場からする行為と同質のものとなることを指摘した¹⁰。すなわち、政治と文遊は一見相反する行為に見えるが、その実、嵯峨朝では同等の価値が置かれていたということである。このような状況にあった嵯峨朝の行幸では、天皇と臣下が詩歌を詠み交わす「君臣唱和」と、それにより互いの関係性を確認・補完する「君臣和楽」が実現されていた。さらに、特に嵯峨朝では、皇親貴族によって造営された離宮別業への賦詩の場の拡大がみられ¹¹、そうした多くの詩宴の場で詠まれた漢詩のなかには、詩宴が催された邸宅の個別の庭園や周辺景観が扱われることもあった。以上から、

筆者は平安時代初期に造営された庭園の形態や機能を探る上で、漢詩が重要な手掛かりになると考える。

本研究では、漢詩の読解・検討を中心として、平安時代初期の庭園が個別にどのような形態的・機能的特徴を有しているのかを明らかにする。さらに、立地条件や所有者属性の相違により庭園を分類し、形態や機能にどのような差異があらわれるのかを考察する。以上により、平安時代初期庭園のあり方を明らかにすることを目的とする。

第二節 研究の構成と方法

第一章では、平安時代初期の庭園文化をより多面的に捉えるために、「平安時代初期庭園をめぐる諸相」として、庭園造営の基盤となる平安京内外の自然条件や嵯峨朝の政治社会状況などの時代背景を概観する。第一節・第一項では主に『平安京提要』^{二二}、第二項については北村優季「都の民衆と災害・都市問題」^{二三}、寒河旭『地震の日本史』^{二四}など、第三項については飛田範夫『日本庭園の植栽史』^{二五}、四手井綱英(編)『下鴨神社 糺の森』^{二六}などを参考資料として用いる。第二節では、京都市(編)『京都の歴史』^{二七}、村尾次郎『桓武天皇』^{一八}、春名宏昭『平城天皇』^{一九}、川崎庸之『平安の文化と歴史』^{二〇}など、第三節については太田静六『寝殿造の研究』^{二二}、小野健吉『日本庭園辞典』^{二三}、檀原考古学研究所(編)『発掘された古代の苑池』^{二四}などの文献を参照する。

第二章では、対象とする離宮および貴族邸宅の形態的・機能的特性について漢詩からのアプローチを試みる。漢詩を扱うことについては、これまでその信憑性が懸念されてきた。詩中の描写を以て、庭園の構成や意匠を具体的に描写したものと捉えてよいかという問題である。すなわち、漢詩中には修辭的表現や誇張もあり、描写に対する信用性が問題になってきたのである。とはいえ、漢詩に詠み込まれる内容は庭園の一種の理想像ではあるものの、文飾も含めて一定の実態を背景としていることは確かである。つまり、それぞれの庭園について、漢詩の描写からそれぞれ個別の特徴を読み取ることができたならば、各庭園の実像に沿った理想像を抽出することが可能であろうと考えた。そのうえで、発掘調査成果や文献資料と合わせ考察すれば、概ねその邸宅が「どのような形態的特徴をもち、どのような機能を有したか」が推測できると考えた。具体的研究の進め方は以下の通りである。まず、本研究において対象とするのは、平安時代初期、なかでも嵯峨朝(八〇九―八三三)で利用された離宮・邸宅のうち、関連する漢詩が比較的多く残っている六邸宅、すなわち、天皇の離宮である神泉苑、冷然院、嵯峨院、河陽離宮、臣下の邸宅である淳和院(大

伴親王の邸宅)、閑院(藤原冬嗣の邸宅)である。

これらの対象邸宅に関連する漢詩文の収集については、嵯峨朝に詠まれたものを中心として行う。特に、平安時代初期に編纂された勅撰漢詩集である『凌雲集』(八一四年成立)、『文華秀麗集』(八一八年成立)、『経国集』(八二七年成立)収録の漢詩を主に用いる。その他、必要に応じて、平安時代中期以降に編纂された『本朝文粹』、『本朝無題詩』、『田氏家集』などから引用する(表「序―2―1」)。

第二章の各節で整理・検討を行う漢詩は、以下のとおりである。

第一節 神泉苑の庭園…全三十三首(『凌雲集』十四首、『文華秀麗集』五首、『経国集』十三首、『遍照發揮性靈集』一首)

第二節 冷然院の庭園…全六首(『文華秀麗集』四首、『田氏家集』一首、『本朝文粹』一首)

第三節 嵯峨院の庭園…全五首(『文華秀麗集』三首、『経国集』一首、『本朝無題詩』一首)

第四節 河陽離宮の庭園…全三十七首(『凌雲集』八首、『文華秀麗集』二十首、『群書類従』五首、『経国集』三首、『本朝無題詩』一首)

第五節 淳和院の庭園…全十首(『凌雲集』四首、『文華秀麗集』二首、『本朝無題詩』三首、『本朝文粹』一首)

第六節 閑院の庭園…全十六首(『凌雲集』二首、『文華秀麗集』三首、『経国集』一首)

一首)

以上のように、邸宅ごとに漢詩を収集し、それぞれの漢詩中に詠み込まれた庭園の形態と機能に関連した語句を抽出し、検討していく。最終的には、漢詩を中心に、関連する文献資料や発掘調査成果などを援用しながら考察を加え、対象邸宅それぞれの形態的・機能的特性を明らかにする。なお、それぞれの漢詩の読み下し文と大意については、表「序・2・2」に示す書籍から引用した。

第三章では、第二章の個別の庭園の検討を受けて、二つの観点から平安時代

表 [序-2-1] 平安時代に編纂された漢詩集一覧（黒枠内が本研究で対象とする平安時代前期を示す）

院政期文化 (1086~1198年)	国風文化 (930~1068年)	弘仁・貞観文化 (794~930年)	平安時代の時代区分
後期	中期	前期	
後鳥羽天皇 ←	後冷泉天皇 ←	醍醐天皇 ← 朱雀天皇	桓武天皇 仁明天皇
『法性寺関白御集』 『本朝無題詩』	『扶桑集』 『本朝麗藻』 『江吏部集』	『性霊集』 『都氏文集』 『菅家後集』 『菅家文集』 『田氏家集』	『凌雲集』 『文華秀麗集』 『経国集』

初期の庭園の在り方に迫る。一点目は、それぞれの邸宅はどのような「立地条件」のもとに造営されたか、という点である。平安京内に構えられた離宮および邸宅として神泉苑・冷然院・淳和院・閑院があり、平安京外の離宮として嵯峨院・河陽離宮がある。庭園は、一般的に立地する場所の地形や地勢などの様々な環境条件により、その構成や意匠といった形態は必然的に変わる。つまり、綿密な都市計画により概ね平坦で河川も整備された京内に立地する邸宅と、自然地形を活かして造営される京外の邸宅との間には形態的な差があるのが当然である。そこで、漢詩における庭園意匠等の描写を通じて、主に立地条件の違いによって出現する形態の特徴について分析し、考察する。

二点目は、それぞれの邸宅について天皇が所有していたか否かという「所有者」の観点である。天皇の所有した離宮として神泉苑・冷然院・嵯峨院・河陽

表 [序-2-2] 本研究において漢詩を扱う際に引用した注釈書の一覧

漢詩集名	凌雲集	文華秀麗集	経国集	菅家文集	性霊集	本朝無題詩	田氏家集	本朝文集	群書類従
小島憲之、『国風暗黒時代の文学』中（中）、塙書房、一九七九年	① 小島憲之（校）、『日本古典文学全集10（懐風藻、文華秀麗集、本朝文集）』、岩波書店、一九六四年 ② 小島憲之、『国風暗黒時代の文学』補篇、塙書房、二〇〇二年	① 小島憲之、『国風暗黒時代の文学』中（下）Ⅰ、塙書房、一九八五年 ② 小島憲之、『国風暗黒時代の文学』中（下）Ⅱ、塙書房、一九八六年 ③ 小島憲之、『国風暗黒時代の文学』下Ⅰ、塙書房、一九九一年 ④ 小島憲之、『国風暗黒時代の文学』下Ⅱ、塙書房、一九九五年 ⑤ 小島憲之、『国風暗黒時代の文学』下Ⅲ、塙書房、一九九八年	川口久雄（校）、『日本古典文学大系72（菅家文集、菅家後集）』、岩波書店、一九六六年	坂田光全、『性霊集講義』（平成新訂）、（株）高野山出版社、二〇〇三年	本間洋一（校）、『本朝無題詩全注釈』、汲古書院、年	中村璋八・島田信一郎（校）、『田氏家集全釈』、汲古書院、一九九三年	① 小島憲之（校）、『日本古典文学全集10（懐風藻、文華秀麗集、本朝文集）』、岩波書店、一九六四年 ② 柿村重松（註）、『本朝文集註釈』下冊、内外出版、一九二二年	小島憲之、『国風暗黒時代の文学』中（下）Ⅰ、塙書房、一九八五年	

離宮があり、臣下のものとしては淳和院と閑院がある。天皇の離宮と一口で言っても、神泉苑のように造営当初から一貫して天皇専用の離宮であったものから、冷然院のように嵯峨天皇によって造営され、その譲位後に後院となったものまで、その在り方は様々であるが、どの施設も天皇の居所として相応しい建物や庭園が備えられていたと考えられる。また嵯峨朝では、しばしば臣下の邸宅に行幸があり、その際には納涼や叙任の儀式などが行われた。行幸とそれに伴う宴の場となった臣下の邸宅には、どのような形態と機能の庭園が造営され、どのように天皇を迎えたのかを検討し、さらに両者の間にはどのような違いがあったのかを考察する。

結論では、第一章の概要を示したうえで、二章・三章で得られた成果をとりまとめる。さらに、本研究の課題と今後の展望について述べ、結びとする。

第一章 平安時代初期庭園をめぐる諸相

第一節 自然環境

一 平安京の地形

平安京は、延暦十四年(七九四)、桓武天皇が長岡京から遷都した都城である。京都盆地を中心に山背国葛野、愛宕両郡にまたがり、京都盆地北部の東西四・五キロメートル、南北五・二キロメートルの範囲に造営された。

平安京が立地する京都盆地は、明瞭な断層を有する地溝性盆地である。北から西を丹波高地の北山と西山、南西を男山丘陵、北東を比叡山とその南に東山、南東を笠置山地、南を奈良山丘陵に囲まれる。また、盆地内には、大阪湾へ注ぐ淀川水系の支流河川が流下する。高野川と加茂川が合流して鴨川となり、平安京域の東端を南流する。丹波高地に水源を持つ桂川は平安京の西南方を流下する。右京、すなわち平安京の西半部を流れる紙屋川・御室川などの小規模河川は桂川へ注ぐ。また、平安京南方では、木津川、宇治川が鴨川と合流して淀川となる。平安京域における各河川の流域別面積比率は、鴨川が約六割、桂川となる右京の小河川が約四割である。右京域においては小河川の流域面積が八割を占めている^{二四}。盆地には周辺山系から多くの河川が流れ込んだが、その中でも鴨川は繰り返し洪水被害を引き起こし、流域に扇状地帯が形成された。従来は、鴨川の治水のために、遷都時に河道を人工的に東側に付け替える工事が行われた、とする説が主流であったが^{二五}、現在では、鴨川は当時からほぼ同位置を流れており、河道すべての領域を瀬替えたのではなく、一部に人為的な河道を掘り堤防を築いた、とする説が有力である^{二六}。

平安時代前期の洛中には自然流路や池、湿地などが残っている部分が多かりあり、この傾向は右京の西部に顕著で、北辺から三条にかけては木辻小路より東側、四条以南は馬代小路あるいは道祖小路より東側しか市街化していなかつ

た。右京九条三〜四坊にいたっては条坊すら設定されていなかった、と推定されている^{二七}。氾濫原にあたる条坊が使用されなかったのは、地形条件が悪い上に、たびたび起こる洪水のために、当時の土木技術では開発が不可能であったためである^{二八}。また、平安京は盆地の北端に位置し、傾斜も緩やかであるため、大雨や台風などの直接的な被害は比較的小さいものの、氾濫時に排水不良により京中に水が溢れ留まってしまいう状況が大きな被害を生んだ^{二九}。一方で、複合扇状地であるが故に、それぞれの扇状地の地質のvariety目や土質の差により、地下水が湧出する箇所があり、それを「泉」や「清泉」、力強く噴出するものを「飛泉」と呼ぶなど、湧水が非常に豊富でもあった^{三〇}。

以上のように、平安京は東・北・西の三方を山に囲繞され、河川の流域面積が大きい扇状地であったため地下水量もかなり多かった。こうした環境特性が、都城の開発をはじめとして、庭園の意匠・構成にも大きな影響を与えていたものと考えられる。

二 気候と天災

嵯峨朝を含む八〜十一世紀には日本列島の気候は全体として温暖化したと推定されている。山本武夫は九〜一〇世紀の宮廷の花宴および観桜日記録の記事から御宴の平均日を算出し、平安京における当時のサクラの満開日は現代京都よりも約五日早かったことを指摘した^{三一}。これは、当時の三月の平均気温が現代よりも、一〜一・五度高いことに相当する。『延喜式』によると、平安の最盛期、盛夏には一日あたり約八〇〇キログラムの氷が使用されていたこともあるという^{三二}。しかし、こうした気候変化は人々の生活に大きな影響を及ぼすこととなる。まず、豪雨の発生頻度が高くなり、降雨の多い地域はより量が增加し、少ない地域はより減少した。また、五〜九月の降雨量が減少し、渇水にさらされることとなった。そして、気温上昇により稲作の北限は上がったが、南部は高温障害を受けた。その他にも、害虫の発生回数の増加や水田雑草の活発化、作物病害の増大などが挙げられる^{三三}。記録上において、七世紀末〜八世紀には干ばつ被害、九世紀後半には長雨被害が増大している^{三四}。例えば、

平安京で度々発生した大風や洪水被害は、鉄砲水や地滑りなどの大規模なもの
はなかったが、京中に水が溢れて溜った状態がつづくことで、民衆の生活再建
がままならず、飢えなどの被害を拡大させる結果となった^{三五}。

また、平安時代初期は、火山噴火や地震などの災害が多発した時期でもある。
弘仁八年（八一七）末、京都において有感地震が三度あり、翌年七月には北関
東を大きな地震が襲った。『日本後紀』には「是月。相模・武蔵・下総・常陸・
上野・下野等國地震。山崩谷埋数里。…（後略）」と記録されている。これに
よると、関東六ヶ国で大規模な山崩れが発生し、多数の圧死者を出したことが
わかる。埼玉県、群馬県では、この地震に伴う断層、地割れ、噴砂の遺構が広
範囲にわたり確認されている。さらに、淳和朝においても地震が頻発するこ
となる。天長五年（八二八）から京都において群発地震が始まり、連日大震、
余震が続き、年間四十三回にも及んだ。大きな被害を出すことなく、翌年には
おさまったが、天長七年一月には出羽国秋田町で大地震が発生し、秋田城の大
部分が倒壊し、城内の家屋も倒れ、多数の死傷者が出た。出羽国では前年から
疫病が猛威をふるっており、この大地震が追い打ちをかけた形となった^{三六}。
また、天長九年五月には伊豆国で大噴火が起こった。噴出物は深い谷を埋め、
高い巖を砕いて、二〇〇町くらいの平地が造り出されたというから、伊豆半
島の陸地部分の噴火であると推定されている^{三七}。

以上のように、平安時代初期、特に嵯峨・淳和朝は度重なる天災に苦しめら
れた王朝であった。古代、こうした天災は天皇の資質に起因するものであると
考えられており、嵯峨天皇は弘仁九年の北関東の地震の後、諸国の仏寺の祈禱
や免税処置の拡大など、さらなる徳政を敷き、王権の保持を図っている。なお、
仁明天皇の即位とともに、先の王朝まで京都で頻発していた地震は徐々に小さ
まったことが記録からわかっている^{三八}。

三 京都盆地の植生と庭園植栽

京都盆地の植物相の変遷は、深泥池の調査^{三五}から以下の時期を経てきたと
推測されている。すなわち、針葉樹林時代…交代期…コナラ亜属時代…交代期

…エノキ時代…アカガシ亜属時代…マツ時代の全七時期である。最後のマツ時
代とは、人間活動、特に焼畑農業によって従来の森林が破壊された結果、先駆
植物であるマツ類が増加した時代を意味する^{四〇}。平安京遷都以前の京都盆地
における具体的な自然植生については不明な点が多いが、ニレ科樹木を主体
にシイやイチイガシを交える樹林、つまり現在の「糺の森」に近い植生であつ
たと指摘する研究もある^{四一}。その理由は、ニレ科樹木は、洪水後に裸地とな
った氾濫原によく育ち、地下水位が高くても耐えられる先駆植物であり、河川
が集まる京都盆地の大部分が氾濫原であつたと仮定すると、平地ではニレ林が
成立と衰退を繰り返していたと考えられるからである。さらに、洪水時に水が
つかないやや高い場所や、乾燥しやすい場所ではアカマツが先駆的に繁茂し、
ニレ科の侵入を妨げ、アカマツ林を形成した可能性も指摘されている。

また、平安時代初期の庭園植栽については、飛田範夫『日本庭園の植栽史』
^{四二}に明る。飛田は、園池の岸にはシダレヤナギ・マツ・キク・タケ・ミカン
類、池中にはハス・アシ、中島にはススキ。園路に沿ってタケ・シダレヤナギ、
築山周辺にはマツ、平地部分にはサクラ・アオギリ、建物近くにはナシ・ノイ
バラといったように各所に見所となる植栽が施されていた、と指摘する。また、
嵯峨院や平安京右京三条三坊三町では、発掘調査に際して植物遺存体の分析が
実施され、これらのデータをもとに、仲らによって寝殿造庭園の植栽特性につ
いて検討が行われた^{四三}。嵯峨院では、遣水の堆積土の第二層（平安時代初期）
から、キイチゴ属の核、スモモの核、クサギの核、ムラサキシキブの核、カジ
ノキの核、アカメガシワの種子、ブドウ属の種子、タラノキの核が検出されて
いる。また、平安京右京三条三坊三町では、一〇世紀初頭までに生育していた
と考えられる植物としては、針葉樹ではモミまたはツガ属、ヒノキ、常緑広葉
樹ではカシ、クス、落葉広葉樹ではナシ属、キイチゴ属、ウメ、スモモ、モモ、
サクラ亜属、センダン、エゴノキ、クサギ、ガマズミ、ゴマギ、ハンノキ、ナ
ラガシワ、ムクノキ、エノキ、クワ、カジノキ、サンショウ、イヌザンショウ、
カラスザンショウ、アカメガシワ、カエデ属、ブドウ属、ムクロジ、サルナシ、
マタタビが確認されている。

京都盆地本来の植生が庭園植栽にどこまで影響を与えたかは邸宅の立地や

地勢などにより千差万別であろう。しかし、仲らが指摘するように、嵯峨院のように平安京外に立地する離宮などでは、周囲の自然植生を庭園景観に積極的に取り入れて庭園が造成された可能性が高いと考えられる^{四四}。

第二節 政治情勢と社会状況

延暦十二年（七九三）三月、「幸葛野^一、巡覽^二新京^三。」（『日本紀略』）と記録があるように、桓武天皇は遷都にさきがけて新京を巡覽した。その直後から新都の造営を開始し、ほぼ二十カ月で大内裏の皇居諸殿が落成したことから翌年一〇月には「車駕遷^一于新京^二。」とあるように、新京に遷御した。そして、延暦十三年（七九四）十一月丁丑（八日）条に「詔。云々。山勢実合^一前聞^二。云々。此国山河襟帶、自然作城。因斯勝、可^レ制^三新号^四。宜^レ改^二山背国^一為^二山城国^一。…（後略）」とあるように、十一月には山背国を山城国と改称し、平安京を都と定めた。

遷都後も新京の造営は継続された。平安宮はその造営に三年を費やし、「延暦十五年春正月甲午朔。皇帝御^二大極殿^一、受^レ朝。…（後略）」とあるように、延暦十五年にはようやく新しい大極殿において朝賀式が挙行された。しかし、平安京造営は財政を圧迫し、前後に起きた自然災害の影響も大きく、なかなか工事は完了しなかった。また、三度にわたる蝦夷に対する軍事遠征も加わり、国家の人的、財政的負担は拡大する一方であった。そうした中、延暦二十四年には藤原緒継と菅野真道による徳政相論の末に、桓武天皇は造都事業と軍事遠征の中断を決定した。一方、延暦二十三年三月二十八日条には「授^二大使葛野麻呂節刀^一。」とあり、藤原葛野麻呂を唐に派遣している。その一行の中には、後に中国の最新の仏教を修め、日本の仏教に新たな動きを生むことになる空海や最澄らも留学僧として同乗していた。桓武天皇が在位中の延暦二十五年三月に崩じると、大同元年（八〇六）五月に桓武天皇の第一皇子である平城天皇が即位する。平城天皇は、藤原緒嗣を中心に藤原縄主や藤原園人などを重用し、律令体制再建に尽力した。桓武天皇が軍事と造都に尽力したのとは異なり、平城天皇は国家財政、地方財政の安定に力を注いだ。地方行政改革では六道観察使を設置した。これは参議が六道をそれぞれ担当し地方の実情を把握した上で、地方支配の正常化を目指した機構である。中央官僚機構改革としては、例えば、内侍司の准位上昇、高官を侍従任命などがある。後者は朝廷を小規模化するこ

とで政権の安定を図る狙いがあったと考えられている。また、農政の整備や農具の発達などにより、地方社会は確実に発展し富裕層が生まれる一方で、貧富の差が拡大し民衆の生活は疲弊した。大同四年、平城天皇は風病が悪化したことから同年四月十三日に弟の神野親王に譲位し、親王は嵯峨天皇として即位した。しかし、同年十二月、平城上皇は多数の官人を率いて平城旧京に移り、政治に介入して二所朝廷の様相を呈した。嵯峨天皇は、弘仁元年（八一〇）九月に平城上皇の遷都の命にあらがい、大納言坂上宿禰田村麻呂以下の軍を発して、東国入りを企てた上皇を抑止し、陰謀を企てた中心人物として上皇の寵妃・藤原薬子とその兄の右兵衛督藤原仲成を滅ぼした（薬子の変）。この事件後、嵯峨天皇側は平城上皇の専制的な国政運営の意志を抑え込み、基本的には桓武朝の政策を継承する。こうした嵯峨朝の政治姿勢は、平城朝の改革路線からの揺り戻しでもあり、官僚たちに歓迎された。この後、弘仁年間、さらには嵯峨上皇の崩御までの間は、巨大な権威のもとに政権は安定し、弘仁文化が開花した。弘仁十四年、嵯峨天皇は大伴親王（淳和皇太子）に譲位し冷然院に移り、天長十年（八三三）に正良親王（仁明天皇）が受禪すると、嵯峨上皇は嵯峨院に遷御し晩年を過ごした。承和九年（八四二）八月、嵯峨上皇が崩御し、嵯峨山上陵（現・大覚寺の西北、嵯峨野の北にある御廟山の山頂）に葬られた。その直後、伴健岑と橘逸勢が恒貞親王を擁立し、東国で挙兵するとの密書が暴露され、恒貞親王は廢太子される事件が起こる（承和の変）。これは、嵯峨上皇の崩御による政治的動揺の大きさを示すものと考えられている。

また弘仁年間文化面での隆盛も際立った時代であった。嵯峨天皇は文事を愛し、唐文化を好み、その影響力は宮廷・社会に浸透した。その一例として、嵯峨天皇の主導により精力的な勅撰事業が行われたことが挙げられる。嵯峨天皇の命により『弘仁格』一〇巻、『弘仁式』四〇巻、『内裏式』といった儀式書、さらに漢詩集の『凌雲集』、『文華秀麗集』が編まれ、これらは淳和朝に編纂された『経国集』と合わせて三大漢詩文集と呼ばれている。この勅撰三集に共通するのはどの集にも年少微官の人の作が含まれることで、『文華秀麗集』には女性の作者も現れるといったところからは、嵯峨天皇の領導する文壇の勢いとその成熟が推測できる^{四五}。さらに、平城朝に停止された儀式の復活や内宴・

朝覲行幸などの整備、年中行事の成立を進め、朝廷の威儀を確立した。嵯峨朝を支えたのは政見や文藻に秀でた有能な官人たちである。藤原冬嗣・園人・緒嗣、菅原清公、清原夏野や、皇太子時代からの側近である巨勢野足、秋篠安人、小野岑守などが挙げられる。そうした人物の存在が安定した宮廷を築く力となった。その中には、留学僧として入唐し、その二年後帰国し真言密教を開いた空海もいる。空海は弘仁十四年（八三三）に東寺を給預される以前から詩文を通じて天皇と信頼関係を結んでいた。天皇自身も詩文に優れ、勅撰詩集に多くの作を遺している。嵯峨朝は「文章は経国の大業」という理念のもと、漢詩の全盛期を迎えた時代といえる。また、嵯峨天皇は書にも勝れ、空海・橘逸勢とともに後世「三筆」と称された。その他、五〇人にも及ぶ皇子・皇女を全て親王にすることは国家財政に支障ありとの考えから、源姓を与え臣籍に降ろし、源氏賜姓の例を開いた最初でもあった^{四六}。

つづく淳和・仁明朝においては、嵯峨上皇の影響のもと、政治面、文化面ともに嵯峨朝の諸政策を受け継ぎ、王権の継承も平穩に行われた。しかし、嵯峨上皇が領導し、隆盛を極めた唐風の宮廷文化も、承和の変前後から転換の兆しが見え始める。詩文の世界も例外ではなく、弘仁期からほとんど姿を消していた和歌が復活の兆しをみせ、漢詩全盛の時代から、六歌仙の時代へと次第に推移していくのである。

第二節 邸宅と庭園

平安時代に先立つ飛鳥・奈良時代にも、貴族の邸宅や宮殿などに庭園が造営されたことを示す文献資料、あるいは発掘調査成果がある。まず、飛鳥地方で検出された庭園遺構としては嶋庄遺跡、石上遺跡、酒船石遺跡、古宮遺跡、飛鳥宮跡苑池などがある。この中から嶋庄遺跡と飛鳥宮跡苑池について、その概要をみておきたい。「島庄遺跡」では、蘇我馬子の邸宅やそれを継承した島宮に関連する庭園遺構が検出されている^{四七}。ここで検出されたのは、一辺が四十二メートルの隅丸方形とみられ、幅十メートルの堤がめぐる方形の池である。池の深さは二メートル以上で、護岸は川石をほぼ垂直に積み上げ、池底は扁平な石を中央部分がややくぼむ様に敷く。池の北辺中央部には排水用の木樋が据えられているおり、こうした方池のデザイン及び築造技術は百濟からもたらされたものであると考えられている^{四八}。次に、飛鳥京跡上層遺構内郭の西方にある「飛鳥京跡苑池」である^{四九}。これは宮城の後方に展開する園池としては先駆的で、苑池を構成する水利施設を含めると南北二〇〇メートル以上、東西約一〇〇メートルの大規模園池であったと推定されている。直線形を基調とした苑池は南池と北池にわかれ、南池は底が平らで水深が浅く、池中には噴水施設や中島が築かれていた一方で、北池は水深が深く、傾斜部分では大きめの石を置いただけの仕様であることが明らかとなった。池には水位を調節するための木樋や水路、付属施設として溝や掘立柱列も検出されている(写真「1-3-1」^一、「1-3-2」^二)。

奈良時代を代表する庭園遺構としては「平城宮東院庭園」がある。東院庭園は奈良時代後期の大改修を中心に前期と後期に分けられ、前期の池は逆L字型を基本に多少の出入りを付けた形であったが、後期には出島や入江の連続する複雑な形を持ち、北岸が括れた形状の中島も造られ、護岸は州浜、要所に景石を配し、北岸の築山状の出島には立石を中心とした石組が組まれていたことが明らかになっている^{五〇}。また、平城京の中心部で発掘された「平城京左京三条二坊旧跡庭園」は、八世紀中頃に築造された公的な宴遊施設であると推測さ

れている。竜の形状を模したように蛇行する流れ状の池が検出されており、平石敷きで、水生植物用の植え枿が埋め込まれていた。曲水宴のような季節の行事や海外使節接待の場として用いられたと考えられている^{五一}(図「1-3-3」^三)。さらに、「平城宮左京三条二坊二坪庭園遺構」は長屋王邸跡であると考えられており、敷地の西南隅に園池が築造された。曲池の東北部で洲浜敷が検出され、池の斜面に幅〇・六×一・五メートルで帯状に礫が敷きつめられていた^{五二}。このように、平安時代以前にも、宮殿や貴族の邸宅には意匠性に富んだ庭園が造営されていたことがわかる^{五三}。特に、奈良時代後半になると、出入りの多い複雑な池の形、州浜の手法を用いた汀線の処理、景石や石組、親水施設といったデザインが用いられ、すでに平安時代の先駆をなす意匠を有する庭園が存在していたことがわかる。

では、これに続く平安時代初期、特に本研究で対象とする嵯峨朝前後で造営された邸宅にはどういった庭園が造られたのであろうか。

まず、現在も地上に遺存するものとしては、嵯峨天皇の京外離宮・嵯峨院の園池(現・大覚寺内大沢池)と京内離宮・神泉苑の園池がある。前者は大規模な土木工事により、水を堰き止めて造成された広大な園池である。発掘調査により滝石組(名古曾滝)や遣水なども検出され、現在一部が復原されている。後者の庭園は大きく縮小し、園池の一部が現存するのみである。発掘調査によって池の汀線や船着き場とみられる遺構が検出されている。

また、発掘された庭園遺構として以下の三邸を紹介しておきたい。まず、嵯峨天皇の京内離宮・冷然院(冷泉院)の庭園である。この庭園では南半を占める大きな園池に遣水が敷地中央部で流れ込み、園池の北岸中央部では荒磯風の石組が検出されている(図「1-3-4」^四)。そして、桓武天皇の皇子である賀陽親王の邸(左京二条一坊九・十町)では、中央部に南北二町にまたがって広がる園池が確認され、汀は玉石敷きの州浜であったことがわかつている。最後に、藤原原相邸(西三条第)であると考えられている右京三条一坊六町では、園池が西半部から中央部にかけて存在し、汀線は大きく屈曲して展開しており、敷地東半部に園池を望むように建物配置されたと推定されている(図「1-3-5」^五)。このように、発掘調査成果は年々集積されてきているものの、そこか

ら当時の庭園の総合的な在り方についての見解を得ることは必ずしも十分でない状況にある。一方、平安時代初期を取り扱った、太田静六『寝殿造の研究』などにおいて庭園に関連する文献資料が整理、検討されてきており、ここで平安時代初期、特に嵯峨朝を中心とした庭園の様相について文献資料の面からみておきたい。

延暦十三年（七九四）十月の平安遷都後に初めて記録に現れる行幸記録は、桓武天皇の近東院行幸である。『日本後紀』の延暦十四年六月庚戌（十五日）条には「幸近東院」と記事がある。その後、同書延暦十九年七月乙卯

（十九日）条に神泉苑行幸の記事が初出した後は、一年に数回もの神泉苑行幸が記録されている。さらに、天皇は京中を巡覧したり、大原野、的野、北野などの禁野で遊獵したり、神野親王邸や西八条邸などへ行幸している。続く平城朝では桓武朝に引き続き頻繁に神泉苑に行幸があったが、新たな離宮や邸宅に関する記録はない。しかし、嵯峨・淳和朝になると、大規模な宮殿の造営が相次いで行われる。嵯峨天皇は新たに冷然院や河陽離宮、嵯峨院を、淳和天皇は皇太子時代の邸宅・淳和院（南池）や雲林院を造営している。またこの時期は、行幸があった離宮ないしは邸宅も多彩で、神泉苑などの離宮以外にも、前記の淳和院や閑院（藤原冬嗣邸）、双ヶ岡山荘^{五四}（清原夏野邸）、長岡之第^{五五}（小野石子邸）といった臣下の邸宅へも行幸した記事が散見する。例えば、淳和院の行幸の記事としては、『日本後紀』の弘仁四年（八一三）四月甲辰（二十二日）条に「幸皇太弟南池」。命文人賦詩。：（中略）……。雅楽奏樂。賜五位已上衣被及諸王藤氏六位已下并文人等綿一、各有差。がある。このとき、行幸に際して文人らと詩会を催し、雅楽寮による奏樂があり、行幸に随従した臣下らに身分に応じた禄が与えられている。また、閑院の行幸については、同書弘仁五年（八一四）四月乙巳（二十八日）条「幸左近衛大将正四位下藤原朝臣冬嗣閑院」。供張之宜、尋藤原都子従五位下。賜五位以上衣被。がある。このとき正四位であった藤原冬嗣が従三位へと昇進し、无位であった妻である藤原美都子が従五位下へと叙せられた。天皇の閑院行幸は、その叙任式と宴のためであった。このよう

に、嵯峨朝では臣下の邸宅へ天皇が行幸し、天皇と臣下が関係性を確認する宴が催されたことがわかる。ところで、太田は、平安時代初期のなかでも桓武朝から仁明朝までは皇威隆盛の王朝盛期で、皇室関係の諸院の建造が隆盛を極めた時代であったのに対し、後の五十余年は藤原氏の興隆期で藤原氏関係の邸宅が次第に数を増し豪華なものとなっていた時代であると指摘している^{五六}。また、鈴木久男は平安時代初期の庭園に関して以下の二点の指摘をしている。一点目は、平安宮内に造られる庭園の普及は平安京や宮内の造営が一段落し政権の安定を迎えた弘仁年間以降であること、さらに二点目は平安時代において貴族邸宅の中に庭園が登場するのは九世紀前半からであること、である^{五七}。嵯峨朝では、しばしば臣下の邸宅に行幸があったことから、一部の高位貴族の邸宅には天皇を招くに相応しい庭園が備えられ始めていたと推定できるが、その形態や機能に関する考察は必ずしも十分ではない。

以上のように、平安時代初期の庭園の様相については発掘調査、文献資料の両面から一定の研究は進められてきた。その結果からすると、平安時代初期の庭園は高位貴族の邸宅もわずかに含まれるものの、多くは天皇に関連するものであった。つまり、天皇や一部の高位貴族のように、豊富な財政基盤を有し、湧水があるなど比較的条件の良い土地を獲得することが可能であった階層の人々によって、平安時代初期の庭園文化は牽引されてきたといえる。彼らは、京内の庭園造営に適した土地、あるいは京外の周辺環境に恵まれた土地を有することによって、それぞれ特徴のある意匠性に優れた庭園を築いていたのである。そのなかで生じた具体的な現象は、庭園の大規模化とともに、瀑布、遊興施設、あるいは五行説にもとづく植栽といった奈良時代にはなかった新たな構成要素の導入であったといえよう。



写真 [1-3-2] 飛鳥京跡遺跡西辺護岸（「飛鳥京跡苑池遺構—飛鳥京跡第140次調査—」現地説明会資料、1999年）



写真 [1-3-1] 飛鳥京跡遺跡全景（「飛鳥京跡苑池遺構—飛鳥京跡第140次調査—」現地説明会資料、1999年）



写真 [1-3-4] 冷泉院の景石出土状況（『京都市文化財ボックス第28集—平安京—』, 2014, P.71）

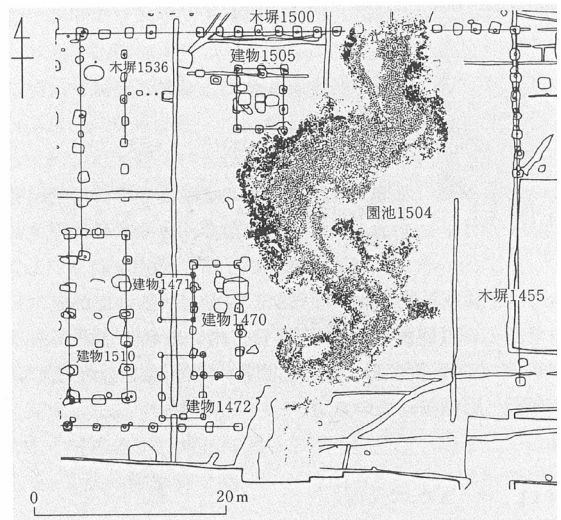


写真 [1-3-3] 平城京左京三条二坊宮後庭園（『岩波日本庭園辞典』, 2004, P.267）

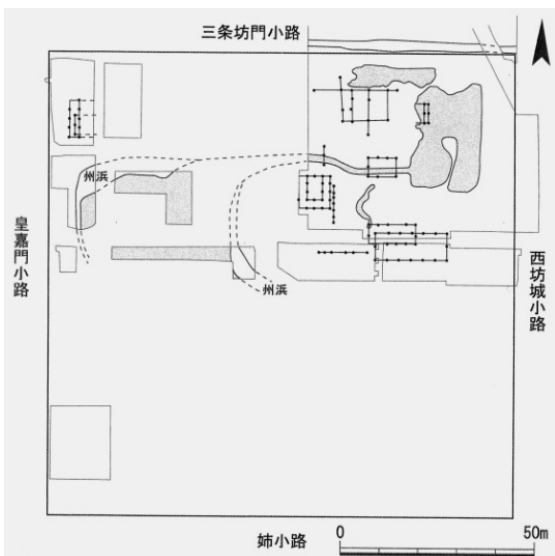


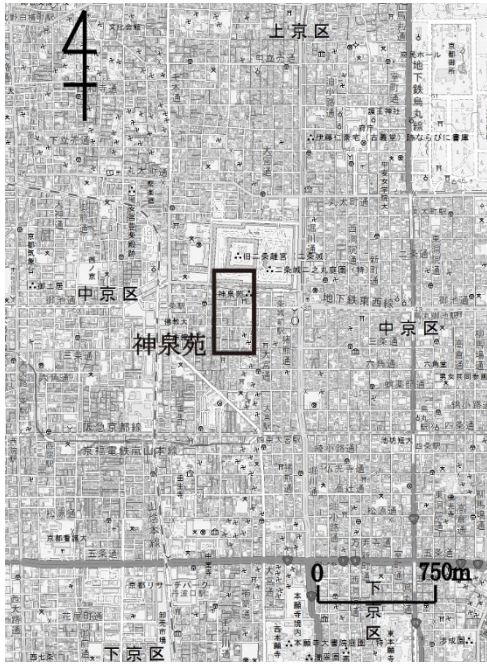
写真 [1-3-5] 西三条第復原図（『京都市文化財ボックス第28集—平安京—』, 2014, P.81）

第二章 漢詩からみた嵯峨朝の庭園

第一節 神泉苑の庭園

一 神泉苑とは

神泉苑は、平安京造都の際、大内裏の南に接して営まれた禁苑である。神泉苑の「苑」は、『説文解字』において「禽獸を養う所以なり」とあり、種々の目で鳥獸を飼う区画を指す。また「苑」を含む語句として「苑圍」があるが、これは大を苑、小を圍、あるいは樹木に苑、禽獸に圍が当たるとする^{五八}。つまり、嵯峨朝において唯一「苑」とされた神泉苑は、大規模な敷地内に植栽が施され、動物が飼育されていたことも想定され、天皇の庭園として別格の存在であったことは名称の観点からも明らかである。『拾芥抄(中)』には、「神泉苑、天子遊覽所、以近衛次將^一為別當。乾臨閣謂^二之正殿。金岡置^レ石。二条南、大宮西八町、三条北、壬生東、善女龍王常見^三此所^一。上代有^レ公卿別當者、長保年間道綱補^レ之」と記されており、東西は大宮・壬生、南北は二条・三条の各大路に囲まれた南北四町、東西二町、総面積約十三万平方メートルの広大な



図[2-1-1] 神泉苑位置図(国土交通省 国土地理院 数値地図2500に図示)

敷地を占めていたと考えられている。神泉苑の文献上の初出は、延暦十九年(七九九)七月乙卯(十九日)条の「幸神泉苑^二」で、その創建は桓武天皇が平安京遷都の際に大内裏の南側に設けた離宮であった。桓武朝から頻繁に行幸があり、その後も歴代天皇に受け継がれ、行幸の場として利用された。特に平城、嵯峨兩朝においては年中行事の儀場としての利用が目立ち、淳和朝以降は釣魚や遊猟など、種々の遊興を行う場へと推移していった。また、天長元年(八二四)には空海によって初めての雨乞い祈禱が行われている。さらに早魃の際には、水門を開き京中に水を放出することもあった。その出来事について『醍醐天皇御記』では、延喜十七年十二月乙丑(二十日)条に「冷泉院池水又枯、勅開神泉苑東北門^一令^下人齋汲^中泉水^上」と記されている。早魃時にも枯渇しない神泉苑の池には善女龍王が住むといわれ、当初の天皇の京内離宮という機能だけでなく、祈禱場としての側面も加わっていったのである。

しかし、平安時代末期には苑の規模が縮小し、荒廃する。次第に湧泉の量が減少し、室町時代に至っては著しく池面積を縮める結果となった。森蘊は、この頃には、池が自然樹林で囲まれている状況であり、庭園というよりも自然勝地といった様相を呈していたと推測している^{五九}。時代は下がり、慶長八年(一六〇三)、徳川家康が二条城を造営した際には、神泉苑の敷地の一部が取り込まれ規模が縮小するに至った。しかし、同十二年には寺院として復興され、現在では中京区門前町に造営当時の苑池の一部を残し、真言宗の寺院となっている。

二 神泉苑に関連する先行研究と課題

神泉苑に関連する先行研究には、管見の限り、以下の研究成果が存在する。

それは、太田静六による建築史からの研究^{六〇}、森蘊^{六一}、村井康彦^{六二}、飛田範夫^{六三}、小野健吉による庭園史からの研究^{六四}、林屋辰三郎^{六五}、吉野秋二による歴史学からの研究^{六六}、井実充史による文学からの研究^{六七}である。

太田は神泉苑に関連する文献の検討をもとに、神泉苑を三期に区分し、各期における神泉苑の位置や境域の変遷、さらに殿堂や庭園の意匠・構成に言及した。まず、創建当時の建築について以下の指摘をしている。一点目は、神泉苑

の建築は整然とした左右対称配置で、正殿の乾臨閣は南面し、正殿と池の間に小山が築かれ、神供所があったこと。次に、正殿は仏教建築に似ており、閣の両端は鴟尾を上げ、瓦葺、丹塗り、丸柱の重厚な唐式建築で、左右に建造された左閣・右閣から渡廊によって左右の釣台が結ばれていたことなどである。さらに庭園については、園内部を描いた「東寺所藏神泉苑古圖」と文献記録をもとに以下の三点の指摘をしている。一点目は神泉苑の池は東西六〇丈・南北五七条で、庭園中央に池が配置され、園の周囲には四門が設けられていたこと。二点目は導水方法についてである。神泉苑の膨大な池水は東北隅の湧水および大宮川からの引水によって賄われており、東方で遣水の末端が瀑布になり、そこには東滝殿が設置され橋が架けられていたことを指摘した。三点目は園内の植栽についてである。神泉苑には樹木が鬱蒼と茂り、諸種の花木が植栽され、鹿や水鳥といった鳥獣が生育していたことを述べている。

森は、平安京内裏が未完成の時期から、神泉苑には桓武天皇の行幸があったことを根拠として、当初は単に自然の池泉が存在する勝地といった意味で「神泉」と呼ばれていたことを推測した。つまり、神泉苑は平安遷都以前からあった自然の池泉・林丘を離宮として整備したと考えたのである。また神泉苑の利用方法に関しては、当初は宴遊の場であったが、次第に心身の鍛練場としての意識が高まった結果として、弘仁期に釣台、馬埒殿などが設えられた可能性を示した。さらに、神泉苑の名称は漢の甘泉殿に由来し、配置は漢の上林苑に倣ったものであると論じている。

小野は、神泉苑の空間構成を考える上で、中国・朝鮮半島を含めた東アジアとしての視点の重要性を論じ、その観点から神泉苑造営のモデルを推定した。そのなかで、①「唐長安城興慶宮」をモデルとした（太田、一九八七）、②泗水の「宮南池」をモデルとした（吉野、二〇〇五）をとりあげ、検証した。その結果、神泉苑は渤海の上京龍泉府禁苑を直接のモデルとしながら、実はそのモデルとなった唐長安城興慶宮を模範とした可能性を示している。

村井は、神泉苑はもともと自然池であったと指摘する。また、その庭園景觀について「…（前略）苑内には樹木が繁茂して鳥が群生し、中島があり、竜池閣（乾臨閣）と呼ばれる殿舎があった、苑内には鹿が放たれ、水面を水禽が泳

いだが、渤海国の使者が贈った契丹の動物で鹿を逐わせ、あるいは雉を放って水禽を捕えさせるということもあった。…（後略）」と、その規模の大きさと幽邃な様子を推測している。

飛田は、神泉苑に関連する記録や漢詩の分析から、神泉苑にはマツの古木、カエデの林、タケ、シダレヤナギ、また池の湾曲部分にミカン類が植栽されていたと推測した。また、弘仁三年（八一二）から「花宴」が年中行事化することから、サクラも多く植栽された可能性を示した。草本類としては、池の洲にアシ、池の中にハスが植栽され、重陽節の際には岸边や丘にキクが植え付けられたことを指摘している。

林屋は、神泉苑は自然の池泉を利用し整備されたため、比較的短期間で竣工した可能性が高く、延暦二十一年（八〇二）二月戊午（六日）の行幸において舟遊びが行われたことを根拠に、この頃に神泉苑最盛期の景觀が完成し、宴遊の場として完成に至ったことを推定した。なお、林屋は唐の長安城の東南隅にある曲江池との関連性を指摘し、神泉苑は離宮でありながら、唐の曲江池と同じく市民行楽の苑池へ発展する方向性を孕んでいた可能性を挙げた。ただし、この点については根拠がやや薄弱であると思われる。

吉野は、発掘調査の結果から神泉苑の池は縄文期以来の自然池に由来し、創建は文献上の初見（延暦十九年）を遡らず、利用が本格化する延暦二十一年まで整備が継続した可能性を示した。また弘仁初期までに、神泉苑は三月三日節会、花宴、七夕の相撲、九月九日重陽節の儀場として固定し、それに伴い神泉苑での詩宴固定化が進んだことを指摘している。桓武期段階で、三月三日節会を想定した遣水などの造園がなされ、神泉苑には主要儀式全般に渡り、専用の儀場を整備する構想が有されたことも併せて指摘した。神泉苑は臨時の行幸や曲宴に多用されながらも、重陽節や花宴といった詩宴を伴う儀式を後発的に新設する形で利用が拡大したことを指摘し、詩宴によって君臣関係を確認し、次代を担う官人を見出す場所として、神泉苑における饗宴や郊外遊獵が利用されるなど多角的利用が可能な禁苑として整備されたことを推測している。

井実は神泉苑に関連する漢詩を分析することで、神泉苑にどのような文学空間が創造されたかを考察し、以下のように指摘している。一点目は、神泉苑は

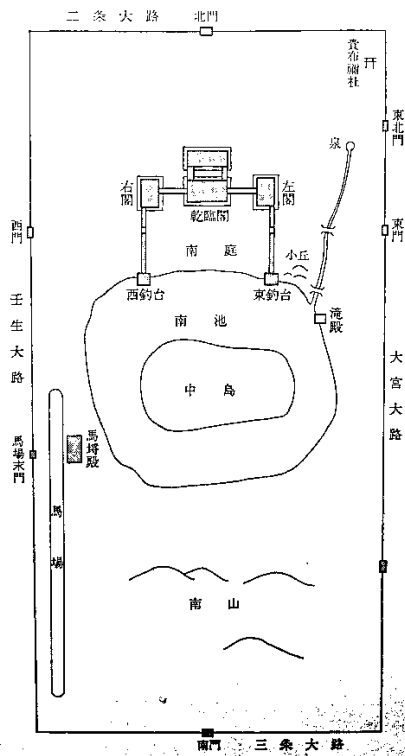


図 [2-1-2] 神泉苑復原図(嵯峨天皇の弘仁頃) (『寝殿造の研究』、太田、1987)

有徳の天子が人民を教化し人民と和楽を図るための政教的空間である、ということである。つまり、神泉苑は明君と賢臣が一体となった理想的な君臣関係が実演される舞台であり、詩はそのための意匠として機能させられたことを指摘した。二点目は「江南的空間」である。重陽節の詩宴では悲秋文学^{六八}が制作され、その作品中では神泉苑の明媚な意匠が江南の風景に見立てられていることを指摘した。そこから、井実は嵯峨天皇が長安を模した平安京の中に江南的空間としての神泉苑を加えることで、世界最高の都城を目指し、そこに君臨する天皇の偉大さを示すことへと繋がったものと推測している。

以上のように、神泉苑には平安時代初期の庭園としては多くの研究成果が存在する。その理由として、現在まで庭園遺構の一部が残存していること、そして累代の京内離宮であったことから関連記録が比較的多く存在していることが挙げられる。本節では、嵯峨朝を中心に神泉苑に関連する漢詩を整理・分析することで、さらに神泉苑の庭園にまつわる形態や機能について探っていきたい。

三 神泉苑に関する考古学的成果

発掘調査は、一九九〇〜九三年にかけて実施された。調査では神泉苑の東西



写真 [2-1-1] 神泉苑船着場 (『京都市文化財ブックス 28 集—平安京—』 2014、p.49)

築地を始めとして、苑池の一部が検出された。池北縁部の水際には礫敷きの州浜と北東から池に流れ込む流路が検出されており、庭園の中核をなす池は縄文期から続く自然池を造成したことが確認された。また、クヌギの厚板を水平に固定した船着き場とみられる施設も確認されている。さらに、東西方向の掘立柱列が二条並列して検出され、回廊跡であると推測されている。池の中からは乾臨閣の屋根を葺いた緑釉瓦など、諸施設に関連する遺物も出土している。これらの瓦のなかには「神泉苑」と刻印されたものもあった。なお、緑釉瓦が平安宮の初期造営の一環として豊楽院が造営される際に用いられたものと同じであることから、神泉苑が整備された時期も文献上の初出(延暦十九年)から遡らないことが確認されたことになる。

四 文献に現れる神泉苑

神泉苑に関連する記録を六国史から抽出し、表「2-1-1」に示す^{六九}。なお、嵯峨朝に造営された神泉苑の実態に迫るため、神泉苑の初出から嵯峨天皇存命中(八〇九〜八四二)の記事に限定することとした。

神泉苑の文献上の初出は桓武朝で、延暦十九年(八〇〇)七月辛卯(十九日)である。桓武朝ではこの年から毎年、神泉苑に定期的な行幸があった。初出か

らほどなく、『日本後紀』の延暦二十一年(八〇二)二月戊午(六日)には「幸神泉」。泛舟曲宴。」とあり、神泉苑の池で舟遊びをした様子が記録されている。ここから、林屋が指摘するように、神泉苑の池は創建から比較的早い時点で竣工し、舟遊びができるほどに整っていたことがわかる。桓武朝のような頻繁な神泉苑行幸は、平城朝、嵯峨朝を経て、仁明朝まで継続する。村井が「春夏秋冬、四季折々の節会や饗宴の場とされたなかでも、二月・四月・七月・九月と、それぞれの季節にピークのあったことも知られよう。」と指摘するように、四季に応じて毎年複数の行幸があったことがわかる。しかしながら、こうした行幸は私的なものでなく、いわゆる「年中行事」としての宴が神泉苑で執り行われたという一面を示すものである。吉野は、嵯峨朝初期に、三月三日節会、花宴、七夕の相撲、九月九日重陽節の神泉苑における儀場の固定化が進められたことを指摘している。つまり吉野は、三月三日節会に関しては、桓武朝から伝統的に神泉苑を儀場としてきたが、それ以外は詩宴を伴う儀式を新設しつつ、儀場の利用が拡大したと推測したのである⁷⁰。では、具体的な記録をいくつか見てみよう。平城朝の大同二年(八〇七)七月壬辰(七日)条に「御神泉苑」。観相撲。令文人、賦七夕詩。後日、文人賜綿有差。」とあり、七夕において相撲と詩宴が催されたことを示すものである。同じく、大同二年九月己未(九日)条には「幸神泉苑」。琴歌間奏。四位已上共挿菊花。：(後略)」とあり、初めて重陽節の記録が現れる。嵯峨朝になり、弘仁三年には花宴が創始される。『日本後紀』の弘仁三年(八二二)二月丙辰(十二日)条に「幸神泉苑」。覽花樹。命文人賦詩。賜綿有差。花宴之始於此矣。」とあり、花木を觀賞する詩宴を開き、これを「花宴」の始まりとする、との記述がみられる。また、弘仁五年から一、二年間は、財政上の理由から重陽節を廃止し、その以後、三月三日節会と花宴を併合するなど多少の変遷はみられるが⁷¹、神泉苑は創建時から次第に年中行事を行う場としての機能が整い、儀場としての役割が増大していった。一方で、年中行事という枠にくくることのできない臨時の行幸も、神泉苑では頻繁にあったことが表「2-1-1」からわかる。吉野は、神泉苑はあくまでも臨時の行幸・曲宴に多用され、年中行事での使用は後発的であった、との指摘をしている。臨時の行幸の例としては、

弘仁三年五月己巳(十二日)条には「幸神泉苑」。木工寮獻物。雅樂寮奏樂。飲宴終日。賜五位已上衣衾。」などが挙げられ、年中行事以外でも神泉苑において君臣との和楽を図る、いわゆる密宴(すなわち、天皇の私的興趣によって開かれる宴⁷²)が行われたことがわかる。

淳和朝になると、神泉苑と年中行事との関係性はやや希薄になるものの、年中行事は継続的に行われる。淳和朝において、神泉苑が年中行事に利用された記録の一つが、『日本後紀』の天長五年(八二八)九月庚戌(九日)条にある「幸神泉苑」。使賦重陽之詩。賜祿有差。」で、臣下に重陽節の漢詩を賦させ、褒美を与えている。淳和朝では全十二回もの神泉苑行幸があり、その利用方法にはある特徴を見出すことができる。それは「釣魚」である。『日本後紀』の天長四年(八二七)四月乙酉(二十三日)には「幸神泉苑」。遊釣。」とあり、神泉苑の池で釣りをしたことがわかる。こうした遊興の在り方は、嵯峨朝に詠まれた漢詩の中にも一部みられるが、記録上は淳和朝に初出であり、頻度も高い。釣魚の記録が四七月の暑い時期に多いことから、「納涼」の一環として行なわれた可能性が高い。また、天長元年(八二四)四月辛丑(二十二日)条では、「幸神泉苑」。試令渤海狗、逐苑中鹿。中途而休。」とあり、神泉苑内で渤海狗に鹿狩りをさせた様子が記録されている。淳和朝における神泉苑は、年中行事の比重が増した嵯峨朝の性格を受け継ぎながらも、釣魚や鹿狩りをする狩り場としての一面が増大したことが推測できる。

また仁明朝では、行幸全体の回数が減少するにもかかわらず、神泉苑に限っては二十回もの行幸があり、その特徴は「鷹狩り」に関連する記録が多くみられることである。例えば、『続日本後紀』の承和二年(八三五)十二月庚午(二十二日)にある「天皇幸神泉苑」。放隼拂水禽。」では、ハヤブサに水鳥を払わせたとあり、鷹狩りが行われた様子がわかる。さらに、承和三年十二月丙寅(十二日)の「天皇於神泉苑放隼。獲水鳥百八十翼」。是日。侍従及非侍従見參者。賜祿有差。」では、百八十羽もの水鳥を狩り、そのとき付き従った臣下に褒美を取らせたことが記録されている。

神泉苑は桓武朝に京内離宮として創建され、以後の天皇に受け継がれ、多く

表 [2—1—1] 神泉苑に関連する行幸記事一覧

元号	年	月日	記事	出典
延暦 (八〇〇)	十九年	七月乙卯(十九日)	幸神泉苑。	日本後紀
		八月己卯(十三日)	幸神泉苑。	日本後紀
		九月丁卯(八日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十月辛丑(二十五日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十一月壬子(十日)	暴雨大風。中院西樓倒。打死牛。又墮壞神泉苑左右閣京中廬舍。諸國多蒙其害。天皇生年在丑。歎曰。朕不利歟。未幾不豫。遂弃天下。	日本後紀
		八月壬子(十日)	幸神泉苑。	日本後紀
		九月己卯(八日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十月壬戌(二十一日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十一月甲申(十三日)	幸神泉苑。左京人從七位下大僕連三田次賜姓大真連。	日本後紀
		十二月丁亥(十六日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十一月己丑(十八日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十一月戊戌(二十七日)	幸神泉苑。令左大辨正四位下兼行皇太子學士但馬守菅野朝臣眞道。木工頭從五位上兼行造宮亮播磨介石川朝臣河主。監僧綱政。	日本後紀
		十二月壬寅(一日)	幸神泉苑。	日本後紀
		十二月丁未(六日)	幸神泉苑。	日本後紀
大同 (八〇七)	二年	七月壬辰(七日)	御神泉苑。觀相撲。令文人、賦七夕詩。後日、文人詩綿有差。	日本後紀
		七月甲寅(二十九日)	幸神泉苑。賜五位已上衣服。	日本後紀
		八月癸未(二十八日)	幸神泉苑。賜五位已上衣服。	日本後紀
		九月乙巳(二十一日)	幸神泉苑。琴歌問奏。四位已上共插菊花。	日本後紀
		四月乙亥(二十四日)	幸神泉苑。賜五位已上衣服。	日本後紀
		五月戊子(七日)	幸神泉苑。令畿内七道諸國停貢相撲人。	日本後紀
		五月甲午(十三日)	幸神泉苑。宴群臣。賜錢有差。	日本後紀
		七月丁亥(七日)	幸神泉苑。觀相撲。令文人賦七夕詩。	日本後紀
		八月辛未(二十二日)	幸神泉苑。飲宴極歡。賜五位已上綈。各有差。	日本後紀
		九月戊戌(十九日)	幸神泉苑。有勳。令從五位下平群朝臣賀是麻呂作和歌曰。伊賀尔布久。賀是尔阿礼婆可。於保志万乃。乎波奈能須惠乎。布岐牟須悲太留。皇帝歡悅。即授從五位上。	日本後紀
		九月壬子(九日)	幸神泉苑觀射。兼命文人賦詩。賜錢有差。	日本後紀
		六月庚午(二日)	幸神泉苑。有勳、召文人、令賦約台詩。賜錢有差。	日本後紀
		六月丙戌(十八日)	幸神泉苑。五位以上賜衣服。	日本後紀
		七月乙巳(七日)	幸神泉苑、觀相撲。	日本後紀

の行幸があった。それらの行幸は、年中行事と臨時の宴による利用にわけられ、年中行事での利用は、創建された桓武朝から始まり、嵯峨朝で種類・頻度共にピークを迎えた後、仁明朝まで存続する。一方、臨時の宴による利用は年中行事よりも頻度が高く、利用方法も多岐にわたる。また、淳和朝から仁明朝にかけては、神泉苑における遊獵の比重が増大し、釣魚や鷹狩りの記述が多く見られるようになったことが特筆される。

元号	年	月日	記事	出典		
弘仁 (八一一)	二年	四月己巳(六日)	幸神泉苑。賜觀王已下及諸衛人綿各有差。	日本後紀		
		四月乙亥(十二日)	幸神泉苑。右京人正六位上高田首清足等七人賜姓田村臣。	日本後紀		
		四月辛巳(十八日)	幸神泉苑。侍臣已上賜衣服。	日本後紀		
		五月乙巳(十二日)	幸神泉苑。帝自茲以後。每至假日。避暑於此。	日本後紀		
		七月己亥(七日)	幸神泉苑。觀相撲。	日本後紀		
		七月甲辰(十二日)	幸神泉苑。陪侍之人。賜錢有差。	日本後紀		
		八月甲戌(十二日)	幸神泉苑。五位已上。賜綿有差。	日本後紀		
		二月辛丑(十二日)	幸神泉苑。覽花樹。命文人賦詩。賜綿有差。花宴之節始於此矣。	日本後紀		
		四月癸巳(六日)	幸神泉苑。賜四位已上綈。	日本後紀		
		五月己巳(十二日)	幸神泉苑。木工寮獻物。雅樂寮奏樂。飲宴終日。賜五位已上衣服。	日本後紀		
		七月癸亥(七日)	幸神泉苑。觀相撲。命文人賦七夕詩。	日本後紀		
		七月庚辰(二十四日)	幸神泉苑。賜陪侍者錢有差。	日本後紀		
		九月甲子(九日)	幸神泉苑。宴侍從已上。奏妓。命文人賦詩。五位已上及文人賜綿有差。	日本後紀		
		二月壬子(二十九日)	幸神泉苑。命文人賦詩。奏樂賜綿有差。	日本後紀		
四年	四年	七月丁巳(七日)	幸神泉苑。觀相撲、命文人賦七夕詩。	日本後紀		
		九月戊午(九日)	幸神泉苑。命群臣賦詩。賜綿有差。	日本後紀		
		二月丙午(二十八日)	幸神泉苑。命文人賦詩。賜侍從及歌詩者綿各有差。	日本後紀		
		五月戊午(十二日)	幸神泉苑、曲宴。賜侍臣衣服。	日本後紀		
		六月戊寅(三日)	神泉苑北垣、无故自潰。長四十五丈。一脈給京中飢民。	日本後紀		
		七月壬子(七日)	幸神泉苑。觀相撲。	日本後紀		
		閏七月庚辰(六日)	幸神泉苑。	日本後紀		
		閏七月丙戌(十二日)	幸神泉苑。賜五位已上衣服。	日本後紀		
		二月庚午(二十八日)	幸神泉苑。花宴。命文人賦詩。侍臣及文人賜綿有差。	日本後紀		
		四月壬子(十一日)	幸神泉苑。	日本後紀		
		七月丙子(七日)	幸神泉苑。命文人賦七夕詩。	日本後紀		
		七月癸巳(二十四日)	幸神泉苑。	日本後紀		
		四月辛丑(六日)	幸神泉苑。左右馬寮、奉獻開戲四百貫。令左右近衛射、中賜錢。	日本後紀		
		七年	七年	七月庚午(七日)	幸神泉苑、觀相撲。	日本後紀
九月乙未(九日)	幸神泉苑。令文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
二月壬午(二十八日)	幸神泉苑。命文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
九月庚寅(九日)	幸神泉苑。宴侍臣。命文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
二月癸酉(二十五日)	幸神泉苑。宴侍臣。並命文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
五月甲午(十七日)	幸神泉苑。奉幣貴布禰社、祈雨。			日本後紀		
九月甲申(九日)	幸神泉苑。命文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
七月丁未(七日)	神泉苑、觀相撲。			日本後紀		
八月己子(九日)	幸神泉苑。			日本後紀		
九月戊申(九日)	幸神泉苑。宴五位已上、令文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
二月庚寅(二十八日)	幸於神泉苑。宴侍臣、命文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
九月丙申(九日)	御神泉苑、宴侍臣、命文人賦詩。賜錢有差。			日本後紀		
十三年	十三年			二月庚寅(二十八日)	幸於神泉苑。宴侍臣、命文人賦詩。賜錢有差。	日本後紀
				九月丙申(九日)	御神泉苑、宴侍臣、命文人賦詩。賜錢有差。	日本後紀

承和		天長	
三年	二年 (八三五)	一年 (八二四)	天長
五月辛丑(三日)	七月辛丑(十六日)	四月辛丑(二十二日)	幸神泉苑。試令渤海狗、逐苑中鹿。中途而休。
二月壬午(十三日)	八月己巳(十日)	六月庚子(二十三日)	幸神泉苑。覽左右馬寮御馬。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	四月乙巳(十四日)	幸神泉苑。歷覽垂釣。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	四月癸丑(二十二日)	幸神泉苑。遊釣。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	六月壬子(二十二日)	幸神泉苑。見參中納言已下大舍人已上、賜商布有差。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	七月乙丑(六日)	幸神泉苑、垂釣。左近衛府獻時味。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	閏三月乙丑(四日)	幸神泉苑、遊釣。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	六月辛未(十七日)	幸神泉苑、遊釣。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	六月丁丑(二十三日)	幸神泉苑。右衛門獻物。雷鳴雨降、山崩水溢。囑清行僧卅人於野寺。誦大般若經。防水害也。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	九月壬辰(九日)	幸神泉苑。使賦重陽之詩。賜祿有差。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	六月丁卯(十九日)	幸神泉苑。賜祿有差。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	七月己子(二日)	幸神泉苑。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	七月癸巳(十六日)	御神泉苑、覽相撲。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	八月己未(十二日)	幸神泉苑。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	九月甲午(十七日)	幸神泉苑。召文人、賜祿有差。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	四月丙午(三日)	皇帝幸神泉苑。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	七月戊子(十六日)	天皇幸神泉苑、覽相撲。申刻雷雨、酉刻霹靂。內裏西北角曹司。左右近衛、騎乘御馬、馳入內裏、撲滅神火。戌刻雷聲乃止。即帝還宮。見參諸司官人已下、衛門門部已上、賜祿有差。不覽相撲。肅露慶也。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	六月戊子(二十二日)	皇帝幸神泉苑。日暮還宮。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	八月乙亥(十日)	皇帝幸神泉苑。召阿波守正五位下善道宿祢真真、主稅頭從五位下安野宿祢真繼、直講近田宿祢種繼等、令論議。推真實為座首、論三弘義、推真繼為座首、論三弘義。右近衛府獻物。雅樂寮奏音樂。侍臣具酌、西時還宮。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	八月丁亥(二十二日)	皇帝幸神泉苑。令左右近衛、進相撲四番。雅樂寮奏音樂。日暮還宮。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	八月丁亥(二十二日)	皇帝幸神泉苑。喚博士生徒等、令論議。賜祿有差。大納言藤原朝臣三守獻物。已決輿台。賜非侍從已上綿有差。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。觀相撲節。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。放單拂水禽。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。遊賞。賜見參五位已上祿。叙无位飯高宿祢永刀自外從五位下。云云。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。放鶴單。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。放單拂水禽。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。放單。
二月壬午(十三日)	八月乙亥(十日)	八月丁亥(二十二日)	天皇幸神泉苑。愛其逸氣橫生。麾則應機。招則易呼。是日。授无位百濟王永琳從五位下。
二月己丑(二十日)	八月丁亥(二十二日)	八月丁亥(二十二日)	天皇御神泉苑。蓋。且以垂繒。且以陶暑。見參五位不論侍從非侍從皆賜祿。
日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀

表 [2-1-2] 神泉苑に關連する漢詩一覽

題詞	作者	出典
一 神泉苑宴賦落花篇	嵯峨天皇	凌雲集
二 雜言於神泉苑待露賦落花篇	小野岑守	凌雲集
三 雜言於神泉苑待露賦落花篇	高丘弟越	凌雲集
四 重陽節神泉苑賜宴群臣、勅空通風同	嵯峨天皇	凌雲集
五 九月九日於神泉苑宴群臣、各賦一物、得秋	嵯峨天皇	凌雲集
六 九月九日侍露神泉苑各賦一物得秋露	淳和皇太弟	凌雲集
七 九月九日侍露神泉苑各賦一物得秋露	良岑安世	凌雲集
八 九月九日侍露神泉苑各賦一物得秋露	小野岑守	凌雲集
九 九月九日侍露神泉苑各賦一物得秋山	菅原清公	凌雲集
十 重陽節神泉苑同賦三秋大有年、題中取韵、大韵成篇	嵯峨天皇	凌雲集
十一 神泉苑九日落葉篇一首	嵯峨天皇	凌雲集
十二 神泉苑九日落葉篇一首	巨勢識人	文華秀麗集
十三 重陽節神泉苑賦秋可哀、一賦一首	嵯峨大上天皇	經國集
十四 重陽節神泉苑賦秋可哀、一賦一首	淳和皇太弟	經國集
十五 同前	良岑安世	經國集
十六 同前	仲雄王	經國集
十七 同前	菅原清公	經國集
十八 同前	和氣真綱	經國集
十九 同前	和氣仲世	經國集
二十 同前	滋野貞主	經國集
二十一 同前	橘常主	經國集
二十二 七言重陽節得秋虹心製一首	藤原冬嗣	凌雲集
二十三 神泉苑雨中跳躡心製一首(探得初字)	菅野真道	凌雲集
二十四 晚夏神泉苑同勅深臨陰心製一首	賀陽豐年	凌雲集
二十五 晚夏神泉苑同勅深臨陰心製一首	小野岑守	凌雲集
二十六 夏日神泉苑釣臺心製	嵯峨天皇	文華秀麗集
二十七 代神泉古松傷哀歌一首	仲雄王	文華秀麗集
二十八 奉和代神泉古松傷哀歌一首	巨勢識人	文華秀麗集
二十九 春日侍神泉苑賦得春月心製一首	滋野貞主	經國集
三十 七言和海和尚秋日觀神泉苑之作一首	空海	性靈集
三十一 秋日觀神泉苑	賀陽豐年	經國集
三十二 五言詠禁苑鷹生雛一首	中科善雄	經國集
三十三 五言詠禁苑鷹生雛一首	中科善雄	經國集

五 漢詩からみた神泉苑

嵯峨朝において、神泉苑を詠んだ漢詩と賦は、『凌霄集』から十四首、『文華秀麗集』から五首、『経国集』から十三首、空海が著した漢詩文集『遍照發揮性靈集』から一首の全三十三首存在する。

本章では、これらの漢詩に描写された神泉苑の庭園意匠や景観の要素を抽出し、漢詩に詠み込まれた神泉苑の庭園について整理しておきたい。以下、前ページの表「2-1-1-2」で示した作品それぞれにつき、原文、読み下し文、大意を示した上で、説明と解釈を付す^{七三}。なお、年中行事に関連する漢詩を五十一（花宴：五十一―一／重陽節：五十一―一）、それ以外の宴に関連する漢詩を五十二で示す。

五十一 年中行事に関連する漢詩

五十一―一 花宴（作品番号「二」〜「四」）

作品番号「二」

「神泉苑花宴賦落花篇」

御製（嵯峨天皇）

過半青春何所催

過半の青春何の催す所ぞ、

和風数重百花開

和風数重りて百花開く。

芳菲歇尽無由駐

芳菲歇尽くれば駐むるに由も無し、

爰唱一文雄 賞宴来

爰に文雄を唱ばひて賞宴に来る。

見取花光林表出

見取す花光林表に出づることを、

造化寧ぞ仮らむ丹青の筆を。

造化寧ぞ仮らむ丹青の筆を。

紅英落処鶯乱鳴

紅英落つる処に鶯乱れ鳴く、

紫萼散時蝶群驚

紫萼散らふ時に蝶群れ驚く。

借問濃香何独飛

借問す濃香何より独り飛ぶかと、

飛来満坐堪襲衣

飛び来りて坐に満ち衣に襲くに堪ふ。

春園遥望佳人在

春園遥かに望めば佳人在り、

乱雑繁花相映輝

乱雑なる繁花相映輝ふ。

點^二珠顔^一、綴^二髻鬟^一

珠顔に點く、髻鬟に綴ふ、

吹入^二懷中^一嬌態閑

懷中に吹き入りて嬌態閑かなり。

朝攀^レ花^一。暮折^レ花

朝に花を攀つ、暮に花を折る、

攀^レ花力^二尽衣帶^一餘

花を攀つて力尽き衣帶餘ぶ。

未^レ厭^二芬芳^一徒徒倚

未だ芬芳に厭かずして徒に徒倚み、

留連^二林裏^一晚光斜

林裏に留連すれば晚光斜めなり。

妖姫^一一^レ翫^レ已^レ為^レ樂

妖姫一たび翫びて已に樂をなす、

不^レ畏^二春風^一総吹落^一

春風の総べて吹き落すことを畏れず。

对^二此年華^一絶可憐

此の年華に対かひて絶へて憐ぶべし、

一時風景豈空捐

一時の風景豈に空しく捐てむや。

〈大意〉

春も半ば過ぎた二月頃、いったい何が人の心を浮き立たせるのか、のどかな風がしきりに吹き、多くの花が咲く。芳しい花の匂いが失せるのを止める術はないのだ。さてそこで、文人らに呼び掛けて花を賞美する宴を催すために神泉苑にやってきた。この苑に入ると、美しく咲き誇る花の輝きが林の外にまで感じられる。造化の神の創造する美しさは色艶やかな色彩の絵筆を借りる必要もないほどだ。紅の花弁の落ちるところでは鶯が入り乱れて鳴き、紫色の萼の散る時に蝶が群がってはハッと驚きゆらゆらと揺れる。濃い香りを放つ花はどこからひとり飛んできたのか、少しお尋ねしたいものだ。それは飛んで来て一座の席に満ち、衣に巧みに貼りつく。春園のはるか彼方を見やると美しい舞姫たちがいる。その艶やかさと咲き誇る花とは互いに輝き合う。玉のように美しい顔に花弁が散りかかり、彼女らの髪にまとわりつき、風に吹かれて懐に入る、その艶やかな姿は閑雅である。舞姫たちは朝に花を引きたわめ、夕べには花を手折る。彼女らはか弱く、花を手折るのに力尽き、着ている衣も緩む。芳しい花の香りに飽き足りないで、なんとはなしに辺りをさまよい、林苑のなかに居続けていると日も暮れてきた。美しい宮女らはこの花散る風景を十分楽しんで、春風が花を全て吹き散らしても気にかけることはない。この春の日の趣にしみじみと感じいった。花の落ちゆく麗しい光景を見過すことはできない、

この風景に対し詩を作り楽しもう。

〈説明・解釈〉

作品番号「一」は、嵯峨天皇による花宴の漢詩であり、作品番号「二」、「三」は当詩に対する応制である。また、「花宴」が年中行事として定められた弘仁三年二月丙辰（十二日）以降の作であることが、詳細な制作年は不明である。

この詩は旧暦二月頃、春たけなわの神泉苑に、第四句「爰唱文雄賞宴来」とあるように、天皇が文人らと詩宴を催すために訪れたときのものである。第二句「和風数重百花開」は、庭園にはのどかで暖かな春風が吹き、多くの花々が咲き乱れる様子を示している。その美しさは、第五句に「見取花光林表出」とあるように、樹林が花で染まり輝くようだ、という描写からもわかる。また、第六句「造化寧仮丹青筆」は、庭園が春の花々によって様々な色彩を帯びていることを示し、このことから庭園内には様々な種類の植物が植えられており、人々がその美しさを賞美したことがわかる。具体的には、第七句「紅英落処鶯乱鳴」の紅色あるいは桃色の花房（紅英）が落ちる様子や、第八句「紫萼散時蝶群驚」の紫の萼が舞い散る様子が挙げられる。さらに、第九句「借問濃香何独飛」は、強い芳香を放つ花が風に吹かれて飛んでいく様子を詠んでいる。中国の詩文では「紫萼」でウメ、「紫文」でモモを示す用例があること^{七四}から、第八句はウメについて詠まれており、第九句の「濃香」という表現からもウメが連想される。「紅英」がどの植物を指すのかは明確ではないが、行幸の時期から推して、モモが咲いていたであろう。ウメやモモは満開の時期も少しずつ異なり、実際には同時に鑑賞することは難しいが、それらを同じ詩中に詠み込むことこそ漢詩特有の文飾的表現であろう。

また、詩中に詠まれるのは花だけではない。第十一〜十六句では、佳人（舞姫）が、花ふぶきの中を艶やかに舞う様子が詠まれる。美しい舞姫たちと花々の描写の相乗効果で、漢詩のなかには夢のような美しい世界が描き出されている。そうした宴も終りに近づき、第十八句「留連林表晚光斜」では、宴を催した林苑に夕日が差し込む様子が詠まれている。

作品番号「二」

「雑言。於神泉苑待讌、賦落花篇、応製」 内蔵頭従五位上兼左馬頭美濃守

小野朝臣岑守

三陽二月春云半

雜樹衆花咲且散

鸞駕早来遍歴覽

奇香詭色互留翫

昔聞一県栄三河陽

今見仙源避秦漢

此時澹蕩吹和風

落藥因之滿遠空

梅院不掃寸餘紫

桃源委積尺所紅

看落花落

落花寂寂聽無声

青黄赤白天然染

南北東西非有情

遊蝶息尋葉初見

群蜂罷釀巢纒生

待花宴

花宴何太合良辰

玉管千調無他曲

金疊百味自能醇

臺上美人奪花綵

欄中花綵妬美人

人花両共相對

誰得分明偽与真

借問花節有期否

花開花落億万春

三陽二月春云に半ばなり、

雜樹衆花咲き且つ散らふ。

鸞駕早く来りて遍く歴覽し、

奇香詭色互ひに留翫せしむ。

昔聞きつ一県河陽に栄えしを、

今し見る仙源秦漢を避ることを。

此の時に澹蕩に和風吹き、

落藥これに因りて遠空に満つ。

梅院掃はず寸餘の紫、

桃源委積りぬ尺所の紅。

花の落つることを看る、

落花寂寂にして聴くに声なし。

青黄赤白天然の染、

南北東西非有の情。

遊蝶尋ぬること息めて葉初めて見ゆ、

群蜂釀むること罷めて巢纒に生ふ。

花宴に待す、

花宴何ぞただ良辰に合へる。

玉管千調他し曲なし、

金疊百味自らによく醇し。

台上的美人花綵を奪ふ、

欄中の花綵美人を妬む。

人花両共に相對ふ、

誰か分明くこと得む偽と真と。

借問す花節期あるか否かを、

花開き花落つ億万の春。

〈大意〉

陽春の二月、春も半ばになり、様々な樹木の花々は咲いたり散ったりしている。鸞輿は早くもこの苑に來り、あらゆるところを巡り回って花を御覧になる。珍しい花の香や変わった花の色は天子の鸞輿を留めて賞翫させるほど素晴らしいものだ。むかし、河陽県という一県をすべて花で飾った潘岳の故事を聞いた。また、秦や漢の乱を避けて桃花源へ入り自適の生活を送った人々のことを書いた陶淵明の「桃花源記」があるが、今はそれにも比すべき神泉苑という地に、俗世を避けて花を賞美する君臣が集う。ちょうど今、のどかに春風が吹き、落花の薬が風に運ばれて空遠くまで飛び、満ちる。梅が咲く庭は掃除もせず、一寸余りも紫の花弁が積もっている。桃の花が咲く桃源郷のようなこの庭には一尺ばかりも紅色の花弁が積り重なっている。落花を見る。落花は静かに落ちて、耳を傾けても何の音もしない。散る花は青黄赤白の天然自然の染め物のようであり、四方八方に無心の情をもつて飛び散る。ひらひら飛ぶ蝶はもはや花を尋ねることをやめ、ようやく木々にも葉が見え始める。群蜂は蜜を醸し出すことをやめ、やつと巣を作り始める。今、神泉苑の花の宴に侍る。この花の宴は春のなんと良い季節にするのだろうか。管楽器の発する数限りないしらべは、他のリズムの曲を合わせてもよく調和し、酒樽の酒の色々な味は自然に濃く美味い。舞台の上の美しい舞姫らは花の色を奪わんばかりに美しく、欄干のなかに散る落花の色は美女の艶色を妬まんばかりの美しさである。美人と花は二つながらともに相対して美色を競い、美しくみえるのは人か花か、その真偽の程を判別することは誰ができようか。少しお尋ねしたいものだ。花の季節に限りがあるのだろうか。いや、花々が咲き散るこの季節は永遠に続くのである。

〈説明・解釈〉

この詩は、嵯峨天皇による作品番号「二」に対する応制である。作者は小野岑守（七七七八三〇）で、平安時代前期の貴族で文人である。岑守は漢詩の知識に明るく、『凌雲集』の勅撰に関わり、「凌雲集序」を草している。また、藤原冬嗣、良岑安世、朝野鹿取などと共に『内裏式』を勅撰した。岑守の漢詩は『凌雲集』を始めとして、『文華秀麗集』、『経国集』にも多数収められてお

り、嵯峨文壇の中心的存在であったと考えられる。

園内には、第二句「雑樹衆花咲且散」とあるように、様々な種類の樹木が植えられ、それらがたくさんのお花を付けていたようである。天皇らは神泉苑を鸞輿で廻り、第四句「奇香詭色互留翫」とあるように、変わった花色や珍しい香りの花々を楽しんだというのだから、ウメやモモ、サクラといつても園内には珍種を集め育てていたのかもしれない。これらの漢詩の中には二種の植物が詠み込まれている。一つ目がウメである。具体的には、第九句「梅院不掃寸餘紫」が挙げられ、この「紫萼」とはウメの暗紅色の萼を指す。つまり、神泉苑にはウメを主に植栽した中庭があったのであろう。二つ目に、第十句「桃源委積尺所紅」からモモが植栽されていたことがわかる。これらは、辺り一面に桃色の花弁がひらひらと舞い散り、地面に降り積もっている様子を示しており、神泉苑にはモモを群植した一画があったと考えられる。

なお、現在は花見といえばサクラを思い浮かべるが、これらの漢詩の中にはサクラを表わす具体的な描写はみられない。後藤昭雄は、漢詩中にモモやウメを詠出することから、嵯峨朝の花宴は観桜の宴ではなかったと指摘する^{七五}。また飛田は、サクラが日本を代表する樹種としての地位を得た象徴的な

出来事は、貞観十六年（八六四）、紫宸殿前のウメをサクラに替えたときであると指摘する^{七六}。また平安時代以前には、『万葉集』などにサクラを詠んだ詩歌は豊富だが、漢詩文が隆盛した嵯峨朝を中心に編纂された三大漢詩文集においてサクラを主題にとつたものは激減している。小島は「桜花を作詩する場合にも、やはり詩の桃花や梅花などと同じ中国表現を学ぶのは当然であり、御製や豊年の作もそれを免れない」^{七七}と指摘する。例えば、『懷風藻』の正五位近江守采女朝臣比良夫『五言。春日侍宴。応詔。一首。』^{七八}には「（前略）…。葉緑園柳月。花紅山桜春。…（後略）」とあり、園のヤナギの緑色と、山を染めるサクラの紅色を対句で詠んでいる。第二句「雑樹衆花咲且散」に詠まれる雑樹衆花の中にはサクラ（ヤマザクラ）もあったと考えられるが、漢詩全盛の時代において敢えてサクラを詠むこと自体が激減し、それに伴い中国風のウメやモモに主眼が置かれたのであろう。漢詩から、花宴の頃、春を告げる園内の様々な植物が花を咲かせ、あるいは風に花弁が舞い散

つている庭園景観は、第十三句「青黄赤白天然染」にあるように、得も言われぬ美しさであったことがわかる。

詩の後半には、作者の視点は「花」から「宴」の様子へと移る。第十九〜二十一句「玉管千調無他曲、金疊百味自能醉、臺上美人奪花綵」から、宴では「玉管」が奏され、女性たちが舞いを披露し、芳醇な香りの酒が振る舞われたことがわかる。第二十一句「臺上美人奪花綵、欄中花綵妬美人。」では、庭園を背にし、欄干の廻らされた舞台上で、花吹雪の舞う中、女性たちが舞や歌を披露している姿が詠まれている。漢詩の中では、花宴の中心をなす「花」とその宴における「女性たち」を相比べ、双方の美しさを引き立てる文脈がよく使われている。例えば、前述の第二十一句や「點珠顔、綴髻鬢、吹入懷中嬌態閑。朝攀花、暮折花。攀花力尽衣帶賒。」(作品番号「二」)を挙げることができる。

作品番号「三」

「雑言。於神泉苑待花宴、賦落花篇、応製」 外従五位上行山城介高丘宿禰弟越

落花飛

落花飛ぶ、

飛去落_レ丹墀_一

飛び去きて丹墀に落つ。

本謂随_レ風落

本より謂へらく風の随に落つと、

方知乘_レ化帰

方に知りぬ化に乗りて帰ぬと。

乍往乍還浮_二御盞_一

乍は往き乍は還りて御盞に浮かぶ、

一連一断点_二仙衣_一

一は連り一は断えて仙衣に点く。

無心草木猶餘_レ恋

無心の草木すら猶し恋を餘す、

況復微臣醉_二恩卮_一

況むや復微臣の恩卮に酔ふをは。

〈大意〉

落花が飛ぶ。飛んで行き、丹塗りのきさはしの上に落ちる。もともと花は風に導かれるままに散りゆくものと思っていたのに、天地の変化に従って散るということを悟った。落花はあちらへ飛び去ったかと思うと、こちらに漂ってきて天子の酒杯に浮かぶ。あるいは連なり、途切れて、御衣に点々と張りつく。

心のない落花でさえ、やはり天子を思慕する念をまだ十分に残している。まして我々臣下が恩賜の酒杯に酔うのは当然のことである。

〈説明・解釈〉

この漢詩は作品番号「二」とともに、作品番号「二」の応制であり、作者は高丘弟越である。弟越は『凌雲集』にこの漢詩を含めて二首が採られている。生没年などは不明で、弘仁三年(八二二)正月に外従五位下、山城介、また同五年二月に外従五位上となり、同六年正月には従五位下となった^{七九}。第一、二句「落花飛、飛去落丹墀」では、花卉が丹塗りのきさはしに舞い落ちる様子を、作者が趣深く眺めている様子から、正殿・乾臨閣の前庭で宴を開いたのであろう。落花は、風に乗ってどこか遠くに飛んで行ったかと思えば、まるで心があるかのように天皇の近くへと漂ってきて、御盞(第五句)に浮かんだり、仙衣(第六句)に点々と張りついたりする。天皇を慕う臣下の気持ち、を、こうした落花の様子に乗せて詠みあげている。

五一一―二 重陽節(作品番号「四」)「二二二」

作品番号「四」

「重陽節神泉苑賜宴群臣、鞞空通風同」 御製

登臨初九日

登臨す初九の日、

霽色敞_二秋空_一

霽色秋空に敞らかなり。

樹聽寒_レ蟬斷

樹に聴きし寒蟬断ゆ、

雲征遠雁通

雲に征きし遠雁通ふ。

晚藥猶含_レ露

晚藥猶し露を含む、

衰枝不_レ裊_レ風

衰枝風に裊がず。

延_レ祥盈把菊

祥を延ぶ盈把の菊

高宴古今同

高宴古今に同じ。

〈大意〉

重陽節、神泉苑で群臣に賜宴。初九日に登臨し、秋空が晴れ、寒蟬の鳴き声は断れ、遠く雁の群が通る。夕薬は露を含み、衰枝は風に揺られず、祥雲を延ぶ菊を把り、高宴は古今に同じ。

今日は九月の最初の九日、重陽の節である。小高いところに登りあたりを見渡すと、晴れ晴れとした美しい秋の空が一面に広がっている。夏頃、木々の間に聞いた蝸の声はもはや絶え、春頃に雲の彼方に飛び去っていった雁が帰ってくる季節となった。晩秋遅くに咲く菊の葉は白露を含み、葉も散り、衰えた木々の枝は寒風にもはや揺れることもないほどだ。今日は手を一杯の菊花に満たして、寿命を延ばす佳節である。この高尚な酒宴は今も昔も変わらず行われている。

〈説明・解釈〉

作品番号「四」は嵯峨天皇による漢詩で、弘仁三年（八二二）九月甲子（九日）条「幸神泉苑」。宴侍従已上。奏伎。命文人賦詩。五位已上及文人賜祿有差。」〔日本後紀〕または、同四年九月戊午（九日）条「幸神泉苑。命文人賦詩。賜綿有差。」〔類聚国史〕と記録される行幸において詠まれた可能性が高い^{八〇}。

第一句「登臨初九日」の「登臨」は、九月九日の日に災厄を免れるための儀式「登高」と同じく、神泉苑の小高い場所に登り菊酒などを飲む儀式である。こうしたことから、神泉苑には登高の儀式が行えるような丘状の場所が設えられていたと考えられる。第三、四句「樹聽寒蟬斷、雲征遠雁通」は対句で、セミの声が途絶え、ガンの到来する季節、つまり重陽の季節が巡ってきたことを示す。また、第五句「晚藥猶含露」の遅咲きのキクの葉が露を含みみずみずしい様子と、第六句「衰枝不裊風」の落葉し乾き衰えた木々の枝の様子を対句で詠むことで、重陽節の景物であるキクの美しさを際立たせている。第七、八句「延祥盈把菊、高宴古今同」では、手にキクを満たし寿命を延ばすという陶淵明の故事をなぞらえ、多くの臣下らと共に、「高宴」（高尚高雅で盛大な宴）を催した様子が詠まれている。

作品番号「五」

「九月九日於神泉苑宴群臣、各賦一物、得秋菊」

御製

旻商季序重陽節

旻商の季序重陽の節、

菊為開花宴千官、
菊の花を開くが為に千官を宴す。
藥耐朝風今日笑、
藥は朝風に耐えて今日し笑む、
采露夕露此時寒、
采は夕露に露ひて此の時し寒し。
把盈玉手流香遠、
把りて玉手に盈てては香を流ふること遠し、
摘入金杯辨色難、
摘みて金杯に入れば色を辨くこと難し。
聞道仙人好所服、
聞道く仙人好みて服する所ぞと、
對之延壽動心看、
これに對ひて寿を延べむと心を動かして看る。

〈大意〉

今日は九月九日の節会である。この佳節の景物である菊が咲いたので、数多くの文武百官を参加させて御宴を開いたのである。菊の葉は朝風に耐えて今日九日の日に咲き微笑むが、その花は夜露に濡れて今や寒げに見える。菊を採って玉のように美しい手に満たすと、その香りは遠くまで流れ伝わっていく。また、摘み取って金色の酒杯に入れると、杯と菊の黄金が区別できないほど美しい。聞くところによれば、菊は仙人が好んで服用するらしい。この菊に長寿を願い、菊に心を寄り添わせてみる。

〈説明・解釈〉

作品番号「五」は嵯峨天皇による漢詩である。この節会で詠まれた漢詩群は各々一つの景物を題材に採って詩を作っており、この作品は「秋菊」について詠まれたものである。同じ詩宴で詠まれた応制詩として、作品番号「六」（淳和皇太子）、「七」（良安安世）、「八」（小野岑守）、「九」（菅原清公）がある。詩宴に参加した公卿らからみて、この詩宴は弘仁初期であろうと推測できる。小島は弘仁二〜四年の九月九日のいずれかの作であろうと推測している^{八一}。

この漢詩の第二句「菊為開花宴千官」から、多くの文人・官人と共に神泉苑において重陽節の宴がとり行われたことがわかる。この漢詩は、題詞にあるように、キクに焦点を当てて詠まれている。第三、四句「藥耐朝風今日笑、采露夕露此時寒」から、朝の寒風に負けずに美しく咲き誇ったキクが、

夜露に濡れて寒々しく見える様子を詠む。第五句「把盈玉手流香遠」はキクを手に満たし香りを楽しむ様子を示し、第六句「挿入金杯辨色難」では、長寿を願い、菊酒を飲む儀式が行われた様子を示している。

作品番号「六」

「九月九日侍讌神泉苑、各賦一物、得秋露、応制」 令製（淳和皇太弟）

蓐収警節秋云老 蓐収の警節秋云に老い、

百卉初腓露已凄 百卉初めて腓み露已に凄し。

池際凝_レ荷残葉折 池際荷に凝りて残葉折る、

岸頭洗_レ菊早花低 岸頭菊を洗ひて早花低し。

未央闕側承_二双掌_一 未央の闕側双掌に承く、

長信宮中起_二隻啼_一 長信の宮中隻啼を起す。

謬忝_二恩筵_一何所賦 謬りて恩筵を忝くす何の賦する所ぞ、

晞陽湛湛被_二群黎_一 晞陽湛湛に群黎に被る。

〈大意〉

秋は「蓐収」は秋を司る神の意、ここに更けゆき、様々な草木もや々と枯れ始め、白露はもはや冷たい。池の水際には露が蓮に凍り付き、破れ損じた葉は折れてしまい、池岸には早咲きの菊が露に洗われて低く頭を垂れていく。漢の未央宮の門の側には甘露を受けるために仙人掌が二つ並び立ち、漢の長信宮では班婕妤（漢成帝の時の女官）が独り侘しく露のような涙を流す。そんな身分でもないのに、間違つて温情あふれるこの御宴の筵に侍り、何を詩に作つたらよかるうか。濡れた露を乾かす太陽の如き天子の恩恵が多くの人民にまでも及んでいるので、今更詩を作る必要もないほどである。

〈説明・解釈〉

作品番号「六」は、「秋露」を題に採り詠まれた淳和皇太弟の作品で、作品番号「五」の応制である。

まず、第二句「百卉初腓露已凄」から、秋も深まり園内の植物が冬枯れの様相を呈している様子がわかる。第三句「池際凝荷残葉折」では、池際のハスの葉に露が凍り付き、傷み折れている侘しい秋の風情が詠まれ、第四句「岸頭洗菊早花低」は、池岸に植栽された早咲きのキクが水面に低く頭を垂れている様子を示している。第七、八句「謬忝恩筵何所賦、晞陽湛湛被群黎」の「恩筵」とは天子の賜る恩情あふれる御宴を意味し、「晞陽湛湛」では露を乾かす太陽のような天子の恩恵を表している。

作品番号「七」

「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋蓮、応製」 左兵衛督従四位下兼

行但馬守良岑朝臣安世

神泉御苑霜氛下 神泉の御苑霜氛下り、

靈沼秋蓮過半黄 靈沼の秋蓮過半黄なり。

露泛_二穿杯_一拙_レ生_レ玉 露は穿杯に泛かびて玉を生むこと拙し、

風吹_二旧服_一無_レ復香_一 風は旧服を吹きて復香なし。

波収_二隱士_一三秋蓋 波に収まる隱士が三秋の蓋、

浦落_二幽人_一九月裳 浦に落つ幽人が九月の裳。

妖艷佳人望_二已断_一 妖艷の佳人望已に断ゆ、

為_二因_一聖主_二水亭傍_一 為に聖主に因る水亭の傍。

〈大意〉

神泉の御苑には霜を含んだ気が下り、周・文王の靈沼にも比すべき、この御苑の池の秋蓮はおおよそ黄色く色付いてきている。白露は蓮の葉に浮かんでいるものの、破れた葉の上ではなかなか美しく玉を帯びることができない。古ぼけた衣のような蓮の花弁に風が吹きつけるが、もはや芳香もない。神泉苑の池の波間に静かに浮かんでいる隠者の笠にも似た秋蓮の葉、池の入江に落ちて散り敷くしずかな女人の裳にも似た晩秋の蓮の花弁。艶やかな美しい女人のごとき蓮の花をもちや見ることとはかなわぬ。そのため聖天子に頼って水辺の亭の傍に侍るのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「七」は良岑安世による漢詩で、作品番号「六」と同様に作品番号「五」の応制である。この漢詩は「秋蓮」を題に採り、詠まれた漢詩である。作者である良岑安世（六八五〜八三〇）は、桓武天皇の皇子で、延暦二十一年（八〇二）十二月良岑朝臣を賜り、臣籍降下した。大同四年（八一〇）に従五位下、右近衛少将に叙任され、弘仁二年には藏人頭となり、嵯峨天皇の側近となった。弘仁七年には三十二歳の若さで参議となり、十二年に従三位、中納言となる。文武に優れ、『日本後紀』『内裏式』の編纂に参画した。また、三大漢詩文集にも多数の漢詩が収録されており、『経国集』編纂にも携わった。

まず、第二句「露沼秋蓮過半黄」では、神泉苑を周の文王の離宮にあった池沼「露沼」に例え、その庭園意匠を称賛している。その園池にはハスが群生しており、折しも秋になり葉が黄色く色づいている様子である。第二句「露泛穿杯拙生玉」は、破れてしわになったハスの葉が露を帯びる様子を詠み、第四句「風吹旧服無復香」では、古ぼけた衣のように枯れ、芳香を失ったハスの花びらを詠んでいる。第五句「波取隠士三秋蓋」は黄変し隠者の傘のように萎んだハスの葉の様子、第六句「浦落幽人九月裳」は池の入り江に散り集まったハスの花弁が薄く透けて女性の裳のように見える様子を詠む。最後に第八句「為因聖主水亭傍」から、神泉苑の池の傍らには水亭が設えられていたことがうかがえる。

作品番号「八」

「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋柳、応製」
馬頭美濃守小野朝臣岑守
内藏頭従五位上兼左

九月高颺吹暮柳、
千条縮折無復柔、
寒声寥亮空留笛、
衰蔭淒涼不障楼、
短晷晚斜星舍冷、
九月高颺暮柳を吹き、
千条縮折し復柔ふことなし。
寒声寥亮にして空しく笛を留む、
衰蔭淒涼にして楼に障らず、
短晷晩に斜きて星舎冷し、

辺山昼も暗く寒途脩し。

哀生雖謝封霜勒

辺山昼も暗く寒途脩し、
哀生れて謝らむとすと雖も封霜勒し、

恩煦之餘未先秋

恩煦之餘未だ秋に先だたず。

〈大意〉

暮秋の九月、高い秋空を吹く疾風が柳に吹きつけ、幾筋もある柳の糸枝は縮み折れ曲がり、再びしなやかに垂れさがることもない。寒々と吹く風の音はさやかに高く響き、いたずらに柳の枝に笛のような残響を残すばかりである。衰えた柳の木陰は小さく、物寂しく、高樓の邪魔にもならない。短い秋の日は傾き、星の宿りは冷たい。国境地帯の山は昼もなお暗く、砦に通ずる道は延々と続く。哀れさが生じ、季節も秋から冬へと移り変わるが、霜が柳を抑え縮こまらせている。しかも天子の恩恵を有り余るほど受けているために、この柳はまだ葉を散らさずにいるのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「八」は小野岑守による漢詩で、作品番号「六」、「七」と同様に作品番号「五」の応制である。この漢詩は「秋柳」を題に採り詠まれた漢詩である。

第一〜三句「九月高颺吹暮柳、千条縮折無復柔、寒声寥亮空留笛」には、ヤナギが晩秋の寒風に縮こまり、枝が枯れ乾いてしなやかさを失った様子が詠まれている。さらに、第四句「衰蔭淒涼不障楼」から、衰えたヤナギの葉が茂らず枝の間から、高樓が透けて見えている様子がわかる。

作品番号「九」

「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋山」
臣清公
従五位上行式部少輔菅原朝

三山縹眇滄瀛外、
五岳嵯峨赤嶺中、
防露占松千載翠、
露を防ぐ古松千載に翠なり、

待レ風危葉九秋紅 風を待つ危葉は九秋に紅なり。

落泉曝レ布懸二飛鶴一

落泉布を曝して飛鶴を懸く、

晴雨収レ糸閉 薄虹一

晴雨糸を収めて薄虹閉づ。

仁者樂レ山何所寄

仁者山を樂しづるは何の寄する所で、

国家襟帯在二西東一

国家の襟帯西東に在り。

〈大意〉

仙人の住むという三つの仙山（蓬萊・瀛州・方丈）は遙か青海原の外に立ち、名山である五つの名山（泰山・衡山・嵩山・華山・恒山）は險しく中国本土の中に聳える。露をしのぎ立つ御苑の古松は千年もの間、変わらぬ緑を保ち、風を待つて危うく散ろうとする木の葉は今紅葉している。庭に落ちる瀑布の水は白い布をさらしたかのように白く垂れて、あたかも飛び渡る白い鶴（くぐい）のようだ。晴れゆく雨はかぼそい糸のような筋を収め、薄くなった虹は消えてゆく。仁者が山を樂しむとは一体どのような根拠があるのか、それは山が国家の襟や帯として東西に聳えているからだ。

〈説明・解釈〉

作品番号「九」は菅原清公の漢詩で、作品番号「六」も「八」と同様に、作品番号「五」の応制である。菅原清公は、延暦八年（七八九）文章生に補せられた。延暦二十三年に唐に渡り、藤原葛麻呂と共に皇帝・徳宗に謁見し、翌二十四年に帰国すると従五位下、大学助に叙任される。嵯峨朝後期以後には順調に昇進し、承和六年（八三九）には従三位、同九年十月に没した。その優れた学識により嵯峨文壇の一員として、三大漢詩文集の中に漢詩を多く残し、『凌雲集』、『文華秀麗集』の撰にも参与している^{八〇}。

第一、二句「三山縹渺滄瀛外、五岳嵯峨赤泉中」は、三つの仙山と中国の五つの名山を詠み、神泉苑の築山はそれに比すべき意匠であることが詠まれている。また、第八句「国家襟帯在二西東一」について、小島は「在二西東二は、山が囲むやうに西方や東方に連なつてゐる形容。二二は、神泉苑の築山がぐるりと池のあたりを取り巻く様を云つたものとみられよう」と指摘す

^{八三}。一方で、太田による弘仁期の神泉苑復原図には、そうした意匠の築山は描かれていない。つまり、この築山の描写は「秋山」という題に沿った最上級の称賛といったもので、やや誇張された表現であると考えられる。第三、四句「防霞古松千載翠、待風危葉九秋紅」は、庭園内で冬も青々と茂るマツの古木と、紅葉し散りかかった木々が対句で詠まれている。さらに、第五句「落泉曝布飛鶴」は鶴が飛び去るようにまつぐ水の落ちる瀑布の様子を詠んでいるが、ここは第五句に詠まれた瀑布の水飛沫とそこに光が反射してうつすらと虹が架かる情景を描写したものととして考えることもできるかもしれない。

作品番号「十」

「重陽節神泉苑、同賦三秋大有年、題中取韻、尤韻成篇」 御製

旻氣何寥廓

旻氣何ぞ寥廓なる、

登高望悠悠

登高望み悠悠なり。

大田獲二豊稔一

大田豊稔を獲、

従レ此歳工休

此より歳工休む。

芳莛筵上薦

芳莛筵上に薦む、

時菊盞中浮

時菊盞中に浮かぶ。

林洞逢二揺落一

林洞りて揺落に逢ふ、

池清為二潦収一

池清くして潦収を為す。

蟋蟀蔵レ声曉

蟋蟀声を蔵むる曉

兼葭変レ色洲

兼葭色を変ふる洲。

重陽常宜レ宴

重陽常に宴に宜し、

況復有レ年秋

況むや復年有る秋をば。

〈大意〉

秋の気はなんとからりと、天高く広がっていることか。高所に登ると、四方の眺めは遠くはるばると見渡される。広々として大きな田が豊かな稔りを

もたらし、これより一年の農事は休みに入る。酒宴の席で芳しい茱萸を人々に勧め、杯中には秋に咲く菊が浮かんでいる。林は木の葉が落ち、枝の間を透かし見ることが出来る。池は濁った滞水が引き、清く澄んでいる。蟋蟀が声をひそめるまだ暗い暁のもと、池辺の洲の葦や蘆が黄色く枯れている。九月九日は毎年いつも宴会を設けるのに相応しい。まして豊年のこの秋においては猶更のことだ。

〈説明・解釈〉

作品番号「十」は重陽節の詩宴における嵯峨天皇による漢詩である。

まず、第二句「登高望悠悠」は小高い場所に登る「登高」という重陽節の儀式の様子が詠まれており、神泉苑の築山はこうした儀式に利用される側面を有していたことがうかがえる。第五、六句「芳萸筵上薦、時菊盞中浮」では宴において茱萸を身につけ、菊酒を飲む様子がそれぞれ詠まれており、これらはいずれも、災厄を避け長寿を願う儀式である。また、第七、八句「林洞逢揺落、池清為潦収」は対句で、落葉した樹林の様子と、滞水が解消し水の澄んだ園池を詠んでいる。さらに、第八句「兼葭変色洲」から、園池の洲にはアシヤヨシが群生し、重陽節の頃には黄色く枯れようとしていたことがわかる。

作品番号「十一」

「神泉苑九日落葉篇。一首。」 御製

寥廓秋天露為霜

寥廓なる秋天露は霜となり、

山林晩葉併芸黄

山林の晩葉併しく芸黄す。

自然灑落任朔風

自然灑落朔風に任せ、

揺颺徘徊滿雲空

揺颺徘徊雲空に満つ。

朝来暮往無常時

朝来暮往常の時無く、

北度南飛寧有期

北度南飛寧ぞ期あらむや。

歲月差馳徒逼迫

歲月差馳徒らに逼迫し、

川臯变化通盛衰

川臯变化通ひに盛衰す。

熙熙春心未傷尽

熙熙なる春心未だ傷尽きぬに、

儵忽復逢秋氣悲 儵忽ちにして復も逢ふ秋氣の悲しきに。

商飈掩乱吹洞庭 商飈掩乱洞庭を吹き、

墜葉翩翻動寒声 墜葉翩翻寒声を動かす。

寒声起、洞庭波 寒声起り、洞庭波だつ、

随波泛流不己 波に随ひ泛流にして流れて已まず。

虚条縮槭楓江上 虚条縮槭す楓江の上、

旧蓋穿適荷潭裡 旧蓋穿適す荷潭の裡。

塞外征夫遼西戍 塞外の征夫遼西を戍り、

閨中孤婦怨睽携 閨中の孤婦睽携を怨む。

容華銷歇為秋暮 容華銷歇して秋暮となり、

心事相違多悽悽 心事相違して悽悽多し。

觀落葉、斷人腸 落葉を觀れば、人の腸を断つ、

淮南木葉雜雁翔 淮南の木葉雜雁翔る。

對此長年悲 此れに対かひて長年を悲しび、

含情多所所思 情を含みて思ふ所多し。

吁嗟潘岳興 吁嗟潘岳の興、

感歎淚空垂 感歎の淚空しくも垂る。

秋云晚 秋云に晚れぬ、

無物不蕭条 物として蕭条ならずといふこと無く、

坐見寒林落葉飄 坐に見る寒林に落葉の飄るを。

〈大意〉

空虚でからりとして広い秋空のもと、露はやがて霜となる。晩秋の山林の木は葉は皆一様に黄葉する。葉は自然に落ちて北風の吹くままに任せる。ゆらゆらと舞いあがってさまよい、雲の多い秋空一杯に満ちる。朝な夕な木の葉は飛び交い、定まる時はない。年月が相次いで走り過ぎ、何もしない内に早くも秋となった。川や水田は年月の流れと共に、順々にその姿を変えてゆく。楽しい春を思う心がまだ尽きないのに、忽ちまたも悲しい秋の気配に出会う。秋のつむじ風がさつと吹き、洞庭湖の水面をさらう。落ち葉はひらひ

らと翻つて、寒々とした音を奏でる。落ち葉は波のまにまに浮かび漂い流れて止まることはない。楓江のほとりに葉が落ちて、空しい枝は縮む。蓮池のなかで、古くなった蓮の筥が露霜に打たれている。砦の外に行つた夫は辺境の遼西を守り、閨の中で独り留守をする女人は夫との別離を恨む。華やかな容貌は消え失せて、暮秋ともなれば、心に思う事と実際の事とは互いに違い、心にいたみ悲しむことが多くなる。落ち葉を見るとはらわたを断ち切られる思いがする。淮南の木の葉の中に雁が入り混じつて翔ける。このような情景に対して年を重ねることを悲しみ、感情を胸中に収めて思うところも大きい。ああ、潘岳の秋興の賦を読めば、感嘆の涙が垂れ落ちる。秋がここに暮れる。あらゆるものが物寂しく、なんとはなしに寒々しい林に落ち葉が翻るのを見るばかりである。

《説明・解釈》

作品番号「十二」は嵯峨天皇による漢詩で、重陽節の詩宴において、秋のもの悲しさを落葉にのせて詠んだものである。

まず、第二句「山林晩葉併芸黄」は神泉苑の樹林が黄色く紅葉した情景を示し、第三、六句「自然灑落任朔風、搖颺徘徊滿雲空、朝來暮往無常時、北度南飛寧有期」には、落ち葉が風に吹かれるがまにまに舞い上がり、あちらこちらへ飛んでいく様子が詠まれている。第十一、十二句「商飈掩乱吹洞庭、墜葉翩翩動寒声」は、神泉苑の園池を洞庭湖になぞらえ、水面をつむじ風が吹き渡り、落ち葉が翻る情景、第十三、十四句「寒声起、洞庭波、随波泛泛流不已」では風が吹いた水面に波が起き、その波間を落ち葉が漂い浮かぶ様子を示す。さらに、第十五句「虚条縮槭楓江上」は、神泉苑の遣水を楓江（江蘇省を流れ、現・上海を経て海に注ぎ込む大川を指す）になぞらえ、岸辺の樹木が落葉し枝が縮こまる様子が詠まれ、神泉苑内の池や遣水を江南の名景に例えている。井実は重陽節における悲秋文学の制作が契機となつて楚辞的世界が導入され、さらに淮南や呉・楚も引き寄せることで、神泉苑を江南として見立てるようになったことを指摘している^{八四}。また、第十六句「旧蓋

穿迥荷潭裡」には、晩秋のハスの葉が露や霜により傷んでいる様子が描写され、園池にはハスが群生していたことがわかる。

作品番号「十二」

「神泉苑九日落葉篇。応製。一首。」 巨勢識人（巨勢識人）

晩節商天朔氣侵

嚴霜夜雨變秋林

高颺一蟬欲吹尽

灑落寒声万葉吟

來往本無何処定

東西偏任自然心

颺空無着千餘滿

積地不掃尺許深

觀落葉、落林塘

半分紅兮半分黃

洞庭波に随ひて色泛映し、

合浦風に因りて影飄揚す。

繞叢宛似莊周蝶

浦を度れば遥かに郭泰が舟かと疑ふ。

四時寒暑來且往

一歳の榮枯春と秋と。

劉安独り傷む長年の歎、

屈平多く増す遲暮の憂。

紫塞の寒風鉄衣に苦え、

紅樓の夜月羅帷を怨む。

已に見る淮南の木葉の落つるを、

還逢ふ天北の雁書の歸るに。

落葉を見れば、林中に落つ、

林中葉尽きて秋云に窮まる。

衰影遥知楚山桂

衰影に遥かに知る楚山の桂、

餘香猶想吳江楓

餘香に猶想ふ吳江の楓。

誰使二変化能若レ此

誰れか変化を能く此の若くならしむる、

一時万物不_レ相同一

一時万物相同しくあらず。

唯餘上林凌_レ霜葉

唯餘すは上林霜を凌ぐ葉、

歳寒之後独青葱

歳寒くして後独り青葱なるのみ。

〈大意〉

秋の末、空を北方の寒気が侵し、厳しい霜や秋雨が林の様子を一変させる。高い所を疾風がさつと吹き、木の葉をすっかり吹き尽くし、落ちて積もった数多の葉が寒々とした音を立てる。落ち葉が行ったり来たり、ひたすら自然に任せてあちこち飛び交う。空に舞い上がってひらひらと数多の葉が空に満ち、土の上に積もつてもかき払わず一尺ばかりの深さになっている。落ち葉が林中の池にも散り落ちる。半分は紅色、半分は黄色である。洞庭湖の波のまにまに黄葉した落ち葉が浮かび、風が吹けば、落ち葉の影が空に翻る。草むらを落ち葉が舞い翻ると、ちようど莊周の蝶が舞う様である。落葉が浦を飛び渡ると、郭泰の舟ではないかと遙かに思いをはせる。春夏秋冬四季の暑さ寒さはやつてきたかと思つと、また去り、一年の栄枯盛衰は春と秋の交代によつて行われる。漢の淮南の王劉安は、独り老年をいたみ、屈原は年をとるにつれ、憂いをますます増した。戦場へ行った夫のいる万理の長城を吹く寒風は鉄の鎧や兜に冴えわたり、朱塗りの高殿に照る夜の月は薄絹のとばりの上を怨み顔に照らす。淮南に木の葉が落ちるのを見るばかりではなく、更に天の北方の雁が帰来するのに出会う。落ち葉を見れば、林の中に散る。林中の葉は散り尽き、秋は極まる。散り衰えた木の影を見て、遙かに楚山の桂の木のあり様を知る。木の葉の消えかかった残り香によつて、吳江の楓の木を思いやる。一体誰がものの栄枯盛衰を廻すのだろうか。万物はひとときも同じ状態ではない。ただ神泉苑には霜を凌ぐ松柏だけが残っていて、寒い中でもひとり青々としているばかりである。

〈説明・解釈〉

作品番号「十二」は巨勢識人の漢詩で、作品番号「十一」の応制である。

巨勢識人は前期に活躍した漢詩人で、三天漢詩文集のなかに多数の作品が収録されている。

この漢詩も作品番号「十一」と同じく、重陽節の詩宴において、神泉苑の落葉の様子について詠んだものである。まず、第三〜八句「高颺一獵欲吹尽、灑落寒声万葉、来往本無何処定、東西偏任自然心、颺空無着千餘滿、積地不掃尺許深」では、落ち葉が風に舞い上がり、空に満ち、あちらこちらに飛散して、地面にも深く降り積もる様子を描写している。また、第九、十句「觀落葉、落林塘、半分紅兮半分黄」は、樹林のなかの堤に赤や黄色など様々に紅葉した葉が散り落ちている様子を示す。そして第十一、十二句「洞庭随_レ波色泛映、合浦因風影飄揚」では、作品番号「十一」と同様に神泉苑の園池を「洞庭湖」になぞらえ、池の波間に紅葉が浮かび、風が吹けば翻る様子を描写する。第十三、十四句「繞叢宛似莊周蝶、度浦遙疑郭泰舟」では、池の周囲の草むらを落ち葉が舞い翻る様子を莊周の蝶八五が舞う様子に例え、落葉が池の浦を飛び渡る様子を郭泰の舟八六に例えている。ここから、秋の池辺はやや鬱蒼とした草むらが広がり、至る所が紅葉した落ち葉で彩られていた様子がうかがえる。さらに、第二十三、四句「觀落葉、落林中、林中葉尽秋云窮」から、神泉苑の樹林も、木々が落葉し落ち葉が積もり、秋の景観を見せたいことがわかる。そうしたなかにあつても、第二十九、三十句「唯餘上林凌霜葉、歳寒之後独青葱」には、松柏だけは青々と葉を茂らせている様子が詠まれている。

作品番号「十三」

「重陽節神泉苑賦秋可哀一首」 太上天皇在祚

秋可_レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀_二年序之早寒_一

年序の早く寒けきを哀れぶ。

天高爽兮雲渺渺

天高爽にして雲渺渺たり、

氣蕭颺兮露团团

氣蕭颺にして露团团たり。

庭潦収而水既浄

林蝉疎以引欲レ殫

燕先二社日一蟄 巖嶺一

雁雜二涼風一叫二江洲一

荷潭帯レ冷無二全葉一

柳岸銜レ霜枝不レ柔

寒服時授

熟稼新収

秋可レ哀兮

哀二草木之揺落一

对二晚林於変衰一分

聽二秋声乎蕭索一

望二芳菊之丘阜一

看二幽蘭之阜澤一

年華荏苒行将レ闌

物候蹉跎已廻薄

楚客悲哉之詞

晋郎感興之作

秋可レ哀兮

哀二秋夜之長遥一

風凜凜 月照照

臥对二風月一正蕭条

窓前墜葉那堪レ聴

枕上未レ眠欲二終宵一

到レ曉城辺誰擣レ衣

冷冷夜響去来飛

不_レ是愁人_一猶多_レ感

深閨何況怨_一別離_一

吁嗟四運易_一行邁_一

庭潦収まりて水既に浄し、

林蝉疎かにして引殫きなむとす。

燕は社日に先だちて巖嶺に蟄る、

雁は涼風に雜りて江洲に叫ぶ。

荷潭冷を帯びて全き葉無し、

柳岸霜を銜みて枝柔らかならず。

寒服時に授く、

熟稼新しく収む。

秋哀れぶべし、

草木の揺落を哀れぶ。

晚林を變衰に対かふ、

秋声を蕭索に聴く。

芳菊の丘阜を望む、

幽蘭の阜澤を看る。

年華荏苒として行き闌けなむとす、

物候蹉跎として已に廻薄す。

楚客が悲哉の詞、

晋郎が感興の作。

秋哀れぶべし、

秋夜の長く遙けきことを哀れぶ。

風凜凜たり 月照照たり、

臥して風月に対へば正に蕭条たり。

窓前墜葉那ぞ聴くに堪へむ、

枕上未だ眠らず終宵ならむとす。

曉に到りて城辺に誰れか衣を擣つ、

冷冷たる夜響去来して飛ぶ。

是れ愁人ならずして猶し感多し、

深閨何ぞ況むや別離を怨むをは。

吁嗟す四運の行邁し易きことを、

惆悵三秋絶可レ悲

惆悵す三秋の絶た悲しむべきことを。

《大意》

秋は哀れむべきである。秋がめぐつてきて早くも冷たさを感じることを哀れがる。秋の空は高く爽やかに、雲ははるか遠くに広がる。秋の気は物寂しく、粒のように丸い露が浮かぶ。庭の水は秋になって収まり、水はすでに澄んでいる。林の蝉は声もまばらになり、その声も尽きようとしている。燕は社日（立秋後の第五の戌の日）より前に岩山の峯に籠り、入れ替わりに雁は冷たい風にまじつて川の洲のあたりになき叫ぶ。蓮のある池の淵あたりでは、蓮の葉は冷気を帯びて損なわれ、柳の岸辺のあたりでは柳が霜を含み、枝が堅く凍っている。秋の涼風が吹きはじめ、寒気を防ぐ衣服をあてがい、よく実った穀物を新たに取り入れる。秋はしみじみと哀れである。草木の葉がゆらゆらと揺れて落葉すること悲しむ。枯れ衰えた晩秋の林に相對し、物寂しい秋の声を聴く。香しい菊の生えた丘を眺望し、奥ゆかしい香りを放つ蘭の生えた沢を見る。月日は流れ、秋も更け行く。四季の風物や気候は忽ち移り行きて、早くも晩秋がめぐつてきた。楚の人・宋玉の『悲しき哉』のうた、晋の人・潘岳の『秋興賦』の作、秋の悲哀は二つの詩に極まる。秋は哀れである。秋の夜の遙かに長いことをしみじみと哀れに思う。風は身に染みるほど冷たく、月は冴え渡っている。臥したまま夜風や月に対するとしみじみと物寂しく感じられる。窓の前に散り落ちる木の葉の音を聴くにつけて、どうして耐えられようか。夜も明けようとするが、眠ることができない。ほの暗い明け方に砧の音が聞こえてくるが、町のあたりで誰かが衣を打っているのだろうか。冷たい夜に砧の音は遠くに消えたり、近くから聞こえてきたりして飛び交う。私は愁を抱く者ではないけれども、秋の物悲しさに思いが深い。ましてや奥深い閨のなかの女性が夫との別れを怨んでいるような場合においてはなおさらである。四季の過ぎやすいことを嘆き、秋のはなはだ哀れなることを悲しむ。

《説明・解釈》

この漢詩は、重陽節の行幸において「秋可哀」という題詞で嵯峨天皇によつ

て作られたものである。後述する作品番号「十四」も「二十一」も同じ宴において同題で詠まれたものである。小島は大同四年（弘仁十三年）の重陽節の行幸のいずれかで作られたものと指摘するが、詳細は不明である。

まず第五句「庭潦収而水既浄」から、夏の滞水が収まり、池の水が清らかに澄んでいる様子がわかる。第九、十句「荷潭帯冷無全葉、柳岸銜霜枝不柔」は対句で、池の淵にはハスが生育し、寒さに葉が凍り破れている様子、また、池岸にはヤナギが植栽されていたことがわかる。さらに、第十七、八句「望芳菊之丘阜、看幽蘭之皁澤」も対句で、重陽節の景物であるキクが小高い丘、つまり築山上に植栽されていたこと、また、蘭が水辺に植栽されていた様子が詠まれている。「蘭」と表される植物は、ラン科の植物以外にも、フジバカマを指す場合がある。時期からしても、ここはフジバカマであろう。秋に、香り高く美しい花を咲かせる植物で、秋の七草にもかぞえられる。重陽節の宴において、落葉し、枯れ行く寂しい庭園景觀に心を寄せるとともに、節会に合わせて咲く築山上のキクや水辺のフジバカマを鑑賞したことがわかる。

作品番号「十四」

「重陽節神泉苑賦秋可哀、應制一首」 皇帝在東宮（淳和皇太弟）

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀ニ秋景之短暉ニ

秋景の短暉を哀れぶ。

天廓落而氣蕭

天は廓落として気蕭し、

日淒清以光微

日は淒清として光微かなり。

潦収流潔兮

潦収りて流潔し、

霜降林稀

霜降りて林稀らなり。

蟬飲レ露而声切

蟬は露を飲みて声切なり、

雁冒レ霧以行遲

雁は霧を冒して行遅し。

屏ニ除熱之輕扇ニ

除熱の輕扇を屏く、

授ニ禦冬之寒衣ニ

禦冬の寒衣を授く。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし

哀ニ百卉之漸死ニ

百卉の漸く死ぬることを哀れぶ。

葉思吳江之楓

葉に思ふ吳江の楓、

波憶洞庭之水

波に憶ふ洞庭の水。

草変レ貌以揺レ蒂

草は貌を変へて蒂を揺がす、

樹換レ容而懸レ子

樹は容を換へて子を懸く。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし

哀ニ榮枯之有レ時

榮枯の時有ることを哀れぶ。

送ニ春光之可レ樂

春光の樂しむべきことを送る、

逢ニ秋序之可レ悲

秋序の悲しむべきことに逢ふ。

嗟揺落之多レ感

嗟揺落の感多き、

良無レ傷而不レ滋

良に傷みて滋さぬこと無し。

悽ニ承弁於岳興ニ

承弁を岳が興に悽む、

想ニ拊衾於湛詞ニ

拊衾を湛が詞に想ふ。

粵採ニ萸房ニ之辟レ惡

粵に萸房を採りて惡を辟く、

復摘ニ菊蕊ニ之延レ期

復菊蕊を摘みて期を延ぶ。

小臣常有ニ蒲柳性ニ

小臣常に蒲柳の性あるも、

恩胸不レ畏ニ嚴霜飛ニ

恩胸嚴霜の飛ぶことを畏れず。

〈大意〉

秋は哀れだ。秋の日の短さを哀れに思う。秋の天空はがらんとして寂しく、その気は厳しい。日は寒々として澄み、その光は微かである。夏にあふれた濁り水は収まり、その流れは清らかである。地上には霜が降り、林の木の葉もまばらになつてゐる。蟬は露を飲んで、その声は切々と人に迫るようである。雁は霧の中をかき分けて飛び、進みは遅々としている。夏によく使つた暑熱を除くための軽やかな扇を捨て去り、冬の寒さを防ぐ衣服を庶民に与える。秋は哀れだ。種々の草木が次第に枯れてゆく様子を哀れがる。木の葉をみては吳江の楓が色づく様子を偲び、秋風に波立つ水面を見ては洞庭湖の水を憶う。草はその姿を変え、枯れ残つた部分が秋風に揺らめく。樹木も姿を変え、果実をぶら下げてゐる。秋は哀れだ。四季の移り変わりによつて物色の盛衰があることが哀れだ。心楽しい春の光を後に送り、ここに秋の悲しい時節に出会つた。ああ、

木の葉の揺れ落ちる様子が感慨深い。誠にいくら心痛めても、感傷が増すばかりである。潘岳の「秋興賦」にあるように、白髪まじりのまだら髪が冠に下に乱れる哀れさを悲しみ、夏侯湛の「秋可_レ哀」の賦にあるように、夜着を撫でつつ眠れない悲しみを思う。さてここに、茱萸の赤い房を手折って頭に差し邪気を払い、また菊の蕊を摘んで服用し寿命を延ばす。臣下の私は日頃川柳の如くか弱い身体だが、暖かい恵を受けているので、九月の厳しい霜の飛び来るとも恐れはしない。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、作品番号「十三」の御製と同じく「秋可_レ哀」という題詞で、大伴親王（淳和皇太弟）によって詠まれたものである。

第五、六句「潦収流潔兮、霜降林稀」から、秋になり、苑内の濁り水が収まり、落葉した樹林に霜が降りていることがわかる。第十三、十四句「葉思呉江之楓、波憶洞庭之水」は対句で、神泉苑の色づいた樹林を見て「呉江之楓」に思いを巡らし、神泉苑の波立つ池を眺めて「洞庭湖」に思い出すなど、神泉苑の意匠を中国の名景に例えている。

さらに、重陽節の儀式の様子も詠まれている。第二十五、二十六句「粵採萸房之辟惡、復摘菊蕊之延期」には、グミの房を頭に差し、菊酒を飲み長寿を願う儀式の様子が描写されている。

作品番号「十五」

「同前」 良安世（良安安世）

秋可_レ哀兮

哀_二初月之微涼_一

火度_レ天而西流

金心_レ律以為_レ王

蟋蟀吟兮壁幽寂

蟬蛸鳴兮野蒼茫

觀_二桐林之早彫_一

秋哀れぶべし、

初月の微涼を哀れぶ。

火は天を度りて西に流る、

金は律に応へて王を為す。

蟋蟀吟きて壁幽寂たり、

蟬蛸鳴きて野蒼茫たり。

桐林の早く彫むを觀、

感_二節物_一而増_レ傷

白日兮爰短

玄夜兮自長

秋可_レ哀兮

哀_二仲月之收成_一

天高兮氣靜

池冷兮水清

燕背_レ巢而北去

鴻含_レ蘆以南征

家家畏_レ朔方氣

戸戸起_レ擣衣聲

秋可_レ哀兮

哀_二季月之薄寒_一

寒眉嘖_二於陌柳_一

晚佩落_二於庭蘭_一

窃窈挿_レ萸兮鴛鴦席

簪纓飲_レ菊兮翡翠樓

痛_二風景之蕭索_一

悲_二揺落之暮秋_一

節物に感じて傷を増す。

白日爰に短し、

玄夜自らに長し。

秋哀れぶべし、

仲月の收成を哀れぶ。

天高くして気静けし、

池冷やかにして水清し。

燕は巢に背きて北を去る、

鴻は蘆を含みて南に征く。

家家畏る朔方の氣、

戸戸起る擣衣の聲。

秋哀れぶべし、

季月の薄寒を哀れぶ。

寒眉陌柳に嘖む、

晚佩庭蘭に落つ。

窃窈萸を挿す鴛鴦の席、

簪纓菊を飲む翡翠の樓

風景の蕭索を痛む、

揺落の暮秋を悲しむ。

〈大意〉

秋は哀れである。秋の初めの月のほのかな涼気を哀れに思う。秋になり、大心の心星（さそり座のアンタレス）は天空を渡って西方に下っていき、金は律暦の法則に依じて秋となり（金…五行説で西、秋を指す）、王（王相…陰陽家の語。五行が四時のあいだに互いに消長すること）という季節の移りをなす。こおろぎが傍で鳴き、その壁のあたりは静寂である。蟬が鳴いて、その声が響く山野は広く果てしない。林の桐が早くも身を縮めるのを見て、秋の季節の物色に哀れを感じて悲哀の情を増す。秋の日差しは短く、秋の夜は長い。秋は哀れである。仲秋八月の秋を悲しむ。秋空は高く、その気色は静かで、池は冷たく、その水

は清らかである。燕は自分の巢を後にし、北の地を去り、鴻雁は蘆の葉を口に含みながら、今秋を迎えているこの南の地にやってくる。家々では北方の寒気を恐れ、遠征中の夫へ送る衣を打つ砧の音が起こる。秋は哀れだ。晩秋のころの迫りくる厳しい寒さを哀れがる。ちまたの柳は寒そうに眉をひそめて縮んでいる。庭の蘭は晩秋の佩物であるその香が失せて衰えている。しとやかな宮女たちが茱萸を頭にかざすおしどりの如く睦まじい節会の席、簪纓（冠をとめるかんざしと冠のひも）をつけた高官たちが菊酒を酌み交わす翡翠のごとく麗しい高殿。秋の風景の物寂しさを痛ましく思い、木の葉の揺らぎ散る暮秋の九月を悲しむ。

〈説明・解釈〉

これは作品番号「十四」と同じく「秋可哀」という題詞で、良岑安世によって詠まれた漢詩である。

第七句「觀桐林之早彫」からアオギリの樹林があり、第二十二句「晚佩落於庭蘭」からフジバカマが植栽されていたことがわかる。

また、重陽節の宴についてもみておきたい。第二十三、二十四句「窃窈挿萸兮鴛鴦席、簪纓飲菊兮翡翠樓」では、神泉苑内の高殿において、グミを頭にかざした宮女たちが仲睦まじげに席に着き、高官らが菊酒を酌み交わす儀式の様子が描写されている。

作品番号「十六」

「同前」 仲雄王

秋可哀兮

秋哀れぶべし、

哀清商之初涼

清商の初涼を哀れぶ。

高曼凄兮林藹變

高曼凄として林藹変る、

厚壤肅兮山髮黃

厚壤肅として山髮黄つ。

聽征鴻之遵渚

征鴻の渚に遵ぶを聴く、

睇素領之辞梁

素領の梁を辞るを睇る。

秋可哀兮

秋哀れぶべし、

哀具物之具腓
送悠陽之暮曜
具物の具に腓むを哀れぶ。
悠陽の暮曜を送る、

承腫臙之初輝
腫臙の初輝を承く。

潭鳥鳴兮音冷
潭鳥鳴きて音冷し、

岸蛩落兮火微
岸蛩落ちて火微し。

秋可哀兮
秋哀れぶべし、

哀水木之清幽
水木の清幽を哀れぶ。

属君王之景祚
君王が景祚に属る、

陪帝者之佳遊
帝者が佳遊に陪る。

献千秋之寿爵
千秋の寿爵を献る、

荷萬代之天休
萬代の天休を荷はむ。

〈大意〉

秋は哀れである。秋の暫く涼気を催しはじめるとを哀れに思う。高い秋の天は寒々として、繁茂していた林は木の葉も疎らになり、地上の厚い土はかたく、山の木々の葉は黄葉する。秋になりやってきた鴻雁が波打ち際に沿って鳴く声を聞き、白いうなじの燕が梁に作った巢を去ってゆくのを見る。秋は哀れである。あらゆる草木がともに皆枯れ衰えることを哀れに思う。傾いていく入りの日の輝きを見送り、まだおぼろで明るくなろうとする月の初光を迎える。淵に住む鳥が鳴いて、その声は冷ややかに響く。岸辺の蛩は草叢に落ちて、その光はほのかである。秋は哀れだ。水や木の清らかで静寂な様を哀れがる。今日の佳節は君主の大いなる幸に当たる日であり、臣下の私どもは君の佳節の遊宴に侍る次第である。天子の永遠を寿ぐ祝いの酒杯を献上し、万世と到る立派な道を身に引き受けよう。

〈説明・解釈〉

これは仲雄王によってつくられた漢詩で、作品番号「十四」と同じく「秋可哀」という題詞で詠まれている。仲雄王は平安時代前期の官人で漢詩人である。

『文華秀麗集』の撰に加わり、序文を作るなど、嵯峨文壇で活躍した漢詩人の一人である。

第三句「高旻凄兮林藹變」では、青々と茂っていた神泉苑の樹林も落葉し、変わり果てた姿になっている様子が趣深く詠まれている。第十一、十二句「潭鳥鳴兮音冷、岸螢落兮火微」から、水辺にすむ鳥の鳴き声と草むらに住む螢の光が対比的に描写されている。

第十五く十八句「属君王之景祚、陪帝者之佳遊、献千秋之寿爵、荷萬代之天休」は、重陽節の宴の描写であり、天皇の永遠を寿いで臣下らが酒杯を献上する場面が詠まれている。

作品番号「十七」

「同前」 菅清公（菅原清公）

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀三秋之爽節

三秋の爽節を哀れぶ。

潦将レ収而水浄

潦収まらむとして水浄し、

雲既廓以天潔

雲既に廓らかにして天潔し。

望朝露之团团

朝露の团团たるを望む。

聽夕風之烈烈

夕風の烈烈たるを聴く。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀秋物之變衰

秋物の變衰を哀れぶ。

草辞レ翠以委レ薄

草は翠を辞りて薄に委す、

葉帯レ紅而去レ枝

葉は紅を帯びて枝を去る。

寒園柳落蟬声断

寒園柳落ちて蟬の声断ゆ、

晚浦蘆枯雁響悲

晚浦蘆枯れて雁が響悲し。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

感秋情之易レ驚

秋情の驚き易きことに感ず。

蘭幸レ佩以擢レ秀

蘭は佩を幸いて秀を擢つ、

菊憶レ杯而含レ馨

菊は盃を憶ひて馨を含む。

皇歡爰発

皇歡爰に発る、

歡興自生

歡興自らに生る。

資神泉之閑敞

神泉の閑敞に資り、

降恩席以延レ英

恩席を降して英を延きたまふ

鈞天奏レ樂

鈞天樂を奏つ、

罄地寿レ禎

罄地禎を寿ぐ。

俱醉重重心未レ尽

俱に酔ひて重重しき心未だ尽きず、

羲和冀駐西晶

羲和冀はくは西に向かふ晶を駐めむことを。

〈大意〉

秋は哀れだ。秋の爽やかな季節を哀れがる。秋になり、夏に溢れて濁った水は収まろうとし、水は清らかになり、空の雲はすでに空しいばかりに広々として天も爽やかに潔い。朝露がしげく降り、烈しい夕べの風の音に耳を傾ける。秋は哀れである。秋の草木も色がうつろい衰え枯れてゆくのを哀れに思う。草のみどりは色失せて、草むらとなつて枯れ行くままにまかせ、紅葉した木の葉は枝を離れ散り去る。寒々とした園の柳は散り、そこで鳴いていた蟬の声も絶え果てた。晩秋の入り江に生えた蘆は枯れ、雁の声は悲しげに聞こえる。秋は哀れだ。秋になり物事が移り変わる様子に驚きはつとして感じ入る。秋蘭は人の佩物となることを願うかのように、抜きん出た芳香を放ち、菊は酒杯に浮かべられることを思うかのように芳香を含んでいる。さてここに、天子の喜びが起こり、天子の興趣は自然に生じる。天子は神泉苑の静かで広々とした有様に因つて、ありがたくも酒宴の席に優れた臣下らを招かれた。天上の音楽にも比すべき宮中の音楽を演奏し、地上のすべてが瑞祥を祝う。皆がともども酩酊し、酒宴を離れたい気持ち募つて尽きない。太陽の御者よ、西に沈みゆくその太陽をどうか止めてほしい。

〈説明・解釈〉

これは菅原清公によつてつくられた漢詩で、作品番号「十四」と同じく「秋可哀」という題詞で詠まれている。

第三句「潦将収而水浄」から、夏場の滞水が引き、神泉苑の池水が澄んでい

る様子がわかる。第十一、十二句「寒園柳落蟬声断、晚浦蘆枯雁響悲」から苑に植栽されていたヤナギが落葉し、池の浦に群生していたアシも秋枯れしている様子がわかる。第十五、十六句「蘭幸佩以擢秀、菊憶杯而含馨」から、フジバカマが芳香を放ち、キクは香りを存分に含んでいるかのように瑞々しい様子であることがわかる。また、第十九、二十句「資神泉之閑敞、降恩席以延英」から、神泉苑は静かで広々としており、そこに臣下らが招かれ酒宴が催されている様子が詠まれ、第二十一、二十二句「鈞天奏樂、磬地寿禎」には、重陽節の宴において宮中の音楽が演奏され、皆で瑞祥を祝う様子が描写されている。

作品番号「十八」

「同前」 和眞綱（和氣眞綱）

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀歳時之如流

歳時の流るるが如きを哀れぶ。

季白膺レ節

季白節に膺り、

百工具休

百工具に休む。

秋何処而不レ興

秋何れの処として興あらざらむ、

興何秋而不レ愁

興何れの秋として愁へざらむ。

却暑絺於匣裡

暑絺を匣裡に却く、

禦寒颼於輕裘

寒颼を輕裘に禦ぐ。

傷曹子之惻怛

曹子が惻怛を痛む、

歎淮王之感憂

淮王が感憂を歎く。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀物候之凄清

物候の凄清たることを哀れぶ。

野改色以草檄

野は色を改めて草檄む、

林代状以枝輕

林は状を代えて枝輕し。

轉花心於風上

花心を風上に転かす、

驚葉影於秋声

葉影を秋声に驚かす。

霜凝レ菊兮蕭蕭

霜は菊に凝りて蕭蕭たり、

露留レ荷兮冷冷

露は荷に留りて冷冷たり。

望離鴻之高翥
離鴻の高く翥ることを望む、
聽檐蟲之潛鳴
檐蟲の潜み鳴くことを聴く。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀短景之微陽

短景の微陽を哀れぶ。

火遷行而増レ分

火は遷行して分を増す、

日廻晷而収レ光

日は廻晷して光を収む。

晚蟬吟於疎柳

晚蟬疎柳に吟く、

夜兔臨於戸堂

夜兔戸堂に臨む。

君王發言以形惆悵

君王發言して惆悵を形はす、

挾摛叢作以挺天章

挾摛叢作して天章を挺いづ。

雖悲零落之序

零落の序を悲しぶと雖も、

欣奉名辰之昌

欣びて名辰の昌を奉る。

〈大意〉

秋は哀れだ。年月の流れるがごとく行き過ぎるのを哀れに思う。今や秋になり、もろもろの職人が仕事を休む。秋はどこも興趣の深いもので、どの秋についても憂愁が深い。暑い日に着たかたびらを衣装箱のなかにしまい、軽やかな皮ころもに着替え、秋の寒い風を防ぐ。曹子建（魏の陳思王植）の秋を悲しむ詩を読んでは胸を痛め、淮南王（漢淮南王劉安）が秋に感ずる詩を読んでは歎く。秋は哀れだ。秋の清く寒々とした風物を哀れに思う。原野は緑から黄色く枯れしぼみ、林は夏とは様相を変え、木の葉の散った枝は軽やかにみえる。花の蕊が風の上を舞い、秋声を葉影に聞いてはつとす。霜は菊の葉に凝り固まって物寂しく、露は蓮の葉に降りて冷やかな様子である。北の空をゆく雁の高くかける姿をはるかに見、軒端に潜んで鳴く虫の音を聞く。秋の哀れさよ。短い秋の日の微かな光を哀れに思う。火星は移動して昼よりも夜が長くなり、日は西方にめぐって沈み、その光を収める。夕方の蟬はまばらな柳の葉に止まって鳴き、夜の月は家の戸口あたりに射し込む。嵯峨帝は言葉に表現して秋をいたむ賦を作り給い、その美しい御製は天のなすあやを抜きん出て表現している。草木の衰える秋の季節を悲しむとはいえ、心から重陽の佳節の御慶びを申

し上げる次第である。

《説明・解釈》

これは和氣眞綱によつてつくられた漢詩で、作品番号「十四」と同じく「秋可哀」という題詞で詠まれている。和氣眞綱（七八三〜八四六）は平安時代前期の公卿で、弘仁二年（八一二）に播磨少掾となり、同十三年に従五位下、弘仁年間（八四一〜八四六）の間に正五位下となった。その後、淳和・仁明朝と諸官を歴任したが、承和十二年（八四五）の善愷訴訟事件をめぐる官職を追われ、同十三年に死去した。

第十三、十四句「野改色以草槭、林代状以枝慳」には、草原が黄色く秋枯れし、樹林の木々が落葉した様子が詠まれている。また、第十七句「霜凝菊兮蕭蕭」は、苑内に植栽されたキクに霜が降りて、花卉を凍りつかせる様子、第十八句「露留荷兮冷冷」は、露がハスの葉に降りて冷やかな様子を詠んでいる。第二十四句「晚蟬吟於疎柳」では、ヤナギのまばらな枝に蟬が止まり鳴いている様子を示している。どれも神泉苑の秋の庭園景観の哀れさを表現しているものだが、苑内にはハスの群生、ヤナギ、あるいは重陽節に合わせてキクの植栽が行われていたことがわかる。

作品番号「十九」

「同前」 科善雄（中科善雄）

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀二秋氣之依依一

秋氣の依依たることを哀れぶ。

望二景宇而高爽一

景宇を望めば高爽たり、

瞻二林沼一以澄稀

林沼を瞻れば澄稀たり。

樹在二庭前一而併槭

樹は庭前に在りて併に槭む、

草非二塞外一以具衰

草は塞外に非ぬに具に衰ふ。

菊方新而欲レ暮

菊方に新しくして暮れなむとす、

蘭雖レ敗而猶芳

蘭敗ると雖も猶し芳し。

物色直置如レ此

物色直に置くこと此の如し、

自然堪レ断二人腸一

自然に人の腸を断つに堪へたり。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀二歳序之通過一

歳序の通過を哀れぶ。

觀二揺落一以起レ感

揺落を觀て感を起す、

履代謝二而自嗟

代謝を履みて自らに嗟かふ。

惜二百年之過半一

百年の過半を惜しむ、

愴二一生之蹉跎一

一生の蹉跎を愴む。

陪二重陽之慶席一

重陽の慶席に陪る、

知二品彙之同類一

品彙の同類を知る。

雖レ对二秋天之凄景一

秋天の凄景に対かふと雖も、

何異二冬日之可レ愛

何ぞ冬日の愛すべきことに異ならむ。

《大意》

秋は哀れだ。秋の醸す気配に何とはなしに心惹かれる思いがして哀れだ。秋の天空を望むと高く爽やかで、池は澄み林の木々の葉はまばらである。前栽にある樹木は枯れしほみ、この庭の草はここが辺境という訳でもないのにもども衰えている。菊はいまや生気を放っており、秋も暮れようとしている。蘭は秋風に損なわれているが、やはり芳香を放っている。秋の物のあやはもっぱらこのような状態である。そこで、自ら腸も断ち切れんばかりの深い秋の悲哀がある。秋は哀れだ。四季が互いに交替しながら過ぎゆくことをしみじみと感じる。草木の葉が揺れ落ちる様を見て感慨をもよおし、時節の移り変わりを感じ、自ずと嘆かれる。人間が生きられる限度の百年の半ばを過ぎて生きてきたことを愛惜し、なお一生の早く過ぎゆくことを傷む。重陽の祝賀の席に侍り、秋の物すべてが枯れ衰えてゆくことを知ったのである。秋空の厳しい景に相對するとはいえ、どうして愛すべき冬の日の光とは違うといえようか、これも天子の仁愛によるものだ。

《説明・解釈》

これは中科善雄によつてつくられた漢詩で、作品番号「十四」と同じく「秋

可哀」という題詞で詠まれている。作者である中科善雄は、延暦十九年（八〇〇）に従五位下・伊予介に叙任されているが、その他の記事は見えず詳細は不明である。

秋の神泉苑は、第四句「瞻林沼以澄稀」にあるように、池は澄み、木々は落葉し、葉がまばらである様子がわかる。第五、六句「樹在前而併槭、草非塞外以具衰」から、前栽の木々は枯れて、草も枯れ縮んでいる様子がわかる。そうしたなか、第七、八句「菊方新而欲暮、蘭雖敗而猶芳」にあるように、キクは生気を放ち瑞々しく、フジバカマは秋風に傷みながらも芳香を放っている様子が詠まれている。

作品番号「二十」

「同前」 和仲世（和氣仲世）

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀光陰之不駐

光陰の駐まらぬことを哀れぶ。

歎涼氣之奪レ熱

涼氣の熱を奪うことを歎く、

痛盲風之落レ樹

盲風の樹を落とすことを傷む。

一葉増長年之思

一葉長年の思を増す、

独杵悲征夫之戍

独杵征夫の戍を悲しむ。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀群物之彫殘

群物の彫殘を哀れぶ。

柳斂眉於天苑

柳は眉を天苑に斂む、

菊映貌於故欄

菊は貌を故欄に映す。

綵燕去而林巢闕

綵燕去て林巢闕けし、

文魚聚以苔水寒

文魚聚ひて苔水寒し。

思虫苦於晚織

思虫晚織に苦しむ、

旅雁倦於路難

旅雁路難に倦む。

何四運之有レ信

何ぞ四運の信有る、

寔大塊之多端

寔に大塊の多端なり。

〈大意〉

秋は哀れである。年月時間が矢の如く流れて止まらないことを哀れがる。寒冷の気が夏の暑さを奪うのを歎息し、疾風が樹木の葉を地上に吹き落とすのを見て心を痛める。ひとひらの葉が落ちるのを見るにつけて寿命を思うことが増し、一人打つ砧の杵音は遠征したまま帰ってこない夫の国境警備の厳しさを悲しむかのようだ。秋は哀れだ。万物が枯れ損ずることを哀れに思う。禁苑の柳はその葉の美しい眉根をよせて衰え、みなれて古びた欄干の辺りの菊はその姿を美しく誇るかのようには咲いている。黒白斑の美しい燕は秋になり飛び去って、林の巢は静かである。この禁苑の池の美しい魚はより集まって、その水辺に生える苔は冷たい。物思いに沈んで鳴く虫は、晩秋に機を織ることに苦しむかのようであり（きりぎりす等が機を織るような動作をして鳴くことから）、旅にある秋の雁は道中の困難さに疲れているかのようである。なんと四季の運行の確かなことか、まことに大地自然のことは様々である。

〈説明・解釈〉

これは和氣仲世によってつくられた漢詩で、作品番号「十四」と同じく「秋可哀」という題詞で詠まれている。作者である和氣仲世は作品番号「十八」の和氣眞綱の弟で、弘仁十年（八一九）従五位下に叙爵、承和八年（八四四）従四位上、承和十一年播磨守となった。病により、仁寿二年（八五二）に没した。第九、十句「柳斂眉於天苑、菊映貌於故欄」から、ヤナギが落葉し枯れ縮み、キクが欄干のそばに美しく咲いていることがわかる。また、第十一、十二句「綵燕去而林巢闕、文魚聚以苔水寒」は、ツバメが飛び去った後の静かな樹林と、池の中で寄り集まる魚の群れを対句で詠んでいる。

作品番号「二十一」

「同前」 滋貞主（滋野貞主）

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀秋候之蕭然

秋候の蕭然たるを哀れぶ。

潘郎可哀之歎

潘郎が可哀の歎、

楚客悲哉之篇

楚客が悲哉の篇。

虫惨悽而声冷

虫は惨悽にして声冷やかなり、

露咄咄而泣懸

露は咄咄にして泣懸く。

班姬酷怨因輕扇

班姬が酷怨は輕扇に因る、

青女微霜自旻天

青女が微霜は旻天自りす。

却細絺於芸匣

細絺を芸匣に却く、

授寒服於香筵

寒服を香筵に授く。

秋可哀兮

秋哀れぶべし、

哀卉木之灑落

卉木の灑落を哀れぶ。

具物縮悴

具物縮悴す、

爽氣遼廓

爽氣遼廓たり。

烟断崇嶺

烟は崇嶺に断ゆ、

雲愁幽壑

雲は幽壑に愁ふ。

淮南木葉声心散

淮南の木葉声まさに散るべし、

上苑楓林陰未薄

上苑の楓林陰はまだ薄からず。

幕下巢空燕早辞

幕下の巢空しくして燕早く辞る、

湖中洲喧雁始帰

湖中の洲喧しくして雁始めて帰る。

節灰尚如レ此

節灰尚し此の如し、

情人誰不レ悲

情人誰か悲しびざらむ。

秋可レ哀兮

秋哀れぶべし、

哀秋暉之易斜

秋暉の斜き易きことを哀れぶ。

巖筵掃レ葉

巖筵に葉を掃ふ、

藤杯挹レ霞

藤杯に霞を挹む。

朗吟聽レ竹樹

朗吟を竹樹に聴く、

夕照倒レ水砂

夕照を水砂に倒にす。

脆柳暮分觀レ疎星

脆柳暮れて疎星を觀る、

叢蘭蔚分聞レ濃馨

叢蘭蔚りて濃馨を聞く。

物色暫雖レ使二人感

物色暫し人を感じましむと雖も、

潭花但喜レ益仙齡

潭花但に仙齡を益すことを喜ぶ。

〈大意〉

秋は哀れである。秋の時候のもの悲しさを哀れがる。潘岳の秋を哀れむ歎きの詩篇『秋興賦』があり、また楚人宋玉の秋悲しきかなの詩篇『九辯』がある。

虫の声は痛ましくまた冷たく、露は人の歎くかの如くその露のなみだをかけている。班婕妤のひどい怨は輕やかな夏の団扇が秋になって捨てられたように寵愛を失ったことによる、秋の女神の司るわずかばかりの霜は秋の空から降ってくる。繊細な質の夏かたびらを虫除けの香草を入れた衣装箱に収め、寒さを防ぐ衣服を佳宴の宴席において与えられる。秋は哀れである。草木の葉の落ちるのを哀れがる。あらゆる草木は縮み衰え、秋空の爽やかな気はからりとして

広々としている。高い山の峯にかかる靄は消え失せ、深く静かな谷の雲は鬱々とかかっている。淮南の木の葉の音を聞けば、今や葉は散りそうであるが、禁苑の楓の林の葉影はまだまだ濃い。燕がはやくも去ってしまい、帳幕のあたりの巢はむなしくなにもない、雁が初めて帰って来て湖の中洲のあたりは騒がしい。月が欠けて季節の推移はやはり以上の如くである、秋の情を知るこの宴の人々の誰に悲哀の心をもたない者があるうか。秋は哀れである。秋の日は短くて、早く傾いてしまうことを哀れに思う。巖の上のむしろに散り敷く木の葉をかき払い、藤で作った盃で靄を酌み交わす。竹林の中を吹く風の音が、まるで誰かがほがらかに歌を歌うかのようで、また夕映えが水中の砂の中に逆さまに映る。もろく弱々しい秋の柳に日は暮れて、その間からまばらに星が見える。

秋の蘭が繁って濃厚な香りが漂ってくる。秋の自然界のあやはわずかの間人の心を悲哀の思いへ駆り立てるけれども、池畔に咲く菊の花だけがただひたすら長寿を益すかのように咲くのは喜ばしい。

〈解釈〉

これは滋野貞主によってつくられた漢詩で、作品番号「十四」と同じく「秋可哀」という題詞で詠まれている。作者である滋野貞主（七八五〜八五二）は平安時代前期の公卿で歌人、三天漢詩文集にも多数の漢詩が収録されている。また、『経国集』の編纂に参画し、『秘府略』を勅撰している。

第十七、十八句「淮南木葉声心散、上苑楓林陰未薄」では、また散りきらな

い楓林の様子を詠む。第二十句「湖中洲喧雁始歸」ではガンが神泉苑に帰って来て、騒がしく鳴く様子が詠まれている。ガンのいる景色を詠むのは、秋の哀れさを表す常套的なものであるが、ここで詠まれる「湖中洲」とは神泉苑の池に中島があつたことを示すものかもしれない。さらに、第二十七、二十八句「朗吟聽竹樹、夕照倒水砂」には、神泉苑の竹林を風が吹き渡り、夕日が池に映り込み美しく輝く様子が詠まれている。また、第二十九、三十二句「脆柳暮分觀疎星、叢蘭蔚兮聞濃馨、物色暫雖使人感、潭花但喜益仙齡」から、落葉したヤナギの枝々の隙間から星が見える様子を示し、また、苑内にはフジバカマの濃厚な芳香が漂い、池畔にはキクが植栽されていることがわかる。

作品番号 〔二十二〕

「七言重陽節得秋虹」応製一首 太上天皇在祚

橘常主

君王出豫重陽序

君王出豫重陽の序、

試望秋虹遠近光

試みに望む秋虹遠近の光。

首尾分形浮殿閣

首尾形を分ちて殿閣に浮かぶ、

雌雄半体跨池塘

雌雄体を半ばにして池塘に跨ぶ。

晴天色爽弦文拖

晴天色爽やかにして弦文拖く、

碧水陰生橋勢長

碧水陰生れて橋勢長し。

別有夢中華渚度

別に夢中華渚に度ること有りて、

千年一聖誕明王

千年に一聖明王誕れます。

〈大意〉

嵯峨帝が出遊あそばす重陽の時に、さて望むところ秋の虹が遠くまた近く光を放っている。虹は首と尾とその形を二つにわけて高殿の上に浮かんだようにかかり、色の暗い雌の虹と鮮やかな雄の虹とは形体を半分に分けあつて、池堤にまたがっている。晴れた空に架かる虹の色は爽やかで弦形の模様をかけたようであり、池の青い水に虹の影が映つてその橋形の姿は長い。なお、格別に夢の中で虹のごとき星が華渚へ流れ下つて名君が生まれたという

中国古代の故事があるが、それに因んで千年に一度の明君嵯峨が誕生なされたのである。

〈説明・解釈〉

作品番号 〔二十二〕は橘常主による漢詩である。作者である橘常主（七八七〜八二六）は平安時代前期の公卿で、嵯峨天皇の側近として『弘仁格式』の編纂に参加した。

第三句「首尾分形浮殿閣」は、虹が殿閣の上に浮かんでいる様子が詠まれている。この「殿閣」は神泉苑の中心殿舎であると乾臨園のことであると推測できる。また、第四句「雌雄半体跨池塘」は、虹が池の堤にまたがるようにかかり、それが橋のように見える様子を詠んでいる。

五十一 年中行事以外で詠まれた漢詩（作品番号 〔二十三〕〜〔三十二〕）

作品番号 〔二十三〕

「神泉苑雨中跳矚」応製一首〔探得魚字〕

参議左近衛大将従三位兼行東

宮大夫美作守藤原冬嗣

雨氣三秋冷

雨氣三秋冷やかなり、

涼風四面初

涼風四面に初む。

蘆洲未だ低雁

蘆洲未だ雁低らず、

芳餌自群魚

芳餌自らに魚を群らがしむ。

岸水飛還落

岸水飛びて還落つ、

池荷卷且舒

池荷巻きて且舒ぶ。

従レ天恩蓋下

天より恩蓋下りぬ、

不レ醉也焉如

酔はずしてまた焉にか如かむ。

〈大意〉

雨を含んだ気がこもり、秋もひんやりと冷たく、冷風が四方に吹き始める。蘆の生えた池洲には、まだ秋雁は去来していない。池の魚はよい餌の周りに自然に集まってくる。池岸に寄せて来る水は飛び散つてはまた池に落ちる。池の蓮の葉は巻いたものも広がったものもある。天子より恩恵の酒杯が下された。

心ゆくまで美酒に酔おうではないか。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十三」は藤原冬嗣の漢詩で、晩秋の雨日の眺めを詠んだものである。

第三、四句「蘆洲未低雁、芳餌自群魚」から、池洲にはアシが生え、冬にはガンが帰来することがわかる。また、池中には魚も生息していた。第六句「池荷卷且舒」からハスの群生が広がり、葉が広がったり巻いたりしている様子が描写されている。神泉苑の池は元々あった自然池と周辺植生を活かして造成されたと考えられているが、漢詩からもそうした様相が読み取れる。

作品番号「二十四」

「晩夏神泉苑、同勅「深臨陰心」、応製一首」 従三位行常陸守菅野朝臣真道

王母仙園近 王母が仙園近し、

竜宮宝殿深 竜宮の宝殿深し。

追涼天蹕幸 追涼天蹕幸したまふ、

縦賞鳳輿臨 縦賞鳳輿臨ます。

竹疎長竿節 竹は疎し長竿の節、

松傾小蓋陰 松は傾く小蓋の陰。

酔臣迷「聖造」 酔臣聖造に迷ふ、

唯有「歳寒」心 唯に歳寒の心有るのみ。

〈大意〉

この禁苑は西王母の苑の近くにある。竜王の宮の宝殿にも比すべき禁苑の御殿は奥深く静まりかえっている。涼しさを求めて行幸し賜い、心のままに楽しもうとして鸞輿はここに臨御なされた。竹はまばらに生えて長い竿のような節をみせている。松は斜めに傾いて小さい笠のような陰を作っている。酒に酔いしれた我ら臣下は、聖天子のなし賜うことは測り知れず広大であるので、戸惑うほどである。寒気の厳しい冬にもしばまず常緑を保つ松や竹のように貞忠の

心を尽くそう。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十四」は、菅野真道（七四一〜八一四）によるもので、「晩夏の眺め」という題詞で詠まれている。作者は平安時代前期の公卿で、弘仁三年（八一〇）に従三位、参議に叙されている。桓武朝末期、藤原緒継との間に起きた徳政相論が有名で、財政逼迫のため桓武朝の軍事と造都を中止すべきという緒継の意見に最後まで強固に反対した人物である。また、藤原継縄、秋篠安人と共に『続日本紀』の編纂に従事した。

まず、第一、二句「王母仙園近、竜宮宝殿深」では、神泉苑は仙園のように趣深く、建物は竜宮の宝殿のように素晴らしいと称賛している。また、第二句「追涼天蹕幸」から納涼のために神泉苑を訪れたことがわかる。さらに、第五句「竹疎長竿節」にはタケが植栽されていたことが示されており、第六句「松傾小蓋陰」では、苑内にマツがあつたことがわかる。

作品番号「二十五」

「晩夏神泉苑釣台、同勅「深臨陰心」、応製」 従四位下行播磨守賀陽朝臣豊

神泉苑裡多雄レ勝 神泉苑裡雄勝多く、

楼観飛鷺倒水深 楼観飛鷺倒水深し。

玉樹長堆跨「帝圃」 玉樹長堆帝圃に跨ぶ、

珠流瀑布写「天臨」 珠流瀑布天臨に写ぐ。

千端赫赫承「春渙」 千端赫赫に春渙を承く、

百品差池仰「夏陰」 百品差池に夏陰を仰ぐ。

今日優遊何所レ楽 今日の優遊何の楽しぶ所かある、

群臣同有「釣璜」心 群臣同しく釣璜の心あり。

〈大意〉

神泉苑内には優れた形勝の処が多い。人を驚かすほど高い高樓は逆様に水に

姿を映し出し、その水もまた深い。樹木の生えた長く続く小さい岡は禁苑にまたがって連なり、流れ落ちる滝水は天子の御臨幸を祝うかの如くふりそぐ。あまたの草木などは輝かしい状態で満ち溢れる春の水の如き天子の恩を受け、あまたの鳥たちは翼を互い違いに差し交わして、夏の木陰の如き天子の恵を仰ぎ奉る。心豊かにのびやかな今日の集いにはどんな楽しみがあるのかと言え、太公望の故事の如く、我ら群臣一同がともども美玉を釣ろうとする心を持つていることにあるのだ。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十五」は賀陽豊年の漢詩で、晩夏の釣殿の様子について詠んでいる。

第一句「神泉苑裡多雄勝」から、神泉苑は多くの見どころを有していたことがわかる。また、第二句「楼觀飛驚倒水深」では、人が驚くほどの高さの高殿が水に映り込む様子を詠んでいる。第三句「玉樹長堆跨帝圃」には、樹木の生えた低く連なる丘が描写されており、これは重陽節で「登高」が行われる築山状の場所である可能性が十分に考えられる。さらに、第四句「珠流瀑布写天臨」から、瀑布があったことがわかる。

作品番号「二十六」

「夏日神泉苑釣台、応製」 内蔵頭従五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守
釣台新結構 釣台新しく結構す、
浮柱出_レ從_レ深 浮柱深きより出づ。
水近綸偏_レ尽 水近くして綸偏に尽く、
軒低竿直臨 軒低くして竿直に臨む。
岸喧瀑布落 岸は喧し瀑布落つ、
浦暗橘柚陰 浦は暗し橘柚陰なす。
自仰中孚化 自らに仰ぐ中孚の化、
同欣在藻心 同しく欣ぶ在藻の心。

〈大意〉

釣台を新しく造り構えた。その水中に浮かぶ楼台の柱は池の深い底から出ている。池水は楼に近接しているが、そこから垂らしても池は深く、釣り糸は届かない。その軒は池に低く被さり、釣竿を直接池に臨んで垂らすことができる。滝水の落ちる音が聞こえ、池岸は騒がしく、柑橘類は陰を成して生い茂り、池の入江は鬱蒼と暗い。魚たちは誠を以てし賜う天子の恵をおのずと仰いでおり、我ら臣下も魚と同じく天子の恩愛を仰ぎ、共に喜びあうのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十六」は小野岑守の漢詩で、神泉苑の釣殿を新築した際に行幸で詠まれたものである。

まず、新造された釣殿（第一句「釣台新結構」）は、第二、四句「浮柱出從深、水近綸偏尽、軒低竿直臨」にあるように、柱を池の深みに立て、床面は水面に近接させ、軒は低く被さるような設計であったことがわかる。また、第五句「岸喧瀑布落」から、音をたてて水が落ちる水勢の強い瀑布が存在していたことが推測できる。さらに、第六句「浦暗橘柚陰」から池の入組んだ部分に柑橘類が植栽されていたことがわかる。

作品番号「二十七」

「代神泉古松傷衰歌。一首。」 御製
昔從_下凡木殖_中上林_上 昔凡木を上林に殖えし従り、
過却_二風霜_一年幾深 風霜を過却し年幾はくか深き。
帝者愛_レ貞賜_二恩顧_一 帝者は貞を愛で恩顧を賜ひ、
水亭忽構_レ頻_レ近臨 水亭忽ちに構へ頻りに近臨したまふ。
本森沈、今顛頽 本は森沈なり、今は顛頽す、
長条縮折_レ乏_二蒼翠_一 長条縮折蒼翠に乏し。
不下是辭_レ榮好_中寂寞_上 是榮を辭り寂寞を好むにはあらず、
還愁稟質抱_二幽志_一 還りて愁ふ稟質幽志を抱けることを。

〈大意〉

昔、凡木を禁苑に植えてから、久しく年月が経った。天子である自分は松が常に青々と葉を茂らせている様子を愛し、御恵を垂れ賜う。御苑の水辺に亭を構え、頻りに松のそばに出御する。松は元々こんもりと繁茂していたが、今は痩せ衰えている。差し出た長い枝は折れ縮み、葉も少ない。このような状態は、天子より愛される名誉を辞退して、静かに孤高を保っている訳ではないのだ。そうではなく、天子は、松の生まれつき奥深い志を持っている状態を憂えているのだ。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十七」は嵯峨天皇の漢詩で、「神泉苑のマツの古木を傷む」という題詞で詠まれたものである。

第四句「水亭忽構頻近臨」から、天皇は池のほとりの水亭からマツのそばに出御したことがわかる。第六句「長条縮折乏蒼翠」から、マツの老木は葉もまばらで、折れ縮んでいる様子が詠まれている。

作品番号「二十八」

「奉和代神泉古松傷衰歌。一首。」 仲雄王

孤松盤屈薜蘿枝

孤松盤屈す薜蘿の枝、

貞節苦寒霜雪知

貞節を苦寒の霜雪に知る。

御琴台、廻仙矚

琴台に御し、仙矚を廻らす、

風入颼颼添清曲

風入りて颼颼清曲を添ふ。

森翠宜看軒月陰

森翠宜しく看るべし軒月の陰、

還羞不材近天臨

還りて羞す不材天臨に近きことを。

自然色衰無他故

自然に色の衰ふるは他し故無し、

不敢幽懷負中恩顧

敢へて幽懷恩顧に負かじ。

〈大意〉

一本の松が屈曲し、薜蘿が纏わり垂れさがっている。松のいつも変わらない

正しい節操を、甚だ寒い霜や雪の時に初めて知る。琴を奏する楼台に天子が出御され、松を頻りに賞翫される。風が松に吹き入り、音を立て清らかな調べを添える。茂った松の緑を軒端にかかる月影を通して見るのはよい眺めである。しかし、かえって役に立たない材木の身でありながら、天子の御目に近いことを恥じる。自然に松の緑が衰え褪せるのは他に理由がある訳ではない。松の奥深い心が天子の御恩に敢えてそむくまいとするだけだ。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十八」は仲雄王の漢詩で、作品番号「二十七」の応制である。まず、第一句「孤松盤屈薜蘿枝」から、このマツの古木にはサルオガセがからみつき、風雪に幹や枝が屈曲している様子がわかる。第三句「御琴台、廻仙矚」は天皇が琴台に出御し、マツを賞翫した様子が詠まれている。ちなみに、琴台は琴を弾くための設えを施した台のことで、「台」つまり「楼台」とは高い建物、またはあずまやなどの屋根のある建物を指す。琴台とマツの古木との距離感を考え合せると、作品番号「二十七」に登場した水亭と同じ建造物を指す可能性が推測できる。

作品番号「二十九」

「春日侍神泉苑。賦得春月。応製。一首。」 巨識人（巨勢識人）

春天霽静無纖翳

春天霽静纖翳も無く、

皎潔孤明桂月来

皎潔孤明桂月来る。

窓外曲鉤疑卷箔

窓外の曲鉤箔を巻かむかと疑ひ、

空中懸鏡不関レ台

空中の懸鏡台に開れず。

漸円光随漢東蟀

漸くに円き光は漢東の蟀に随ひ、

半缺影逐淮南灰

半ば缺けし影は淮南の灰を逐ふ。

堯帝当時何計レ曆

堯帝の当時何にか曆を計りし、

須レ看葉葉夾階開

須く看るべし葉葉階を夾みて開けるを。

〈大意〉

春の夜空は静かに晴れて、細い影さえもなく、白く清い月が上がってきた。窓の外にかかる曲がった鉤のような月は竹の簾を巻いたように見える。空中にかかる鏡の如き月は鏡台とは無関係だ。次第に円くなっていく月の光は漢東（漢水の東部）の蛤の珠胎の満ち欠けに従う。だんだん欠けてゆく月影は淮水の南の月の満ち欠けに随う。昔、堯帝の当時にはどんな方法で暦を計る道具立てとしたのか。その頃は月の満ち欠けではなく、葇蕒（こよみ草）の葉が月の一日から十五日までの間一枚ずつ落葉する様子を暦の代わりにしたのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十九」は巨勢識人の漢詩で、神泉苑における春の観月を詠んだものである。

この漢詩中には、神泉苑の庭園形態などを描写した部分はないが、第三句「窓外曲鉤疑卷箔」から、作者は曲がった鉤のような三日月を鑑賞していたことがわかる。また「窓外」という描写から、作者は屋内から観月をしたと推測できる。当時は月を直接見るのではなく池に映る月を鑑賞したと考えられることから^{八七}、池際の建物、例えば作品番号「二十七」、「二十八」で詠まれた亭においてそうした遊興が行われたのかもしれない。

作品番号「三十」

「七言和海和尚秋日觀神泉苑之作一首」 滋貞主（滋野貞主）

闍梨下_レ自_レ南山幽_一 闍梨南山の幽自り下り、

勅許令_レ看_レ上苑秋_一 勅許上苑の秋を看しむ。

御路蕭疎楊柳影 御路蕭疎たり楊柳の影、

遵行直到白沙洲 遵行直に到る白沙の洲。

廻瞻肅殺無_二紛濁_一 廻瞻すれば肅殺として紛濁無く、

眼沸清泉一細流 眼に沸く清泉一細流。

小嶺登攀頻見鷺 小嶺に登攀して頻り鷺を見る、

暗林払入欲_レ驚_レ鳩 暗林に払入して鳩を驚かさむとす。

三明湿照龍池閣 三明湿りて照る龍池閣

二道薰迎秋蕙楼 二道薰りて迎ふ秋蕙楼

法侶相隨喜樹下_一 法侶相隨ひて樹下に喜ぶ、

不_レ殊_下昔與_中大比丘_上 昔大比丘と與なりしに殊にあらず。

〈大意〉

空海阿闍梨は深閑な高野山を自ら下り、秋の神泉苑の遊観が許されたのである。御幸道である都大路の柳の葉はまばらで寂しい影を落とし、この大路に沿って禁苑の池の白砂の洲のほとりに直行する。眼をめぐらしつつ眺めると、苑は寒々として万物が枯れ落ちさっぱりした状態で、眼前にわき出る清らかな泉の細流が一筋見える。御苑の小高い丘に登攀すると、頻りに鷹の姿を見る。暗い御苑の林木などを払い除けつつ入ってゆくと、そこに住む鳩を驚かしそうになる。月・星が湿りを帯びながら照る禁苑龍池に臨む高殿、二又の道の辺りでは楼閣がそびえ、香草が匂いを放ちながら迎えてくれる。僧侶たちが空海に随行し、私どもは樹下で逢い喜びあう。それは大比丘空海と交遊を共にした昔と何ら違うことはない。

〈説明・解釈〉

作品番号「三十」は滋野貞主による漢詩で、秋日の神泉苑で空海と詩歌を詠み合った時のものである。

まず、第四句「白沙洲」は池の白砂の洲を示し、第六、七句「眼沸清泉一細流、小嶺登攀頻見鷺」から、細い流れと小高い築山があったことがうかがえる。また、第八句「暗林」は、鬱蒼と茂った樹林を示している。さらに、第九、十句「三明湿照龍池閣、二道薰迎秋蕙楼」から、「龍池閣」（閣…高く構えた建造物）と「秋蕙楼」（楼…高層の建造物）といった二つの建造物があったことがわかる。

作品番号「三十一」

「秋日觀神泉苑」 空海

イ子神泉ニ觀ニ物候一

神泉にイ子して物候を觀る、

心神恍惚不能レ歸

心神恍惚として帰ること能わず。

高台神構非ニ人力一

高台は神の構へ人力に非ず、

池鏡泓澄含ニ日暉一

池鏡泓澄として日暉を含めり。

鶴響聞レ天馴ニ御苑一

鶴の響天に聞こえて御苑に馴れたり、

鵠翅且戢幾將レ飛

鵠の翅且く戢めて幾ばくか將に飛ばんとす。

游魚戲レ藻數吞レ鉤

游魚藻に戯れて數鉤を呑み、

鹿鳴ニ深草ニ露濡レ衣

鹿深草に鳴きて露衣を濡す。

一翔一住感ニ君徳一

一びは翔り一びは住つて君の徳を感ず、

秋月秋風空入レ扉

秋の月の秋の風空しく扉に入る。

銜レ草啄レ梁何不レ在

草を銜み梁を啄んで何ぞ在らざらん、

踰躑率舞在ニ玄機一

踰躑として率い舞つて玄機に在り。

〈大意〉

神泉苑を歩み風光を楽しむと、その美しさに恍惚として帰ることも忘れてしまふ。高台（築山）は神が造形物にして人力のかなうところではなく、鏡のように澄み渡つた池は日輪が輝く。鶴の音が天に響き、御苑に馴れ、鵠（ハクチヨウ）はここで佇み力を得て、また大空に舞う。遊魚は藻と戯れて時には釣針を呑み、鹿は深草に鳴いて、露が衣を濡らす。鳥は一度この御苑に舞えば天子の恩を感じ、一度ここに住めば天子の徳を感じる。秋月も秋風も遮るものはなく御苑に入り、獸は草を食み、鳥は粟を啄み満たされる。鳥獸が自由に舞い遊ぶごとく、人々も豊かで楽しめるのも全て天子の徳にあるのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「三十一」は空海による漢詩で、作品番号「三十」と同じ行幸で詠まれたものである。

第一、二句「イ子神泉觀物候、心神恍惚不能歸」では、神泉苑は帰ることを忘れてしまふ程の美しい庭園景觀を有することが詠まれている。また、第三、四句「高台神構非人力、池鏡泓澄含日暉」では、神が創造したかの如き高台（築

山）、鏡のように澄んだ池が対句で詠まれ、作者は神泉苑の庭園意匠の精緻さを称賛している。井実は、この漢詩に登場する生き物は、嵯峨天皇の有徳性とそれに仕える廷臣たちの賢人性を暗示し、明君と賢臣が一体となった理想的な君臣関係を象徴する風景であつたと指摘した^{八八}。

作品番号「三十二」

「五言詠禁苑鷹生雛一首」 陽豊年（賀陽豊年）

峻嶺増巢鳥 峻嶺増巢の鳥

生レ雛禁苑中 雛を生む禁苑の中。

低昂留ニ聖矚一 低昂聖矚を留む、

神俊狙ニ祥風一 神俊祥風を狙ふ。

理レ翮情方盛 翮を理め情方に盛りなり、

廻レ眸氣不レ窮 眸を廻らし氣窮まらず。

願栖ニ仙閣下一 願はくは仙閣の下に栖まひ、

將助ニ魯臣忠一 魯臣が忠を助けなむことを。

〈大意〉

険しい峰に巢を増やしていく鷹、その鷹が捕えられ、宮廷の苑の中で雛を産んだ。この鳥はあるいは高くあるいは低く飛んで天子の御目にとまり、その優れた雄姿はめでたく良い風が吹くのを待っている。羽の根元をきちんと収めつつ、内にひそむ心の中は本当に燃え上がるほど激しく、瞳をあちこちにやりつつ外に溢れんばかりの気力は尽きることがない。鷹よ、どうか天子のおひきもとに棲み付いて、鷹の如く空に翔け上がって武王を助けた魯の国の忠臣呂尚の如き忠義を尽くして天子を助けてくれるように。

〈説明・解釈〉

作品番号「三十二」は賀陽豊年の漢詩である。

題詞、及び第二句「生雛禁苑中」から、神泉苑においてタカが雛を生み、健やかに育つ様子が詠まれている。仁明朝になると、冬の神泉苑行幸におい

て鷹狩りが頻繁に行われた記録が残るが、神泉苑においてタカの飼育・繁殖が行われていたと考えられる。

作品番号「三十二」

「同前」 科善雄（中科善雄）

茲禽群鳥俊 茲の禽群鳥の俊、

禁苑数雛生 禁苑数雛生る。

日日雄姿美 日日雄姿美し、

朝朝猛気驚 朝朝猛気に驚く。

青骹羈綵絆 青骹綵絆に羈さる、

素質狎丹庭 素質丹庭に狎る。

願以凌雲翼 願はくは凌雲の翼を以て、

長輸逐雀誠 長に逐雀の誠を輸さむことを。

〈大意〉

鷹は最も秀でた鳥である。その鷹が何羽かの雛を産んだ。日々見るこの鳥の雄々しい姿は美しく、朝な朝なに見る雄々しい気に驚かされる。青い脛をもつ鷹は色鮮やかな紐で繋かれ、白地の肌をし、赤い瓦を敷き詰めた宮中で人懐く馴れている。雲を押ししのけんばかりの強い翼をもつてして、いつまでも悪い奴らを追い払うような真心を天子のために尽くしてほしい。

〈説明・解釈〉

作品番号「三十二」は中科善雄の漢詩で、作品番号「三十二」と同じ詩宴において詠まれたものである。

第二句「禁苑数雛生」から、作品番号「三十二」と同じく神泉苑においてタカの雛が数羽生まれたことがわかる。人に懐き、すくすくと生育する様子が明るく表現されている。

六 小括

平安時代初期の神泉苑行幸は、どの天皇においても比較的頻繁にあった。特に、嵯峨朝の神泉苑では、二月下旬の花宴、七月七日の七夕、九月九日の重陽節といった年中行事が行われるようになったことは、記録からも見て取れる。一方で、年中行事以外の行幸も減少することなく、比較的暑い時期、すなわち四〜七月を中心に多数見受けられた。これは水辺の涼しさを求める避暑のためであろう。淳和朝に入ると釣魚の記録が一気に増加し、夏の行幸が圧倒的に多くなる。一方、仁明朝では鷹狩りが行われ、冬期の利用が増大する。このように時期ごとにその内容に多少の変化はみられるもの、おしなべて頻繁な利用があり、神泉苑は天皇と密接な関係を持つ場所であり続けたことは明らかである。

以下、庭園構成要素と意匠、建造物、庭園植栽について、神泉苑に関連する漢詩から読み取れた事柄を整理、考察してみたい。

〈庭園構成要素と意匠〉

神泉苑に関連する漢詩から見えてくる庭園の構成要素として、まず挙げられるのは広大な園池である。これは森、村井、吉野らが指摘するように、自然池を整備したもので、広々として野趣にあふれた様子であったことが推測できる。作品番号「十一」、「十二」、「十四」において神泉苑は「洞庭湖」になぞらえられて、賞賛されている。また、「遵行直到白沙洲」（作品番号「三十」）にあるように、白沙の洲が敷かれていた。実際に、一九九〇〜一九九三年の発掘調査により、池の一部と北縁部の水際には礫敷きの洲浜が検出されている。こうした池の意匠は漢詩からも裏付けられる。さらに、「池清爲潦収」（作品番号「十」）から、秋になり池のこりが引いて清く澄んでいる様子が描写され、「観落葉、落林塘」（作品番号「十二」）からは、周囲を落葉樹に囲まれ、樹林の様相を呈していたことがわかる。そして、「蘆洲未低雁」（作品番号「二十三」）や「池荷卷且舒」（同）からアシの洲やハスが群生していたこと、「浦暗橘柚陰」（作品番号

「二十六」から柑橘類が植栽されていたこともうかがえる。また、「游魚戯藻数吞鉤」（作品番号「三十一」）から池には魚が生息していたこともわかる。この園池では、桓武朝に舟遊び、淳和朝では釣魚、仁明朝には鷹狩りが行われた記録がある。仁明朝の鷹狩りについては、承和二年十二月壬辰（二十一日）に「天皇幸神泉苑」。放隼隼拂永禽。」（『続日本後紀』）とあり、その広大さと野趣に富んだ様相がしのばれる。

また、園内には「眼沸清泉一細流」（作品番号「三十」）と詠まれる遣水があった。発掘調査によって、この遣水は北東から池に流れ込む流路として検出された。遣水に樹木の枝が迫り出す様子が「虚条縮撼楓江上」（作品番号「十一」）と詠まれている。さらに、「珠流瀑布写天臨」（作品番号「二十五」）と描写される瀑布もあった。「落泉曝布懸飛鶴」（作品番号「九」）から、帯状に白く真つ直ぐ落ちる布落ちであったことがわかる。このように、神泉苑では元々の恵まれた環境を存分に活かした様々な表情を見せる種々の水景が造られていたと指摘できる。そして、築山についても描写されており、「玉樹長堆跨帝圃」（作品番号「二十五」）とあるように、樹木の生えた小高く連なる丘状の地形の高まりとして造成されていたことがわかる。例えば、後述する冷然院や淳和院など京内の邸宅では得てして築山の高さや陰しさが強調されるが、神泉苑の築山は穏やかな様相で表現されており特徴的である。なお、重陽節にはここで「登高」が行われ、儀場としての一面を備えていたことがうかがえる。

〈建造物〉

庭園内の建造物としてまず挙げておきたいのが「爲因聖主水亭傍」（作品番号「七」）、「水亭忽構頻近臨」（作品番号「二十七」）にある「水亭」という建物である。作品番号「二十七」では、天皇が水亭近くに植栽されたマツに出御する様子が詠まれている。同題で詠まれた作品番号「二十八」には、「御琴台、廻仙矚」とあり、作品番号「二十七」と同じく、天皇が琴を奏する台（琴台）に出御し、マツを賞玩する様子がわかる。ここから、水亭と琴台は同じ建造物で、池岸から迫り出して生えたマツの近くに、琴の演奏ができる亭が設えられていたと考えることができる。そして、「楼觀飛鷺倒水深」（作品番号「二十五」）や

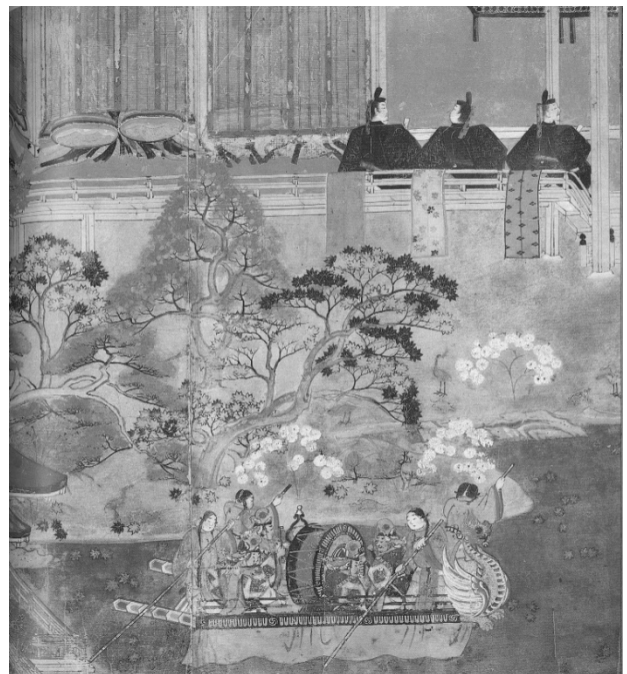


図 [2-1-3] 汀に白いキクが咲いている様子（『日本の絵巻（18）伊勢物語絵巻・狭衣物語絵巻・駒競行幸絵巻・源氏物語絵巻』、小松茂美、中央公論社、1988、『駒競行幸絵巻』p.52より）

「二道薰迎秋蕙楼」（作品番号「三十」）から、池に近接して「秋蕙楼」と呼ばれる高樓があったことがわかる。さらに、「三明湿照龍池閣」（作品番号「三十一」）から、池際に「龍池閣」と呼ばれる建物があったことがわかる。太田は正殿である乾臨閣の東西から廊が出て東西に高殿状の対屋があったと推定し^{八九}、村井はこの龍池閣を正殿・乾臨閣と同じ建物であると推測している^{九〇}。想像の域を出ないが、筆者は正殿・乾臨閣に加えて、池の東岸と西岸に對をなす龍池閣と秋蕙楼という二つの建造物があった可能性を示しておきたい。なぜなら、「秋蕙楼」や「龍池閣」といった名称は無造作に付けられたものではなく、五行説を参照すれば「龍」は東、「秋」は西を指すことから、「秋蕙楼」は池の西岸の高樓、「龍池閣」は池の東岸の閣であったと推測できるからである。最後に「釣台」をとりあげておきたい。作品番号「二十六」は新造した釣台を詠んだ漢詩である。そこには「浮柱出従深、水近綸偏尽、軒低竿直臨」とあり、太田も指摘するように^{九一}、柱は池の中に立ち、床は水面に近接し、屋根は深く覆い被さるような建物であったと推測できる。

こうしたことから神泉苑内には、冒頭の『拾芥抄(中)』記載の乾臨閣ほか、漢詩からは水亭(琴台)、龍池閣、秋蕙楼、釣台といった建物が随所に設えられていたことがわかる。

〈植栽〉

神泉苑には、作品番号「二十七」の題詞にもなっている「神泉古松」と称されるマツの老木があった。「孤松盤屈薛蘿枝」(作品番号「二十八」と描かれるように、サルオガセが垂れ下がり古く曲折したマツが池に迫り出して生えていたことがわかる。次に、「梅院不掃寸餘紫」(作品番号「二二」からウメ、「桃源委積尺所紅」(作品番号「二二」からモモの存在が窺える。これらは花宴の漢詩に詠まれており、儀場の空間に群植されていたと推定できる。また、「雑樹衆花咲且散」(作品番号「二二」や「奇香詭色互留翫」(同)も花宴の漢詩のもので、珍しい香りの花や変わった色の花、また様々な花木が植栽されていたことがわかる。「雑樹」がどういったものであったかは不明だが、春に美しい花木としてヤマザクラなどが植栽されていた可能性は十分にある。なお、花宴にはウメ・モモなどの開花時期の異なる樹木が同時に詠まれているが、勿論、花宴の時期にこれらすべてが鑑賞できたとは考えられず、こうした表現こそが漢詩独特の文飾表現であろう。また秋には重陽節に合わせてキクが植栽された。キクは重陽節の最も重要な景物で、複数の漢詩に描写されている。飛田は節会に合わせて、圃場で生産した苗を直前に植えつけていたと指摘している^{九〇}。キクは、例えば「岸頭洗菊早花低」(作品番号「六二」では池の際に頭を垂れるように植栽されていたし、「望芳菊之丘阜」(作品番号「三二二」では小高い丘の上、「菊映貌於故欄」(作品番号「二二一」では古びた欄干のそば、「潭花但喜益仙齡」(作品番号「二二二」)では水辺といったように各所に工夫して植えられていたことがわかる。ちなみに、若干時代は下がるが『駒競行幸絵巻』のなかにも、神泉苑での描写と同じように池や遣水の岸にキクを植栽している様子が見えるので、これらは平安時代を通じて見られる典型的な植栽方法の一つだったと考えられる。(図「2-1-3」)。また、同様に秋において楽しまれた植物としてフジバカマを挙げておきたい。重陽節を詠んだ作品番号「三二二」〜「三二二」

(同じ詩宴で詠まれた漢詩群)にキクと合わせて登場するこの植物は、秋の七草^{九三}のひとつである。「看幽蘭之皁澤」(作品番号「三二二」)では水辺の湿地に植栽されていたことがわかる。「叢蘭蔚兮聞濃馨」(作品番号「三二二」)から、フジバカマから濃厚で芳しい香りがすることが描写されている。飛田は神泉苑に、カエデの林、タケ、シダレヤナギ、ミカン類が植栽されていたことを指摘している^{九四}。今回の分析により、秋蕙楼の傍に「九月高颺吹暮柳、衰蔭淒涼不障楼」(作品番号「八」)からヤナギ、池の周りには「竹疎長竿節」(作品番号「三十四」)からタケ、「浦暗橘柚陰」(作品番号「二六六」)から池の入り江の岸に柑橘類植栽され、「上苑楓林陰未薄」(作品番号「二二二」)からカエデの林があり、池には「池荷卷且舒」(作品番号「二二二」)や「蘆洲未低雁」(同)から、ハスやアシが生育していたことが確認できた。さらに、「靚桐林之早彫」からアオギリの生えた樹林(作品番号「三五」)もあったことがわかる。

以上で述べたとおり、漢詩に詠み込まれた庭園構成要素と意匠、建造物、植栽からも神泉苑が累代の京内離宮として極めて大規模で優れた構成・意匠をもつ庭園を有していたことがわかる。

この離宮には代々頻繁な行幸があり、年に数回、しかも村井が述べるように四季折々の様子を楽しむように二、四、七、九月といった季節ごとの行幸があった^{九五}。これは、京内に立地しながら、季節と共に移り変わる自然の趣を愛でるような京外への行幸に近い在り方である。吉野が「神泉苑は臨時の行幸・曲宴に多用され、年中行事での使用は後発的であった。」と指摘しているとおり、神泉苑が嵯峨朝を中心に整備された花宴、七夕、重陽節などの年中行事の儀場となったのはもちろん嵯峨朝以降のことで、庭園のなかに儀場設備も増設された。例えば、花宴の梅院やモモを植栽した一画がそれであり、築山も重陽節の登高に利用されている。一方で、嵯峨朝ではこうした年中行事での利用とともに、それ以外の種々の行幸も頻繁であった。例えば作品番号「二二七」、「二二八」のように同題で漢詩を詠み合ったり、それぞれ異なる景物に題材を採り漢詩を詠み合うといった漢詩群がみられるように、「君臣唱和」の舞台として多くの密宴が催されている。

すなわち、嵯峨朝における神泉苑は、年中行事から密宴に至るまでの多様な機能に対応し得る形態を有し、利用する場面・状況に応じて異なるイメージが演出されていたことがわかる。これは、漢詩中に詠み込まれた種々の建造物や、儀場を組み込んだ庭園構成からも裏付けられる。累代の京内離宮であるが故に詩歌の中で過剰な称賛が行われた分は差し引いて考える必要があるが、嵯峨朝で造営された他の離宮や貴族の邸宅と比較しても、「王母仙園近、竜宮宝殿深」(作品番号「二十四」と描写されるように、その庭園規模や意匠性が傑出し、各所に見どころのある優れた景趣を造り上げていたと指摘することができ。特に、元来の自然池を利用し、周辺植生を活かした野趣あふれる大池や、ゆつたりと小高く連なる丘のような築山など、地勢を活かした庭園構成は、季節の移り変りを愛でるのに適し、詩宴の舞台として最上のものであったことも想像に難くない。通常、自然の移ろいを愛でるために行幸する京外の自然遊興地は、「嵯峨野なら秋草」といわれたように、季節や風物が限定されるが、ここ神泉苑は京内離宮でありながら、春の花、夏の納涼、秋の紅葉とキク、時代が下れば冬の鷹狩りというように、すべての時期に優れた景観と情趣を有している。いわば、この離宮のなかに楽園的な自然を再構成したと考えられる。作品番号「三十一」の空海の漢詩にみえる「一翔一住感君徳、秋月秋風空入扉、銜草啄梁何不在、踏踏率舞在玄機」とは、神泉苑の中で生きているすべての動植物、あるいは風や月光までもが天皇の大きな恩恵により生かされているとの意である。これは神泉苑に対する認識を端的に示していると考えられる。すなわち、ここ神泉苑は天皇自身が煩雑な日常を離れ、癒しと力を得る空間であると同時に、天皇の徳を示すための空間でもあった。換言すれば、天皇の徳によって、神泉苑の自然は生き生きと脈打ち、そこに生息する動植物、ひいてはそこを訪れる臣下らが恩恵を享受することになるからである。こうしたことから、神泉苑は年中行事の儀場、密宴の舞台、ひいては天皇の権威を象徴する場といった多様な機能を備えるとともに、平安時代初期に造営された唯一の「苑」として、規模・構成ともに別格の存在感を有していたことがうかがえるのである。

第二節 冷然院の庭

一 冷然院とは

冷然院は、嵯峨朝に創建された離宮のひとつで、大炊御門、二条、大宮、堀川の各大路に囲まれた平安京左京二条二坊三丁六町の敷地で造営された。現在は江戸時代初頭に造営され現在も存続する二条城の東北部分と概ね重なる。二条城の北側、中京区竹屋町通堀川西入に「冷然院址」の石標が建っている。

冷然院の明確な成立年代は定かではないが、文献上の初見は弘仁七年(八一六)八月丁巳(二十四日)で、『類聚国史』のなかに「幸冷然院。命文人賦七詩。賜侍臣祿有差。」と記載されている。嵯峨朝における冷然院は、図書を収蔵する機能を持つとともに、離宮のひとつとして行幸の場でもあった。ま



図 [2-2-1] 冷然院の位置図 (国土交通省 国土地理院 数値地図 2500 に図示)

た、淳和天皇に譲位後、承和元年（八三四）に仁明天皇に伝領するまで、嵯峨上皇は冷然院を後院としたため、淳和朝の冷然院は朝覲行幸の舞台となった。さらに、仁明天皇以後は累代の離宮として、後院や里内裏として利用した。なお、冷然院は複数回の火災に遭っており、最初は貞観十七年（八七五）で、約五年後に再建された。再建後は陽成天皇によく用いられ、仙洞となり、天曆三年（九四九）九月に冷然院にて陽成上皇が崩御すると、その一か月半後に罹災した。その後、村上朝の天曆八年（九五四）頃に再建され、冷然院の「然」の字が火災に通じるとして、「冷泉院」に改称された。その後も火災と再建を繰り返し、規模を縮小しながら鎌倉時代になっても存続した。

二 冷然院に関する先行研究と課題

冷然院に関する先行研究としては、管見の限り以下の四つの研究がある。すなわち、太田静六の建築史からの研究、所京子の文献史学からの研究、井実充史による文学からの研究、そして飛田範夫の造園史からの研究である。

まず、太田は『寝殿造の研究』^{九六}のなかで、平安時代初頭の禁苑である神泉苑との比較から、冷然院は後院^{九七}として創建されたとした。つまり、神泉苑が御遊^{九八}のみに利用され、後院としての位置付けを一度も持たなかったのに対し、冷然院は嵯峨天皇の後院として位置付けられた後、累代天皇の仮御所（以下「里内裏」という）として受継がれたからである。また、①創建者である嵯峨天皇が積極的に唐文化を導入した時代背景、②冷然院が後院として機能していたこと、③冷然院には広大な池が造成されたこと、の三点から、冷然院は唐の「興慶宮」^{九九}を模範として造営されたことを指摘した。さらに、創建時から三度の罹災と再建を繰り返した冷然院の歴史を、第一期から第四期以降までに分類し^{一〇〇}、各時期の形態と機能について言及した。機能面では、嵯峨朝だけでなく仁明朝や村上朝でも、内裏の罹災に際して冷然院を里内裏として利用していることを立証している。また形態面では、『続日本後紀』承和九年（八四二）七月庚戌（十八日）^{一〇一}に「冷然院西釣台」、『文徳天皇実録』仁寿二年（八五二）

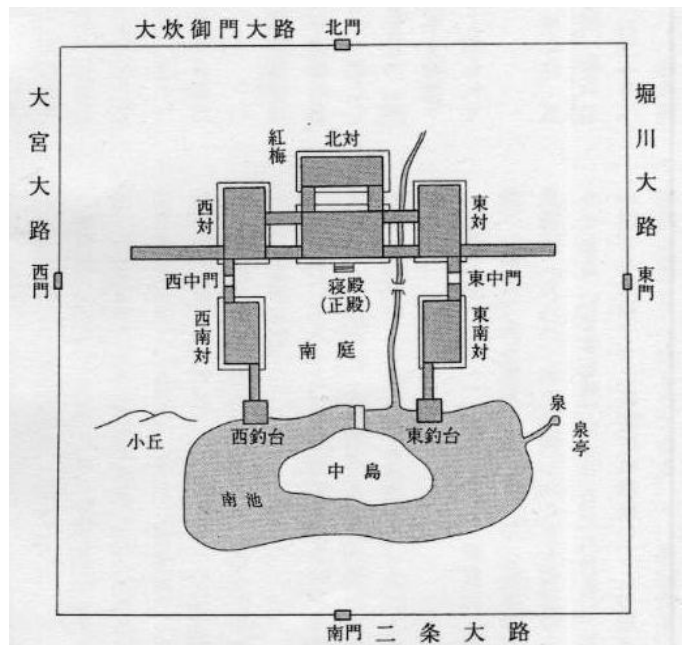


図 [2-2-2] 冷然院第三期復原図 (太田、1987)

一月庚午（三日）^{一〇二}他に「東釣台」との記述があり、第一期冷然院には神泉苑と同様に東西に釣殿があったことを指摘する。さらに、第三期冷然院については推定復原図を示しており、図「2-2-2」のように中心殿舎群は基本的に寝殿造配置であることを推定した。しかも東南対屋と西南対屋が揃った珍しい空間構成であり、庭園部分に関してはサクラ、ウメ、フジなどの樹木が華やかで、大池には中島も造成された、とした^{一〇三}。

所は、冷然院の主な役割の一つである「後院」について論じた^{一〇四}。冷然院と朱雀院が成立当初から後院として造営されたとする従来の指摘を採り上げ、両邸宅の平安時代前期の利用実態について検討し、後院の成立過程を探った。冷然院は諸院のひとつとして創建されたが、嵯峨天皇が譲位後の居所としたことから特別視されるようになり、仁明天皇に伝領された際には内裏罹災に際する里内裏や、天皇に関する仏事の開催所としての機能も加わった。つまり、当

初から後院として創建されたのではなく、数ある離宮のひとつから「累代の後院」という特別な位置付けになったのは仁明朝以降であると指摘する。さらに、本来後院は内廷に関する行事の際に「物」を供するという役目を担っており、それを内蔵寮や穀倉寮と共に弁備している例が多く、後院には「倉」的性格があったことも指摘している。このことから、平安時代中期の朱雀院・冷泉院は「御院」（天皇・上皇が一定期間居住する邸宅）であり、その御院の建物および御物の管轄を「後院」で行ったことから、後世に「御院」と「後院」が同一視されるようになったと推察した。

井実は、嵯峨朝時代の漢詩から、嵯峨朝文壇の君臣唱和の舞台となった邸宅である神泉苑や嵯峨院、冷然院を採り上げ、文学空間としての冷然院の景観特性を他邸宅との比較から論じた^{一〇五}。冷然院に関しては勅撰三集に収録された漢詩四首すべてを考察している。冷然院の漢詩は、他の邸宅での漢詩に比べて、情景を過剰に讃嘆する傾向を指摘し、池や築山などの庭園意匠が当時の造園技術の粋を集めた極めて先端的なものであったと考察している。

飛田は、冷然院を詠んだ「秋日冷然院新林池。探得池字。応製。一首。」の「径栽晚竹春餘粉（径に栽うる晚竹春餘の粉）」という表現から、園路にタケが植栽されており、「冷然院各賦一物 得潤底松。一首。応製。」という詩題から、築山の中にマツの老木が植栽されていたことを推測している^{一〇六}。また、『続日本後紀』の承和九年（八四二）七月庚戌（十八日）^{一〇七}から、西釣台の東側にある築山の近くにも、マツの高木があったことを指摘した。

以上のように、冷然院に関しては、建築学的研究が比較的進展しているが、弘仁年間（第一期冷然院）に関しては不明な部分も多く、こと庭園の形態に関しては資料が少ない。本節では、発掘調査成果と文献資料上の記載について整理した上で、勅撰三集に収録された冷然院に関連するすべての漢詩と、その他補足的に取り上げた後世の漢詩から、庭園に関する語句を抽出・検討し、嵯峨朝における冷然院庭園がどのような形態と機能を有したのか、その一端を探ることとした。

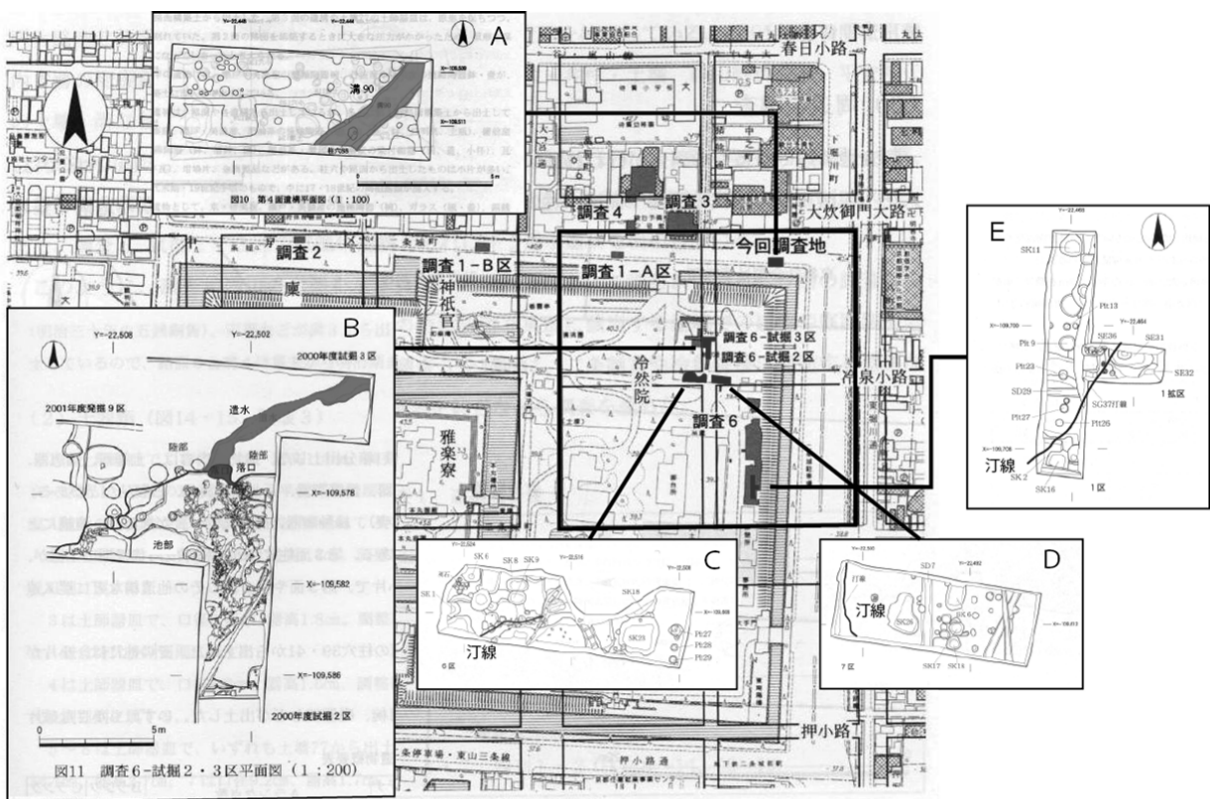


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

図 [2-2-3] 冷然院の発掘調査概要 (調査位置図A…『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006/B・C・D・E…『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所編 2001、2002 から引用・加筆)

三 冷然院に関する考古学的成果

発掘調査は一九八二、一九九四、二〇〇〇～二〇〇三、二〇〇五、二〇〇九の各年度に行われた。特に、庭園に関する遺構が発掘されたのは、二〇〇一～二〇〇二年度の二条城内試掘・発掘調査で、平安時代前期から後期に至る景石群を伴う池状遺構と遣水遺構が発掘された(写真「2-2-1」)。池状遺構では水の落口や汀線、洲浜などが部分的に検出された。また、二〇〇五年度の調査では溝SD90が発出されたが(写真「2-2-2」)、これは遣水の主流部分の可能性が高く、二〇〇一～二〇〇二年度発掘の遣水、池状遺構へ続くと考えられている。このような発掘調査成果から考えると、冷然院庭園は北東から南西に向かう遣水が配置され、敷地のほぼ中央で遣水が池部分に注ぎ込むかたちはかなり広大な池が存在していたことがわかり、このような配置は、いわば



写真 [2-2-1] 1-2 区州浜検出状況 (北から)
(「史跡旧二条離宮(二条城)」、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概要、2001-15 より)

寝殿造の標準型と見ることができ(図「2-2-3」)を参照。

四 文献資料に現れる冷然院

冷然院に関連する記事を六国史から抽出し、表「2-2-1」^{一〇八}に示した。なお、平安時代前期、特に嵯峨朝(八〇九～八三三)を対象とするため、冷然院の初出から嵯峨天皇存命中(八〇九～八四二)の記事に限定する。また、近東院が冷然院の前身であるとする主張があるため、補足的に延暦年間の近東院に関連する記録も、冷然院の記録の一部として示すこととした^{一〇九}。

「冷然院」という名称の邸宅は、嵯峨朝中期の弘仁七年(八二六)八月丁巳(二十四日)が文献上の初見である。この行幸では、冷然院において文人らとの詩宴が催されている。これを皮切りに、嵯峨朝では六度の行幸があり、詩宴や奏楽が催されている。そして、嵯峨天皇は弘仁十四年(八三三)四月甲午(二〇日)に退位し、内裏から冷然院に遷御したことで、冷然院が嵯峨上皇の仙洞御所となった^{一一〇}。その後、嵯峨上皇は承和元年(八三四)八月丁亥(九日)には嵯峨院に移御し、そこで最晩年を過ごした。この時に冷然院は仁明天皇に譲渡された。

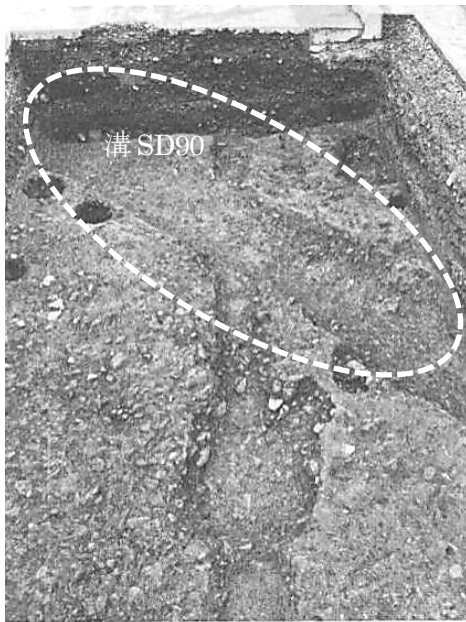


写真 [2-2-2] 溝 SD90
(「史跡旧二条離宮(二条城)・平安京冷然院跡」、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概要、2005-16 より)

表 [2-2-1] 冷然院に関連する行幸記事一覧

元号	延暦	弘仁	天長	承和	九年	十年	八年	七年	四年	二年	十三年	十四年	十一年	十年	八年	七年	五年	四年	三年	二年	元年		
年	十四年 (七九五年)	十五年	十六年	十七年	十七年	十八年	十九年	二十年	二十一年	二十二年 (八二五年)	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年	三十年	三十一年	三十二年	三十三年	三十四年	
月日	六月庚戌(十五日)	三月乙卯(二十五日)	正月癸丑(二十六日)	五月辛卯(十二日)	八月丁巳(二十四日)	四月壬辰(三日)	四月丙戌(十六日)	四月戊寅(十八日)	四月甲午(十日)	正月戊申(二日)	五月庚辰(二十日)	正月庚辰(五日)	八月丁卯(二十六日)	正月壬寅(三日)	七月癸丑(十八日)	二月乙亥(十一日)	八月癸巳(十日)	正月甲寅(三日)	正月乙卯(四日)	八月辛巳(三日)	八月月丁亥(九日)	十一月癸未(二十九日)	四月乙亥(十一日)
記事	幸近東院。	巡覽朝堂及諸院、御近東院、宴飲終日、侍臣及諸衛等、賜物有差。	幸近東院。宴五位已上。賜錢有差。	幸近東院。	幸冷然院。命文人賦詩。賜侍臣祿有差。	幸冷然院。命文人賦詩。賜侍臣及文人衣被。	幸冷然院。宴。奏樂賜祿。	幸冷然院。令文人賦詩。	御冷然院。	帝遷冷然院。	掖庭公主參觀冷然院。賜陪從大夫已下祿。	冷然院賀皇子新誕、賜五位已上衣被。	皇后謁冷然院。為賀正也。	皇后詣冷然院。奉賀新造寢殿、兼獻珍麗。	皇后謁冷然院。終日雨雪。	相撲人十人、令參冷然院。	秀良親王、於冷然院、加元服。授三品。拜賀禮了、錫宴賜祿。	天皇謁觀先太上天皇及太皇太后於冷然院。賜從五位已上祿有差。是日。太上天皇幸姬大原真人全子。橘朝臣春子。保親王母氏葛井宿祢藤子並叙從五位下云。	後太上天皇賀先太上天皇於冷然院。以入新年也。先太上天皇乍驚。逢迎中庭。	天皇朝謁先太上天皇及太皇太后於冷然院。是日。先太上天皇亦御淳和院。以相賀也。中納言從三位直世王薨。年五十八。	上為先太上天皇及太皇太后。置酒於冷然院。上自奉玉卮。伶官奏樂。令源氏兒童舞于殿上。極歡而罷。以綿一万屯賜五位已上并院司祿各有差。太上天皇及太皇太后將遷御嵯峨新院。故有此謠設也。	先太上天皇遷御嵯峨院。	臣貞雄從五位上、從四位上笠朝臣繼子正四位下、從五位上內藏宿祢影子從四位天皇遷御冷然院。以修理內裏也。
出典	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀

表 [2-2-2] 冷然院に関連する漢詩一覧

六	五	四	三	二	一	題詞	作者	出典
暮春。侍宴冷泉院池亭。同賦花光水上浮。 応製。	九日侍宴冷然院。各賦山人採藥。十韻 応制 每句用藥名	冷然院各賦一物。得水中影。 応製。 一首。	冷然院各賦一物。得瀑布水。 応製。 一首。	冷然院各賦一物。得澗底松。 一首。	冷然院各賦一物。得澗底松。 一首。	秋日落然院新林池。 探得池字。 応製。 一首。	淳和皇太弟	文華秀麗集
菅原文時	島田忠臣	桑原広田	桑原腹赤	嵯峨天皇	淳和皇太弟			文華秀麗集
本朝文粹	田氏家集	文華秀麗集	文華秀麗集	文華秀麗集	文華秀麗集			文華秀麗集

その後も、承和九年(八四二)四月乙亥(十一日)には内裏の修理のために仁明天皇が冷然院に遷御している。続く文徳天皇は冷然院を里内裏とし、陽成上皇は仙洞御所として利用した。さらに、村上朝には「冷然院」を「冷泉院」と改称し、里内裏としている^{二二}。また、冷泉上皇の仙洞御所や後冷泉天皇の里内裏としても用いられた。このように、冷然院は各朝において、「後院」や「里内裏」といった重要な機能を果たしていたのである。

五 漢詩からみた冷然院

冷然院を詠んだ漢詩と賦は全部で六首ある(表「2-2-2」)。嵯峨天皇による勅撰漢詩集『文華秀麗集』に収められたものが四首、平安時代前期終盤および中期と時代は下がるものの、当庭園に関連する漢詩と賦が各一首である。そのうち、作品番号「二」は冷然院に庭園が新しく造られた折の行幸時の天皇主催の詩宴で、大伴親王(淳和皇太弟)によって詠まれたものである。作品番号「二」〜「四」も行幸時の天皇主催の詩宴で詠まれた漢詩群で、御製(作品番号「二」)に対して、桑原腹赤と桑原広田が応制を詠んでいる(作品番号「三」「四」)。作品番号「五」「六」は少し時代が下がり、両者とも「侍宴」のことは

がみえることから公宴の漢詩であろう。作品番号「五」は冷然院庭園を秋山に見立て作者を採葉する山人に例えて詠まれた漢詩、作品番号「六」の賦は晩春に冷然院の池亭で宴を催したときのものである。

本章では、これら六首の漢詩と賦に描写された冷然院の庭園意匠や景觀の要素を抽出し、漢詩に詠み込まれた冷然院庭園について整理しておきたい。以下に示す漢詩について、原文、読み下し文、大意^一^二を各々示した上で、若干の説明と解釈を付す。

作品番号「一」

「秋日冷然院新林池。探得池宇。応製。一首。」 令製（淳和皇太弟）

君王本自耽幽趣

泉石初看此地奇

積水全含湖裏色

重巖不謝破中危

徑栽晚竹春餘粉

歲淺新林未拱枝

景物仍堪遊聖目

何ぞ勞駕向瑶池

君王本自幽趣に耽り、

泉石初めて看すに此の地奇し。

積水全く含む湖裏の色を、

重巖謝らず破中の危きを。

徑に栽うる晩竹春餘の粉、

歳浅き新林未だ拱かぬ枝。

景物仍し聖目を遊ばしむるに堪へぬ、

何ぞ勞かむ整駕して瑶池に向かはむことを。

〈大意〉

嵯峨天皇は幽趣を好み、この地に新林池を造られた。庭園のたたずまいは靈妙である。池の水はまるで湖水のように深く美しい色をみせる。幾重にも重なった巖は溪谷の険しさに劣らない。小道に植栽された竹は春の名残の粉を吹き、植えられたばかりの樹木ははまだ抱きかかえられる程には成長していない。この風景の眺めは天皇を楽しませるもので、ここにいれば仙境にあるという瑶池に向かう苦勞をする必要などありはしない。

〈説明・解釈〉

作品番号「一」は、秋の日の冷然院行幸の際に、冷然院に新しく造営された

庭園について詠んだ漢詩で、作者は嵯峨天皇の弟・大伴親王（淳和皇太弟）である。

秋に行われた行幸の記録は二例あるので、以下に示す。

①弘仁七年（八一七）八月丁巳（二十四日）

「幸冷然院。命文人賦詩。賜侍臣祿有差。」（類聚国史）

②弘仁十一年（八二〇）八月丙戌（十六日）

「幸冷然院。命文人賦詩。」（類聚国史）

冷然院は、桓武朝の記録に四度登場する近東院が前身であると考えられる（表「2-2-1」、題詞の「新林池」は近東院の庭園が嵯峨朝に入り改修されたと考えるのが順当である。そうしたことから小島は、この漢詩が詠まれたのはより早い時期の弘仁七年八月丁巳（二十四日）であると推定している^{一三〇}。また、井実はこの日の詩会は冷然院の完成披露会を兼ねていたと指摘している^{二四〇}。

新林池の庭園景觀は、第二句「泉石初看此地奇」や尾聯「景物仍堪遊聖目、何勞整駕向瑶池」のように描写されており、斬新で趣深い意匠であることがわかる。もちろん、大伴親王による応制なので文飾は割り引いて考える必要があることは言うまでもない。それでもなお、第三句「積水全含湖裏色」にあるように、池水が湖沼のように深い色合いであることや、第四句「重巖不謝破中危」にあるように園内の石組が険しく連ねたてられた溪流のような遣水など、水の景觀が印象的に描かれている点には注目してよいだろう。そして、第六句「歳浅新林未拱枝」から、新造された庭園には植栽されたばかりの若い樹林があったことがわかる。特に、第八句にある「瑶池」は崑崙山中にあり神仙が住むという中国の伝説上の美麗な池泉のことであり、瑶池に向かはずとも冷然院の庭園を見れば事足りるという表現は、最上級の讚辞に他ならない。

作品番号「二」

「冷然院各賦一物、得澗底松。一首。」 御製（嵯峨天皇）

鬱茂青松生幽澗

経年老大未知霜

鬱茂なる青松幽澗に生ひ、

経年の老大未だ霜を知らず。

薛蘿常掛千條重

雲霧時籠一蓋長

高聲寂寂寒炎節

古色蒼蒼暗夕陽

本目不_レ堪登嶺上

唯餘風入韻_二宮商_一

薛蘿常に掛かりて千條重く、

雲霧時に籠めて一蓋長し。

高聲寂寂炎節に寒く、

古色蒼蒼夕陽に暗し。

本目嶺上に登るに堪へず、

唯餘すは風入りて宮商に韻くのみ。

〈大意〉

青々と生茂った松が奥深い谷の底から聳えている。松には薛蘿がいつも垂れ下がり、枝々は重そうになつてゐる。霧や雲が谷に立ち込めて、まるで一本の傘のように立っている。丈高い松は、真夏でさえも涼しそうに、年月を経た葉も青々として夕陽に沈んで見える。谷底の松は元來峰の上に生えることにはできない。ただ松に風が吹き込み、松風の音を奏でるばかりである。

〈説明・解釈〉

作品番号「二〇」〜「四」は同じ行幸で詠まれた漢詩である。これら四首が、どの行幸で詠まれた作品であるかは不明であるが、候補としては弘仁八年（八一八）四月壬辰（三日）、弘仁十年（八二〇）十月乙卯（十日）、弘仁十一年（八二二）六月丁亥（十七日）、弘仁十一年八月丙戌（十六日）、弘仁十三年（八二三）四月戊寅（十八日）のいずれかであろうと考えられる。井実は、蔵持しのぶが作品番号「二〇」〜「四」を題画詩であると指摘し、三首の描く風景が単なる実景描写ではないとした点^{二一五}を評価しながらも、これらの漢詩の叙景対象はあくまでも冷然院の庭園であり、「遊天台山賦」という先行テクストを媒介として再構成された冷然院の風景であることを考える必要があると指摘している^{二一六}。

この漢詩は前述のように谷底のマツについて描写した、嵯峨天皇による漢詩であるが、前述のように、飛田は『続日本後紀』の記述も引きながら、西釣台の東側にある築山の近くにマツの高木があったことを指摘しており、マツの存在自体は確かであろう。第一句「鬱茂青松生幽澗」から、マツが生えている山

奥の谷川とは、恐らく遣水についての描写であろう。自然風の谷川を模した遣水の傍に高く伸びたマツを詠んでいるのである。そのマツについて、第二句「経年老大未知霜」はその丈が高いことを示し、第三句「薛蘿常掛千條重」から、その枝にサルオガセが絡みついている様子がわかる。また、第五句「高聲寂寂寒炎節」とあるように、炎節、すなわち暑い季節でもマツは涼しげで、青々として緑陰を作っていることがわかる。実際、厳暑にありながらも青々と生い茂るマツをはじめとする常緑樹は、京中の邸宅における避暑の場面にたびたび登場する。

作品番号「三二」

「冷然院各賦一物、得曝布水。応製。一首。」桑腹赤（桑原腹赤）

兼山傑出院中陰

一道長泉曳_レ布開

驚鶴偏隨_二飛勢_一至

連珠全逐_二逆流_一類

巖頭照_レ日猶零_レ雨

石上無_レ雲鎮聽_レ雷

疇昔耳聞_二今眼見_一

何ぞ勞絶_レ粒訪_二天台_一

一道の長泉布を曳きて開く

驚鶴偏に飛勢に随ひて至り

連珠全く逆流を逐ひて類る

巖頭に日は照れど猶し雨零り

石上に雲無くして鎮に雷を聴く

疇昔耳に聞き今眼に見る

何ぞ勞かむ粒を絶ちて天台を訪はむことを

〈大意〉

重なつた山々が聳えて院のなかは険しく、滝が白い布を引き伸ばした様に落ちる。水が落ちる様子は、驚いて飛び去る鶴のように一直線である。連なつた珠がひたすら逆流を追つてくずれ落ちるようだ。岸の巖に日は照るが滝の飛沫で雨が降つたようで、滝の音はまるで雷のように響いている。昔はこの滝のことを耳にしたが、今は実際にこの目で見ている。どうして、穀物を断つてまで靈仙のいる天台山の滝を訪うような苦勞をしようか。

〈説明・解釈〉

作品番号「三」は桑原腹赤の作で、作品番号「二」（御製）に対する応制である。冷然院の瀑布のダイナミックな様子を布・鶴・珠などの豊かな比喻を用いて表現している。作者の桑原腹赤（都腹赤）（七八九〇八二五）は、平安時代初期の官吏で詩人である。遣渤海副使・桑原秋成の子で、弟の貞継とともに上奏し氏姓を都宿禰に改めた。文章生を経て、少内記、大内記、大学頭、文章博士などを歴任し、正五位下とつた。また、『文華秀麗集』では中心的詩人で、選者の一人となるなど、目覚ましい台頭をみせ、嵯峨文壇の重要な漢詩人の一人であった。

第一句「兼山傑出院中陰」から園内には石が二つ二つと連ね立てられており、自然景観風の庭園景観が演出されていることがわかる。また、第二句「一道長泉曳布開」とあり、瀑布は伝い落ちや幅広の水落ちなどではなく、反物を解き垂らしたような細長い布落ちであったと考えられる。瀑布について、第三句「驚鶴偏随飛勢至」は白い飛沫を上げて水が直下している様子、第五、六句「巖頭照日猶零雨、石上無雲鎮聽雷」は滝水で岸の石がいつも濡れており、滝音が園内に雷のように響きわたる様子を詠み、瀑布の水勢の激しさが示されている。さらに、第八句「天台」は中国の伝説上の天台山の瀑布を指し、冷然院の瀑布をこれに例えて、その意匠を称賛している。

作品番号「四」

「冷然院各賦一物、得水中影。応製。一首。」 桑広田（桑原広田）
萬象無_レ須_レ匠 万象匠を須_レあること無く、

能_レ凶_レ緑水中 能く凶く緑水の中。

看_レ花疑_レ有_レ馥 花を看ては馥有らむかと疑ひ、

聽_レ葉不_レ鳴_レ風 葉に聴きては風を鳴らさず。

一鳥還添_レ鳥 一鳥還鳥を添へ、

孤叢更向_レ叢 孤叢更に叢に向かふ。

天文逢降_レ耀 天文逢かに耀を降す、

応_レ為_レ潭心空_二 応に潭心の空しきが為なるべし。

〈大意〉

画家を用いることもなく、水中の影は緑水のなかに万象を描きだす。水面に花を見ては、香りがするのではないかと疑う。葉影に耳を澄ませてみるが、勿論、葉擦れの音がすることはない。一羽の鳥が水に影を落とすと更に鳥が加わり、一つの草むらが水に映るともう一つの草むらと向き合う。天が遙かに光を水中に投げかけるのは、淵の底に淀むものが何も無いためだろう。

〈説明・解釈〉

作品番号「四」は桑原広田による漢詩で、作品番号「二」（御製）に対する応制である。冷然院の「水中の影」、すなわち池の水面に様々な景物が映り込む景色の美しさが詠まれている。

第三、四句「看花疑有馥、聴葉不鳴風」では、池の岸辺に植栽された植物の花や葉むらが、香りや葉擦れの音もせず逆さに映り込む様子を眺め、第五、六句「一鳥還添鳥、孤叢更向叢」は池に飛来した鳥や草むらが池に映り、数が増えたように見える妙を詠み込んでいる。このように池に、花々や葉むら、草むら、飛来する鳥など様々な景物を映し込む描写から、冷然院の池は広大で澄んだ水面が大きく広がり、周囲が植物で修景されていたことがうかがえる。

作品番号「五」

「九日侍宴冷然院。各賦山人採葉。十韻応制。每句用葉名。」 島田忠臣
山人参_レ跡薛蘿幽 山人跡に参る 薛蘿幽なり、

旻景天晴採_レ葉遊 旻景天晴れ 葉を採りて遊ぶ。

乍嗽_レ田施_レ花水面 乍ちに嗽げば田く施る 花水の面、

随_レ行斜滑_レ石巖頭 随ひ行けば斜めに滑る 石巖の頭。

欲_レ扶_レ老到_二殷勤_レ摘 老いの到るを扶けんと欲して 殷勤に摘み、

教_レ苦_レ心懷_二子細_レ求 心の懐ひを苦しめしめて 子細に求む。

氣_レ白_二前原_レ真性_レ逸 氣は前原に白くして 真性逸しみ、

樹_レ黄_二連野_レ道心_レ優 樹は連野に黄にして 道心優かなり。

犬_レ牙_二小逕_レ来_レ侵_レ月 犬牙の小逕 来りて月を侵し、

犬牙の小逕 来りて月を侵し、

龍胆深叢去趁レ秋

龍胆の深叢 去きて秋を趁ふ。

誰計常思松子遇

誰か計らむ 常に思ひて松子に遇はむことを、

未レ知要繞葛陂投

未だ知らず 要め繞りて葛陂に投ぐることを。

愛レニ将寓木ニ長栖レ露

寓木を愛將して 長く露に栖み、

遮レニ棄重樓ニ独枕レ流

重樓を遮棄して 独り流れに枕す。

不レ忍ニ冬隣ニ山植尺

冬隣なるを忍びず 山植尺き、

暫防ニ風急ニ岸陰留

暫く風の急なるを防ぎて 岸陰に留まる。

人衝ニ快志ニ筓篋満

人快志を衝みて 筓篋満ち、

水寫ニ清声ニ洗始休

水清声を寫して 洗始休ふ。

軟脚当レ帰雲洞裏

軟脚当に帰すべし 雲洞の裏

事ニ須万歳用ニ仙羞ニ

事須く万歳に仙羞を用ゐるべし。

〈大意〉

山人がわずかな足跡をたよりに山道を分け入るが、薜蘿が生い茂つて物寂しい。秋空は晴れて明るく、薬草採つて歩き回る。口を漱げば、水紋が花の散り込む水面に広がり、そのまま流れに沿つて進むと岩場となつていて斜めに滑りやすい。老いの到来を助けようと、丁寧に薬草を摘み、はやる気持ちを抑えて丁寧に探し求める。秋の気は前方の野原に白く、樹木は連なっている野いっぱいに黄葉していて、自然を愛する心は豊かである。入り組んだ小道を来て、月陰の下に入り込み、竜胆の深い草むらをくぐり、秋の趣を追い求める。いつも心に思っているあの赤松子に会うことなど、誰が取り計らってくれるだろうか。また、費長房が仙人に授かり、葛陂に投げたという杖を捜し求めて、それに乗つて帰ろうとも思わない。寓木を愛して、長らく露のなかに住み、立派な楼閣で暮らす世界を捨て去つて、ただ一人流れに枕して耳を洗い清める。冬が隣に来て、草木が枯れ尽き、強い風で防いでしばらく崖下にとどまる。魚を採るふせごも、薬草の籠も満ちて快い。川の流れは清らかな秋の音色で、そこで我が身を洗い清めて休む。歩き疲れた足はもはや雲間の洞のうちに帰らねばならぬ。そして、この採取した仙薬を、ぜひとも万代まで用いたいものだ。

〈説明・解釈〉

作品番号「五」は、『田氏家集』に収められている島田忠臣（八二八〜八九二）の作品である。『田氏家集』は寛平三年（八九一）頃に成立し、編纂者は島田忠臣である。上巻六九首、中巻六十首、下巻八十六首の全三巻で構成されている。本稿で対象としている嵯峨朝よりも時代は下がるが、参考までにみておきたい。まず、第四句「随行斜滑石巖頭」は、流れに沿つて歩くと苔むした岩場のような場所がある様子を示し、第八句「樹黄連野道心優」は樹林が一面に黄葉している様子を詠んでいる。また、第九句「犬牙小逕来侵月」から小路が交錯していることを示し、第十句「龍胆深叢去趁秋」からリンドウの深い茂みがあることがわかる。その他、第十一句「誰計常思松子遇」にはマツカサ、第十二句「未知要繞葛陂投」にはクズが詠まれている。さらに、第十三句「暫防風急岸陰留」は岸の陰で風を防いでいる様子が描かれ、第十五句「水寫清声洗始休」は清らかな水音が響いてくる様子を詠んでいる。

これは「九日侍宴冷然院。…」との記載から、重陽節（九月九日）における冷然院行幸で宴席に侍つた際の漢詩であると考えられるが、何年の作かは不明である。「山人採薬」という題詞で詩を詠んでいるので、冷然院の庭を山に見立て、山人が薬となる植物を採集する状況を詠んでいることになる。題詞には「毎句用薬名」とあり、作品内には前述のように薬効がある薜蘿（サルオガセ）、竜胆（リンドウ）、松子（マツカサ）、葛陂（クズ）などが詠み込まれている。詩中で山中に例えられている築山状の場所は存在したと考えられるが、これらの植物が本当に庭園に植栽されていたのかについては不明である。

ただし、第三句「乍嗽円施花水面」では、岸边に花が咲き、美しい水面の池なり遣水がある庭園景観が詠まれており、こういった特徴は嵯峨朝に詠まれた作品番号「四」にもみられた。また、第四句に描写されるような、ごつごつと苔むした岩石が連なる険しい様子は、「兼山傑出院中險」（作品番号「三」）や「重巖不謝破中危」（作品番号「二」）と通じる部分があり、庭園の意匠として信ぴょう性が高い。このように、平安時代前期終盤の時点で、池や流れといった水景や岩山を思わせる築山があったことがわかる。これらの構成要素の意匠が嵯峨朝から存続したものである可能性は小さくない。

作品番号「六」

「暮春。侍宴冷泉院池亭。同賦花光水上浮。応製」 菅三品(菅原文時)
冷泉院者萬葉之仙宮、百花之一洞也。 冷泉院は萬葉の仙宮、百花の一洞なり。
景趣幽奇、煙霞勝絶。 景趣幽奇、煙霞勝絶なり。

…(中略) …

爰宴于林下之池台、 爰に林下の池台に宴する、
誠有以矣。 誠に以有るかな。
觀其花綻在岸、 觀れば其れ花綻ろびて岸に在り、
水清盈科。 水清くして科に盈つ。
花垂映而水下照、 花映を垂れて水下に照り、
水浮光而花上鮮。 水は光を浮かべて花上に鮮らけし。
瑩日瑩風、高低千顆万顆之玉、 日に瑩き風に瑩く、高低千顆万顆の玉、
染枝染浪、表裏一入再入之紅。 枝を染め浪を染め、表裏一入再入の紅。
誰謂水無心、 誰か謂はむ水心無しと、
濃艶臨兮波変し色、 濃艶臨みて波色を変ふ、
誰謂花不語、 誰か謂はむ花語らずと、
輕漾激兮影動レ脣。 輕漾激りて影脣を動かす。
嗟呼、花之遇時、 嗟呼、花の時に遇ひ、
水之得レ地者歟、 水の地を得たるか。
夫布レ政之庭、 それ政を布くの庭は、
風流未必敵三崐園、 風流未だ必にも崐園に敵しからず、
兼之者此地也。 これを兼ねたる者は此の地なり。

…(中略) …

于時宴入二夜景、 時に宴夜景に入り、
醉蕩二春風。 醉春風に蕩く。
詠詩「於琪樹之陰」、 琪樹の陰に詠詩し、
踏舞「於沙涯之畔」。 沙涯の畔に踏舞す。
…(後略) …

〈大意〉

冷然院はよろずよの仙宮(後院)で、万花の咲き乱れる邸宅でもある。景趣は趣深く珍しい様子で、極めて素晴らしいものである。…(中略)…林のほとりの池台(釣殿)で宴を催す。目をやれば、岸では花のつぼみが開き始め、清らかな水がくぼみに満ちている。花は水に映り込み、水に光が反射して、水に映った花の上いきらきらと鮮やかである。光はきらめき、高く低く千粒万粒の玉となる。水に映った花の紅で、枝や波が染まる。水には、花の表側や裏側が映り込んでいる。花は水に映ったかと思えば消えたり、また映り込んだりする。水に心が無いと誰が言ったのだろうか。艶やかで美しく、水を見てみると波色が変わった。花が語らないと誰が言ったのだろうか。さざ波が逆巻き、影を動かした。ああ、ここは花が咲き乱れ、水の美しい場所であることだ。政治を執り仕切る庭の素晴らしい景趣は崐園にも劣らない。…(中略)…宴は夜に入り、酒に酔って、春の風を感じる。玉のように美しい樹木のそばで詩を詠み、砂地の岸辺で踊りをする。…(後略) …

〈説明・解釈〉

この賦は村上朝(九四六〜九六七)の冷泉院行幸(冷然院から改称)の際の作で、「侍宴」との記載があることから公宴のものである。晩春に、冷泉院の池亭において、参加者が同じ題詞「花光水上浮」で漢詩を詠んだ。この漢詩の作者である菅原文時(八九九〜九八二)は、菅原道真の孫で、平安時代前・中期の公卿である。天元四年一月に三位に叙せられ、同年に八十三歳で没した。

まず、「冷泉院者萬葉之仙宮、百花之一洞也、景趣幽奇、煙霞勝絶」から、冷然院の庭園景観は極めて優れ、趣深く珍しい様子で、園内には花々が咲き乱れている様子が詠まれ、また「爰宴于林下之池台」から、池に臨んだ釣殿があり、そこで宴会が行われていたことがわかる。さらに「誠有以矣、觀其花綻在岸、水清盈科、花垂映而水下照、水浮光而花上鮮」とあり、咲きほころんだ花が池の清らかな水に映り込み、光が反射しきらきらと輝く様子が詠まれている。このように、水面に景物が映り込む趣深さは、前述の作品番号「四」「水中影」でも詠まれている。特に冷然院の池では水面に映り込む庭園景観を楽しむ描写が

よくみられ、広い池を中心に水景が施された庭園であったと推測できるのである。そして、「于時宴入夜景、醉蕩春風、詠譎於琪樹之陰、蹈舞於沙涯之畔」では、日暮れから宴会が始まり、樹木の下では詩会が行われ、池辺の砂地では舞いが催されている様子が描写されている。村上朝の華やかな行幸の一場面がうかがえる。

六 小括

冷然院で詠まれた漢詩のうち嵯峨朝の作品（作品番号「一」～「四」）は、嵯峨文壇の唯美的特徴が色濃く表れる『文華秀麗集』に収録されている。滝川幸二によれば、嵯峨文化圏（サロン）は、嵯峨天皇を中心とし、藤原冬嗣や良岑安世ら国家経営の中心に位置する公卿らも詩人として登場する一方で、位階の低い官人までも君臣唱和の世界に取り込んだとされる^{二七}。また、滝川は、平安時代の天皇主催の詩宴の場を、節会とそれ以外に分ける視点が「公宴」と「密宴」の区別であると指摘し、公宴での詩作では応制詩（天皇の命令による詩作を行う場合）が中心となり、密宴では奉和詩（天皇が詩を詠み、それに対して臣下が応える場合）が中心であると論じた。さらに、『朝野群載』（卷十三・書詩体・帝王）では「公宴の時、必ず侍宴の字を書く也、臨時の密宴之れを書かず」との記載があることも指摘した。嵯峨朝の冷然院行幸のうち、「侍宴」ではないが、「応製」と記載された漢詩が三首（作品番号「一」と作品番号「二」に対する応制・作品番号「三」、「四」）ある。それらは、天皇主催の詩宴で詠まれたことを意味するが、『凌雲集』以後に編纂された『文華秀麗集』、『経国集』は、天皇自身が強固に領導する文壇で、極めて私的人格を持っていたとの指摘^{二八}から、「密宴」に限りなく近いものであると考えてよいだろう。すなわち、滝川も指摘するように、同じ行幸で詠まれた作品番号「二」～「四」は嵯峨天皇と桑原腹赤・桑原広田ら臣下が、「密宴」の詩会において漢詩を軸に相互の関係性を確認・補完していたということであり、そういった関係性は律令制が支配する宮内での「公宴」では実現し難いものだったということである。なお、作品番号「五」、「六」は平安時代初期の冷然院の庭園形態を知る参考として取り上げ

たものである。

以下、漢詩からみた冷然院の庭園形態についてみておきたい。冷然院庭園について、井実は当時の造園技術の粋を集めてできた最先端の庭園であったことを指摘したが^{二九}、「泉石初看此地奇」（作品番号「一」）などの句から、確かに冷然院庭園の意匠の先端的で目新しい様子が見て取れる。そうしたなかでも特に注目すべき点は、「水景」の描写の豊富さと多彩さである。そこで、表「2-2-3」において、冷然院六首のなかで「水景に関して詠まれた部分」を抽出した。ここでは、冷然院の水景について池、瀑布、遣水、水辺などに分類し、各部分がどのような意匠であったのかについて改めて整理し、考察を加えておきたい。

池の描写では、「何勞整鷺向瑤池」（作品番号「二」）の「瑤池」などの表現から、冷然院の池自体が美観的に非常に洗練されていたことが想像できる。また、池の意匠だけでなく池水や水面の様子、つまり水質の美しさについても詠まれている。例えば、「積水全宮湖裏色」（作品番号「二」）や「萬象無須匠、能図綠水中」（作品番号「四」）がそれに当たる。これらは、「池水は青く深い湖の色を湛えて澄み切っているから、水面に映る景物すべてを見事に描きだす」という意味である。つまり、冷然院の池の水質が良好であったことを示す描写であり、あるいは、前述の「積水」（作品番号「二」）が海水や湖水を表わすことから浅い池ではなく深さのある池であった可能性も高い。発掘調査では、洲浜を伴った池の汀線や遣水からの合流部分が検出されており、その検出位置からして、広大な池であったと考えられている。そうした事実と突き合わせても、漢詩に詠み込まれた冷然院の池の意匠は矛盾がなく、湧水が豊富であった地勢的な特性を踏まえると、水質が良かったことも確かであろう。

次に、瀑布の描写である「兼山傑出院中險、一道長泉曳布開」（作品番号「三」）や、「驚鶴偏隨飛勢至、連珠全逐逆流類」（同）より、石が連ねて立てられた険しい滝口から水勢激しく布を曳くように直線的に水が落ちる様子がうかがえる。また、「巖頭照日猶零雨」（同）では、瀑布から激しく飛び散る飛沫で岸辺の石はいつも雨が降ったように濡れているとあり、ここから冷然院の瀑布の周囲に石が配されていたことがうかがえる。本研究で取り上げた離宮及び邸宅に

において、瀑布の具体的な描写があるのは冷然院の他には神泉苑があるのみで、冷然院の瀑布は「天台（天台山の瀑布）」（作品番号「三三」）と比較されるほどなので、意匠性に優れた瀑布であったことが推測できる。このように、漢詩から園内に瀑布があったことは確かであるが、発掘調査では検出されておらず、正確な位置や規模を知ることができない。

遣水に関する描写としては、「鬱茂青松生幽澗」（作品番号「二二」）があり、青々としたマツが幽閑な谷川のような流れの傍に植栽されている様子が描写されている。実際に発掘調査によって遣水遺構が検出されており、冷然院の敷地の北東部分から中央に向かって延びて、中央部分で池に接続していたことがわかっている（図「2-2-3」）。

また、池、瀑布、遣水以外の構成要素に関しても見ておきたい。まず飛田が指摘するとおり、園内にはタケとマツがあったことを確認した^{二〇〇}。そして、時代の下がる作品番号「五」において、クズやリンドウなどの薬用植物が植栽された自然の山野と見紛うような築山が描かれる。また、作品番号「六」の「爰宴于林下之池台」から、樹林のほとりの高殿で宴を催していることがわかる。このように、後世の漢詩には築山を思わせる描写がみられ、詩宴の際にはその築山に深山のイメージすら重ねられていた様子が見て取れる。しかし、嵯峨朝の漢詩（作品番号「一一」～「四」）においては、他邸宅と比較しても、築山に関連する目立った描写が見られないことから、嵯峨朝の冷然院庭園の構成は、池、瀑布、遣水といった水景に特色をもたせたものであったと考えられる。そうした水景を彩る要素として、「重巖不謝硤中危」（作品番号「一一」）や「兼山傑出院中險」（作品番号「三三」）、あるいは「随行斜滑石巖頭」（作品番号「五」）にあるように、自然の山野を髣髴とさせるような石の立て方の描写も際立つ。このような景石を配した構成や意匠の在り方は、発掘調査成果からも裏付けられており^{二二}、冷然院庭園の意匠上の大きな特徴とみることができる。

ところで、冷然院の池水に関して、平安時代中期の以下の記録をみておきたい。

延喜一七年（九一七）十二月甲子（十九日）

「從^ニ去九月^ニ雨沢不^レ降井泉枯竭、其最甚者^ニ一条以上^ニ：陽成院上皇開^ニ冷泉院

表 [2-2-3] 冷然院に関連する漢詩中で水景について描写された部分一覧

水景に関する部分	意匠	作品番号
泉石初看此地奇	池、景石	一
積水全含湖裏色	池	一
何勞整駕向瑤池	庭（特に池か）	一
鬱茂青松生幽澗	遣水	二
一道長泉曳布開	瀑布	三
驚鶴偏隨飛勢至	瀑布	三
連珠全逐逆流頽	瀑布	三
巖頭照日猶零雨	瀑布周辺の石組み	三
石上無雲鎮聽雷	瀑布の音	三
天台	瀑布	三
萬象無須匠、能図緑水中	池	四
乍嗽円施花水面	池か（修辭的）	五
独枕流	遣水か（修辭的）	五
觀其花綻在岸、水清盈 科、花垂映而水下照、水 浮光而花上鮮	池	六
爰宴于林下之池台	釣殿	六
輕漾激兮影動層	池	六
詠訝於琪樹之陰、蹈舞於 沙涯之畔	池岸	六

東北門^ニ、令^下二人庶^ニ齋汲^中其池水上」（『醍醐天皇御記』二二）

同年十二月乙丑（二十日）

「冷泉院池水又枯、勅開^ニ神泉苑東北門^ニ令^下二人齋汲^中泉水上」（『醍醐天皇御記』

これは、延喜十七年九〜十二月の旱魃で井戸や泉が枯渇し、冷泉院の池水を汲みだしたが、翌日には冷然院の池も枯渇し、神泉苑の泉水を汲んでいる様子である。神泉苑には及ばずとも、冷然院も豊富な水源を有したことがうかがえ、その豊かな水を用いて多様な水の風景が造りだされたことが推測される。

漢詩に詠まれた冷然院の姿は、嵯峨天皇の離宮であるが故に、特に応制では庭園風景を褒め称える文言が多く用いられる。井実は、表現の「過剰性」は、あたかも大湖や深山幽谷を髣髴とさせる池や築山の造形の巧みさに対する称賛表現だとみるべきであると指摘する^{二二三}。しかし、漢詩のなかに詠み込まれる庭園イメージは、実際の冷然院庭園の庭景に寄り添ったものであり、庭園形態と漢詩世界が深く関わっていた状況を見て取ることが出来る。また、平安時代前期の冷然院の作品が収録されている『文華秀麗集』は、同時期の勅撰漢詩文集『凌雲集』より華美な作風を特徴で、嵯峨文壇が中心となり、勅撰時も嵯峨天皇の影響力が大きく、より私的な色合いが強い漢詩集であった^{二二四}。冷然院を詠んだ全ての漢詩が『文華秀麗集』に収録されていることは、「累代の後院」として公的な色合いが強い離宮と思われがちなこの邸宅が、創建当時は嵯峨天皇の私的な趣向を反映させた形態であったことをうかがわせる。漢詩の詳細な検討に基けば、とりわけその水景こそが、嵯峨朝の邸宅のなかでも群を抜く、趣向を凝らした意匠であったことを強調しておきたい。あわせて、こうした特色のある庭園を伴っていたことが、嵯峨天皇による「密宴」の舞台として冷然院が用いられた理由とも考えられるのである。

第二節 嵯峨院の庭

二 嵯峨院庭園とは

嵯峨院は平安京の西郊、嵯峨野に造営された離宮である。『拾芥抄』には「遍照寺在^レ西、嵯峨天皇御在所」と記されており、現在の京都市右京区嵯峨大沢にある大覚寺にあたる。境内にある「大沢池」は、かつての嵯峨院時代にさかのぼる園池であり、現在も築造当時の姿をうかがい知ることのできる希少な遺構である。

また、嵯峨院の立地する「嵯峨野」は桓武朝の遊獵地であった「的野」を指し^{二二五}、平安時代初頭には「北野」とも呼ばれていた。「嵯峨野」の文献上の初見は、元慶六年（八八二）十二月二十一日であり、『三代実録』のなかに「勅、山城国葛野郡嵯峨野充元不制、今新加^レ禁、樵夫牧豎之外、莫^レ聽、放鷹追兔」と記録されている。嵯峨野は、保津川が京都盆地に流れ出て桂川となる地の左岸（西岸）一帯にあたる。東は太秦、西は小倉山の山麓、北は丹波高地の一部をなす西山山地の山麓が境界となる。ちなみに、平安時代には、秋草や虫の名所として名高く、風流な土地柄としても知られていた。以下に示す『古今集』（秋上・二三八）の詞書からは、作者らが嵯峨野に花を見に行き、その際に和歌を詠んだことがわかる。

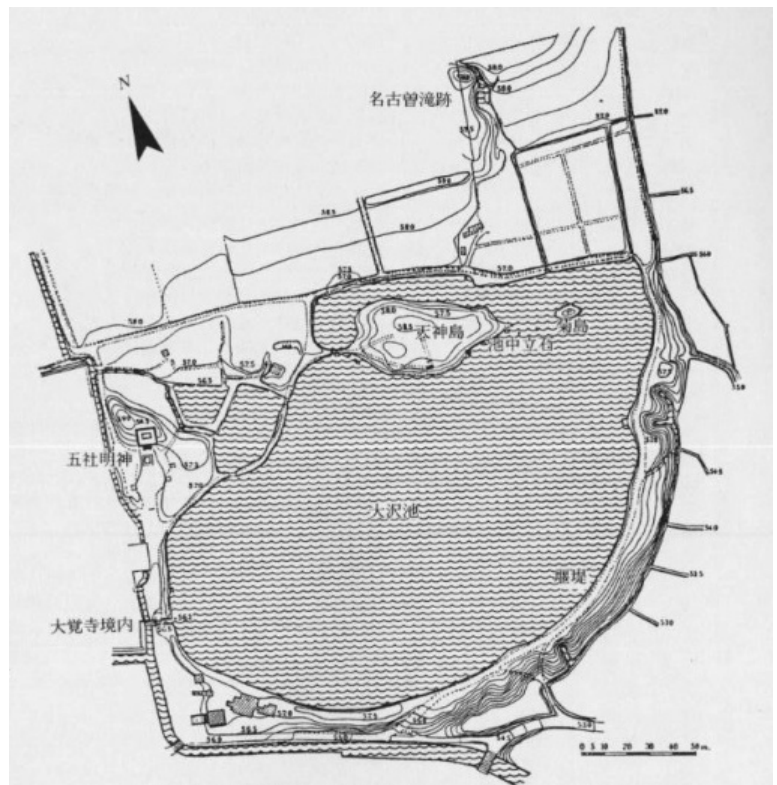
「寛平御時、藏人所のをのこども、さが野に花みんとてまかりたりけるとき、かへるとてみなうたよみけるついでによめる」

また、古くは桂川の溢水による沼沢地で未開墾地が多くを占めていた。しかし、渡来氏族である秦氏により、粟原堤（ふしはらつつみ）をはじめとする一帯の治水工事と田野の開拓が進められ、肥沃な土地となった^{二二六}。その際、水量を調整するための貯水池と水路が多数造成された。その中の一つで、農業に利用されていた貯水池を嵯峨天皇が園池として造営したのが「大沢池」の始まりである、という指摘もある^{二二七}。一方で、嵯峨野の開発が本格的に行われたのは平安時代初期であるという見方もある^{二二八}。現在では、双方の研究をもとに、秦氏が嵯峨野周辺の開発を始めた先駆であるが、それを受け継ぎ、平安時



図[2—3—1] 嵯峨院の位置図(●で示す)(国土交通省 国土地理院 数値地図2500に図示)

代初期には条里・プランを施行するなど、より発展的で広範囲の開発が行われたと考えられている^{二九}。平安期の嵯峨野は、正南北方向の統一条里とは異なる西傾した特殊な条里制が施行されており、皇族や貴族らの山荘が造営されていた^{三〇}。嵯峨院は、創建時期は不詳であるが、もともとは嵯峨天皇が神野親王時代から造営した別業であった。また、嵯峨天皇在位中には、京外離宮として利用されたことを示す記録が複数みられる。嵯峨天皇讓位後に、後院として京内離宮である冷然院などを利用したが、晩年には嵯峨院内に御所を新造して居



図[2—3—2] 大覚寺大沢池地形実測図(森蘊、1962)

住し、承和九年(八四二)七月に嵯峨院内にて崩御している。なお、その後、皇女である淳和天皇皇后正子が嵯峨院を寺院とし、現在の大覚寺となった。

二 嵯峨院に関する先行研究と課題

先行研究には、管見の限り、以下の研究成果が存在する。太田静六による建築史の研究^{三一}、森蘊^{三二}、飛田範夫^{三三}、小野健吉^{三四}、仲隆裕・藤井英二郎・浅野二郎による庭園史の研究^{三五}、井美充史による文学の研究^{三六}、山口敬太・川崎雅史による環境工学の研究^{三七}である。

太田は主に文献資料から、京外離宮としての嵯峨院の特性を検討し、以下の指摘をしている。一点目は、初出の弘仁五年(八一四)の記事内では「嵯峨院」

と記述され、弘仁七年（八一六）には「嵯峨別館」と改称し、それ以後行幸が頻繁にあったこと。二点目は、当初は遊獵の拠点として山荘的な意匠の簡素な離宮だったが、弘仁五年から一年余りをかけて改修されたこと。三点目は、嵯峨院が嵯峨上皇の仙洞御所として機能した経緯から、同じく嵯峨天皇の京外離宮である河陽離宮と比較してもより重要な離宮と位置付けられていたこと、などである。

森は文献資料と発掘調査成果をもとに、創建当時の嵯峨院の姿に迫り、以下の指摘をしている。一点目は、嵯峨朝には既に庭園的景観が整い、宴遊に関連する施設が備わっていたこと、二点目は巨勢金岡や百済河成など名立たる画家が造園したという説話が庭園の傑出した意匠性を示唆していること、三点目は園池の水源は北方からの流水を堰き止めて確保していることなどである。

飛田は文献資料、なかでも漢詩の分析から嵯峨院の植栽について言及した。その結果、シダレヤナギ、ウメ、タケ、マツが植栽されていたことを指摘し、「春日侍 嵯峨山院」探得廻字「心製一首」（『文華秀麗集』）の「攢松嶺上」という表現から、嵯峨野周辺の山腹の植生がアカマツ林であった可能性を示した。

小野は文献資料と地形の分析から、以下の指摘をしている。一点目は、嵯峨院のある北嵯峨地域は東・北・西の三方を山に囲まれ南が開ける立地環境であり、「山河襟帯」と称された平安京と相似すること、二点目は嵯峨院の利用形態だけでなく、造営の経緯からも唐風への志向がみられることなどである。

仲・藤井・浅野は嵯峨院の遣水遺構の堆積土を四層にわけ、植物遺存体を調査した。その結果、平安時代初期堆積土中から、キイチゴ属の核、スモモの核、クサギの核、ムラサキシキブの核、カジノキの核、アカメガシワの種子、ブドウ属の種子、タラノキの核が検出された。また、嵯峨院を詠んだ漢詩の分析と調査結果を合わせて、園内にはヤナギ、ウメ、マツ、タケ、モモ、キクが植栽されていたことを推測した。

井実は嵯峨院に関連する漢詩の分析から、嵯峨院の文学的イメージについて、以下の指摘をしている。まず、嵯峨野は都から比較的近距离である一方で、精神的には異境空間という意識が強かったこと、二点目は、そうした認識に、「春日侍 嵯峨山院」探得廻字「心製一首」（『文華秀麗集』）の中にある「埃塵外」



写真 [2-3-1] 名古曾滝と遣水

といった表現に象徴されるような空間認識が重ねられることで、超俗性を備えるに至ったことなどである。

山口と川崎は平安時代に造営された別業の空間的特性を「地形的囲繞」という観点から分析し、以下の指摘をしている。まず、嵯峨院は、東・北・西にかけて完全に山並に囲繞され、かつ大沢池の広がりが見渡す上での視界遮蔽物をなくしており、そうした空間特性が、周囲の山並みを見渡す上で大きな役割を果たしていること、二点目は周囲の山並みの高低変化が小さいため、離宮からの眺望がなだらかであることなどである。

以上が、嵯峨院に関連する先行研究の概略である。嵯峨院は、現在大覚寺境内に大沢池という当時の園池遺構が残っている。そのため、平安時代初期に造営された離宮であるにもかかわらず、文献研究に限定されることなく、多様な

研究成果が存在する貴重な事例である。さらに、後述する発掘調査成果から、園池周辺の意匠が部分的に明らかになっていることも特筆される。一方で、資料の不足から、いまだ明らかになっていない部分も少なくない。そこで本研究では、従前の研究成果を援用しつつ、嵯峨院に関連する漢詩文を中心の題材として詳細に考察することで、嵯峨院庭園の形態的、機能的特徴に関する解釈を試みる。

三 嵯峨院に関する考古学的成果

嵯峨野および大覚寺周辺の考古学的調査として、一九八二〜九〇年度および一九九五〜六年度に発掘調査、一九九七年度に立会調査が行われた。そのなかから、平安時代初期の庭園に関連する発掘調査成果を以下にまとめる。

まず、名古曾滝付近から大沢池に流れ込んでいる遣水遺構が挙げられる。これは大規模な素掘蛇行溝で、大沢池への合流地点付近のみに石材を用いた庭園的な修景が行われている。嵯峨院の時代にさかのぼり大覚寺へ伝えられた意匠であると推定されている。流路には方一・四メートルの石組枘が設置されている部分があり、これは流水を一旦溜めて浄化・調整するための装置である。また、水生植物を植栽するための植床のような施設や、土器、植物遺体が多数出土している。なお、名古曾滝に関しては、石組は中世以降に大規模な改変が行われており、滝石組背後の築山や水分石は室町時代以降の造作であることが明らかになっている。

また、天神島西岸部分の地形に関しては、嵯峨院造営当初、天神島は北から張り出す出島状地形を呈しており、近世以降に大沢池北岸と天神島を分離すべく帯状の園池が開削されたことが推定された。名古曾滝の石組について、『今昔物語集』のなかには、「今ハ昔、百済ノ川成ト云フ繪師有ケリ。世ニ並ナキ者ニテ有ケル。瀧殿ノ石モ此ノ川成ガ立タルナリ。」とあり、百済河成（七八二〜八五三）によるものであるとする説話が収められている^{三三八}。

しかし、名古曾滝も平安時代中期になると、石組だけが残る枯滝になってしまう。その頃の様子を平安時代中期の公卿・歌人藤原公任（九六六〜一〇四

一）が「滝ノ糸ハ絶エテ久シクナリヌレド名コソ流レテナホ聞コエケレ」と詠んでいる『拾遺和歌集』巻第八）。

四 文献に現れる嵯峨院

嵯峨院に関連する記録を六国史から抽出し、表「2-3-1」に示した^{三三九}。なお、本研究では嵯峨朝（八〇九〜八三三）における嵯峨院庭園を対象とするため、嵯峨院の初出から嵯峨天皇存命中（八〇九〜八四二）の記事に限定した。

嵯峨院の文献上の初出は弘仁五年（八一四）閏七月辛丑（二十七日）で、「遊獵北野」。日晩御「嵯峨院」。賜「侍臣衣被。」と記録されている。それによると、嵯峨天皇らは北野に遊獵後、夜に嵯峨院を訪れたことがわかる。以後、嵯峨・淳和朝において、嵯峨院（嵯峨別館、嵯峨荘を含む）の記載がみられるのは九例である。そのなかで、嵯峨院への行幸は大きく二種類に分けられる。それは北野遊獵に伴う場合と嵯峨院行幸のみの場合である。前者の嵯峨院行幸が明記されたのは八例で、例えば、弘仁八年閏四月乙亥（十六日）「幸嵯峨別館」。命「文人賦」詩。賜「五位已上衣被。」や弘仁八年八月甲戌（十七日）「遊獵北野」。便御「嵯峨院」。賜「五位已上及山城国掾已上衣被。」が挙げられる。しかし、嵯峨院が北野遊獵の拠点として利用されたことを考慮した上で、「北野遊獵」の記事と合わせて見ると、一年に数回嵯峨野を訪れ、その際に嵯峨院へ立ち寄った可能性も考えられる。また、北野遊獵は八〜十月に多くあり、秋から初冬にかけて行われている。これは、冬期に鷹狩りを行ったことに起因する。さらに、遊獵をする目的ではなく、嵯峨院へ行幸し詩会を催した事例は時節のよい春や夏にあり、毎年定期的にあつたものではないようである。

以上のことから、弘仁年間の嵯峨院は遊獵の拠点としての機能、あるいは密宴私的な行幸の舞台としての機能を有する多面的な施設であつたといえる。

なお、嵯峨天皇の讓位後、天長年間には嵯峨院の利用は減少したが、承和元年（八三四）には嵯峨上皇の後院となり、朝覲行幸の舞台となつた。

表 [2-3-1] 嵯峨院に関連する行幸記事一覧

元号	弘仁二年 (八一)	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十三年	十四年	十五年	天長五年 (八二八)	七年	八年	九年								
元号	弘仁二年 (八一)	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十三年	十四年	十五年	天長五年 (八二八)	七年	八年	九年								
年月日	二月丙子 (十一日)	八月戊寅 (十六日)	九月辛酉 (六日)	十月癸未 (四日)	閏七月辛丑 (二十七日)	八月戊辰 (二十五日)	十月癸丑 (十日)	八月甲子 (二十六日)	二月癸亥 (二十七日)	八月庚申 (二十七日)	八月辛酉 (二十八日)	閏四月乙亥 (十六日)	八月甲戌 (十七日)	八月己卯 (二十八日)	八月戊辰 (二十三日)	八月丙子 (六日)	九月丙寅 (二十七日)	一月丁巳 (二十五日)	九月甲寅 (二十七日)	九月癸亥 (十二日)	九月戊申 (二十六日)	十月乙巳 (五日)	十月丁卯 (二十七日)	閏十二月壬申 (二日)	十月戊寅 (十四日)	九月乙卯 (二十六日)
記事	遊獵于北野。五位已上賜衣被。	遊獵于北野。五位已上賜衣被。	遊獵于北野。五位已上賜衣被。	遊獵于北野。	遊獵于北野。日晚御嵯峨院。賜侍臣衣被。	遊獵于北野。	遊獵于北野。	遊獵于北野。	幸嵯峨別館。命文人賦詩。雅樂寮奏樂。賜文人已上緋有差。	幸嵯峨別館。命文人賦詩。奏樂。賜侍臣并山城國掾已上。衣被。	幸嵯峨別館。命文人賦詩。賜五位已上。衣被。	幸嵯峨別館。命文人賦詩。賜五位已上。山城國掾已上。衣被。	遊獵于北野。幸嵯峨院。命文人賦詩。賜侍臣衣被。	幸嵯峨院。命文人賦詩。賜侍臣衣被。	幸北野。命文人賦詩。賜五位已上。衣被。	幸北野。賜五位已上。衣被。	遊獵于北野。	遊獵于北野。	幸北野。賜五位已上。衣被。	太上天皇幸嵯峨莊。先是、中納言藤原朝臣三守、奏可行幸狀。皇帝即勅有司、令設御輿及仗衛。太上天皇不受。皇帝再三苦請。太上皇帝固辭、遂騎馬、無前驅并兵仗。	遊獵于北野。風從五位已上及山城國司已上、賜祿有差。	遊獵于北野。參議左近衛中將從四位下室朝臣秋津獻物、御祭野。侍臣及山城國掾已上、賜祿有差。	天皇幸北野。獵。狝・狝水鳥。便幸于嵯峨院。賜五位已上。衣被。	天皇幸北野。便幸大納言清原真人夏野之双岡宅。主人率親族拜舞。侍臣已下山城國掾已上、賜祿有差。	皇帝幸北野。便幸御祭野院。風從親王已下、賜酒肴。雅樂寮奏音聲。夜頭賜侍臣及院司并山城國掾已上。祿。各有差。子夜還宮。	乘輿幸北野。試鷹狗。獵双岳及陶野。幸雲林院。賜侍臣已上。祿有差。
出典	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀

承和	一年 (八三四)	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	
年月日	八月丁亥 (九日)	十月甲申 (七日)	一月己酉 (三日)	一月丁卯 (三日)	一月壬戌 (三日)	閏一月乙酉 (二日)	二月乙丑 (十三日)	二月己酉 (二日)	一月戊戌 (三日)	七月丁未 (十五日)
記事	先太上天皇遷御嵯峨院。	嵯峨院殿新成。今遣使奉獻。以賀之。	天皇謁觀先太上天皇及大皇太后於嵯峨院。	天皇朝觀先太上天皇及大皇太后於嵯峨院。日暮賜扈從者祿。車駕還宮。	天皇朝觀先太上天皇及大皇太后於嵯峨院。賜扈從五位已上祿有差。	天皇朝觀先太上天皇於嵯峨院。是日。以正四位下源朝臣融。從四位下正道王。並爲侍從。賜扈從群臣祿有差。	天皇先幸神泉苑。次遊覽北野。皇太子從駕。山城國獻御贊。便駐蹕於右近衛馬埒。命先驅近衛等。聘試御馬之遲疾。日暮還宮。	天皇朝觀先太上天皇及大皇太后於嵯峨院。賜扈從群臣并院司祿有差。	天皇朝觀太上天皇及大皇太后於嵯峨院。于時雅樂寮奏音樂。公卿醉中不勝感興。各起更舞。是日。詔從五位下秋篠朝臣康子正五位下。无位山田宿禰近子從五位上。並太上天皇更衣也。賜扈從五位已上祿。日暮還宮。	太上天皇崩于嵯峨院。春秋五十七。
出典	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀

五 漢詩からみた嵯峨院庭園

嵯峨朝では、勅撰漢詩文集である『凌雲集』、『文華秀麗集』が編纂され、次ぐ淳和朝では『経国集』が編纂された。これらの三大漢詩文集及び『本朝無題詩』から、「嵯峨院」に関連する漢詩を抽出した(表「2-3-2」)。そのうち、嵯峨院に関連する漢詩は全五首で、『文華秀麗集』から三首、『経国集』、『本朝無題詩』から各一首を検討する。

作品番号「二」は、嵯峨院での納涼を詠んだものである。作品番号「二二」、「三」は同じ行幸で詠まれた漢詩群で、作品番号「三」は御製(作品番号「二二」)に対して詠まれた大伴親王(淳和皇太弟)の作である。作品番号「四」は嵯峨上皇と空海が嵯峨院を遊覧した際の漢詩で、嵯峨上皇の漢詩の

表 [2-3-2] 嵯峨院に関連する漢詩一覧

五	四	三	二	一	題詞	作者	出典
夏日大覚寺即事	七言与海公飲茶送帰山一首	春日侍嵯峨山院。探得廻字。応製。一首。	春日嵯峨山院。探得遅字。一首。	嵯峨院納涼。探得帰字。応製。一首。		巨勢識人	文華秀麗集
藤原明衡	嵯峨太上天皇	淳和皇太弟	嵯峨天皇	嵯峨天皇			文華秀麗集
本朝無題詩	経国集	文華秀麗集	文華秀麗集	文華秀麗集			本朝無題詩

み残っている。その他、作品番号「五」は、嵯峨朝より時代が下がるが、参考までに示すこととする。これら五首の漢詩に描写された嵯峨院庭園の形態や機能に関連する語句を抽出し、漢詩に詠み込まれた庭園景観を整理している。以下に示した作品について、原文、読み下し文、大意を各々示した上で一四〇、説明と解釈を付す。

作品番号「二」

「嵯峨院納涼。探得帰字。応製。一首。」 巨勢識人（巨勢識人）
 君主倦レ熱来レ茲地一 君主熱けきを倦み茲の地に來たまふ、
 茲地清閑人事稀 茲の地清閑にして人事稀らなり。
 池際追レ涼依レ竹影一 池の際に涼しきを追ひては竹影に依り、
 巖間避暑隠レ松帷一 巖の間に暑けきを避けては松帷に隠る。
 千年駁蘇藪密 千年の駁蘇藪を覆ひて密く、
 一片晴雲互レ嶺帰 一片の晴雲嶺を互りて帰る。
 山院幽深無レ所有一 山院幽深にして有る所無く、
 唯餘朝暮泉声飛 唯餘すは朝暮に泉声飛ぶのみ。

〈大意〉

天皇は避暑のために、嵯峨野の地に行幸された。この地は、俗事に煩わされ

ることのない静かな場所である。涼しさを求めて池際の竹影に身を寄せ、暑さを避けて岩間に生える松の緑陰に入る。階段の苔は、まるで千年も生えているかのように密生していて、たった一片の雲は嶺を渡って流れていく。嵯峨山院は山奥にあり、辺りには何もないが、朝に夕に泉の水が流れる音だけが聞こえているのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「二」は巨勢識人によるもので、嵯峨天皇の漢詩を受けて詠んだ応制である。作者の巨勢識人は平安時代前期の漢詩人で、嵯峨文壇のなかで重要な位置を占め、三天漢詩文集のなかに多数の作品が収められている。この漢詩は、題詞に「納涼」、第一句「君主倦熱来此地」とあることから夏初秋の行幸であろう。この時期の行幸としては弘仁五年閏七月辛丑（二十七日）「遊獵北野。日晚御嵯峨院。賜侍臣衣被。」と弘仁八年閏四月乙亥（十六日）「幸嵯峨別館。命文人賦詩。賜五位已上衣被。」があるが、小島は後者のときであろうと推測している一四〇。

まず、第二句「茲地清閑人事稀」は嵯峨院が世間との交渉がない場所であることを示し、第三句「池際追涼依竹影」は池際にタケが植栽されていることを詠んでいる。また、第四句「巖間避暑隠松帷」では岩の間にマツが植栽されていることを示し、第五句「千年駁蘇藪密」は離宮の階段がコケに覆われていることを詠んでいる。さらに、第七句「山院幽深無所有」は嵯峨院が幽深で何もない環境であることを示す。第二句と併せ考えると、嵯峨院は周囲を自然に囲まれ、世間と隔絶された脱俗的空間として認識されていたと考えられる。また、第八句の「唯餘朝暮泉声飛」には、どこから泉の湧く音が聞こえる様子が詠まれている。極力人工的要素を排した場所で、水音だけが響く様子を描写することにより、この場所の静けさがより強調されている。実際の嵯峨院庭園は、ゆるやかな山並みに圍繞された空間で、広大な池面の広がりを中心に名古曾滝や大規模な遣水が配置されている。そうしたことも考え合せると、この「泉声」は園内の水景から発せられる音を指すと推

測できる。例えば、瀑布の水落ちの音であるとも考えることができるかもしれない。

作品番号 二二

「春日嵯峨山院。探得遲字。一首。」御製（嵯峨天皇）

氣序如今春欲老

嵯峨山院暖光遲

峯雲不覺侵

溪水尋常對

莓苔踏破經

楊柳未懸伸

此地幽閑人事少

唯餘風動暮猿悲

氣序如今春老いむとし、

嵯峨山院暖光遲し。

峯雲不覺に梁棟を侵し、

溪水尋常に簾帷に対かふ。

莓苔踏破す年を経し髪、

楊柳未だ懸けず月を伸ぶる眉。

此の地幽閑にして人事少らなり、

唯餘すは風動きて暮猿悲しぶのみ。

〈大意〉

春も終わろうとしているのに、嵯峨院は寒気が抜けない。峯にかかっていた雲が、知らないうちに建物の梁を隠し、渓谷の水は院の帷に向かって流れてくる。苔は伸び広がり始めたが、柳の新葉はまだ伸びきらない。ここ嵯峨野は幽閑で、世間との交渉も少ない。ただ風が吹いて、暮れ方には猿の声が悲しげに響いている。

〈説明・解釈〉

作品番号「二二」は嵯峨天皇の漢詩で、晩春の嵯峨院を詠んだものである。晩春の行幸記事は、弘仁七年二月癸亥（二十七日）「幸嵯峨別館。命文人賦詩。雅楽寮奏樂。賜文人已上綿有差。」の一例のみなので、この行幸での作と考えてよいだろう。

この漢詩は、第一、二句「氣序如今春欲老、嵯峨山院暖光遲」から、晩春に差しかかろうとする季節になってもまだ陽気の届かない嵯峨野の遅い春の訪れを詠んだものである。その具体的な例として、第五、六句「莓苔踏破経年髪、

楊柳未懸伸月眉」には、コケは広がってきたが、ヤナギの新葉はまだ伸びきらない様子が詠まれている。さらに、第七句「此地幽閑人事少」では、世間との交渉の少なさが詠まれる。このように、春たけなわになっても暖かさが戻らず、人里離れた寂しい様子は、作品番号「二二」と同じく、嵯峨野の脱俗的イメージを強調するものである。また、具体的な庭園構成に関する句もある。第三、四句「峯雲不覺侵梁棟、溪水尋常對簾帷」では、嵯峨院の棟にかかる雲の様子と簾帷の方へ流れてくる溪水の様子が対句で詠まれている。この「溪水」とは、大沢池に流れ込む遣水と推測することができる。ちなみに、作品番号「二二」に「唯餘朝暮泉声飛」とあり、これに関して園内の水景から発せられる音であるうと推測したが、嵯峨院に関連する漢詩は、内外の境界が曖昧に描写され、一見周辺環境の描写と考えるものも、庭園景觀の一部を詠んでいる可能性が十分にあると考えられる。

作品番号 三二

「春日侍嵯峨山院。探得廻字。応製。一首。」令製（淳和皇太弟）

嵯峨之院埃塵外

乍到幽情興偏催

鳥轉遙聞縁階壑

花香近得抱窓梅

攢松嶺上風為雨

絶澗流中石作雷

地勢幽深光易暮

變興且待莫東廻

嵯峨之院は埃塵の外、

乍ちに到れば幽情の興偏に催す。

鳥の轉遙かに聞ゆ階を縁る壑、

花の香近くに得たり窓を抱く梅。

攢松の嶺上風は雨と為り、

絶澗の流中石は雷を作る。

地勢幽深にして光暮れ易し、

變興且く待て東に廻すこと莫れ。

〈大意〉

嵯峨院は埃塵の外にあり、ここに来ればすぐに幽情の風情を感じることができ。嵯峨院の階段を取り囲む谷間からは鳥のさえずりが聞こえてくる。花の香りが近くからする。これは窓の外に咲く梅の香りであろうか。松が群生する峯の上では風が雨となり、深く険しい谷の流れの中では石は雷のように音をた

てて転がる。この地は山深いので、日もすぐ落ちてしまふ。天皇の鸞輿よ、東へと引き返すのをもう暫くお待ちなさい。

《説明・解釈》

作品番号「三」は、御製（作品番号「二」）に対する大伴親王（淳和皇太弟）の作である。これも御製と同じく、弘仁七年二月癸亥（二十七日）の行幸の際に詠まれたものであると考えられる。

この漢詩は、作品番号「二」と同じく、嵯峨院の春の様子を詠んだものである。第一、二句「嵯峨之院埃塵外、乍到幽情興偏催」では、世俗と離れ幽情の趣のある場所であることが詠まれ、今までの漢詩と同じく「脱俗的環境」が強調されている。また、第七句「地勢幽深光易暮」にあるように、嵯峨院の日が早く暮れてしまふ様子も、そうしたイメージを補強している。また詩中には、嵯峨院庭園の構成に関連する部分もある。第四句「花香近得抱窓梅」から、建物の窓のすぐ外にウメが植栽されていたことがわかる。また、第五、六句「攢松嶺上風為雨、絶澗流中石作雷」は対句であり、隣接するマツが生えた山で雨雲が湧き起り雨となる様子と、険しい溪流のなかで石がごろごろと音を立てて転がり流れる様子が詠まれている。これ自体は過剰な表現であるが、このマツは作品番号「一」で詠まれたマツと同じもので、ごっこつとした岩が配置された険しい溪流の様子は遣水の描写とも推測できる。

作品番号「四」

「七言与海公飲茶送帰山一首」 太上天皇（嵯峨太上天皇）

道俗相分経「数年」

道俗相分ちて数年を経、

今秋晤語亦良縁

今秋晤語亦良縁。

香茶酌罷日云暮

香茶酌み罷みて日云に暮れぬ、

稽首傷離望雲煙

稽首離を傷み雲煙を望む。

《大意》

僧侶と俗人の道に分かれ年月が過ぎた。この秋に打ち解けて話をするのも何かの縁であろう。香茶を酌みつかれ、日も暮れてしまった。稽首し、別れを惜しみ、遥かに雲煙を望む。

《説明・解釈》

作品番号「四」は嵯峨上皇による漢詩で、秋日、空海と共に嵯峨院を遊覧したときに詠んだものと考えられる。

まず、第三句「香茶酌罷日云暮」は嵯峨天皇と空海の来訪を歓迎し、喫茶をしている様子が詠まれている。また、第四句「稽首傷離望雲煙」は嵯峨院庭園を遊覧し、別れ際に遥か向こうに雲煙を眺めたことが詠まれている。なお、これは現在大覚寺が有する茶室「望雲亭」の名の由来となっている。

作品番号「五」

「夏日大覚寺即事」

藤原明衡

晨出洛城一日漸闌

晨に洛城を出て 日も漸く闌けなんとし

嵯熾古院得盤桓

嵯熾古院に 盤桓することを得たり

披雲先礼氷顔潔

雲を披きては 先づ氷顔の潔きを礼み

当夏独垂雪鬢寒

夏に当たりても 独り雪鬢寒きを垂れたり

葱北教文難悟李

葱北の教文 李を悟りて難く

院主頼公令予説「西天正教述序」。

荊南気味愁斟蘭

荊南の気味 愁ひて蘭を斟みたり

于時有盃酒

梵宮華構亀陰旧

梵宮の華構 亀陰に旧り

左伝云。亀陰者亀山之陰也。

仙洞珍奇馬脳残

仙洞の珍奇 馬脳残り

太上天皇馬脳御枕。于今在此寺一也。

松岸風生秋百尺

松岸 風生て 秋百尺

竹籬曉至露千竿

竹籬 曉至て 露千竿

何因遠覓蓬瀛地
象外勝形此処看
何に因てか遠く覓めん 蓬瀛の地
象外の勝形は 此の処に看ん

〈大意〉

夜明けに城を出て、だんだんと日も昇ってきたところで、嵯峨古院をぶらぶらと歩き回っている。覆い隠しているものを除き、御仏の御顔に拝したが、夏であるのに独り雪のように白毛を垂れる己の身が切ない。御仏の教えもその奥理は悟り難く、強いて酒を傾け味わうわけである。この寺の立派な構えも龜山の北の地に歳月を重ね、この故地には太上皇が御使用になられた珍宝の馬瑙の御枕が残されているとか。松の岸辺に風が吹いて秋涼を感じさせ、竹籬には明け方の露がおりるといふ好ましさ。どうして遠く神仙の境など求める必要があるのか。なんととなれば、俗外の勝地のすばらしさを、この地で十分見て楽しむからである。

〈説明・解釈〉

作品番号「六」は藤原明衡の漢詩で、平安時代中期に完成した『本朝無題詩』に収められている。この漢詩は、嵯峨院が大覚寺になってから後の様子を詠んだものであるが、参考までに示す。作者である藤原明衡は平安時代中期の漢学者で、『本朝文粹』の編纂の他『雲州消息』、『新猿楽記』を著すなど、文化面において大きな業績を残した。

この漢詩は、第一、二句「晨出洛城日漸闌、嵯峨古院得盤桓」にあるように、作者が早朝に都を出発して、嵯峨古院へ行き辺りを散策した時の様子を詠んだものである。庭園構成に関しては、第九句「松岸風生秋百尺」から、岸边にマツがあったことがわかる。また、第十一、十二句「何因遠覓蓬瀛地、象外勝形此処看」において、嵯峨古院は仙人が住む蓬瀛の地のようであり、現実世界を超越した美しい場所であると称賛している。時代が下がり、嵯峨院自体は活気を失い、名古曾滝もすでに枯れていたと考えられるが、大沢池の水面の広がりを見てこうした感興を抱いたものと想像できる。

六 小括

嵯峨天皇存命中に詠まれた作品番号「一」～「三」は、『凌雲集』の後に編まれ、嵯峨文壇の私的性格が濃厚な漢詩集『文華秀麗集』および『経国集』に収録されている。前述のように(第三章・第二節・六)、作品番号「一」、「二」は「応製」と記されてはいるものの、「侍宴」と記載がないことから、これらは嵯峨天皇と臣下らと関係強化するための「密宴」(天皇の私的興趣によって開かれる宴)により詠まれた漢詩であると考えられる。嵯峨院に関連する記事からみると、秋・初冬には北野をはじめとする禁野へ遊獵する時の拠点として利用されており、それ以外の季節には私的な行幸の舞台として機能したと推測できる。なお、仁明朝になると嵯峨上皇が嵯峨院を後院としたため、毎朝朝覲行幸があった。

次に、漢詩の分析・検討からわかった、嵯峨院庭園の具体的な構成・意匠について順にみていきたい。

庭園の構成要素として、まず池が挙げられる。「池際追涼依竹影」(作品番号「一」と詠まれ、これは現在も残る「大沢池」のことである。さらに、ここから、納涼の施設として池が重要であったことも指摘できる。次に、遣水が挙げられる。遣水は、漢詩のなかでは「溪水尋常对簾帷」(作品番号「二」)あるいは「絶澗流中石作雷」(作品番号「三」)と描写されている。前者は「簾帷」とあることから、遣水が建物近くを流れていたことを示している。後者からは、ごつごつとした石を多数配した自然風の遣水であったことがうかがえるが、発掘により検出された遺構とは意匠が異なるので、文飾の可能性も考えられる。また、庭園には現在も石組が残る「名古曾滝」があったが、漢詩からは明確に瀑布を示す句はみられない。しかし、「唯餘朝暮泉声飛」(作品番号「二」)の「泉声」とは水勢よく水しぶきが飛び散る音を示しており、遣水の始点として滝が配されていたことを詠んだのかもしれない。以上が嵯峨院の水景である。一方で、築山の描写はなく、「山並み」については複数詠まれているのも特徴的である。このことから、周辺の山並みを借景として取り込み、庭園景観の一部とみなしていたことがわかる。この庭園は池と遣水を中心とするが、それらがこの場所

にもともと存在したかのような一体感を感じさせるに当たって、この山並みの存在は不可欠であった。これは三方を山並みで囲繞されるなか、広い池により視点場近傍の視界遮蔽物をなくすことで、より効果的に山並みを借景することができる、と指摘した山口・川崎の環境工学的研究からも裏付けられる。

植栽としては、「池際追涼依竹影」（作品番号「二二」）から池岸にタケ、「巖間避暑隱松帷」（作品番号「二二」）と、「松岸風生秋百尺」（作品番号「二五」）から岩間にマツが植栽されていたことがわかる。また、「楊柳未懸伸月眉」（作品番号「二二」）からシダレヤナギ、「花香近得抱窓梅」（作品番号「二二」）から建物に沿ってウメも植栽されていた。これら嵯峨院の植栽については、飛田の指摘どおりである^{一四〇}。なお、幅広い時代の発掘調査成果から、池や遣水遺構部分から大きな樹冠を形成する大木の他に、スモモやブドウ属の植物など、早春〜初夏に花の美しい花木の種子や果実なども出土していることがわかっている^{一四〇}。すなわち、造成当時から華やかな花木などを配植しつつも、周辺の山野と調和した植栽が施されていたと推測できる。

以上のような具体的な庭園構成及び意匠に鑑みて、嵯峨院に関連する漢詩に通底して詠み込まれるイメージについて探っていききたい。漢詩中に繰り返し表わされ、強調されるイメージとして、「静けさ・幽深さ」あるいは「脱俗的雰囲気」がある。嵯峨朝に詠まれた嵯峨院に関連する漢詩には、「茲地清閑人事稀」（作品番号「二二」）、「山院幽深無所有」（同）や、「此地幽閑人事稀」（作品番号「二二」）、「嵯峨之院埃塵外、乍到幽情興偏催」（作品番号「二二」）など、人里離れた場所の清らかさや寂しさが詠まれ、脱俗的環境であることが繰り返し示されている。井実はこうした「埃塵外」（作品番号「二二」）に象徴されるような空間認識こそが、嵯峨院の漢詩に詠まれる超俗的世界観を担保したと指摘する^{一四四}。さらに、後世の漢詩である作品番号「二五」では、嵯峨院は「何因遠覓蓬瀛地」と詠まれており、神仙境的環境にも例えられている。また、そうした環境の背景として、「一片晴雲巨嶺帰」（作品番号「二二」）、「峯雲不覺侵梁棟」（作品番号「二二」）、「唯餘風動暮猿悲」（同）、「地勢幽深光易暮」（作品番号「二二」）など、嵯峨院の山に近い立地、特に西方に山があり平安京よりも日が早く暮れるという立地的特性が挙げられている。また、嵯峨院に関連する漢詩には、作品番号「四」で天皇

が空海と喫茶を楽しんだ描写以外に、遊興的な要素は詠まれておらず、むしろそうした要素がないことが特徴であるといえる。つまり、嵯峨院の庭園は「自然と一体になり、日々の煩わしさを洗い流す環境」として漢詩中に描写され、嵯峨野のもつ幽深で清浄な脱俗的環境を十二分に享受するのに相応しい庭園が実現されていたと考えられる。

こうした嵯峨院特有の環境特性を表現するために、嵯峨院を詠んだ漢詩には「音」の描写が多用されている。例えば、「唯餘朝暮泉声飛」（作品番号「二二」）や「絶澗流中石作雷」（作品番号「二二」）は園内に響く水音、「鳥轉遙聞縁階壑」（作品番号「二二」）では、小鳥のさえずりが詠まれている。このように、嵯峨院の漢詩には「音」が効果的に使われているのがわかる。こうした手法は、中国の詩文にも見ることができる。唐の詩人王維の『鹿柴』^{一四五}「空山不見人、但聞二人語響、返景入深森、復照青苔上」^{一四五}には、夕暮れの静かな山が詠まれている。ひそまりきった山の中で人の話し声らしき音だけが響く様子が詠まれているが、ここでも人の声が効果的に使われ、山の静けさを一層引き立てている。静かな環境に音が響くからこそ、一層静けさが際立つのである。嵯峨院の幽深で静かなイメージは、漢詩の中で、しんとした静けさのなか、そこに響く音に耳を澄ませる姿勢によって示され、より強調されているのである。

以上、漢詩からみた嵯峨院庭園の形態と機能について考察を行ってきた。その結果、嵯峨院庭園は遊獵の拠点、あるいは密宴の舞台として機能していた。敷地内には、池、遣水、瀑布といった水景が造成されており、さらに、周囲を取り囲む山並みを借景として庭園景観に取り入れることで、広がりや奥行きのある空間を創出していた。漢詩のなかでは「幽深さ」、あるいは「脱俗的環境」が一貫して強調され、人工的要素の描写は極力排されている。実際のところ、現在残る「大沢池」は南東に傾斜する地形を利用しながら、南から東に長大な堤を造成することで、北西からの流れを堰きとめた人工の池であり、発掘された遣水などを見ても、嵯峨院は非常に大規模な土木工事が行われている。しかし、漢詩を見る限り、嵯峨院は原自然の静けさや脱俗的な雰囲気強調され、人工的な意匠を感じさせる部分はみられないのである。嵯峨院は、東宮時代からの離宮であり、最晩年の後院となったことに鑑みても、華美を追及するもの

ではなく、自らの癒しを得るための私的な傾向の強い離宮であったと考えられ、嵯峨野の環境を基盤に理想的な自然を再構成した庭園であったということができる。

第四節 河陽離宮の庭

一 河陽離宮とは

河陽離宮は、淀川上流域の山崎に位置し、具体的には現・離宮八幡宮（京都府乙訓郡大山崎町字大山崎小字西谷二十一―）付近一带にあったと考えられている^{一四六}（図「2-4-1」）。そうしたことから、離宮八幡宮の南門脇には「河陽宮故址」の碑が建てられている。

河陽離宮の立地した山崎（別称、河陽）は、平安京の西南方の地名で、京都市の中心部から南南西約十五キロに位置する。東に山城盆地一帯、南には淀川と男山を臨む風光明媚な土地柄として知られ、桓武朝の長岡京遷都以来、水陸交通の要衝としても著名であった。淀川に面した港湾は「山崎津」と呼ばれ、淀津（現・京都市伏見区）の舟運が開けるまで、平安京の外港として賑わいをみせた。淀川には「山崎橋」が架橋され、早くから橋と共に「山崎関」も開設された。山城国の駅は山崎のみで、駅馬二十疋を置くことが定められ、畿内では最大の規模であった。しかし、律令制の実体的な解体とともに公營の駅は廃れ、山崎駅も例外ではなかった。前出した「河陽」は嵯峨朝に用いられた山崎の別称で、漢詩文で用いられる。小島憲之は、「河陽」即ち「黄河」の陽（きた）を、淀川の陽（きた）に当て、河陽離宮のある山崎の地に移行したのである。^{一四七}と指摘する。さらに、中国晋の文人・潘岳の「即是河陽一県花」（北周、庾信「枯樹賦」）の故事に由来し、この河陽という語感のなかには「花」を想起すべき文学境の意を含んでいたと指摘し、漢詩と密接な関わりのある呼称であることを示唆している^{一四八}。

河陽離宮の文献上の初見は、『日本後紀』弘仁四年（八二三）二月己亥（十六日）「遊獵於交野」。以山崎驛爲行宮。」である。それから三年後の弘仁五年には「山崎離宮」、弘仁十年には「河陽宮」という名称があらわれる。そこから、弘仁四年に駅舎を行宮としたことにはじまり、ここにきて離宮としての整備が行われたことがわかる。吉川一郎は、山崎駅が行宮とされた理由について以下の二点を指摘した^{一四九}。一点目は駅馬の配置や人馬の継立、宿舎と食料の

提供などの駅としての設備や機能が優れていたこと、二点目は山崎駅のように大路に沿う駅は、規模の面でも行宮の条件を満たしていたことである。この吉川の指摘は妥当なものであろう。「離宮」とは、皇居以外に設けられた皇室の宮殿を意味し、庭園の有無までは名称からは明らかではない。しかし、平安時代初期なかでも嵯峨朝は、山崎自体が最も繁栄し、かつ河陽離宮の造営も加わり、活発な市井の賑わいに満ちていた時代であったと考えられ、河陽離宮行幸において、嵯峨文壇の漢詩人らによって多くの漢詩が詠まれたのも確かである。そうしたことから、平安京外の離宮を行幸した際の詩宴において、漢詩中に詠



図 [2-4-1] 河陽離宮の立地 (国土交通省 国土地理院 数値地図 2500 に図示)

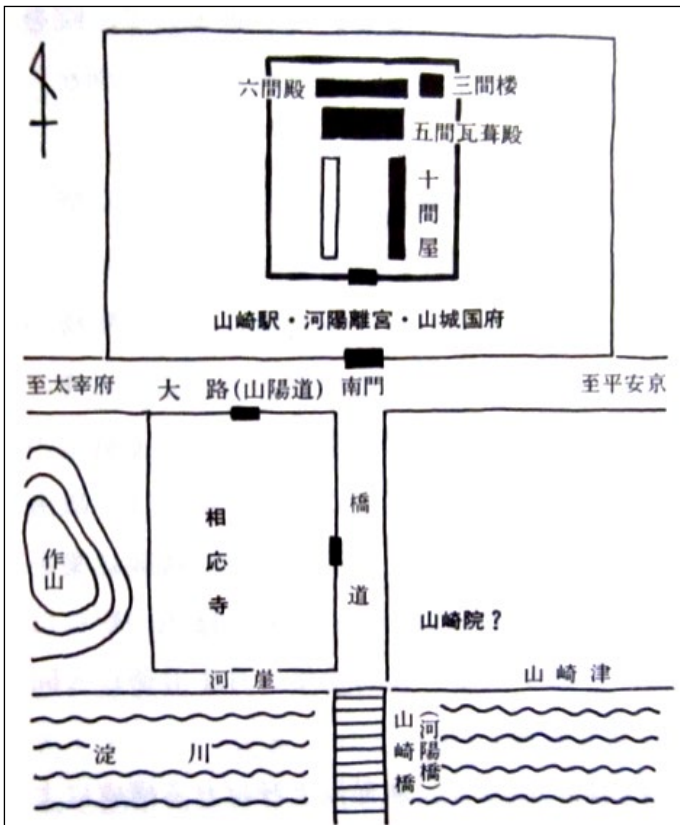


図 [2-4-2] 山崎駅・山崎橋位置関係想定図 (高橋、1996)

み込まれた事柄を整理することで、離宮内の庭園の有無も含め、京外の行幸において天皇らは何に情趣を傾け、何を求めていたのか、その一端を明らかにできると考えたのである。

二 河陽離宮に関する先行研究と課題

河陽離宮に関する先行研究には、管見の限り、以下の研究成果が存在する。高橋美久二による歴史地理学からの研究^{一五〇}、吉川一郎による地誌学からの研究^{一五二}、古閑正浩による考古学からの研究^{一五三}、井実充史による文学からの研究^{一五三}である。

高橋は、古代山陽道の駅家の構造を考察するにあたって、山崎駅を研究している。河陽離宮(離宮院)は五間瓦葺殿・六間殿・十間屋・三間楼の四字から

成り立っており、これらは山崎駅の駅館院にあたる敷地の一面に存在していたことを想定した。こうした想定をもとに、河陽離宮と山崎橋の位置関係を含んだ想定図を示している(図「2-4-2」)。

吉川は、大山崎に関する史料を網羅し、『大山崎市叢考』を著した(図「2-4-3」)。交通の要衝として、その機能を果たした「山崎橋」、「山崎関」、「山崎駅」などの諸施設と、「河陽離宮」の考証を行っている。河陽離宮の位置に関しては梅原末治の報告を取り上げており、梅原によると、離宮は現・離宮八幡宮付近に存在し、離宮は河陽橋の北側で、その南門は橋道に通じ、淀川へ続いており、その橋道の東側に相應寺があつたと指摘している。吉川は梅原の研究を受け、以下の指摘を行った。一点目は離宮の位置については同意しながらも、河陽橋、相應寺は考慮すべき点があること、二点目は、はじめ河陽橋は淀川最狭部に架橋されたが、嘉祥年間(八四八〜八五二)にはより上流に移設されたことなどである。

古閑は、山崎駅・河陽離宮跡をとりあげ、出土瓦の分析を通じて、その造営過程を検討している。この遺跡に使用された瓦は、旧都の再利用瓦や青谷式軒瓦を主にしながら大山崎瓦窯産の瓦が補完的に含まれていることを指摘し、大山崎瓦窯跡から出土した軒瓦は平安宮朝堂院を始め、嵯峨院と河陽離宮に供給されていることから、嵯峨朝の二離宮の造営は都城造営と連動して進められたと推定した(一五四)。

井実は『凌雲集』に収録された河陽離宮に関連する漢詩を「河陽文学の初発」と位置付け、その文学的イメージを探り、以下の指摘を行った。一点目は河陽文学が中国狩猟文学の影響下に出発したが、嵯峨天皇自身が山崎という地を他郷と意識していたことから、元来見られなかった「旅情性」を詩中に詠み込むなど独自の要素を含むようになったこと。二点目はそうした河陽文学がその後狩猟文学の影響を脱し、嵯峨文壇の特徴である洗練された美的表現が取り入れられ河陽の風景を美化する方向へ推移し、河陽の詩境(春の旅先において月下に松声や猿声を聞きつつ旅情を抱く)が定着したことを指摘した。

以上が、河陽離宮に関連する先行研究である。河陽離宮は立地や周辺施設との位置関係に関連する研究成果があり、発掘調査による部分的な成果はあるが、

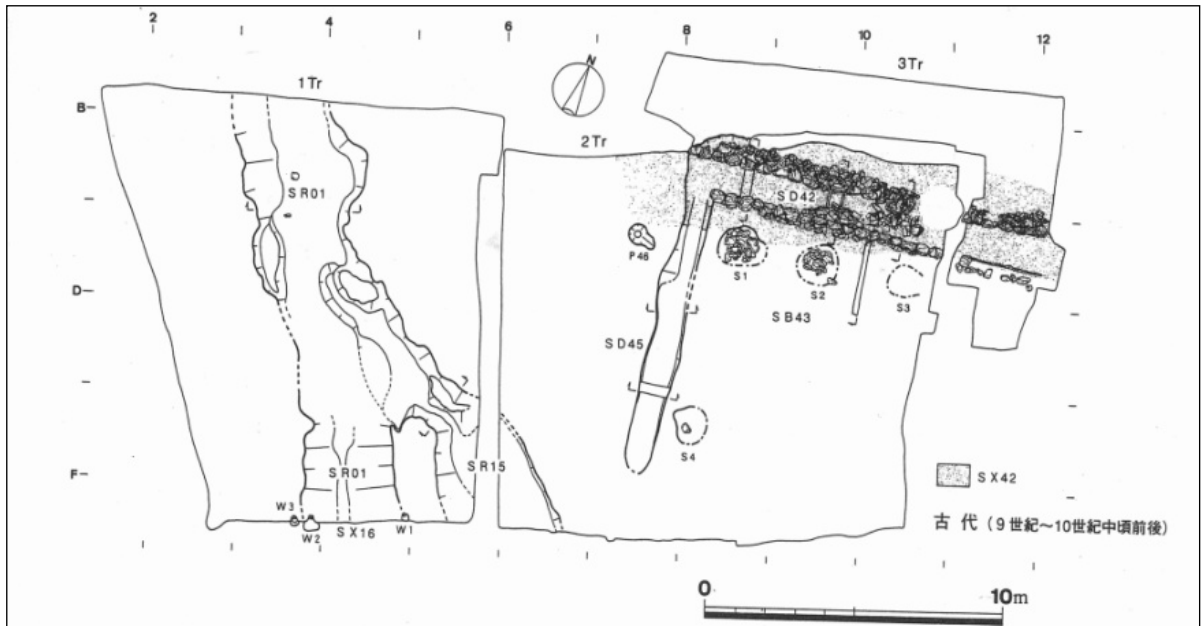


図「2-4-3」寛保元年の京都繪圖抜粋(吉川、1953)

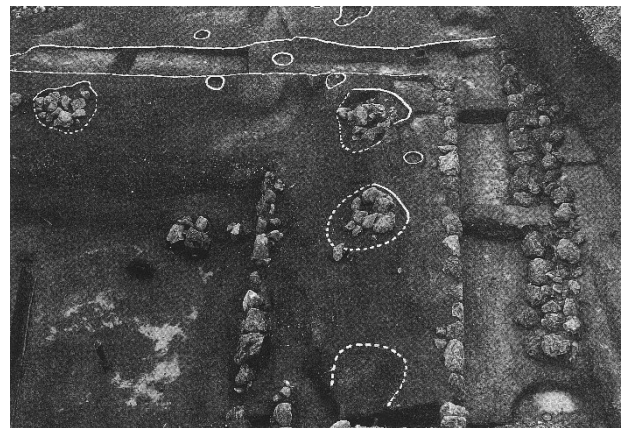
具体的な庭園意匠の様相は不明である。また、関連する文献資料が少ないことも研究がなかなか進まない要因のひとつである。そこで、本研究では河陽離宮に関連する漢詩で、嵯峨朝に詠まれたものを抽出し検討することで、河陽離宮庭園の姿に迫りたいと考えている。

三 河陽離宮に関する考古学的成果

二〇〇〇年に行われた河陽離宮に関連する発掘調査では、九世紀前半から成立し、十世紀中頃の遺構面で礎石建物跡(SB43)、石組み溝(SD42)、流路(SR01)、またそこに架けられた橋跡(SX16)などの遺構が検出さ



図[2-4-4] 大山崎遺跡群 K49 次調査の検出遺構 (古閑正古浩、「京外離宮の造営と都城制—竹原井頓宮と山崎駅・河陽離宮をめぐって」、『都城 古代日本のシンボリズム 飛鳥から平安京へ』、青木書店、2007年、p.300)



写真[2-4-1] 第2トレンチ礎石建物SB43周辺遺構 (東より) (大山崎町埋蔵文化財調査報告書第20集 山城国府跡第49次調査(7YYMS'NT-5地区)発掘調査報告、大山崎町教育委員会、2000より)

れた一五五。このうち、流路と橋は庭園に類する遺構である可能性が指摘されている。礎石建物は、同所で出土しこの建物に利用されたと考えられる青谷式瓦の供給時期との兼ね合いから、河陽離宮の一部である蓋然性が高いと考えられている。さらに、離宮八幡宮の北郭・南郭の西築地の西側において、近世の池跡が検出された。嵯峨朝におけるこの池の有無は定かではないが、十世紀中頃の遺構に鑑みても、河陽離宮が造営された当時には、水景を含んだ、何らかの庭園様空間が創出されていた可能性は十分であろう。

四 文献に現れる河陽離宮

河陽離宮に関連する記事を『類聚国史』、『日本紀略』、『続日本紀』、『続日本後紀』、『文徳美録』から抽出し、以下に示した(表「2-4-1」一五六)。

まず、河陽離宮を指すと考えられる文献上の初見は、弘仁四年(八二二)二月己亥(十六日)で、『日本後紀』のなかに「遊獵於交野。以山崎驛爲行宮

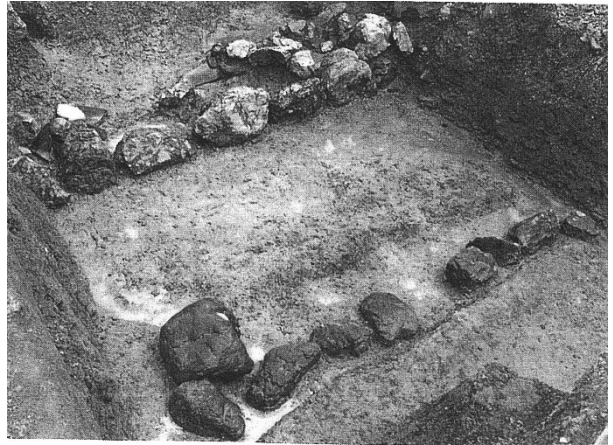


写真 [2-4-2] 第3トレンチ石組み溝SD42 (南西より) (大山崎町埋蔵文化財調査報告書第20集 山城国府跡第49次調査 (7YYMS'NT-5地区) 発掘調査報告、大山崎町教育委員会、2000より)

「一」とあり、山崎駅のなかに仮宮を設けている。その三年後、弘仁五年閏二月乙未(十七日)には、『日本後紀』に「幸于交野^二。日暮御山崎離宮^二。河内国及掌侍五位下安都宿祢吉子奉^レ献。賜四位已上被、五位及百濟王等衣^一。」とあり、このとき「山崎離宮」と明記されることから、この地に離宮が造営されたことを示している。また、弘仁十年には「河陽宮」という名称が現われ、以後その名称で統一的に記録されている。高橋は弘仁四年二月己亥(十六日)に山崎駅を行宮とした記事以前には離宮に関連する記事がなく、それ以後は駅を宿所とした記事がないことから、河陽離宮は山崎駅を整備したものであると結論した^{一五七}。その根拠として、離宮の一面にある「離宮院」という建造物群の楼閣建築に着目し、一般的には重層建築が珍しかった平安時代において、この楼閣建築が離宮院のために造られたというのは考えにくいことから^{一五八}、本来は山崎駅の駅楼であった可能性を示唆し、駅館院と呼ばれていた一面が離宮院へ移行したと推測したものである。すなわち、山崎駅の中心部分が弘仁四年の行宮を契機として離宮へと整備されたとの見解である。

表 [2-4-1] 河陽離宮に関する記録一覧

弘仁元年 (八二一)		二年 (八二二)		三年 (八二三)		四年		五年		六年		七年		八年		九年		十年		十一年		十二年		十三年	
月日																									
閏十二月甲辰(十四日)																								遊獵于水生野。御於山崎驛。山城攝津二国奉獻。賜五位已上衣被。	出典
二月癸卯(十四日)																								遊獵水生野。	日本後紀
二月甲辰(十五日)																								賜侍從以上及国宰掾已上衣被。	日本後紀
二月己亥(十六日)																								遊獵於交野。以山崎驛爲行宮。是日。津頭失火。延燒卅一家。給米綿有差。又駕輿丁并左右衛士等。賜綿有差。	日本後紀
二月辛丑(十八日)																								遊獵水生野。山城国奉獻。五位已上并山城。河内。攝津等国賜衣被。史生郡司賜綿有差。是夕還宮。	日本後紀
十一月癸酉(二十四日)																								遊獵水生野。山城攝津河内等国奉獻。侍臣及三国掾已上賜衣被。目已下綿各有差。	日本後紀
二月甲午(十六日)																								幸交野。	日本後紀
二月乙未(十七日)																								幸于交野。日暮御山崎離宮。河内国及掌侍從五位下安都宿祢吉子奉獻。賜四位已上衣被、五位及百濟王等衣。	日本後紀
二月丙申(十八日)																								遊獵水生野。攝津国奉獻。	日本後紀
二月己亥(二十一日)																								是日。車駕至自交野。	日本後紀
二月乙丑(二十三日)																								行幸交野。	日本後紀
二月甲午(二十八日)																								車駕自交野還。	日本後紀
十一月甲午(二十八日)																								遊獵水生野。五位已上及兩國掾以上賜衣被。	日本後紀
二月壬子(十六日)																								幸于交野。	日本後紀
二月丙辰(二十日)																								四位上。從七位下百濟王勝義從五位下。賜侍從五位已上、山城河内攝津三国掾已上衣被、施捨佐爲・百濟・粟倉僧尼三	日本後紀
二月丁未(十七日)																								幸交野。	日本後紀
二月庚戌(二十日)																								是日。車駕至自交野。	日本後紀
十月己卯(二十三日)																								遊獵水生野。	日本後紀
十一月戊申(二十三日)																								遊獵水生野。	日本後紀
二月庚午(十六日)																								幸于交野。	日本後紀
二月癸酉(十九日)																								車駕還宮。	日本後紀
二月己巳(二十一日)																								遊獵水生野。日暮、御河陽宮。水生村窮乏者、賜米有差。	日本後紀
二月庚午(二十二日)																								五位已上賜衣被。車駕還宮。	日本後紀
十月乙丑(二十日)																								幸交野。	日本後紀
十月己巳(二十四日)																								車駕自交野還。	日本後紀
二月壬辰(十九日)																								幸交野。五位已上及山城攝津兩國司賜衣被。	日本後紀
十月庚寅(二十七日)																								車駕至自交野。陪從親王以下、五位已上、山城攝津兩國郡司、賜祿有差。	日本後紀
二月壬午(二十日)																								遊獵于水生野。	日本後紀

天長		承和	
八年 (八三一)	二月丁亥(十八日)	二年 (八三五)	二月壬寅(二十七日)
獲鶉雉。酉時御河陽宮。山城摂津兩國掾已上、賜祿有差。夜深還宮。借外從六位下勲六等伴苺田臣繼立、外正七位下勲六	皇帝幸水成野。	行幸水生瀨野遊獵。賜扈從者祿。日暮還宮。	行幸水生瀨野遊獵。賜扈從五位已上祿有差。日暮車駕還宮云云。攝津。河内
日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀
九年	正月己未(二十五日)	五年	二月庚子(十二日)
獲鶉雉。酉時御河陽宮。山城摂津兩國掾已上、賜祿有差。夜深還宮。借外從六位下勲六等伴苺田臣繼立、外正七位下勲六	皇帝幸水成野。	車駕遊獵於水成瀨野。山城。攝津。河内等國司獻御費。賜扈從群臣及國司等祿各有差。	行幸水生瀨野遊獵。賜扈從五位已上祿有差。日暮車駕還宮云云。攝津。河内
日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀
六年	十二月乙丑(十七日)	六年	十二月乙丑(十七日)
獲鶉雉。酉時御河陽宮。山城摂津兩國掾已上、賜祿有差。夜深還宮。借外從六位下勲六等伴苺田臣繼立、外正七位下勲六	皇帝幸水成野。	行幸水生瀨野遊獵。賜扈從五位已上祿有差。日暮車駕還宮云云。攝津。河内	行幸水生瀨野遊獵。賜扈從五位已上祿有差。日暮車駕還宮云云。攝津。河内
日本後紀	日本後紀	日本後紀	日本後紀

河陽離宮行幸の記録をみると、水生野や交野の遊獵を伴っており、数日間宿泊する場合がほとんどである。ここで、水生野と交野の場所について示しておきたい。水生野は水無瀨を意味し、平安時代初期には水生野や水成野と記述される。ここでは水生野に統一しておくが、水生野は水無瀨川が淀川に合流する地域の右岸一帯を指し、南東に淀川、対岸に男山と枚方丘陵が広がる景勝地である。さらに、小動物や野鳥が生息する絶好の狩猟場でもあった一五九。交野は現在の大府枚方・交野市付近の台地を指し、両者とも河陽離宮からほど近い場所である。こうした禁野において遊獵を行った後、夕方に還宮していることから、河陽離宮は「遊獵の拠点」として機能していたことがわかる。具体的には、例えば天長八年(八三二)二月丁亥(十八日)には、『日本紀略』のなかに「皇帝幸水成野。申時澍雨、俄頃而晴。多獲鶉雉。酉時御河陽宮。…(後略)」とあり、ウズラやキジといった野鳥を狩ったことを示す記録がある。水生野では、延暦十三年(七九四)の平安京遷都以前から遊獵が行われており、その慣行は嵯峨朝にピークを迎えた。嵯峨朝の水生野遊獵は、ほぼ毎年二月十六日付近の数日と十、十一月にあり、二月には二〜六日程度の行程で行われている(表「2-4-2」)。また、この行程中に交野に訪れる場合もあれば、十、十一月に単独で訪れる場合もあった。交野は、桓武朝において都の南郊で天を祀る儀式・郊天祭祀を行った場所でもある。嵯峨朝の記録では「遊獵」ではなく「行幸」と表記される場合が多いことから、こうした儀式を行った可能性が指摘できる。続く、淳和・仁明朝は嵯峨朝と比べ回数が大きく減るものの、水生野などへの遊獵の記録はみられ、その際に離宮が利用されたと考えられる。

しかし、嘉祥二年(八四九)三月己未(五日)を最後に離宮としての利用は途絶えている。

表 [2-4-2] 弘仁年間における河陽離宮行幸月別年表

月	(弘仁)2年	行幸内容	3年	4年	5年	6年	7年	
1月								
2月			14日 ↓ 15日	水生野 交野	16日 ↓ 17日 ↓ 18日	交野一行宮(山崎駅) 交野一山崎離宮 水生野	16日 ↓ 20日	交野 水生野→交野一内裏
3月								
4月								
5月								
6月								
7月								
8月								
9月								
10月					24日	水生野		
11月				24日	水生野			
12月								
閏12月	14日	水生野一山崎駅						
1月								
2月	17日 ↓ 20日	交野 交野一内裏	16日 ↓ 19日	交野 内裏	21日 ↓ 22日	水生野→河陽離宮 内裏	19日	交野
3月								
4月								
5月								
6月								
7月								
8月								
9月								
10月	23日	水生野			21日 ↓ 22日	交野 交野一内裏	27日	交野一内裏
11月	23日	水生野					8日	河陽宮→交野
12月								
閏12月								

表 [2-4-3] 河陽離宮に関連する漢詩一覧

番号	題詞	作者	出典
一	河陽駅経宿、有懐京邑	嵯峨天皇	凌雲集
二	和左大将軍藤冬嗣河陽作	嵯峨天皇	凌雲集
三	江亭眺興	嵯峨天皇	凌雲集
四	奉和江亭眺興、呈左神策衛藤藤得軍	淳和皇太子	凌雲集
五	奉和江亭眺興詩、応製	小野岑守	凌雲集
六	春日遊氣、日暮宿江頭亭子	嵯峨天皇	凌雲集
七	奉和春日遊氣、日暮宿江頭亭子、応製淳和皇太子	小野岑守	凌雲集
八	奉和春日遊氣、日暮宿江頭亭子、御製	嵯峨天皇	凌雲集
九	江頭、春曉、一首	嵯峨天皇	凌雲集
十	奉和春日江亭閑望、一首	仲雄王	文華秀麗集
十一	奉和春日江亭閑望一首	巨勢藏人	文華秀麗集
十二	河陽花	嵯峨天皇	文華秀麗集
十三	河陽花	藤原冬嗣	文華秀麗集
十四	江上船	嵯峨天皇	文華秀麗集
十五	江上船	仲雄王	文華秀麗集
十六	江上船	朝野鹿取	文華秀麗集
十七	江上草	嵯峨天皇	文華秀麗集
十八	山寺鐘	嵯峨天皇	文華秀麗集
十九	山寺鐘	仲雄王	文華秀麗集
二十	山寺鐘	滋野貞主	文華秀麗集
二十一	故閑柳	藤原冬嗣	文華秀麗集
二十二	五夜月	良岑安世	文華秀麗集
二十三	水上鷗	仲雄王	文華秀麗集
二十四	水上鷗	朝野鹿取	文華秀麗集
二十五	河陽橋	仲雄王	文華秀麗集
二十六	故閑鷗、一首	嵯峨天皇	文華秀麗集
二十七	奉和故閑鷗、一首	桑原腹赤	文華秀麗集
二十八	奉和過古閑、一首	宮部村維	文華秀麗集
二十九	雜言、奉和聖製河上落花詞一首	坂田永河	群書類従
三十	奉和聖製河上落花詞	菅原清公	群書類従
三十一	奉和聖製河上落花詞一首	紀御依	群書類従
三十二	雜言、奉和聖製河上落花詞一首	滋野貞主	群書類従
三十三	雜言、奉和聖製河上落花詞	有智子	群書類従
三十四	春江賦	嵯峨太上天皇	経国集
三十五	七言山夜一首	嵯峨太上天皇	経国集
三十六	七言山居驛筆一首	嵯峨太上天皇	経国集
三十七	遊河陽賦漁夫	藤原通憲	本朝無題詩

五 漢詩からみた河陽離宮

平安時代初期に編纂された勅撰漢詩集『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』と、平安時代後期に成立した『本朝無題詩』から作品を抽出・整理する。なお、『本朝無題詩』は、対象とする期間より時代が下がるため、参考までに示すこととする(表「2-4-3」)。

河陽離宮や河陽を詠んだ漢詩は全部で三十六首あり、『凌雲集』から八首、『文華秀麗集』から二十首、『経国集』から二首、『本朝無題詩』から一首、『群書類従』(二三四巻・文筆部十三)から五首が抽出できた。特に、この離宮の特徴として『文華秀麗集』に多数の作品が収録されていることが挙げられる。本章では、以上の漢詩に描写された河陽離宮の庭園形態や周辺の景観を描写した箇所を抽出し、漢詩に詠み込まれた庭園や周辺の景観の様子について検討していきたい。以下に示す漢詩について、原文、読み下し文、大意^{一六〇}を各々示した上で、説明と解釈を付す。

作品番号「二」

「河陽駅経宿、有懐京邑」 御製(嵯峨天皇)

河陽亭子経「数宿」 河陽の亭子にして数宿を経

月夜松風悩「旅人」 月夜松風旅人を悩ます。

雖聴「山猿助」客叫「山猿の客を助けて叫ぶことを聴くと雖ども、

誰能不「憶」帝京春「誰か能く帝京の春を憶はざらめや。」

〈大意〉

河陽の離宮で数夜を過ごしたが、月夜に吹く松風は私の心を悩まし旅愁をかきたてる。山の猿が旅情を促すかのように啼き叫ぶのを耳にしても、やはり都の春が懐かしく思われてならない。

〈説明・解釈〉

作品番号「二」は、嵯峨天皇が自身を旅人になぞらえ、山崎の旅情をしみじみと詠んだ一首である。

第一句の「河陽亭子」とは河陽離宮を指す。離宮を「亭子」と表現することで旅の風情を強調している。第二句「月夜松風惱旅人」では、明るい月夜のもと、松風が寂しげな音をたてて、旅人の侘しさをかき立てている様子が詠まれている。なお、第三句「雖聽山猿助客叫」は、山からサルノの鳴き声が響く様子であるが、修辞表現で実景を詠んだものではないにしろ、離宮周辺が自然豊かな場所であった可能性が高い。このように旅先の侘しさと対比することで、都の春をいっそう懐かしく表現している。

作品番号 二二

「和左大将軍藤冬嗣河陽作」 御製

節序風光全就暖 節序風光全て暖に就き、

河陽雨氣更生レ寒 河陽の雨氣更に寒を生む。

千峯積翠籠レ山暗 千峯の積翠山を籠めて暗し、

万里長江入レ海寬 万里の長江海に入りて寬けし。

曉猿悲吟誰斷得 曉猿の悲吟誰か断つこと得む、

朝花巧笑豈堪レ看 朝花の巧笑豈に看るに堪へむや。

非下唯物色催中春興上 唯に物色の春興を催すのみにあらず、

別有下泉声落中雲端上 別に泉声の雲端より落つること有り。

〈大意〉

春の季節になり、その風光はすっかり暖かくなったが、河陽には雨氣が立ち込めて、なお寒さを生じている。峰々の連なった緑は山を立ち込めて暗く見え、万里の果てまで続く川の流れば漫々と豊かに海に流れ込む。まだ、夜の暗い曉に鳴く猿の物悲しい声を誰が止めさせることができようか。朝咲く花の可愛らしいほほ笑みが絶えられないほど可憐だ。ただ物のあやだけが春の興趣を促すのではなくて、雲の間から流れ落ちる滝の音も聞こえて、春の趣が増々湧いてくるのだ。

〈説明・解釈〉

この作品の原詩は、藤原冬嗣が嵯峨天皇に供奉し、河陽離宮行幸をしたときの作であり、本詩はそれに和した嵯峨天皇の作である。

第一句「節序風光全就暖」から季節は春であろう。都は春もたけなわだが、河陽には雨氣が立ち込めていまだ寒い様子が詠まれ、旅先の侘しげな風情が強調されている。このように、詩中では山崎を都と隔絶された旅先の地として描写しているが、これについて井実は「山崎を旅先の地と意識させたものは、実際の距離ではなく当時の空間認識であったと思われる。その地を京外、すなわち他境と認識していた」と指摘しており^{一六二}、これはもつともな指摘であろう。第三、四句「千峯積翠籠山暗、万里長江入海寬」では、河陽離宮を取り巻く代表的な景觀である男山と淀川の景觀が詠まれている。男山は暗く見えるほどに緑が茂り、淀川は広々と雄大に流れている。第五句「曉猿悲吟誰斷得」は明け方頃に響くサルノの悲しげな鳴き声を詠むが、作品番号「二」と同じく、修辭的な用法であろう。第五句と対句になっている第六句「朝花巧笑豈堪看」には朝に咲いた花の美しさが詠まれている。さらに、第八句「別有泉声落雲端」は、山中を落ちる小規模の瀑布が詠まれている。

作品番号 二二

「江亭曉興」 御製

今宵旅宿江村駅 今宵旅宿す江村の駅、

漁浦漁歌響二夜亭一 漁浦漁歌夜亭に響く。

水氣眠中来湿レ枕 水氣は眠れる中に来りて枕を湿らす、

松声覺後暗催レ聽 松声は覺めて後に暗に聽を催す。

天辺曉月看如レ鏡 天辺の曉月看るに鏡の如し、

戸外朝山望似レ屏 戸外の朝山望むに屏の似し。

記得煙霞春興足 記し得たり煙霞春興の足らふことを、

況乎河畔草青青 況むや河畔の草青青なるをは。

〈大意〉

今宵、川辺の村の駅に宿をとったところ、漁をする入江の辺りから、漁師の

歌声が夜の亭に響いてくる。水を含んだ湿気が眠りの中に入ってきて枕をぬらす。目を覚ますと松風の音が聞こえてきて、知らず知らず耳を傾ける。大空の果てにかかる明け方の月はまるで鏡のようで、亭外の朝の山々を眺めやると、屏風のように聳え立つ。この暁の景によって、もやや霞などのかかる春暁の興趣が十分であることをよく悟ることができた。まして、川辺の春草が青々と茂っているのを見れば、なおさらそうだ。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、嵯峨天皇が「河辺の亭の暁」について詠んだものである。「江村駅」という表現は、山崎駅つまり河陽離宮を指す表現である。第二句「漁浦漁歌響夜亭」とあるように、離宮にはまだ暗い内から活動を始める漁師らの「漁歌」が響いてくる様子が描かれ、ここから、離宮と淀川の距離的な近さと共に、河陽離宮行幸において、天皇らが民衆の生活空間を非常に身近に感じていたことが推察できる。また、第四句「松声竟後暗催聴」からマツには川風が吹き付け、第五句「天辺曉月看如鏡」から月が明々と鏡のように輝く様子が詠まれるが、こうした様子は作品番号「二」の第二句「月夜松風惱旅人」の情景に類似している。また、第六句「戸外朝山望似屏」から離宮の外には屏風のように山々が連なっている様子が示され、第八句「況乎河畔草青青」からは、淀川の河原に青々と草が茂る春の景観が描写される。

作品番号「四」

「奉和江亭晚興、呈左神策衛藤將軍」 合製（淳和皇太子）

我后巡_レ方春日晚

我后方を巡りて春日晩る、

廻_レ鑾駐_レ蹕次_二江亭_一

廻鑾蹕を駐めて江亭に次らず。

水流長製天然帶

水流長く製す天然の帶、

山勢多奇造化形

山勢多く奇し造化の形。

岸上松声眠裏雨

岸上の松声眠裏の雨、

舟中火色望前星

舟中の火色望前の星。

烟霞欲_レ曙鷓鴣潮落

烟霞曙けむとし鷓鴣潮落つ、

帰雁群鳴起_二迥汀_一 帰雁群鳴きて迥汀を起つ。

〈大意〉

我が君主、嵯峨天皇は四方を巡狩あそばされ、日脚の長い春の日も暮れてしまった。鸞輿を廻らせ留めて、淀川べりの離宮に宿泊される。川の流れば帯のように長く流れていく。山の形勢はまるで人智の及ばぬような造形で、その多くは奇妙な姿をしている。山崖のほとりで松に吹く風の音は、まるで雨が降っているように聞こえる。川に浮かぶ船中の燈火の色は目の前にきらめく星のように見える。もやや霞などに包まれた夜は明けようとして、淀川の潮は引いていく。北の空に帰りゆく春の雁はむらがり鳴いて、遙かな水際を飛び立つ。

〈説明・解釈〉

この詩は作品番号「三」の奉和である。そのため、詩が詠まれた時期や状況に関しても、作品番号「三」に準ずる。

嵯峨朝の二月の河陽離宮行幸は数日間宿泊し、その間に水生野において遊獵をしたり、交野に行幸するなどして日暮に還宮するパターンが多いことは前に述べた。この漢詩でも、第一、二句「我后巡方春日晚、廻鑾駐蹕次江亭」にあるように、天皇は「巡方」し、夜に離宮へと帰ってきている。この「巡方」という表現は遊獵したことのほかに、「国見」の意を含むのではあるまいか。榎村寛之は王権狩獵（野行幸）について以下の指摘をしている^{一六二}。『源氏物語』（玉鬘）の大原野行幸を描いた部分「その師走に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、六条院よりも、御方々引き出でつつ見たまふ。卯の時に出でたまうて、朱雀より五条の大路を、西ざまに折れたまふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。」を挙げ、京内を巡行するときは天皇を民衆が見、同時に天皇側も民衆を見る相互的な行為が生まれ、野に到着し野の入口に留まって陣を敷き狩獵を見るときは野を見、そして岡上から四方を見るときは国を見る行為である。王権狩獵はこのように人民、野（自然）、国全体の代表を象徴的に見るための儀式的側面を伴っていたことを指摘している。こうしたことから、第一句は遊獵に際するそうした儀式的意味合いが込められている可能性も指摘で

きよう。また第三、四句「水流長製天然帶、山勢多奇造化形」は対句表現で、河陽の最も特徴的な景勝地である男山と淀川を詠んでおり、これは河陽離宮に関連する多くの作品に通じる要素である。さらに、マツに吹きつける「松声」が雨の音に聞こえる様子は、「江亭」に泊まる旅人の侘しさをより強調しており、こうしたマツの描写は作品番号「二」「三」にも同じくみられた。また、第六句「舟中火色望前星」から、夜に往來する舟の灯が星のようにまたたく様子が詠まれ、旅情性が強調されている。

作品番号「五」

「奉和江亭曉興詩、応製」 内蔵頭従五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守
伝舎前長枕_二江側_一 伝舎前長くして江側に枕き、

滔滔流水日夜深 滔滔なる流水日夜深し。

本期旅客千里到 本より期す旅客の千里より到らむと、

不_レ慮_レ變輿_二九天臨_一 慮らず變輿の九天より臨みたまふとは。

棹唱全聞_二辺俗語_一 棹唱全く聞く辺俗の語、

漂歌半雜_二上都音_一 漂歌半ば雑ふ上都の音。

曉猿莫_レ作_二断腸叫_一 曉猿作すことなけれ断腸の叫を、

四海為_レ家_二帝者心_一 四海を家と為すは帝者の心ぞ。

〈大意〉

駅の宿は、前面が長々と続いて川辺に添い、滔々と流れる淀川の水は夜も昼も深く豊かに流れる。もともと、旅人が千里の遠くからやってくるものと待ち、期待していたところ、思いがけなく輿輿が天の彼方よりここに臨御された。聞こえてくる川辺の庶民の歌。船漕ぎ歌には田舎びた詞が聞かれる、綿洗ひ歌には半ば都ぶりの音調が混じる。曉に鳴く猿よ、はらわたを断ち切るような悲しい叫び声をあげないでくれ。四方を我が家とみなして公平に治め、民の憂が去ることを願うのが帝王の御心で、その叡慮を悩まし奉ることのないように。

〈説明・解釈〉

この作品は、作品番号「四」と同じく作品番号「三」に対する小野岑守の奉和である。

第一句「伝舎前長枕江側」から、宿舎は淀川と対面し、添うように建てられていたことがわかる。なお、離宮について、作品番号「三」、「四」では「江亭」、ここでは「江村駅」と表現されていることにも注目したい。弘仁四年（八三三）に行宮し、当詩が詠まれた頃には離宮として整備されていたにもかかわらず、こうした表現について、河陽離宮に関連する漢詩に類似の表現が複数みられ、これによって旅情を引き立てているのである。また第二句「滔滔流水日夜深」では離宮の目の前を昼も夜も豊かに流れる淀川の様子を詠んでいる。こうした淀川と共に生きる市井の人々を描いた第五、六句「棹唱全聞辺俗語、漂歌半雜上都音」では、船乗りらが歌う田舎風の「棹唱」と洗濯をする女性らが歌う都ぶりの「漂歌」が対比的に詠まれる。こうした描写は、様々な人々が行き交う、まさに交通の要衝といった風情を際立たせている。

作品番号「六」

「春日遊獵、日暮宿江頭亭子」 御製

三春出獵_二重城外_一 三春出獵す重城の外。

四望江山_二勢_レ轉雄_一 四望の江山勢_レ轉雄し

逐_レ兔馬蹄_二承_二落日_一 兔を逐ふ馬蹄落日を承く

追_レ禽鷹_二翻_二松_二輕風_一 禽を追ふ鷹翻松を輕風を払う

征船暮入_二連_二天水_一 征船暮れて入る天に連なる水

明月孤懸_二欲_レ曉空_一 明月孤り懸る曉なむとする空

不_レ學_二下_二夏王_二荒_二中_二此事_一 夏王が此の事に荒びしことを学ばず

為_二思_二周_二卜_二遇_二非_二熊_一 為めに思ふ周卜が非熊に遭ひしことを

〈大意〉

春の遊獵のために九重の宮城の外の郊外に出かけた。四方の山川は見渡すにつけてますます雄大に見える。兔を追いかける馬の蹄は夕日を浴びて光り、鳥類を追う鷹の翼は軽やかに吹く風を振り払って飛ぶ。淀川を下っていく船は日

が暮れて天に連なる水面の中に入って消えていく。ふと見ると、明るい月がただ一つ明けようとする空にかかっている。この遊獵は、夏の国王が遊獵に耽ったような事を学んで行ったわけではなく、周の文王が出獵に際して占いをし、在野の太公望を得た故事を思うからなのだ。

〈説明・解釈〉

この詩は嵯峨天皇によるもので、「三春」という表現からも晩春の遊獵を詠んだものだが、弘仁年間においてこの時期の行幸は弘仁十二年以外毎年あり、詳しい年代に関しては特定が困難である。

まず、第一句「三春出獵重城外」から天皇らは宮を出て、雄大な禁野を訪れている。第二句「四望江山勢転雄」の「四望」という表現は四方を見る行為なので、国見を示唆するものであろう。第三、四句「逐兔馬蹄承落日、追禽鷹翻払軽風」は具体的な狩獵の様子を詠んだもので、ウサギや小型の鳥類を獲物にして鷹狩りを行っている。榎村は「奈良時代以前の王権狩獵が山や野で鹿や鳥を弓矢で追うのに対し、平安時代には王権狩獵と言えは野で行われる鷹狩りになってしまっているのである」と指摘する^{一六三}。ちなみに、「不学夏王荒此事、為思周ト遇非熊」は、嵯峨天皇が夏の暴君であった桀王を真似て狩りに耽っている訳ではなく、周王が出獵の際の占いによつて在野の太公望を得た故事を受けて遊獵を行っていることを意味し、遊獵の意義について述べたものである。井実は「河陽文学の初発」のなかで「中国における狩獵を描いた文学は、勇ましい狩獵を描いた後に奢侈を戒める諷諭的内容を付加する作品が多い」とし、この影響を作品番号「六」の尾聯に認めている^{一六四}。漢詩の面から見ても、遊獵は単なる遊興ではなく、儀礼のひとつとして執り行われことが示唆されている。また、遊獵後の様子として、第五句「征船暮人連天水」では夕暮れ時に淀川を往來する船の漁火の美しさに対する感動を表わし、第六句「明月孤懸欲晓空」は空に輝く月の様子を詠み、旅情性を強調している点も河陽の漢詩の特徴を踏襲している。

作品番号「七」

「奉和春日遊獵、日暮宿江頭亭子、応製」 令製
二月平阜春草浅、 二月平阜春草浅し、
千乘犯晓出城中、 千乘晓を犯して城中を出でたまふ。
鶉驚遥似星光落、 鶉驚くは遥かに星光の落つるに似、
兔尽還疑二月影空、 兔尽くるは還月影の空しきかと疑ふ。
合暗征船唯見火、 合暗の征船唯火を見るのみ、
連霄浦樹豈分紅、 連霄の浦樹豈に紅を分かつたむや。
今朝聖想期何得、 今朝聖想何を得むと期す、
不レ異周王獵渭風、 周王が渭に獵りせし風に異ならず。

〈大意〉

春二月平らかに続く湿地には春草が浅く芽吹いている。天子は、まだ暗い明け方から、都を出発された。鶉が物音に驚いて草むらから飛び立つ様子は、遙か彼方に星の光がきらめいて落ちるようだ。兔を獲り尽くすにつけて、兔の住む月のなかの光もむなしく消え尽きたのではないかと思われるほどだ。夕暮れの中を行く船は、ただ赤い漁火が見えるばかり、空に連なる浦の樹木は火と共に紅色を分け合っている。今朝の遊獵で天子はその御心のなかに何をしようと思われたのであろうか、それは周の文王が渭水のほとりの獵で太公望を得て帰った事に同じである。

〈説明・解釈〉

この詩は、作品番号「六」の御製に対する大伴親王（淳和皇太弟）の奉和詩で、これが詠まれた時期や状況は作品番号「六」に準ずる。

明け方に宮城を出発し遊獵地へ赴き、第三、四句「鶉驚遥似星光落、兔尽還疑月影空」にはウズラやウサギなどを狩る様子が臨場感を持って描かれる。その後、遊獵を終え離宮へ向かう際の淀川について、第五、六句「合暗征船唯見火、連霄浦樹豈分紅」とあり、淀川を航行する船の赤い漁火と、それが映り込んだ水面が美しく輝く様子が描写されている。作品番号「六」にも見られたこうした描写は、河陽の旅情性の強調であると考えられる。井実は河陽における

漢詩を中国狩獵文学と比較し、享樂的内容と奢侈への戒めを説く一連の文脈が酷似することを指摘した一方で、旅情性が内包されている点で独自性があることを指摘しており^{一六五}、これはもつともな指摘であろうと思われる。

作品番号「八」

「奉和春日遊獵日暮宿江頭亭子 御製」 内蔵頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守

君王獵罷日云暮

君王の獵罷みて日云に暮る、

江上郵亭駐綵輿

江上の郵亭に綵輿を駐む。

鑽石山流汲御井

鑽石の山流を御井と汲む、

郡客館作重圍

郡客館に重圍を作る。

鷄潮曉落波瀾急

鷄潮曉に落ちて波瀾急し、

蜃氣朝涵瀉函微

蜃氣朝に涵ひて瀉函微けし。

空乏草沢今在否

草沢に空乏するもの今し在りや否や、

応知天子同載帰

応に知るべし天子同載して帰らすこと。

〈大意〉

嵯峨天皇の遊獵は終わり、日はここに暮れる。淀川べりの宿駅に美しく飾った鸞輿を留め給う。岩石を切り穿つて流れ落ちる山の水を天子飲用の御井として汲み入れ、この地方の郡県にある旅の館に幾重にも重なった門を設ける。潮がほの暗い明け方に落ちて波浪は急激に起こり、朝の天気は辺りを潤して塩分を含んだ土がひそかに見える。在野にあつて、任用されず窮乏している者は現在いるのかどうか、それはともかくとして、天子は有能な在野の士を任用して同じ車に載せてお帰りになるものだとこのことを知るべきである。

〈説明・解釈〉

これは、作品番号「六」の御製に対する小野岑守の奉和である。

まず第一、二句「君王獵罷日云暮、江上郵亭駐綵輿」から、遊獵を終え還宮したときの様子が主に詠まれていることがわかる。まず、天皇を乗せた豪華な

鸞輿が「江上の郵亭」の前に到着する。郵亭とは駅の宿場のことであり、河陽離宮を指す。第二句「鑽石山流汲御井」からは、山の岩石を切り穿つて滴り落ちる水を御井戸として汲み入れていたことがわかる。また、第四句「郡客館作重圍」には、離宮の門は宮殿のように幾重も重なる重厚な造りであったことが詠まれているが、山崎駅の一部を離宮として整備したことに鑑みても、信憑性に乏しく、修辭的な表現であろう。

作品番号「九」

「江頭春曉 一首」 御製

江頭亭子人事睽

江頭の亭子人事睽き、

欵枕唯聞古戍鷄

枕を欵てて唯聞くは古戍の鷄のみ。

雲氣湿衣知近岫

雲氣衣を湿らしては岫に近きことを知り、

泉声驚寢覺隣溪

泉声寢を驚かしては溪に隣きことを覚ゆ。

天辺孤月乘流疾

天辺の孤月流に乗りて疾く、

山裏飢猿到曉啼

山裏の飢猿曉に到りて啼く。

物候雖言陽和未

物候陽和未だしと言ふと雖も、

汀洲春草欲萋萋

汀洲の春草萋萋ならむとす。

〈大意〉

河のほとりの宿は俗世間との交渉もなく、枕をそばだてて、ただ聞こえるのは、古びた砦の跡で春曉を告げる鷄の声ばかり。雲氣が衣を湿らせるので、山の洞穴に近いことを知る。大空の果てにかかる一つの月は河の流れに乗り映って、西方に早く傾いていく。また、山中の飢えた猿は夜明けまで鳴いている。氣候風物がまだ陽気でのどかではないといつても、水際の洲の春草は茂ろうとしている。

〈説明・解釈〉

この詩は嵯峨天皇の作で、題詞から「河陽の春曉」を詠んでいることがわかる。まず、第一句「江頭亭子人事睽」の「江頭亭子」は淀川に沿って建つ宿を

さし、河陽離宮を意味する。また「人事睽」から、ここが俗世間とは一線を画す場所であることを示す。第三句「雲氣濕衣知近岫」の淀川べりで湿度が高く靄が立ち込める様子は、作品番号「三」の「水気眠中来湿枕」(第三句)とも似た表現で河陽(山崎)の旅情性を表す表現のひとつであろう。また、第五句「天辺曉月看如鏡」から淀川の上に輝く月が西に沈む様子が描かれ、第六句「山裏飢猿到曉啼」は山のなかで飢えたサルが鳴く様子を示し、第八句「汀洲春草欲萋萋」からは、淀川の洲に春の草が芽吹いてきた様子がわかる。第六句のサルの描写なども含め、こうしたいわば河陽の旅情を表す典型的な表現を盛り込むことで、河陽(山崎)の旅愁を想起させている。

作品番号「七」

「奉和春日江亭閑望。一首。」 仲雄王

凝旒派上思 凝旒派上を思ひ、

降蹕対「紅花」 降蹕紅花に対かふ。

野甸宸衷遠 野甸宸衷に遠く、

川臯睿望賒 川臯睿望に賒けし。

猿深雲樹峽 猿は深る雲樹の峽、

鶴立浪痕沙 鶴は立つ浪跡の沙。

古椽松蘿院 古椽松蘿の院、

春窓楊柳家 春窓楊柳の家。

水郷漁浦近 水郷漁浦近く、

山館鳳庭遐 山館鳳庭遐し。

老圃鋤「遅日」 老圃遅日に鋤き、

商帆艤「早霞」 商帆早霞に艤ふ。

岸陰生「液乳」 岸陰く液乳生り、

洲暖長「蘆芽」 洲暖かく蘆芽長ふ。

綯服侍臣馬 綯服侍臣の馬

垂鬢公主車 垂鬢公主車

馭門臨「迴陌」 馭門迴陌に臨み

亭子隱「高葩」 亭子高葩に隠る

幸頼陪「天覽」 幸頼に天覽に陪り

還同「星渚查」 還星渚の查に同じ

〈大意〉

天子は冠の垂れを整え、河の支流のほとりに行こうと思ひ、鸞輿を降りて紅の花を賞美される。田野は天子の御心に遠く見渡され、淀川は天子の前に遙かに開けている。猿は雲中に樹木の立つ谷間深くに隠れ、鶴は波の寄せた跡のつく砂上に立つ。古い垂木が下がり、松に絡んだサルオガセのある中庭が見え、春の窓を開いた柳の生えた家が見える。魚を捕る浦は間近で、山崎離宮は遙か遠くにある。老練な農夫は永い春の日に田畑を鋤き、商船は朝霞のなかに出帆の準備をする。川岸は暗く、鍾乳石が生じ、あしかびが長く伸びる。あやのあきらびやかな服を着用した臣下の馬、鬢を垂らした幼い公主の車が見える。馭の入り口は遙か遠く続く街路に臨み、宿場は高い木々に咲く花の陰に隠れている。幸いにも天子の御覽に侍し、その嬉しさは天にも昇る心地である。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、嵯峨天皇の「春日江亭閑望」に奉和した作で、原詩は残っていない。題詞から春の漢詩であるが、詳細な年代については不明である。この漢詩の作者・仲雄王は、平安時代前期、特に嵯峨朝に活躍した官吏、漢詩人で、弘仁九年(八一八)に成立した勅撰漢詩集『文華秀麗集』の主撰者として序文を著すほど文筆に優れた人物であり、そこには自身の漢詩も十三首が収められている。

題詞が示すように、春の河陽の景観を詠んでいる。第一、二句「凝旒派上思、降蹕対紅花」から、天皇は淀川の岸辺に降り立ち、辺りの風景を眺めていることがわかる。後半に登場する「綯服侍臣馬」や「垂鬢公主車」なども天皇に付き従う行幸の列であろうか、実にきらびやかな光景である。第三、四句「野甸宸衷遠、川臯睿望賒」は、鸞輿を降りた天皇の眼前に田野や淀川の景色が遙かに見渡せる様子を詠む。その向こうには、第七、八句「古椽松蘿院、春窓楊柳

家」から、ヤナギの生えた民家やサルオガセの絡んだマツが生える河陽離宮の庭が眺望できる。第十一、十二句「老圃鋤遅日、商帆艤早霞」には田畑を耕す農夫や出立の準備をする船の様子が描写されている。この漢詩には、河陽の民衆の生活ぶりの細かい所にまで心を寄せようとする天皇らの姿と、それを趣深いものとして漢詩に詠み込もうとする様子が窺える。こうした姿には、天皇が自身の統治するものを見て治める「国見」の要素とともに、榎村が指摘するように民衆に見られる対象としての「天皇」の存在もうかがえ、河陽院行幸の特徴といえるかもしれない。さらに、第十七、十八句「駅門臨迴陌、亭子隱高葩」は、河陽離宮の駅門は長く続く街路に臨み、建物は花の咲いた高い樹木の間から見え隠れしている様子が描写される。これは高橋が示した山崎駅付近の想定図とも矛盾がなく、河陽離宮が山崎駅の一部であったことを裏付けている。

作品番号「十一」

「奉和春日江亭閑望一首」 巨識人（巨勢識人）

浩蕩三仲春 浩蕩なる三仲の春、

春晴万里天 春晴る万里の天。

園林半灼灼、 園林半ば灼灼、

原野尽芊芊。 原野尽くに芊芊。

日煖鴛鴦水 日は暖けし鴛鴦の水、

風和楊柳煙 風は和ぐ楊柳の煙。

山光霽後緑 山光霽後緑にして、

江気晚来鮮やかに。 江気晚来鮮やかに。

遠樹繞湖小 遠樹湖を繞りて小く、

長波接海連 長波海に接きて連なる。

潮生孤嶼没 潮生りて孤嶼没り、

霧卷巨帆懸 霧巻きて巨帆懸く。

草色洲中短 草の色洲の中に短く、

花香窓外伝 花香窓の外に伝ふ。

帰声聞去雁

帰声去雁に聞き、

春響送鳴鶻 春響鳴鶻送る。

流静看遊艇 流静かにして遊艇を看、

溪幽聽落泉 溪幽かにして落泉を聴く。

興餘日已暮 興餘りて日已に暮れ、

江月照仙眠 江月仙眠を照らす。

〈大意〉

のんびりとした陰暦二月の春。春が晴れ渡る、遠く万里の空までも。その林は半ば花が咲いて明るく輝き、野原はどこもかしこも草が茂って青々としている。日差しは鴛鴦の住む水の上を暖かく照らし、風は柳の煙るなかを柔らかに吹く。山の色は雨が止んで後に緑を増し、川に立ちこめる靄は夕方になると鮮やかにかかる。潮水が高く起こり、孤島が見えなくなり、霧が晴れて船に大きな帆をかける。緑色をした草は洲のなかでまだ短い、花の香は江亭の窓の外に伝わってくる。鳴きながら北方に帰る雁の声を聞き、鶻（ホトトギス）が春の声をもたらず。川の流れは静かで、そこに遊ぶ小舟を見る。溪谷は奥深く静かで、滴り落ちる水の音を聞く。江亭春望の興が十分尽きないのに、日は暮れて、川辺にかかる月は旅寝の眠りを照らす。

〈説明・解釈〉

これは作品番号「十」の嵯峨天皇作「春日江亭閑望」に対して詠まれた奉和で、詠まれた時期などについては作品番号「十」に準ずる。作者である巨勢識人は、平安時代前期の漢詩人で、勅撰三集にも作品を多く残している。

この漢詩には、河陽離宮の庭園と周辺環境といった二つの景観が詠み込まれている。二者が対句として詠まれている部分としては、例えば第三、四句「園林半灼灼、原野尽芊芊」があり、花が咲く離宮の園林と草が青々と茂る野原の様子が対照的に詠まれている。また、第十三、十四句「草色洲中短、花香窓外伝」も同様に、淀川の洲に草が芽吹く様子と、窓の外から花の芳香が漂ってくる様子が詠まれている。その他、庭園景観であると考えられるのは、第五、六句「日日煖鴛鴦水、風和楊柳煙」で、池にはオシドリが生息し、ヤナギが植栽

されていたことがわかる。

しかしながら、河陽離宮に関連する他の漢詩と同様に、周辺環境の描写が多くを占めており、例えば、第七、八句「山光霽後緑、江気晚来鮮」では、雨後の男山が鮮やかに輝く様子と、淀川の靄が夕方鮮やかに色彩を帯びる様子が対句で詠まれている。さらに、第十七、十八句「流静看遊艇看、溪幽聽落泉」は、淀川の流れに浮かぶ遊艇と、男山の山中を雪解けの水が滴り落ちる様子が詠まれている。

河陽離宮行幸では、淀川や男山といった豊かな周辺環境を趣深く詩中に詠み込むことが圧倒的に多い。なかには一部、離宮内の庭園の描写も含まれるが、中心的なものではない。ここから、むしろ淀川や男山などの自然景観、またそのなかで営まれる市井の人々の営みといった河陽自体の景観に価値を置いて詩作が行われたことがわかるのである。

作品番号「十二」

「故閑聴鶏。一首。」 御製

烽火不伝罷関城 烽火伝わらず関城罷め、

唯余長短曉鶏声 唯余すは長短曉鶏の声のみ。

孟嘗没後年代久 孟嘗が没後年代久し、

誰客今鳴令人驚 誰れの客か今鳴きて人を驚かしめむ。

〈大意〉

烽火はもはやここに伝わらないようになり、関所は廃止された。ただ残っているのは長く短く鳴く明け方の鶏の声ばかり、孟嘗君は鶏の鳴きまねをする客を抱えており、函谷関を出ることができたが、彼がなくなつてから久しくたつた現在、この関所で鶏のまねをして人を驚かせるのはどの客であろうか、いやそんな者はいない。

〈説明・解釈〉

作品番号「十二」〜「十四」は同じ行幸で詠まれたもので、廃止された山崎

の関をモチーフとしている。本作は嵯峨天皇による作品である。

第二句「唯余長短曉鶏声」から、廃れた関所に残っているのは鶏の声だけである。鶏の鳴き声について、孟嘗君の故事^{一六六}を挙げながら、廃された関所に憐みの情を寄せている。

作品番号「十三」

「奉和故閑聴鶏。一首。」 桑原赤（桑原腹赤）

霸道寝来是旧城 霸道寝みて来り是れ旧城

人鶏独送司晨声 人鶏独り送る司晨の声。

自分陽精応覚曉 自ら陽精を分とし応に曉を覚るべく、

如今不爲孟嘗驚 如今孟嘗に驚かされず。

〈大意〉

覇者のとるべき道がやんでしまつてから、今や古い関所の跡になり、曉を告げる鶏の声が聞こえてくるだけである。鶏は曉をまさに知ることができはすなので、今や孟嘗君に驚かされて鳴くこともない。

〈説明・解釈〉

これは、作品番号「十二」に対する応制で、桑原腹赤のものである。

第二句「人鶏独送司晨声」から、廃された山崎の関所には鶏の声が響くだけである様子が詠まれている。

作品番号「十四」

「奉和過古関。一首。」 宮村継（宮部村継）

皇猷遠被車書同 皇猷遠く被びて車書同じく、

関路長開古鎮空 関路長く開けて古鎮空し。

白馬時来無吏問 白馬時に来れど吏の問ふことも無く、

東西行客日夜通 東に西に行客日夜通ふ。

〈大意〉

帝王の道が遠くにまで及んで、車のわだちを等しくし、また文字も同じというような平和で統一された御代である。関所へ通じる道は長々と続いて、古い関所跡が空しく残っている。白馬がこの関所を時折通過するが、もう廃されているため、役人がとがめることもない。東に西に行く旅人は日夜この関所跡を通過する。

〈説明・解釈〉

これは作品番号「十二」に対する応制で、宮部村継によるものである。第二句「関路長開古鎮空」から、関所へ続く道は長々とつづき、その向こうに古い関所跡が残っている。しかし、第三、四句「白馬時来無吏問、東西行客日夜通」から、もう廃されてはいるものの、時折人通りがあり、旅人たちもここを通過している様子がうかがえる。

河陽十詠（作品番号「十五」～「二十八」）

次から紹介していく、作品番号「十五」～「二十八」は「河陽十詠」と呼ばれる一連の漢詩群で、河陽（山崎）に因む景物を題詞に採り詠まれたもので、全て七言絶句の形式をとっている。嵯峨朝における山崎は「河陽一県花」に由来する花の都として著名で、特に嵯峨文壇を象徴する漢詩集である『文華秀麗集』に「河陽十詠」を始めとする多くの漢詩が収録されることから、嵯峨朝の君臣唱和の舞台として機能していたと考えられる。これらの題詞はそれぞれ「河陽花」、「江上船」、「江辺草」、「山寺鐘」、「故関柳」、「十五夜」、「水上鷗」、「河陽橋」である。

また小島は、河陽十詠が詠まれたのは、弘仁四年二月己亥（十六日）「遊獵於交野。以山崎驛爲行宮、…」や同五年二月乙未（十七日）「幸于交野。日暮御山崎離宮、…」など、遊獵のついでに離宮に行幸があったときのものであるが、正確な制作年を知ることが困難であると指摘している^{一六七}。

以下、題詞ごとに漢詩を並べ、その内容についてみていきたい。なお、絶句の作品群であるが故に具体的な事物を示す部分が少ないものが多い。内容に關

する〈説明・解釈〉は同じ題詞のものをまとめて最後の漢詩において行う。

「河陽花」 （作品番号「十五」「十六」）

作品番号「十五」

「河陽花」 御製

三春二月河陽景

河陽從來富於花

花落能紅復能白

山嵐頻下方條斜

三春二月河陽景、

河陽は從來花に富む。

花は落つ能くも紅に復能くも白し、

山の嵐頻りに下して万条斜なり。

〈大意〉

春二月の河陽県について述べると、河陽は從來から花の豊富などころである。紅色かと思えば白く、花びらが散っていく。山辺に風がしきりに吹き下ろして、数多の花の枝が斜めに傾く。

作品番号「十六」

「河陽花」 藤冬嗣（藤原冬嗣）

河陽風土饒春色

一県千家無不花

吹入江中一如濯錦

乱飛機上奪文紗

河陽の風土春色饒ひ

一県千家花ならぬは無し

江中に吹き入りて錦を濯ふが如く

機上に乱れ飛びて文紗を奪ふ

〈大意〉

河陽の風土には春の物色が豊かに充ち溢れ、県中のどの家にも花が咲き誇っている。川に風が吹き、花びらが吹き入って錦の衣を洗いすすぐようであり、機の上にも乱れ飛んで来て、まるであやのあるうすぎぬの美しさを奪うようである。

〈説明・解釈〉

作品番号「十五」「十六」は「河陽の花」という題詞で詠まれたもので、前者

が御製、後者は藤原冬嗣が御製に応じて詠んだ作品である。

そもそも「河陽」という地名が大山崎の別称となったのは嵯峨朝からである。もともとの由来となった河陽(現・河南省孟県付近)とは、黄河の北に位置し、晋代に呉令・潘岳が町中に桃花を咲かせたという故事をもつ。つまり、平安時代初期の山崎(河陽)にとつて「花」は切り離せない景物であった。まず作品番号「十五」。春の河陽(山崎)は、第三句「花落能紅復能白」に詠まれているように花盛りで、第四句「山嵐頻下方條斜」から、風に吹かれて枝が撓り色とりどりの花びらがひらひらと舞い散る様子がわかる。

次に、作品番号「十六」。ここでも、美しく咲き誇る花が描写される。その様子は、河陽の家には一軒たりとも花の咲いていない家はない程、どこかしこで花が咲いている様子である。例えば、「吹入江中如濯錦」では、淀川に花びらが吹き入り水面を染める様子が描写され大変趣深い。

以上、「河陽花」に関連する漢詩をみてきたが、漢詩に詠まれる春の河陽は、まるで中国の河陽県のイメージのままにあらゆる場所で花が咲き乱れていることが詠まれている。実際に、モモを植栽したかどうかまではわからないが、嵯峨文壇にとつての春の河陽はこうした美しい情景を想起させる場所であったことは確かであろう。

「江上船」(作品番号「十七」)「十九」 作品番号「十七」

「江上船」 御製

一道長江通千里、一道の長江千里に通ひ、
漫漫流水漾行船、慢々なる流水行船を漾はす。
風帆遠没虚無裡、風帆遠く没る虚無の裡、
疑は仙查欲上_レ上天、疑ふらくは是れ仙查の天に上らむとするかと。

〈大意〉

筋の長い川が千里の遠くまでも通じ、広く豊かな水上を航行する船が漂っている。風をはらんだ帆は遠く、霧や靄のなかに消える。あたかも仙人の筏が天

に昇ろうとするのではないかと思われるようだ。

作品番号「十八」

「江上船」 仲雄王

晴初駐_レ蹕馳_二玄覽_一、晴初蹕を駐めて玄覽を馳せたまふ、
一点孤浮江上船、一点孤り浮かぶ江上の船。
為_二虚物情_一不相怨、物情虚しくするが為に相怨みず、
乘_レ吹遥度浪中天、吹に乗りて遥かに度る浪中の天。

〈大意〉

空が晴れ渡って、天子は蹕から降りて辺りを御覧になる。船が点のように独り川の上に浮かんでいる。ぼんやりとかすんだ虚無の中を進んで、船は風に乗って遥かに波の中に立ちこめた靄を天へと昇っていく。

作品番号「十九」

「江上船」 朝鹿取(朝野鹿取)

江潮漫漫流幾年、江潮漫漫流ること幾年ぞ、
日夜送迎往還船、日夜送迎す往還の船。
已_レ下_二飛龍遊_中雲裏_上、已に飛龍の雲裏に遊べるに似て、
還看_下翔鳳入_中天辺_上、還た翔鳳の天辺に入るを看る。

〈大意〉

川にさし入る潮が漫々と漲って流れている。いったい幾年月こうやって流れているのだろう。夜も昼も往来する船を送り、また迎える。河上の船の様子は飛びかける龍が雲の中で遊んでいるようであり、飛びかける鳳凰が天にかけ入るのを見るようでもある。

〈説明・解釈〉

作品番号「十七」〜「十九」は「江上船」という題詞で詠まれた漢詩群で、

作品番号「十七」は御製、作品番号「十八」「十九」はそれぞれ仲雄王、朝野鹿取が御製に応じて詠んだ作品である。

まず作品番号「十七」。長い淀川を行く帆船の様子を詠んでいる。帆に風を孕み、遠く靄のなかに消えていく様子を仙人の筏に例えている。

次に作品番号「十八」。この漢詩では、淀川に一艘だけ浮かぶ船の様子が詠まれている。流れをゆつたりと進み、やがてぼんやりと消えていき、天に昇っていく様にもみえる様子が詠まれ、淀川の遥かに雄大な様子が表現されている。最後に作品番号「十九」。ここでは淀川を盛んに往来する多くの船の景観を詠んでいる。日夜問わず、商船や漁船が行き交い活気のある様子を、雲の中で遊ぶ龍や飛び立とうとする鳳凰に例えている。

以上、淀川を航行する船の様子を詠んだ三首をみてきたが、淀川には、小さな舟や大きな帆船など、多くの船が往来し、山崎の舟運を支えていた。こうした景観も、河陽を代表する見どころの一つであったと考えられる。

「江辺草」 (作品番号「二十」) 作品番号「二十」

「江辺草」 御製

春日江辺何所_レ好

春日江辺何の好き所かある、

青青唯見王孫草

青青唯見のは王孫が草のみ。

風光就_レ暖芳氣新

風光暖けきに就きて芳気新しけれど、

如_レ此年年觀者老

此くの如く年年觀る者は老ゆ。

〈大意〉

春日の川辺の見どころは何か。ただ見るのは、青々とした草ばかり。春の風や光はだんだんと暖かくなり芳しい気に満ちているが、このようにして年々歳々この風景を見る者は老いていく一方である。

〈説明・解釈〉

嵯峨天皇が「江辺の草」という主題で詠んだ一首である。春の淀川辺に草が

萌えている描写は「汀洲春草欲萋萋」(作品番号「九」)など、河陽離宮に関連する他の漢詩の中にも詠まれている。この景観も春の代表的な見どころであったと推測できる。

「山寺鐘」 (作品番号「二十一」) ～ 「二十二」 作品番号「二十一」

「山寺鐘」 御製

晩到_二江村_一高_レ枕臥

晩に江村に到り枕を高くして臥す、

夢中遙聽半夜鐘

夢中遥かに聴く半夜の鐘。

山寺不_レ知何処在

山寺知らず何れの処にか在るを、

旅館之東第一峯

旅館の東第一峯。

〈大意〉

川辺の村に行き、枕を高くして安らかに寝る。夢うつつの中で遙か彼方に夜半の鐘の音を聞く。山寺は何処にあるのか知らないが、旅の宿の東の一番高い山の峰にある寺の鐘なのだろうか。

作品番号「二十二」

「山寺鐘」 仲雄王

古寺館東山翠下

古寺は館東山翠の下、

日暮噉_レ咄響_二疎鐘_一

日暮噉咄疎鐘響く。

天籟相和幽洞谷

天籟相和ふ幽洞の谷、

餘音過_レ尽白雲峯

餘音過ぎ尽くす白雲の峯。

〈大意〉

古寺は旅館の東方の山にある。日暮れに、まばらな鐘の音が清くのびやかに響く。風などの自然の音が鐘の音ともども相調和し、奥深く寂靜な谷に響き合う。余韻は白雲のこめた峰の彼方に消えていく。

作品番号「二十三」

「山寺鐘」 滋貞主（滋野貞主）

行虬屢写江樓靜 行虬屢写江樓は静かなり、

一道聞来初夜鐘 一道聞え来る初夜の鐘。

諳識山僧巖水嗽 諳に識る山僧巖水に嗽ぎ、

焚香合掌拝尊容 焚香合掌尊容を拝まむことを。

〈大意〉

水時計の竜口からしばしば水が漏れて、午後八時ごろの鐘の音が一筋聞こえてくる。山寺の僧が岩の水に口を漱いで、香を焚き、合掌して仏の容顔を拝むことがそれとなく思い浮かぶ。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十一」～「二十三」は「山寺の鐘」という題詞で詠まれており、作品番号「二十二」が御製、作品番号「二十一」が仲雄王、「二十三」が滋野貞主によってそれぞれ詠まれたものである。

まず作品番号「二十一」。ここでは、夜中夢うつつに山寺から鐘の音が響いてくる様子を詠んでいる。第四句には「旅館之東第一峯」とあり、河陽離宮の東方の第一峯に山寺が立地していることがわかる。これについては、吉川による石清水八幡宮以前の山寺であるとする説^{一六八}と、小島による相応寺を示しているとする説がある^{一六九}。しかし、相応寺の位置では山寺とは言い難く、吉川の説に信憑性があるように思われる。

次に作品番号「二十二」。第一句に「古寺館東山翠下」とあり、作品番号「二十一」と同じく、離宮の東にある山の中に立地していたことを示している。ここでは、まばらに打つ鐘の音が、日暮れの静けさの中で風の音と混じり合いながら伸びやかに響き渡る様子を詠んだものである。

最後に作品番号「二十三」。この漢詩も、山寺から午後八時頃の鐘が響いてくる様子を詠んでいる。この音を聴くと、作者にはこれから行へと向かう僧侶たちの姿が思い浮かぶのである。

以上、三首をみてきたが、作品番号「二十一」では夜中の鐘（「夢中遙聽半夜鐘」、作品番号「二十二」では日暮の鐘（「日暮嗽吐響疎鐘」、作品番号「二十三」では午後八時頃の鐘（「一道聞来初夜鐘」）を詠んでいる。河陽離宮の東方の山中にあったという山寺とその鐘の音も河陽を象徴する景物であったのであろう。

「故関柳」（作品番号「二十四」）

作品番号「二十四」

「故関柳」 藤冬嗣（藤原冬嗣）

故関柝罷人煙稀 故関柝罷みて人煙稀らなり、

古堞荒涼餘楊柳 古堞荒涼楊柳を餘す。

春到尚開旧時色 春到れば尚し開く旧時の色、

看二過行客二幾回久 行客を看過すること幾回か久しき。

〈大意〉

古い関所では夜回りの拍子木の音は止んでしまつて、人家の煙もまばらになつている。ヒメガキは荒れ果てて物寂しく、柳だけが残っている。春になれば、柳が昔と同じ色に芽吹くだろう。柳が、そこを通過する旅人をどれだけ見送つたか知らないが、もう久しいものである。

〈説明・解釈〉

これは「関所のヤナギ」を主題とした藤原冬嗣による漢詩である。河陽離宮が造営されたころ、山崎関は廃されており、関跡の荒れた侘しい様子が漢詩に詠まれている。第二句「古堞荒涼餘楊柳」から、ヒメガキが荒れ果て、ヤナギだけが毎年新芽を出す侘しい情景がみてとれる。

「五夜月」（作品番号「二十五」）

作品番号「二十五」

「五夜月」 良安世（良岑安世）

客子無_レ眠投_二五夜_一

客子眠ることなく五夜に投り、

正逢山頂孤明月

正に逢ひぬ山頂の孤りなる明月に。

一看_二円鏡_一羈情断

一たび円鏡を見ては羈情断つ、

定識_二閨中憶_一不_レ歇

定めて識る閨中憶ひ歇まぬことを。

〈大意〉

旅人は眠れず、明け方四時頃に至り、山頂のたった一つの明月にまさしく出会った。一度まるい月を見ると、旅の侘しい心はなぐさめられて消えてしまった。しかし、故郷のねやの中で自分を思う妻の心は慰められないであろう。

〈説明・解釈〉

これは「五夜月」（午前四時頃の月）を詠んだ良岑安世の作品で、男山の山頂に円い孤月が浮かぶ様子が詠まれている。第四、五句「一看円鏡羈情断、定識閨中憶不歇」とあるように、旅人は月を見て旅の侘しさが和らいだが、故郷の妻のことを思い心を配る様子が詠まれ、河陽の旅愁が表現されている。

「水上鷗」（作品番号「二十六」～「二十七」）

「水上鷗」 仲雄王

行客近起清江北

御覽煙鳴水刷鷗

鷗性必馴無_二取意_一

況乎玄化及_二飛浮_一

行客近く起つ清江の北

御覽す煙に鳴く水を刷ふ鷗

鷗性必ず馴る取る意の無きことに

況むや玄化飛浮に及ぶをや

〈大意〉

旅人（天皇）は清い川辺の北に立ち、煙霞の立ち込める中、鳴いて羽の水を払いのける水上のカモメを御覧になる。カモメは捕えようとしなければ、人に馴れるものだ。まして、天子の徳が水上に飛ぶカモメにも及んでいいるのだから。

作品番号「二十七」

「水上鷗」 朝鹿取（朝野鹿取）

河陽別宮対_二江流_一

不_レ労行往見_二群鷗_一

能知_二人意_一狎不_レ去

或_レ沂或_レ沿与_レ波遊

河陽の別宮江流に対かひ、

労かずして行き行き群鷗を見る。

能く人の意を知り狎れて去らず、

或は沂り或は沿りて波と遊ぶ。

〈大意〉

河陽離宮は淀川の流に相對している。したがって、苦勞することなく川に行き、群がるカモメを見ることが出来る。カモメはよく人の心を知っていて、人に馴れ親しんでいる。川を遡ったり下ったりして、波のまにまに戯れ遊ぶ。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十六」「二十七」は「水上鷗」について詠まれたもので、前者が仲雄王、後者が朝野鹿取の作である。

まず作品番号「二十六」。第一句「行客近起清江北」から、天皇が河陽離宮から淀川へ直線的に向かう橋道を進み、淀川辺に降り立ち、鷗のなかで羽を翻して水を払うカモメの様子を見ている場面を詠んでいる。

次に作品番号「二十七」。第一、二句「河陽別宮対江流、不_レ労行往見群」とあるように、淀川の川辺まで行きカモメが飛び回る様子を間近に見ている。淀川の上を縦横に飛び回るカモメは人懐こく、作者らを取り巻きながら、戯れ遊んでいた様子が想像できるようである。

⑧河陽橋（作品番号「二十八」）

「河陽橋」 仲雄王

別館雲林相映出

門南脩路有_二河橋_一

上承紫宸長拱宿

別館雲林相映出し、

門南の脩路に河橋有り。

上は承く紫宸長く拱する宿を、

下送蒼海永朝潮

下は送る蒼海永く朝する潮を。

〈大意〉

河陽の橋は、雲のかかった林と相映じ、門の南の長々と続く路に橋がかかっている。この橋の上手は、天子が御殿でとこしえに手をこまねいて平和に天下を治められる宿に続いている。下手では青い海が永遠に朝貢するように潮を注ぎ込む。

〈説明・解釈〉

これは「河陽の橋」を主題として、仲雄王が詠んだ漢詩である。第二句「門南脩路有河橋」より、離宮の南門から、長く橋道が延び、その先に橋が架かっていることがわかる。もともと、山崎橋（河陽橋）は行基が架橋したという説が有力である。その後、桓武朝で長岡京造営にあたって、この橋の重要性が増大したことから、朝廷によって架橋が進められた。また、淀川の水量の多さから、山崎橋は何度も壊れ断絶した。そのため、当詩の作者滋野貞主らに架橋する場所を探すように勅令が出されている一七〇。この漢詩が詠まれた頃は山崎橋の利用が盛んであったため、河陽の重要な風物のひとつに数えられていたと考えられる。

次の作品番号「二十九」〜「三十三」は『群書類従』に収められた雑言奉和の五首の漢詩である。同じ行幸において詠まれた漢詩群で、淀川の落花について詠まれている。

作品番号「二十九」

「雑言。奉和聖製河上落花詞一首。」 従五位上行主殿頭兼備後守坂田朝臣永河上

天子乗レ春幸ニ河陽

天子春に乗じて河陽に幸す、

河陽旧来花作レ泉

河陽は旧来花を泉と作す。

一 県併是落花時

一 県併て是れ落花の時、

落花飄颻映江辺

落花飄颻江辺に映るふ。

濃香不レ異武陵迷

濃香異にあらず武陵の迷、

輕盈髣髴陽台夢

輕盈髣髴たり陽台の夢。

山路吹落明月中

山路吹落す明月の中、

渡頭紛紛細草叢

渡頭紛紛たり細草の叢。

惜落花

落花を惜しむ、

飛來飛去任春風

飛び来り飛び去り春風に任す。

將花擬レ人人將レ故人故花新通惜レ紅

花を人に擬え人故りなむとす、人故り花新しく通ひに紅を惜しむ。

只為二芬芳ニ近レ仙看

ただ芬芳をなし仙に近きを見る、

万樹榮暉一種同

万樹榮暉し一種同じ。

看落花

落花を見る、

一半蕭灑一半結

一半は蕭灑し一半は結ぶ。

今歲蹉跎雖落尽

今歲蹉跎として落ち尽くすと雖も、

明年還復堪攀折

明年還復攀折に堪えむ。

〈大意〉

春の季節に促されて、河陽に行幸した。潘岳の昔より、河陽は花が著名である。河陽の至るところで落花のときを迎え、落花は翻り川辺に輝いている。濃厚な香りは武陵の漁夫が桃源境に案内しようとした故事と同じく、軽やかに美しい落花は楚襄王の夢に現れた巫山の神女のごとくである。河陽離宮の裏月明かりの中落花が吹き散り、淀川の渡し場では十分に伸び切らない草むらに落花が入り乱れる。落花を惜しむ。春風が吹くままに、こちらに飛び来ては、飛び去って行く。年を重ねる人は色あせようとするわが紅顔を惜しみ、新しく咲く花は散りゆく紅色を惜しむかのようだ。花はひたすら芳しく香り、仙境に近いようだ。数多の樹木がともに花で輝く。落花をみる。花が半分散り、半分は枝に残っている。今年の春は忽ち過ぎ、花はことごとく散ってしまったが、来年もまた再び花開き、枝を手折ることができよう。

〈説明・解釈〉

作品番号「二十九」〜「三十三」は『群書類従』（巻一三四・文筆部十三）にある漢詩群である。原詩の嵯峨御製は残っていないが、五人の詩人が奉和した詩が残っており、「河（江）上落花」（淀川に散りかかる花）といった題詞で詠まれている。また、この漢詩群が詠まれたのは詩人らの官位に鑑みるに、弘仁十一年（八一二）頃であろうと推定されている¹⁷¹。この漢詩の作者である坂田永河（七七七〜八五七）は、平安時代初期の貴族で、最終的な官位は正四位下、因幡権守である。嵯峨朝後半は、文武両面で重用された。

第七、八句「山路吹落明月中、渡頭紛紛細草叢」は、河陽離宮の裏手（山路）の道に花弁が舞い散る様子、また淀川の渡し場の草むらに落花が散り落ちる様子をそれぞれ詠んでいる。第十句「飛来飛去任春風」は風の赴くままに、落花があらちを舞い飛ぶ様子は、春の河陽（山崎）の風流な景観を示している。

作品番号「三十」

「奉和聖製河上落花詞。」正五位下行式部少輔兼文章博士臣菅原朝臣清公上

煙霞四照作「春粧」

煙霞四照し春粧を作す、

野樹山花総是香

野樹山花総べて是れ香る。

江風一過吹「花去

江風一過花を吹きて去る、

片片飄飄落「何処」

片片飄飄何処に落ちる。

津家妖艶蚕未出

津家の妖艶蚕未だ出でず、

徒対落花与飛絮

徒に対ふ落花と飛絮とに。

看「落花」

落花を見る。

落花数種色

落花数種の色、

繁盈「園圃」望無「極

園圃に繁盈し望極無し。

酷妬楼中鉛粉彩

酷だ妬む楼中鉛粉の彩、

擬「奪機上霞錦織

奪はむとす機上霞錦の織。

惜「落花」

落花を惜しむ、

雲布星暉麗有「余

雲布星暉麗しきこと余有り。

灑落「叢薄」蝶相伴 叢薄に灑落して蝶相伴ふ、

飛天「窓簾」人不知 窓簾に飛点して人知らず。

年年歳歳花如「茲」 年年歳歳花茲の如し、

看来看去無「息時」 看来り看去りて息む時も無し。

覧覽乗「春憐」物候「 覧覽春に乗じて物候を憐れびたまふ、

群臣仰止濟汾詞 群臣仰止す濟汾の詞。

〈大意〉

四方の空が赤みを帯びて春の粧をなし、すべての原野の木々や山の花々が香っている。淀川を吹く川風は花を吹き去り、花弁は軽く飛び、どこかに行ってしまう。川辺の渡し場近くの家に住むあでやかな女性たちの飼う蚕はいまだ生まれず、なすこともなく落花と柳絮を眺めるばかりである。散りゆく花をみる。落花は色とりどりで、庭園に田畑にどこまでも舞い廻る。高樓の女性たちの白粉の白さを妬まんにばかりに白く散りかかり、織物の色を奪わんとするがごとく紅に散りかかる。落花が雲の如く広がり、星の如く光り、その美しさは比類ない。草むらに散りかかる様子は蝶が飛び来たよう、落花が窓簾に飛んできてははりつく様子を人は知らない。年年歳歳、落花は飛んできたかと思うと、また飛び去り、風に誘われて絶えずあらちを舞い飛んでいる。この度は、春を樂しむ嵯峨帝の行幸に対して、臣下らが御製を仰ぎ奉る。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、作品番号「二十九」と同じく「淀川に散りかかる花」を題材に詠まれた菅原清公の奉和詩である。

第一、二句「煙霞四照作春粧、野樹山花総是香」は春たけなわになり、木々や原野に花々が咲き乱れた河陽の風流な景観が詠まれている。第五句「津家妖艶蚕未出」には、川辺の渡し場近くの家の女性らが登場する。こうした民衆の風景が登場するのは河陽行幸で詠まれた漢詩の特徴である。第九句「繁盈園圃望無極」から、田畑そして河陽離宮の庭園にまでも、花弁が舞い飛んでくる様子が詠まれている。第十四、十五句「灑叢薄蝶相伴、飛天窓簾人不知」は、落花

が草むらに散りかかったり、窓簾に貼りつくなど、いたる所に飛び交う様子が表現されている。

作品番号「三十二」

「奉和聖製河上落花詞一首。」齋院長官従五位下守左馬頭紀朝臣御依上

河陽二月落花飛

河陽の二月落花飛び、

江上行人花襲衣

江上の行人花は衣に襲く。

夾岸林多花非一

岸夾む林多くして花一つに非ず、

飛滿空中灑江扉

飛びて空中に満ち江扉に灑く。

村人争出掣芳柯

村人争ひ出でて芳柯を掣き、

霞浦紛紛艷色多

霞浦紛紛艷色多し。

澄潭祇視彩浪起

澄潭祇に視る彩浪の起るを、

水底初疑白雲過

水底初めて疑ふ白雲の過ぐるかと。

对落花

落花に対ふ、

落花看不得

落花看れど駄まず、

紅樹千条一段発

紅樹千条一段発く。

儵忽飄零樹与叢

儵忽にして飄り零つ樹と叢と、

須臾鋪地不勝風

須臾にして地に鋪く風に勝へず。

半著江磯浦口駁

半ば江磯に著きて浦口駁らかなり、

半飛波上水顔紅

半ば波上に飛びて水顔紅なり。

見落花

落花を見る、

落花欺雪滿湖裏

落花雪と欺き湖裏に満つ、

滿湖一廻投春水

湖に満ち一たび廻りて春水に投る。

無數乱来凡幾千

無數に乱れて来る凡そ幾千、

歴乱飄颺後復前

歴乱飄颺す後に復前に。

唯看日暮律亭下

唯看る日暮律亭の下、

左右源花迎水燃

左右に源花水を迎りて燃ゆるを。

〈大意〉

河陽の二月は落花が飛び交い、花卉が旅人の衣に襲いかかるようにまとわりつく。両方の岸をはさむ樹林は多く、あまたの花々が咲いている。落花が飛んで川辺の家の扉にしきりに散りかかる。淀川べりの村人たちが芳しい花の枝を引ききたわめ、赤みを帯びた朝焼けの入り江には香りのよい花々が散り乱れてあでやかな色に満ちている。波の立たない澄んだ川の淵に落花が飛来する。落花に彩られた水面は美しい波が沸き起こったかのようだ。水底に白い花卉が沈み、白雲が過ぎたかと思われる。散りゆく花にむかう。散りゆく花を鑑賞することに情趣は尽きない。紅色の花の咲く木はひととき美しく輝き、すぐに木々や草むらに散りかかり、風に耐えられず、すぐに地面へ散り落ちてしまう。磯に飛んでいき、浦の入り口を斑に染め、波に飛び来たものは水面を紅に染める。散りゆく花を看る。淀川に舞い飛び、白い雪ではないかと人を欺くばかりに落花が散る。落花は、雪の如く白く染めた淀川を廻り、春の水辺に到る。落花は激しく乱れ飛び、ひらりひらりと前へ後ろへ至る所を舞い翻る。河陽離宮において落花をながめる。桃源郷の花の如く河の水面を廻って花が燃えるがごとく輝いている。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、作品番号「二十九」、「三十」と同じく、「淀川に散りかかる花」という題詞で詠まれた紀御依の奉和詩である。

第三〜六句「夾岸林多花非一、飛滿空中灑江扉、村人争出掣芳柯、霞浦紛紛艷色多」では、淀川の両岸の樹林に花が咲き乱れ、淀川べりの家々の扉にも花卉が舞いかかる様子、村人が花の枝を手折り、入り江に落花が吹き集められている様子が詠まれる。このように、花の風景とともに、花の咲く季節における市井の人々の営みも含めて、天皇らが趣深く眺めていることが漢詩から取れる。第二十一、二十二句「唯看日暮律亭下、左右源花迎水燃」では、河陽離宮を「津亭」と表し、そこから日暮れの淀川を眺めていることがわかる。淀川の水面は一面に花が舞い散り、燃えるように輝いている様子が詠まれている。

作品番号「三十二」

「雑言。奉和聖製河上落花詞一首。」 外従五位下行大内記滋野宿禰貞主上

晴江兩岸輕塵發

晴江兩岸輕塵發る、

車馬争来看物華

車馬争ひ来たりて物華を看る。

本道津橋春色久

本道の津橋春色久し、

桃花楊柳千人家

桃花楊柳千人の家。

灘頭漂母添紅粧

灘頭の漂母紅粧に添ふ、

浦口漁夫泛錦浪

浦口の漁夫錦浪に泛かぶ。

翫落花

落花を翫ぶ、

落花迸灑不折地

落花迸灑して地を扱はず、

去馬飛禽綵色備

去馬飛禽綵色備ふ。

怨婦看憐欲寄遠

怨婦看て憐び遠きに寄せむとす、

商童裏取不求利

商童裏み取りて利を求めず。

惜落花

落花を惜しむ、

落花何処不風斜

落花何れの処にか風斜ならざる。

山梨似雪溪辺飛

山梨雪の似く溪辺に飛ぶ、

洲鷺疑雲林外帰

洲鷺雲の似く林外に帰る。

妾淚常悲兵水滴

妾が涙常に水と滴ることを悲しぶ、

妾顔猶畏与花衰

妾が顔猶し花と衰ふことを畏る。

一遇君王行月令

一たび君王が月令を行はすことに遇ひて、

更使妾意荷芳暉

更に妾が意をして芳暉を荷はしむ。

〈大意〉

晴れた日の淀川べりで軽やかな塵が無いあがる。行幸に供奉する車馬は争い来て、春の景色を眺める。主要な街道である河陽の橋は春たけなわで、桃の花が咲き乱れ、青々とした柳の陰にあまたの家が立ち並ぶ。淀川の早瀬において、水で綿を洗いさらしている女性らの顔に花が散りかかり、化粧をしたようにみえる。淀川で漁をする漁夫らは落花で美しく彩られた水面に浮かんでいる。散りゆく花を鑑賞する。落花がほとぼり飛び、地面のいたるところに散る。走りくる馬、飛ぶ鳥の美しさとともに着飾った供奉の臣下の馬の装飾が美しい。

出征で帰らぬ夫を怨めしく思う女性も、花をみてあわれさを感じ、便りをしようと思ひ、若い商人は落花を包み取ったままで、商売もせず、風流がるであろうか。散りゆく花を惜しむ。風が斜めに吹いて、そこかしこに花が散る。山辺の梨の白い花が白雪の如く谷に舞い入り、洲の白鷺は白雲のように林のなかに飛び去った。生きて帰らぬ夫を思う私のなみだは、いつも水とともに垂れ落ちることを悲しみ、私の容貌も落花とともに移ろっていくことが気づかれる。この度、春の行幸において天子に供奉し、私の心情は天子の日の光の如き恵みを背負っている。

〈説明・解釈〉

この漢詩も、作品番号「二十九」〜「三十一」と同じく「淀川に散りかかる花」という題詞で詠まれた滋野貞主の奉和詩である。

第一、二句「晴江兩岸輕塵發、車馬争来看物華」とあり、河陽行幸に供奉する車馬の列が続々と通る様子が描写されている。第三、四句「本道津橋春色久、桃花楊柳千人家」から、主要な街道である河陽の橋は春爛漫でモモが咲き乱れ、ヤナギが茂る辺りには人家がたくさん並んでいるようである。第五、六句「灘頭漂母添紅粧、浦口漁夫泛錦浪」では、落花が舞う淀川で綿を洗いさらす女性と、落花が浮く淀川で竿をさす漁夫が詠まれており、第十一句「商童裏取不求利」では若い商人が登場する。落花の美しさとともに、山崎の民衆の様子が生きと表現されており、河陽の漢詩を詠むにあたって、民衆がいかに重要な要素であったかがわかる。

作品番号「三十三」

「雑言。奉和聖製河上落花詞。」 無品妾有智子上

本自空伝武陵溪 本自空しく伝ふ武陵の溪、

地体幽深來者迷 地体幽深にして來る者迷ふ。

今見河陽一縣花 今し見る河陽一県の花、

花落紛紛接烟霞 花落つること紛紛にして烟霞に接ぐ。

孤嶼芳菲薄晚暉 孤嶼芳菲にして薄晩に暉る、

夾岸飄飄後前飛

夾岸飄飄にして後前に飛ぶ。

歴覽二江村一花猶故

江村を歴覽するに花猶し故る、

經過二民舎一人復稀

民舎を経過するに人も復稀なり。

对落花

落花に對ふ、

落花猶未レ歇

落花猶し歇まず、

桃花李花一段発

桃花李花一段發く。

儵忽帯レ風左右渡

儵忽にして風を帯びて左右に渡る、

須臾攀折日將レ暮

須臾にして攀折し日まさに暮れなむとす。

歴乱香風吹不レ止

歴乱なる香風吹きて止まず、

湖裏彩浪無数起

湖裏の彩浪無数に起る。

看一落花一

落花を見る

落花作レ雪滿二空裡一

落花雪に作りて空裡に滿つ、

空裡飛散投二江水一

空裡に飛び散りて江水に投る。

可憐漁翁花中廻

憐れぶべし漁翁花中を廻る、

可憐水鳥蘆裡哀

憐れぶべし水鳥蘆裡哀しむ

唯有二釣船鏡中度一

唯し釣船の鏡中を度ること有り、

還疑二查客与レ天来一

還りて查客天より来たれるかと疑う。

〈大意〉

遠い昔よりむなしく伝わる武陵の桃源郷の伝説、地形が奥深く、旅人を迷わせる。今まさに目にして居るのは河陽の花が咲き乱れた光景である。落花が散り、煙霞の間を舞う。淀川の川中の一つの離れ小島に、落花が香り高く夕方に輝いている。川の兩岸では落花が風に翻り前や後ろに舞い飛ぶ。淀川べりの村をあちこち見て回ると花はすでに散り、民家を通り過ぎると人も疎らである。散りゆく花にむかう。やむことなく花は散り、桃や李の花が開く。忽ち、花は風に煽られてあちらこちらに飛び交い、花の枝を手折ろうとするが日が暮れようとしている。入り乱れる花の香りを含んだ風が吹きやまず、波の上に花が散り、鮮やかな波があまた起こる。漁夫は水面に浮か花弁の間をぬいめぐり、水鳥は蘆の間で鳴いている。月光の中、淀川に釣り船が浮かんでいる。筏に乗つ

て天の川をみたというあの客が天から降りてきたのではないかと思う。

〈説明・解釈〉

この漢詩は「二十九」〜「三十二」と同じく、「淀川に散りかかる花」という題詞で詠まれた有智子内親王の奉和詩である。

第五、六句「孤嶼芳菲薄晚暉、夾岸飄飄後前飛」は、淀川の中の小島で落花が輝き、岸の両側では後に後ろに花弁が舞い飛ぶ様子を示している。また、第九〜十一句「对落花、落花猶未歇、桃花李花一段発」から、やむことなく花が散り、モモやスモモが開花し、咲き乱れている。さらに、第十九句「可憐漁翁花中廻」では、淀川に浮かぶ落花を縫うように船を操る様子が詠まれており、ここでも、春の山崎の景観とそこで生活する人々の様子を趣深いものとして捉えられていることがわかるのである。

以下に示す作品番号「三十四」〜「三十六」は『経国集』、作品番号「三十七」は『本朝無題詩』に収められた河陽に関連する漢詩である。嵯峨朝よりも時代は下がるが、河陽離宮とその周辺環境の様子を補足的に見ていきたい。

作品番号「三十四」

「春江賦一首」 太上天皇

仲月春氣滿二江郷一 仲月の春気江郷に滿つ、

新年物色變二河陽一 新年の物色河陽を變ふ。

江霞照出辞レ寒彩 江霞照り出づ寒を辞る彩、

海氣晴来就レ暖光 海氣晴れ来たる暖に就く光

柳懸レ岸而煙中綻 柳は岸に懸りて煙中に綻ぶ、

桃夾レ堤以風後香 桃は堤を夾みて風後に香し。

望 春江二兮騁レ目 春江を望みて目を騁せ、

觀 清流之洋洋一 清流の洋洋たるを觀る。

或漫兮逝不レ留 或いは漫として流れぬに似たり、

或渺兮逝不レ留 或いは渺として逝きて留まらず、

長之難レ可レ識 長くして識るべきこと難し、

濬之誰能測

茲可謂春氣動

而著於江色也

是以羽族翱翔

鱗群頡頏

繽紛雜沓

載來載行

咀嚼初藻

吞茹新荇

各各吟叫

处处相望

涉人廻楫

與淵客而為倫

漁童構宇

接鮫室而同隣

隨波瀾之渺邈

轉舳艫而尋津

菱歌於是頻沿泝

客子於是不勝春

茲可謂江村春

而感於情人也

于時花飛江岸

草長河畔

蝶態紛紜

鶯聲撩亂

遊覽未已

日落西溪

夜在江亭

高枕臥矣

濬くして誰か能く測らむ。

茲に謂ふべし春氣動き

て江色に著しと。

是を以ちて、羽族翱翔す、

鱗群頡頏す。

繽紛雜沓し、

載ち來たり載ち行く。

初藻を咀嚼す、

新荇を吞茹す。

各各吟叫す、

处处相望む。

涉人楫を廻らし、

淵客と倫を為す。

漁童宇を構へ、

鮫室に接づきて隣を同じくす。

波瀾の渺邈たるに隨ひ、

舳艫を転かして津を尋ぬ。

菱歌ここに頻りに沿泝す、

客子ここに春に勝へず。

茲に謂ふべし江村春にし

て情人を感ぜしむと。

時に、花江岸に飛ぶ、

草河畔に長し。

蝶態紛紜たり、

鶯聲撩亂たり。

遊覽未だ已まぬに、

日は西溪に落つ。

夜は江亭に在りて、

枕を高くして臥す。

江上月

浪中明

静如練而雲間発

光与レ水而共清

山風入於戸牖兮

聽颺颺乎松声

歸雁欲下辞汀洲去上

飢猿曉動羈旅情

羈旅乘レ春心轉幽

江南江北事一遨遊

総為レ春深多感歎

年年江望得銷憂

江上の月、

浪中に明らけし。

静かなること練の如くにして雲間より発る、

光は水とともにして共に清清けし。

山風戸牖に入り、

颺颺を松声に聴く。

歸雁汀洲を辞りて去なむとす、

飢猿曉に羈旅の情を動かす。

羈旅春に乗りて心轉幽けし、

江南江北遨遊を事とす。

総べて春深きが為めに感歎多く、

年年江を望みて憂を銷すこと得。

〈大意〉

二月の春の気配は江村地帯に満ち、新しい年の自然の物色は河陽の様子を一変させた。淀川にかかる赤みを帯びた霞は照り出で寒さの去った物色があたりを満ち、海に立ち込める気は晴れ上がり暖かくなつた春の光が流れる。ヤナギは川岸に垂れて春の煙霞のなかに芽をほころばせ、ゆたかに春の淀川を望んで目をはせ、その清らかな流れの豊かさをみる。桃の花は堤の両側を挟むようにあり、風の後に芳しいにおいを放っている。淀川は豊かに流れて、その様は途切れることなくまるで流れていないかのようなのである。あるいはまた遠く遙かに流れゆき、昼夜の区別なく流れとどまるところを知らない。長く流れてその空間的時間的長さを知ることは難しい。また誰にそのような深さを測ることができらうか。ここに春の気配が動いて川辺のものの物色にそれが著しく表れている。そこで鳥は飛びまわり、魚は水の上を浮沈する。鳥の群れは入り乱れて混み合い、飛んできたかと思つとまた飛んでいく。魚は若い水草をよく噛み、新しいあさぎ(水草の一種)を飲み込む。鳥はあちこちで、めいめい鳴き叫ぶ。船頭は楫を動かして漕ぎまわり、水中の鮫人(人魚の類)と親しくなる。漁家

の子供は水辺に家を構え、鮫人の部屋に接近してその隣人となる。遠く遙か彼方まで流れゆく波のまにまに漕ぎゆき、また舟を操りつつ行き先を転じて渡し場を尋ねる。さて舟人たちは菱摘み歌を謡いながらしきりに川を上下する。そこで旅人はこの春の情景を見て感に堪え切れない思いを覚える。さて、ここに淀川べりの村は春であつて人の心に感興を与えるものであるといえよう。時に今や、花は淀川の岸に飛びゆき、春草は川辺に丈高く茂っている。蝶は乱れ飛び、鶯は入り乱れて鳴く。遊覧はまだ終わらないのに、日は西の谷間に落ちた。夜は淀川べりの離宮に泊り、枕を高くして安眠する。淀川の上にかかる月は波の中に映つて清く明らかである。月が静かで美しくかかる様子は練り絹（練つて柔らかくした白い絹布）のようで、それは雲間から現れる。その光は水と同じく共に清らかで冷たい。山から吹いてくる風は離宮の窓に入り、シヨウリユウという音を松風のなかに聞く。帰る春の雁は川の洲を去つて飛び立とうとし、暗い明け方に鳴く飢えた猿は旅愁をかきたてる。この淀川の旅は春の季節に乗じて行ったものであり、心の内はいよいよ静閑な思いがする。淀川の南へも北へも遊覧を専らほしいままにする。全く春が深くたけなわであるために、ものに感動することが多く、年々歳々淀川を眺望して憂を晴らすことができる。

〈説明・解釈〉

この賦は、春の日に、河陽離宮付近から淀川を眺望して詠まれたものである。嵯峨上皇によつて詠まれたものであるが、いつ作られたものかは不明である。

まず、「仲月春気満江郷、新年物色変河陽」から、仲春すなわち二月の行幸で河陽を訪れると、江村地帯がだんだんと春めいてきている様子が詠まれる。「柳懸岸而煙中綻、桃夾堤以風後香」では、春になり、川岸のヤナギの葉が伸び始め、堤をさしはさむ様にあるモモから良い香が漂ってくる様子が詠まれる。淀川は、途切れることなく、昼夜の区別なく豊かに流れている様子が詠まれるが、そうした中、「茲可謂春氣動而著於江色也」とあるように、淀川にも春が訪れ、川べりのものの物色が春めいてきた様子が詠まれる。鳥は「繽紛雜沓、載來載行」から、入り乱れあちこちへ飛びゆき、魚は「咀嚼初藻、吞茹新荇」から、新しく伸び始めた水草を食んでいる。淀川を行き来する舟人らの様子も詠み込

まれている。「渉人廻楫」では船頭が舟をこぐ様子、「漁童搗宇、接鮫室而同隣」は童や水辺に家を構え、鮫人（人魚の類）と隣人になる、といった意味だが、小島は「実際に魚を捕ろうとねらう童児たちが水中にもぐり込むのを見て、このように描写したものである。」と指摘する^{一七〇}。また、「菱歌於是頻沿浜」では舟人らが菱摘み歌を謡いながらしきりに川を往来する様子が詠まれている。こうした淀川の春色が満ちた景色の中、漁師や舟運に携わる人々を目にし、旅人である作者は「客子於是不勝春」とあるように、感動の念が沸き上がったようである。「遊覧未已、日落西溪、夜在江亭、高枕臥矣」から、日が西に傾き、まだ遊覧が終わらないのに、日が西に傾き、河陽離宮に帰ってきたようである。ここからは詩の舞台は河陽離宮内にうつる。「江上月、浪中明」から淀川の上の月が輝き、波間を明るく照らしている。そうして眠りにつくなか、外を吹く松風の音や明け方にサルの鳴き声が響いてきて、旅愁をかきたてる。

作品番号「三十五」

「七言山夜一首」 太上天皇（嵯峨太上天皇）

移居今夜薛蘿眠

移居今夜薛蘿に眠る、

夢裡山鷄報「曉天」

夢裡山鷄曉天を報ず。

不覺雲來衣暗濕

覺えず雲来りて衣の暗に湿ふ、

即知家近深溪辺

即ち知りぬ家の深き溪の辺に近きことを。

〈大意〉

今夜は薛蘿の生い茂る宿に独り眠る。夢うつつに鷄が曉を報せる鳴き声が聞こえてくる。知らないうちに水分を含んだ霧が立ち込めて衣が何やら湿っている。そこで初めて、この宿が深い溪谷の近くにあることを知るのである。

〈説明・解釈〉

この作品は淳和朝（八三二〜八三三）に嵯峨上皇が詠んだ河陽離宮の漢詩で、詠まれた年代については定かではない。淳和朝の河陽行幸の記録は、天長八年（八三二）二月丁亥（十八日）「皇帝幸「水成野」。申時澍雨、俄頃而晴。多獲

「鶉雄」。西時御「河陽宮」。山城撰津両国掾已上、賜_レ祿有_レ差。夜深還_レ宮。」と、天長九年一月己未（二十五日）「皇帝幸_二水成野_一。」の二例が挙げられる。淳和朝では水成野（水生野）行幸は日帰りで行われる。前者は、遊獵後の午後六時頃に河陽離宮に立ち寄っているのでこのときであつたかもしれない。

第一句「移居今夜薛蘿眠」のサルオガセが生い茂つた宿というのは河陽離宮のことであると考えられる。第三句「不覚雲来衣暗湿」は、「水気眠中来湿枕」（作品番号「三三」）や「雲氣湿衣知近岫」（作品番号「九」）など類似の表現が他の作品にもみられ、河陽（山崎）の旅情性を表す表現のひとつであると考えられる。淳和朝になつても引き続き、こうした旅愁を想起させる河陽離宮のイメージが持続していることがわかる。

作品番号「三三六」

「七言山居驟筆一首」

太上天皇

孤雲秋色暮蕭條
魚鳥清機復寥寥
欷_レ枕山風空蕭殺
横_レ琴溪月自逍遙
僻居人_レ老文章拙
幽谷年深鬢髮凋
蘿戸閉来無_二二事_一
莫_レ言吾侶隱須_レ招

孤雲秋色暮れ蕭條たり、
魚鳥清機復寥寥たり。
枕を欷つるに山風空しく蕭殺す、
琴を横たふるに溪月自づからに逍遙す。
僻居人老い文章拙し、
幽谷年深く鬢髮凋む。
蘿戸閉ぢ来り一事も無く、
言ふこと莫れ吾が侶須く隱招くべしと。

〈大意〉

雲が一つ浮かぶ。晩秋になり、物寂しい。山居の近くの魚や鳥もまた物悲しい。枕をそばだてて聞くに、山に吹く風が空しく響き、秋の侘しさを駆り立てる。琴を横たえると、溪月は自ら秋空を逍遙する。辺鄙などところに隱遁する私も老いたが文章はいまだに拙い。幽谷は年を経ても変わらないが、私の髪は少なくなり年老いた。サルオガセの生い茂る家の戸は一度もたたかれないことはい。言うな、仲間と共に隱遁すればいいなどと。

〈説明・解釈〉

これは、嵯峨上皇の漢詩である。第一句「孤雲秋色暮蕭」から、秋の終わりを詠んだものと考えられるが、天長年間の秋の河陽行幸は見当たらず、行幸の詳細は不明である。

第四句「横琴溪月自逍遙」には、月夜の晩に琴を横たえている様子が詠まれている。また、第七句「蘿戸閉来無一事」はサルオガセが生い茂るあずまが描かれ、河陽離宮を表すと考えられる。晩秋の物悲しさと共に、年老いていく自身の姿を詩中に詠み、侘しさを誘う漢詩である。

作品番号「三三七」

「遊河陽賦漁夫」

藤原通憲

煙波深裡有_二漁父_一
高唱_二棹歌_一足_レ断腸
唯憶_二一竿_一投_中曉浪_上
不_レ知_下兩鬢_中變_中秋霜_上
餘年生計_二菰蒲_一利
後日孫謀_二風水_一鄉
呂太公賢_レ誰得_レ識
釣人何_レ必_二渭濱_一陽

煙波深き裡に 漁父有り
高らかに棹歌を唱へば 腸を断つるに足れり
唯だ 一竿を曉の浪に投げんことを憶ひ
兩鬢の秋の霜に變じたるを知らず
餘年の生計 菰蒲の利
後日の孫謀 風水の郷
呂太公が賢は誰か識るを得ん
釣人 何ぞ必ずしも渭濱の陽にあらん

〈大意〉

靄に煙つた淀川の流れの中に掉さす漁夫がいる。彼が歌う舟歌は哀切なものだ。ひたすらに暁の流れに掉さすうちに、秋霜のように鬢毛が白くなり、いつの間にか年老いてしまった。彼の余生は、菰蒲をとる暮らし。子孫の為の計りごとといつても、今のうちに気儘に風に吹かれ水上に生活することくらいである。その漁夫に、あの太公望のような賢明さがあるか、誰も知り得ないが、彼のような釣り人は渭水の北ばかりにいるとは限らない。

〈説明・解釈〉

これは、藤原通憲が「河陽の漁夫」について詠んだ漢詩である。作者の藤原通憲（一一〇六～一一六〇）は平安時代末期の貴族で、学者、僧侶でもある。出家後の法名は信西、号は円空、俗名は藤原（高階）通憲という。藤原実兼の子で、正五位下・少納言であった。学問に優れ、藤原頼長と並ぶほどの碩学として知られていた人物である。

漢詩が詠まれた年代は不明だが、これを収める『本朝無題詩』は、平安時代末期であるため、嵯峨朝よりも時代が下がる作品であると考えられる。嵯峨朝においては活気があった山崎も、貞観三年（八六一）頃には、「久しく行幸せず、稍く破壊に至る」との記録があり、荒廢の様相を呈していた。つまり、この漢詩の詠まれた頃には、山崎は荒れ果てた寂しい場所といったイメージと共にあったと推測できる。第一、二句「煙波深裡有漁父、高唱棹歌足斷腸」は深い霧の立ち込めた中、年老いた漁夫が舟歌を歌いながら棹さす様子を悲哀を込めて詠んでいる。

六 小括

河陽離宮に関連する漢詩は、同時代の離宮や邸宅に関連するものよりも多く残っており、特に『文華秀麗集』に二十首もの漢詩が収録されている。この『文華秀麗集』について、後藤昭雄は『文華秀麗集』が嵯峨天皇を圍繞する側近文人たち、これを嵯峨サロンと呼べば、その嵯峨サロンの所産たる性格を最も濃く与えるに至っている。」と指摘する。なかでも、この漢詩集に収められた「河陽十詠」は特徴的な漢詩群で、嵯峨天皇と文人たちにより、河陽の景物をモチーフとした七言絶句の漢詩十五首が詠まれている。

まず、嵯峨朝（八一〇―八二四）における河陽離宮周辺の行幸・遊獵の記録から、河陽離宮の行幸、水生野遊獵、交野行幸がほぼ毎年あり、毎年二月の中旬頃と、年によつては十、十一月中旬に行幸があったことがわかる。その後、淳和朝になつても行幸自体は続いたものの、日程にばらつきが見られるようになる。例えば「千乗犯曉出城中」（作品番号「七」）とあるように、朝早くに立出したり、『日本後紀』の弘仁四年二月辛丑（十八日）条「遊獵「水生野」：（中

略）：是夕、還レ宮。」のように、日暮や夕方に内裏に帰り着いたりすることもあった。また、十、十一月の冬の行幸は日帰りの例が多いのに対し、弘仁三年（八一二）二月十四、十五日を初例として、毎年二月の同時期に二、六日の行程で、水生野遊獵と交野行幸があり、河陽離宮に宿泊している。なお、淳和朝以降には宿泊を伴う行幸は見られなくなった。また、漢詩中にも遊獵の描写があるのでみておきたい。作品番号「六」の「八」は主に遊獵に関して詠まれている作品で、「逐兔馬蹄承落日、追禽鷹翻松輕風」（作品番号「六」）や「鶉鷺遙似星光落、兔還疑月影空」（作品番号「七」）からは、鷹狩りが行われ、ウサギやウズラといった動物を捕らえている様子が描写されている。ところで、交野へ行く場合、弘仁五年以前は、弘仁三年二月甲辰（十五日）「遊獵交野。」のように、「遊獵」と記されているが、五年以降は「行幸」と記録されるようになったことも指摘できる。ここから、弘仁五年以降、交野で桓武天皇が行った郊天祭祀（天子が都城の南の郊野に設けた天壇で天神地祇を祀る儀式のこと）を嵯峨天皇が引き継いで実施したと考えられる。

次に、漢詩から分析した河陽離宮の空間構成、庭園意匠ならびに周辺環境などについて、関連事項を以下にまとめる。

まず、河陽離宮は駅門を直進した先にあり、花の咲いた高木に隠れるように建っている（「駅門臨迴陌、亭子隱高葩駅」（作品番号「十」）。そして、駅の南門を直進すると河陽橋が架かっている（「門南脩路有河橋」（作品番号「二十八」）。ここから、漢詩に表された駅と離宮の関係性は、高橋の想定図を裏付けるものであることがわかる（図2-4-2）。また、院内にはサルオガセの絡んだマツがあり（作日番号「十」）、春には園内に花が咲き乱れている様子が詠まれ（「園林半灼灼」（作品番号「十一」）、窓の外からは花の芳香が伝わってくる様子が詠まれている（「花香窓外伝」（同））。

また、池にはオシドリが生息し、ヤナギが植栽されていたこともわかる（「日煖鶯驚水、風和楊柳煙」（作品番号「十二」）。発掘調査において、全体的な様相は不明だが、断片的に流れや橋、池跡の遺構が確認されており、離宮内にある程度の庭園様の施設があったことは確かであろう。

しかしながら、漢詩中に詠み込まれた景物の多くは周辺環境に関するもので、

なかでも、最も意識されていたと考えられるのは淀川と男山を中心とした景観である。具体的には、「河陽十詠」（作品番号「十五」～「二十八」）で主題となっていた「河陽の花」、「淀川の船」、「川辺の草」、「山寺の鐘」、「山崎関の柳」、「五夜月」、「淀川の鷗」、「河陽橋」などが挙げられる。また、天皇はこうした周辺環境のなかで営まれる民衆生活を非常に魅力的なものとして、身近な目線で観察した。例えば、「棹唱全聞辺俗語、漂歌半雜上都音」（作品番号「五」）や「老圃鋤遲日、商帆艤早霞」（作品番号「十」）には、淀川を行き交う船や舟運に関わる人々、洗濯をする女性たち、近郊の農村で田畑を耕す老農夫が詠まれ、「商童裹取不求利」（作品番号「三十二」）には若い商人が、「漁童搆宇、接鮫室而同隣」（作品番号「三十四」）には魚を捕まえようとする童子の様子がそれぞれ詠まれている。

嵯峨文壇の文学境としても機能した河陽は、都から隔絶されたある種の異境空間でもある。井実は、山崎を旅先の地と意識させたものは実際の距離ではなく当時の空間認識で、その地を京外、すなわち他郷と認識していたからこそ、山崎への出遊を旅とみなした、と指摘する^{一七三}。複数の漢詩中で、天皇らは自身を旅人になぞらえ、河陽離宮に宿泊した様子を詠んでいる。その中には、「松声覚後暗催聽」（作品番号「三三」）や「岸上松声眠裏雨」（作品番号「四」）など、窓の外を吹く松風の音、「曉猿悲吟誰斷得」（作品番号「二」）など、サルの鳴き声により旅愁がかきたてられる描写が複数みられた。マツに関しては「古椽松蘿院」（作日番号「十一」）から院内に実際に植栽されていたと考えられるものの、これらの文言は修辞的である。井実は旅先で見聞きする月・松・猿に都の春を思うという内容は河陽の詩境の到達点であると指摘する^{一七四}。これらは、河陽離宮について詠むときの決まりきった表現で、換言すれば、都からあたかも遠く離れたかのような非日常的空間へ身を置く心もとなさや侘しさこそが、河陽離宮の有する独自のイメージであったと考えられる。つまり、漢詩から、河陽離宮における天皇の主たる関心は離宮にあるのではなく、山崎という異境的空間にあったと推測することができる。淀川と男山を望む明媚な山崎の景観と、そこで活発に営まれた民衆生活こそが、天皇にとつて得難い興味を誘ったのである。

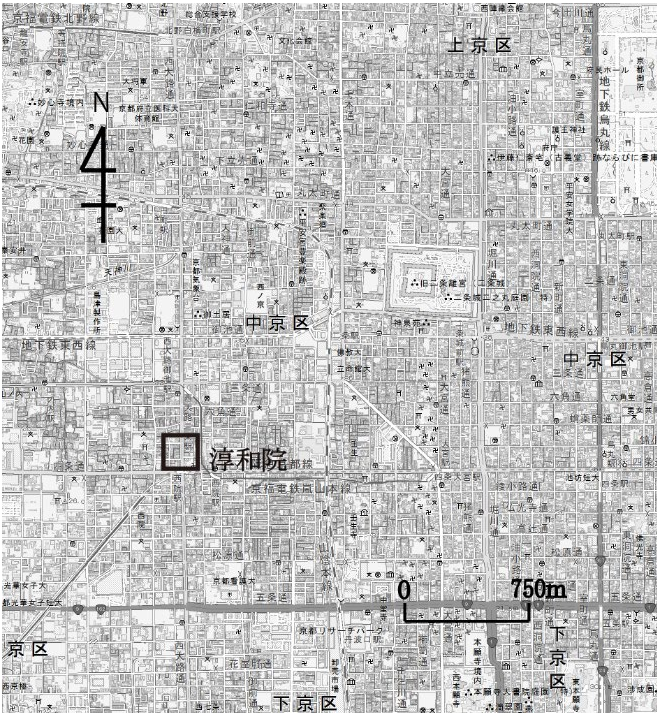
また、河陽離宮の機能としては大きく二点が挙げられる。まず水生野遊猟、あるいは交野行幸の拠点としての機能である。次に、「嵯峨文壇の文学境」としての機能である。最後に、統治する土地や民衆を実際に巡覧する場としての機能である。以上、離宮は複数の機能を有していた。そもそも山崎という土地の独自性―つまり遊猟地から近く、明媚な周辺景観を有し、活発な民衆生活が営まれている―こうした恵まれた土地であるが故に山崎駅の一画を河陽離宮として整備したのであろう。むしろ、漢詩中では、離宮を「川辺の宿」を意味する「江亭」や「江宿」、「津亭」と表現し、河陽という異境に身を置くための宿舎ともいえる描写がなされている。普段内裏にいたのでは見ることでできない統治世界を縮図的に観察し実感する、その気持ちのあり方を端的に表しており、こうした姿勢こそが、河陽離宮の漢詩に独特の旅情性を担保したのであろう。すなわち、河陽離宮の庭園が存在したことは確かであろうが、それ自体が詩宴の舞台として成立していたのではなく、民衆生活を含む周辺外部景観に主眼があり、その総体を庭園とみなしていたということが出来る。

第五節 淳和院庭園

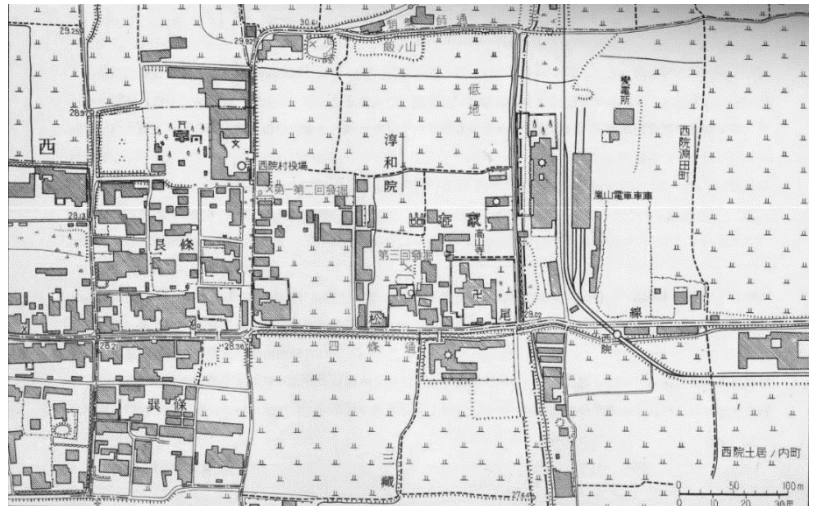
一 淳和院庭園とは

淳和院（西院）は、嵯峨天皇の弟で第五十三代天皇となった淳和天皇（在位八三三〜八三三）の離宮である。元来、淳和院は天皇が大伴親王であった時代からの邸宅であった「南池」であると考えられており^{一七五}、本稿でもその説に従う。南池は弘仁・天長年間に現れる名称で、「淳和院」として記録に現れるのは、天長十年（八三三）に淳和太上天皇の後院となつてからのことである。そのころ「西院」の異称があらわれ、この名称は現在もこの付近一帯の地名として残っている。

淳和院の立地および敷地に関して、『拾芥抄』のなかに「四条北、西大宮東、橘大后家、或云淳和院」、天長上皇離宮、今西院」とある。西田直二郎は、こ



図〔2-5-1〕 淳和院の立地（国土交通省 国土地理院 数値地図 2500 に図示）



図〔2-5-2〕 淳和院遺跡地現状図・発掘調査位置図（西田直二郎、『京都史蹟の研究』より）

の『拾芥抄』の記事と昭和二年（一九二七）の現地調査から、旧四条大路の南、旧四条坊門小路の北、旧西堀川小路の西、旧道祖大路の東に立地し、平安京右鎌倉時代に著された『続教訓抄』のなかに「南池院ト申ハ四条ナハテノ北、西ノ宮殿ノ森ノ西四町ハカリ、繩手ヨリ北へ二町余ノ程ニ島アリ、廻リハ池ナリ、但当時ハ東ノ方ニハ田ヲ作レリ、西ノ方ハ猶池ニテ侍リ、池ノ南ニモ殿ノ跡ト覺シキ処アリ、ウルハシキ御所ハ定テ池ノ北ニ南向ニコソ侍リツラメ、ユハシク広キ中島今ニ見エ侍ルメリ」といった記述がある。「西ノ宮殿」は源高明の邸宅のあった場所で、その森は俗称「戎の森」といい、その西四町許に淳和院があったとしており、こうした記述は西田の示した推定地とほぼ合致している。

なお、森蘊は『平安時代前期庭園の研究』のなかで、旧地形や建物配置の復原から、右京四条二坊九く十六町の八町を占地したとする説を提示した。また従来から、淳和院の前身である南池と淳和院は同一または近似した敷地であったことが指摘されている一方で^{一七六}、一部では大伴親王時代は四条二坊十二町のみで、その地位が上がるにつれて敷地を拡大していった可能性を指摘する説もある^{一七七}。そうしたなかで、現在は概ね同一の場所、四町の敷地で造営されたという見解が主流となっており、その場所は現在の京都市中京区西大路四条高山寺町高山寺内にあたる。西側に西院春日神社、南東隅に高山寺があり、その門前には淳和院址の石標が立っている。

南池すなわち淳和院の創建は不明だが、『日本後紀』弘仁四年（八二三）四月甲辰（二十二日）条に「幸皇太弟南池。命文人賦詩。：雅樂奏樂。賜五位已上衣被及諸王藤氏六位已下并文人等綿、各有差。」とあり、これが文献上の初見である。その後、嵯峨朝には弘仁四、五年八月に三回の行幸記録がある。弘仁十四年に淳和天皇が即位した後は「京内離宮」として使用され、天長年間にはほぼ毎年行幸があった。天長十年に天皇が淳和院において讓位すると「仙洞御所」として用いられるようになり、淳和上皇は皇太后正子と共にここに居住した。そうしたことから、承和元年（八三四）正月癸丑（二日）には朝覲行幸の記録があるが、承和年間にはそれ以外の行幸記録はみられない。そして承七年五月癸未（五日）に淳和院において上皇が崩御すると、その二年後には皇太后は剃髪し、淳和院を寺院とし在所と定めた。また、正子はその信仰心から、僧尼の保護にも熱心で、「以淳和院為道場、不改院号、安下置侍平生左右之尼上、厚充供料、永令居住、師資相承、不断修道」（『日本三代実録』）とあり、正子は淳和院を仏道修行の道場とし、平生尼を近侍させていた^{一七八}。また、貞観十六年（八七四）四月丁未（十九日）の夜に西院は失火により焼亡したが、その後再興されている。正子の没後、元慶五年十二月に恒貞親王の奏言により公卿別当が置かれ、淳和院が大覚寺、壇林寺、および嵯峨上皇・檀林皇太后・淳和皇太后の三陵を檢校することとなった。この公卿別当はやがて奨学院の別当を兼ね、江戸末まで連綿と続いた^{一七九}。

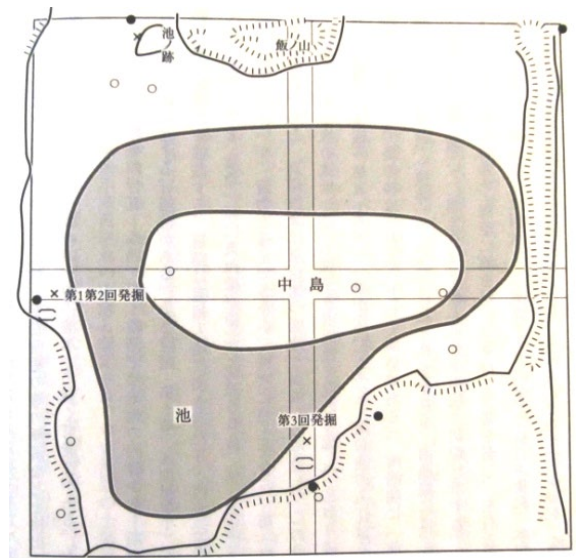


図 [2-5-3] 淳和院模式図 (西山良平, 『平安京と貴族の住まい』, 2012 より)

二 淳和院に関する先行研究と課題

淳和院（南池）に関する先行研究には、管見の限り、以下のものがある。それは、太田静六による建築史からの研究^{一八〇}、森蘊^{一八一}、飛田範夫による庭園史からの研究^{一八二}、西田直二郎^{一八三}、西山良平による歴史学からの研究^{一八四}である。

太田は、文献資料の検討をもとに淳和院の立地と庭園構成について以下の指摘をしている。一点目は、淳和院は池に臨んだ建造物を有したのであることである。その根拠は、『日本三代実録』の貞観十六年（八七四）四月丙申（二十七日）条「淳和太皇淳和太后御輦車還本院洞裏殿」の記録における「洞」という字に着目し、現在の字「淳和院」の東側に「淵田町」があり、記録にある「洞裏殿」が「淵裏殿」の誤りであると推測したことによる。二点目は淳和院が九世紀前期まで「南池」という名称であったことから、大きな池を中心とした意匠を有した可能性が高いことである。

森は、淳和院付近の昭和五年（一九三〇）の現地調査から、淳和院跡実測図を示し、以下の指摘を行った。一点目は淳和院の敷地は東西二町、南北四町の八町を占めていたこと、二点目は淳和院の敷地は平野で眺望にすぐれ、自然の林地を利用した庭園を有し、その池中に二つの中島が存在したこと、三点目は淳和院正殿が北側の中島上に南面して建ち、池跡の西南隅の宅地に涼書殿、東南隅の高山寺の西脇の宅地に洞裏殿があったと推測したことなどである。

西田は、昭和二年の発掘調査成果（図「2-5-2」）と『続教訓抄』などの文献資料から淳和院庭園の構成について以下の指摘を行った。一点目は敷地の中央付近には中島をもつ大池があったこと、二点目は北寄りの現・蛸薬師通付近に御所が南面して建っていたこと、三点目は大正七年（一九一八）頃まで十町の北西部から十四町の北東部に「飯の山」と称され、「後林」の跡地であると伝承される築山が残っていたことから、御所の北側に後林が存在していたことなどである。

飛田は、淳和院に関連する漢詩から庭園植栽について研究し、以下の指摘を行った。一点目は「夏日皇太弟南池」（御製・『凌雲集』）の「風来前浦收煙遠鳥散後林欲暮閑」という句から、池の後方には林丘があったと推測できること、二点目は園内にシダレヤナギやナシが植栽され、池にはアシが生息したこと、三点目は淳和院の池は「沼様^{一八五}」だった可能性があること、などである。

西山は、森や西田らの見解の検証、および現在までの発掘調査成果の検討から以下の指摘を行い、淳和院模式図（図「2-5-3」）を示している。一点目の指摘は前述の漢詩から淳和院には「前（南）浦」と「後（北）林」の景観が展開していたこと、二点目は承和元年（八三四）の朝覲行幸の記録から、敷地の北から南に向かって後林、正殿、中庭、前浦、南門の順に配置されていたこと、三点目は淳和院が前池型（または前池・側池併用型）であったこと、四点目は淳和院（南池）に関連する資料が『教訓抄』、『舞曲口伝』、『龍鳴抄』などに見られ、それによると南池と雅楽との関連が指摘できること、などである^{一八六}。

以上が淳和院に関連する先行研究である。淳和院一帯は多年度にわたり試掘・立会調査を含む発掘調査が行われ、柱穴や池状遺構が検出されるなど、平安時代初期の他の貴族邸宅と比べ成果が比較的大きい。一方、淳和院の庭園の

形態などに関連する文献資料は少なく、その具体的な形態や機能を知ることには困難であると言わざるを得ない。そのため、淳和院庭園を知るための補助材料として漢詩をとりあげた先行研究も見られる。しかし、その多くが一部の漢詩を参照するに止まっている。

そこで本研究では、従前の研究成果を援用しつつ、淳和院に関連する漢詩文を中心的題材として詳細に考察することで、淳和院庭園の形態的、機能的特徴に関する解釈を試みる。

三 淳和院に関する考古学的成果

淳和院一帯の試掘・立会調査としては、まず一九二七年の調査（図「2-5-1」）がある。この調査では、淳和院の西端（第1第2回発掘地点）において、



写真 [2-5-1] 平成4、5年発掘全景写真（関西文化財調査会提供）（『京都市文化財ブックス第28集 平安京』、2014年、76頁）

深さ約一・五メートルで東西方向の木樋とその直上に据えられた平安時代の瓦が検出されており、これは池から道祖大路に水を流す木樋と推定されている。また、一九九二〜三年度の淳和院南西隅の発掘調査では、南北方向、東西方向の溝が検出されており、九世紀前半の遺構として西廂付南北棟の大型建物、その北東部には鑄造関連施設があったと推定され、周辺からは多くの金属製品が出土し、西面中央南寄りでは八角柱で柱間四メートルの西門が検出されている。また、試掘調査や立会調査では、池の埋土や流路が検出されている^{一八七}。

四 文献に現れる淳和院

文献資料に現れる淳和院庭園に関して検討するため、淳和院に関連する記録を六国史から抜粋した^{一八八}。なお、本稿では嵯峨朝を中心として考察を進めるため、淳和院の初出から嵯峨天皇存命中(八〇九〜八四二)の記事に限定して、表「2—5—1」に示す。淳和院は、『続日本後紀』弘四年(八一三)四月甲辰(二十二日)条「幸皇太弟南池。命文人賦^レ詩。…雅樂寮奏^レ樂。賜五位已上衣被及諸王藤氏六位已下井文人等綿、各有^レ差。」が文献上の初見で、それ以前から大伴親王の邸宅として存在していたと考えられているが、創建に関連する記録は残っていない。この初見記事から、嵯峨天皇は皇太弟の南池において文人らと詩会を催し、雅樂を奏しんだことがわかる。弘仁期には、この行幸の他に、同書弘仁四年八月乙未(十六日)条に「幸皇太弟南池。命文人賦^レ詩。雅樂寮奏^レ樂。賜五位已上衣被。」とあり、『日本後紀』翌年八月甲寅(十一日)条には「幸皇太弟南池。命文人賦^レ詩。春宮亮從五位下清原真人夏野授從五位上、大進正六位上橘朝臣長谷麻呂從五位下。賜四位已上被、五位并春宮屬已上及六位已下王藤原氏等衣。」といった記録が残っている。このように、嵯峨朝の淳和院行幸では雅樂がしばしば演奏されたようだが、『教訓抄』の「鳥向楽」の項目には、「此曲弘仁御時、南池院行幸船樂作^レ之、鶴首向故名「鳥向楽」。…」とあり、鳥向楽は弘仁年間に嵯峨天皇の南池行幸に際してつくられた曲で、鶴首に向かって奏されたことから「鳥向楽」と命名されたという。天皇を接遇するにあたって、池に船を浮かべ、雅樂が演奏された華や

表「2—5—1」淳和院に関連する行幸記事一覧

弘仁		天長		承和		
四年 (八一三)	五年	三年 (八二六)	四年	元年 (八三四)	秋	
四月甲辰(二二日)	八月乙未(一六日)	四月壬寅(五日)	四月丁酉(六日)	正月癸丑(二日)	正月乙卯(四日)	
幸皇太弟南池。命文人賦詩。…雅樂寮奏樂。賜五位已上衣被。及諸王藤氏六位已下井文人等綿、各有差。	幸皇太弟南池。命文人賦詩。春宮亮從五位下清原真人夏野授從五位上。大進正六位上橘朝臣長谷麻呂從五位下。賜四位已上被。五位并春宮屬已上及六位已下王藤原氏等衣。	幸皇太弟南池、召文人令賦詩、賜祿有差。	幸南池。召文人有御製。皇太子以下、応製賦詩。賜祿有差。南池。遊魚食餌、群臣垂竿、効獲無數。御船就涼書殿、即召文人令賦春日閑園。賦詩者二十三人。御船就涼書殿、車駕幸南池。令文人賦詩。賜祿有差。	幸南池。召文人令賦詩。雅樂寮奏樂。日暮賜衣被。天皇幸南池。御涼書殿、命文人賦詩。文人已上、賜祿有差。幸南池。命文人令賦夏日松竹。侍從文人賜祿有差。乘輿幸南池。命文人令賦詩。視王以下六位文人以上、賜祿有差。使近衛少將藤原朝臣豐主、所獲鮮魚。獻冷然院。賜被復命。	皇帝於淳和院、讓位于皇太子。天皇御紫宸殿。賜群臣酒。有園蕃之興。訖賜親王以下御衣被各有差。是日。罷權中納言藤原朝臣吉野所兼右大將之任。命文人令賦奉淳和院。龍權中納言藤原朝臣吉野所兼右大將之任。命文人令賦奉淳和院。與後太上天皇遊獵。親王以下咸率於大藏省綿一萬屯賜群臣祿。先太上天皇御淳和院。而後太上天皇遊獵。親王以下咸率於舞。乃共昇殿。賜群臣酒兼奏音樂。左右近衛府更奏舞。既而太上天皇。以鷹鷄各二聯喚鳥大四牙。獻于天皇。天皇欲還宮。降自殿。太上天皇相送到南屏下也。	天皇朝謁先太上天皇及太皇太后於冷然院。是日。先太上天皇亦御淳和院。以相賀也。
紀 日本後	紀 日本後	紀 日本後	紀 日本後	紀 日本後	紀 日本後	

承和	七年	二月甲戌（二十七日）	夜中雷雨交切。遣中使左近衛少將極朝臣岑繼於嵯峨院。右近衛中將藤原朝臣助於淳和院。祇候先後太上天皇起居。	紀 続日本後
		五月癸未（八日）	後太上天皇崩于淳和院。春秋五十五。	紀 続日本後
		五月戊子（十三日）	勅。遣左近衛少將從四位下極朝臣岑繼。及四衛府監附志已下三十二人於淳和院。監護裝束山作義民司等。遺詔不受矣。此夕。奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村。御骨碎粉。奉散大原野西山嶺上。	紀 続日本後

かな遊興の光景がしのばれる。

淳和天皇即位後の天長年間において、淳和院は淳和天皇の京内離宮となる。天長三年（八二六）から毎年一〜二回のペースで行幸があった。例えば、『日本後紀』天長十年八月戊申（二十五日）には「先太上天皇御_二淳和院_一。与_二後太上天皇_一遊讌。親王以下咸萃_レ於_レ彼。命_二文人_一令_レ賦_二詩_一。幽居山水之題_二。兩太上天皇俱有_レ御製。以大藏省綿二万屯賜_二群臣祿_一。」とあり、淳和天皇が嵯峨上皇とともに「幽居山水」の題で文人らと詩を詠み合った様子がわかる。また、淳和朝でも嵯峨朝と同じく、主に四、八月に行幸があった。淳和院は広大な池を有していたから、暑い時期に納涼するのが通例であったのかもしれない。同書天長五年閏三月丁酉（十五日）には「幸_二南池_一。遊魚貪_レ餌。群臣垂_レ竿。効獲_二無數_一。御船就_二涼書殿_一、即召_二文人_一令_レ賦_二春日閑園_一。獻詩者二十三人。」とあり、池に船を浮かべ涼書殿へ向かう間に船上で釣魚を楽しむ様子が記されている。涼書殿に着くと文人らを召して「春日閑園」の題で詩が詠まれている。このほかの行幸でも、賦詩や釣魚などの遊興が行われた。承和年間に入ると、淳和上皇が淳和院に遷御し、淳和院は仙洞御所となった。記録のなかでは「南池」から「淳和院」に改称される。承和元年正月癸丑（二日）条には、「天皇朝覲後_二太上天皇_一於_二淳和院_一。太上天皇逢迎。各於_二中庭_一拜舞。乃共昇殿。賜_二群臣酒_一兼奏_二音樂_一。左右近衛府更奏舞。既而太上天皇以鷹鷂各_二聯_一。嗚鳥犬四牙獻_二于天皇_一。天皇欲_レ還_レ宮。降_二百殿_一。太上天皇相送到_二南屏下_一也。」とあり、淳和上皇の居住する淳和院に仁明天皇の朝覲行幸があったことがわかる。その後は行幸やそれに伴う遊興の記録はみられない。承和七年五月癸未（八日）に淳和上皇が崩じ、同月戊子（十三日）には大原野の西山嶺上に散骨された。その後、淳和院は皇太后正子により寺院となり、その死後、恒貞親王の奏

言により公卿別当が設置されるに至ったのである。

以上、淳和院が華やかな行幸の舞台となったのは弘仁・天長期のことと考えられてよいであろう。弘仁期の淳和院は同伴親王（淳和皇太弟）の邸宅であり、行幸の際は嵯峨天皇を迎え入れる接遇の施設となった。淳和天皇即位後の天長期には京内離宮となり頻繁に行幸があったと考えられる。そこでの宴では広大な池を利用して、船乗や釣魚など種々の遊興が行われていたと推測できる。つまり、弘仁期の記録に関しては三件にとどまるが、天長期の利用実態に鑑みると、行幸に相応しい規模と機能を有する庭園であったと推測できるのである。

五 漢詩からみた淳和院

平安時代初期の三大漢詩文集『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』を中心として、平安中期以降の漢詩文集『本朝文粹』、『本朝無題詩』といった文献から、淳和院に関連する漢詩を抽出・整理した。これらの漢詩および賦は全十首存在し、その内訳は『凌雲集』四首、『文華秀麗集』二首、『本朝無題詩』三首、『本朝文粹』一首となっている（表「2-5-2」）。

まず作品番号「一」は嵯峨天皇が詠んだ納涼の漢詩である。また、作品番号「二」は夏に行われた行幸の際に同伴親王によって詠まれた漢詩である。天皇の淳和院行幸に際してその喜びを表したもので、後に藤原冬嗣に書簡で贈られている。さらに作品番号「三」、「四」は同じ行幸のもので、御製（作品番号「三」）に対する小野岑守（作品番号「四」）の応制である。題詞から秋の行幸において詠まれた漢詩であると考えられる。作品番号「五」は同伴親王の漢詩で、秋の夕日に池亭から月を眺めて詠まれたものである。さらに、作品番号「六」は春の淳和院行幸における漢詩である。以上が嵯峨朝に詠まれた漢詩である。また、作品番号「七」〜「十」は本研究が対象とする年代より下がったものであるが、淳和院の庭園を考える上では参考となるものである。

表 [2-5-2] 淳和院に関する漢詩一覧

	題詞	作者	出典
一	夏日皇太弟南池	嵯峨天皇	凌雲集
二	駕幸南池、後日簡大將軍	淳和皇太弟	凌雲集
三	秋日皇太弟池亭、賦天字	嵯峨天皇	凌雲集
四	秋日皇太弟池亭、応製、賦園字	小野岑守	凌雲集
五	秋夕南池亭子臨眺。一首。	淳和皇太弟	文華秀麗集
六	春日大弟雅院。一首。	嵯峨天皇	文華秀麗集
七	秋日淳和院即事	菅原在良	本朝無題詩
八	淳和院眺望	惟宗孝言	本朝無題詩
九		大江佐国	本朝無題詩
十	晚秋遊淳和院。同賦波動水中山。	源順	本朝文粹

以下、表「2-5-2」で検討する漢詩および賦について一覧し、それぞれ原文、読み下し文、大意をとりまとめて示した上で^{一八九}、説明と解釈を付す。

作品番号「二」

「夏日皇太弟南池」

御製（嵯峨天皇）

納涼儲式南池裏

納涼す儲式の南池の裏

尽洗^二煩襟^一碧水灣

尽くに煩襟を洗ふ碧水の灣

岸影見知楊柳処

岸影見て知りぬ楊柳の処、

潭香聞得菱荷間

潭香聞くこと得たり菱荷の間。

風来前浦収^レ煙遠

風来り前浦煙を収めて遠し、

鳥散後林欲^レ暮閑

鳥散り後林暮れなむとして閑けし。

天下共言貞^二万国^一 天下共に言ふ万国を貞すと、
何ぞ勞^二羽翼^一訪^二商山^一 何ぞ勞かむ羽翼して商山を訪はむことを。

〈大意〉

暑さを避けて涼みをする東宮の南池のほとり、煩わしい心をすっかり洗い落してしまふこの青い水を湛えた池の浦で、池岸に映る水影をみてはヤナギの所在を知り、池淵の辺りににおう香を聞いては、それがヒシヤハスのある辺りから漂うことを知ったのである。風が吹いて来て、前の池の入江に立ち込めていた靄が収まり遠くまで眺めることができるようになり、鳥が立ち去って、後ろの林は暮れようとして静かである。天下の人々は等しく、「天下に大善がある」と天下は正しくなる」と言ふ、もちろん皇太子もこのような徳を備えているのだが、どうしてわざわざ苦勞してまで鳥の翼に乗って（皇太子の補佐役を求めるとして）、商山という四人の隱遁者の住む山を訪れる必要があるだろうか。

〈説明・解釈〉

作品番号「二」は嵯峨天皇による作で、第一句「納涼儲式南池裏」から淳和院での納涼の様子を詠んだものである。このことから夏期の行幸であることがわかる。小島は弘仁四年（八二二）四月甲辰（二十二日）の作であると推測している^{一九〇}。

第二句「尽洗煩襟碧水灣」には青い水を湛えた灣が詠まれ、青々とした水は日々の憂さを洗い流し、気持ちを一新させるような清らかさであったようである。第三、四句「岸影見知楊柳処、潭香聞得菱荷間」は池岸にヤナギが植栽され、池の周辺にハスやヒシの香りが漂う様子を詠んでいるが、これについて小島憲之は盛唐・孟浩然の「澗影見松竹、潭香聞菱荷」〔夏日浮舟過滕逸人別業〕を元にして指摘している^{一九一}。しかし、その内容に関しては、「松竹」から「楊柳」に詠み替えられていることから、比較的現実に即したものであると考えられ、淳和院の池岸にシダレヤナギ、堤にハスが植栽され、池の洲にヒシなどが生育していることは実景を反映したものと考えてよいだろう。また、第五、六句「風来前浦収煙遠、鳥散後林欲暮閑」は対句になっており、正殿の

南側（前）に池があり、北側（後）に樹林が広がる様子を示していると考えてよいだろう。これに関しては飛田、西山が着目し、庭園の空間構成の一端を表わす重要な手掛かりであると指摘しており^{一九三}、その主張は妥当なものだと考えられる。

作品番号「二」

「駕幸南池、後日簡大將軍」 令製（淳和皇太弟）

南池葉暗惟初密

南池葉暗く惟に初めて密し、

聖主追_レ涼過_二小臣_一

聖主涼しきを過ひて小臣に過ぎらす。

此地從來天臨_レ處

此の地從來天臨の處、

林花再得_レ遇_二陽春_一

林花再び陽春に遭ふこと得たり。

蕪蹊更_レ禱_二先時跡_一

蕪蹊更に禱る先時の跡、

旧構還成昔日新

旧構還成す昔日の新しきを。

海岳鴻恩何以報

海岳の鴻恩何を以つてか報いむ、

願当_三粉_レ骨化_二灰塵_一

願はくはまさに粉骨して灰塵に化るべし。

〈大意〉

我が南池は木の葉の色がやつと密に茂り始め、林は光を通さないほど鬱蒼としている。嵯峨天皇は涼しさを求めて小臣である我が邸の南池にお立ち寄りになった。ここは従来行幸の地である。春は過ぎたが、今回再び行幸を仰ぎ、この林泉の花はまたも春（天皇の恩恵）に遇うことができた。雑草の生い茂る小道は刈り払われ、かつての行幸のままの跡が見えるし、旧構えの建物もまた往時そのままのような新しさを保っている。深い海や高い山にも比すべき大きな御恩に対して、何を以てこれに御報いしようか、骨を粉にして灰や塵になるまで君のために御尽くしたい。

〈説明・解釈〉

作品番号「二」は大伴親王（淳和皇太弟）による漢詩で、後日藤原冬嗣に手紙に付けて贈られた作である^{一九三}。第一句「南池葉暗惟初密」から、だんだん

と樹林の葉が茂りつつある様子、あるいは第二句「聖主追涼過小臣」より納涼を行うために淳和院を訪れた様子から、これが詠まれたのは初夏の行幸であることがわかる。初夏の行幸といえ、弘仁四年（八二二）四月甲辰（二十二日）が挙げられる。小島は作品番号「二」を弘仁四年四月の作とするが^{一九四}、作品番号「二」がそれにあたる可能性も考えられる。

また、第四句「林花再得_レ遇_二陽春_一」では、花木が植栽された林が詠まれており、これについて小島は「陽春」は天皇の恩恵を示すもの、「林花」は皇太弟の喜びを表すものであると指摘している。これは、大伴親王（淳和皇太弟）が兄・嵯峨天皇の行幸を喜ぶ気持ちを春の訪れに例えて詠んだもので、実際の季節とは合致しない。ここでモチーフとなった「林花」は、西山が指摘した正殿後背の樹林をイメージしたと考えることもできる。また、第五、六句「蕪蹊更禱_二先時跡_一、旧構還成昔日新」から、行幸にあたって行幸路の雑草が刈り払われ、古い構えの建物も往時のように新しく整えられたことが詠まれており、前述のように、淳和院初の行幸であると考えれば、皇太弟の喜びも一入であったことがうかがえ、その喜びを十二分に表わした一首であるといえよう。

作品番号「三」

「秋日皇太弟池亭、賦天字」 御製

玄圃秋云肃

玄圃秋云に肃しく、

池亭望_二爽天_一

池亭爽天を望む。

遠声驚_二旅雁_一

遠声旅雁に驚く、

塞引_二聽_レ林蟬_一

塞引林蟬に聴く。

岸柳帷初断

岸柳帷初めて断ゆ、

潭荷葉欲_レ穿

潭荷葉穿たれむとす。

肃然幽興_レ處

肃然に幽興の處にして、

院裡滿_二柔煙_一

院裡茶煙滿つ。

〈大意〉

東宮の御苑の辺りは秋が厳しく、池辺の亭から爽やかな秋空が望まれる。旅

の空を飛ぶ秋雁の遠音に驚き、寒そうな声でなく林の秋蟬の声に耳を傾ける。池の岸辺の柳の茂った葉はやっと散り始め、池の淵の蓮の葉は破れようとしている。ここは物寂しく、静かな趣のあるところであって、池亭の庭の辺りには茶煙が立ち込めている。

〈説明・解釈〉

作品番号「三」は嵯峨天皇による漢詩で、秋の淳和院の池亭において「天」を韻字として詠まれたものである。弘仁年間の秋の行幸は、弘仁四年八月乙未（十六日）、弘仁五年八月甲寅（十一日）があるが、小島は前者で詠まれたものと推測している^{一九五}。

第一句にある「玄圃」とは崑崙山にある仙人の住処のことで、淳和院をこれに見立てて称賛し、第七句「肅然幽興処」からこの庭園は仙境のような幽深な趣があったことが推測できる。また第二句「池亭望爽天」から、園内には池に臨んで池亭が設えられていたことがわかる。第五句「岸柳帷初断」から、池岸にシダレヤナギが植栽されていたことがわかり、第六句「潭荷葉欲穿」には、入江にハスが生育していたことが詠まれている。なお、第三、四句「遠声驚旅雁、塞引聴林蟬」は対句である。雁や蟬は秋の漢詩に多用されるモチーフで、聴覚から秋の侘しさ表現する修辞表現である^{一九〇}。しかし秋蟬が鳴く「林」は、作品番号「二」の「後林」と同じく正殿の後ろの樹林を示す可能性があり、一部実景が取り入れられたものと解釈できる。さらに、第八句「院裡滿茶煙」は「喫茶」が行われたことを示唆するものである。

作品番号「四」

「秋日皇太弟池亭、応製、賦園字」 内蔵頭従五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守

高秋八月気將レ肅

高秋八月気肅しくあらむとし、

叡興幽尋太弟園

叡興幽尋したまふ太弟の園。

占レ地猶居 帝城裏

地を占へて猶し帝城の裏に居

杯池体勢絶レ煩喧

杯池の体勢煩喧を絶つ。

梨庭帶レ露冷菓落 梨庭露を帯びて冷菓落つ、
蘆浦生レ風水葉翻 蘆浦風生りて水葉翻る。
憶レ昔欲レ論 吳季重 昔を憶ひて吳季重を論はむとするも、
南皮之賞不レ足レ言 南皮の賞言ふに足らず。

〈大意〉

天高く澄む秋八月、大気が寒く厳しくなるうとするころ、天子は秋を賞美したまう御心によつて皇太弟の静かで深い御苑を尋ねられる。土地の吉凶を占つて今もやはり帝都の内に位置を占め、その林泉は世間の煩わしさと騒がしさを断ち切っている。梨の庭園には露を帯びた冷たい果実が落ちていて、蘆の生えた池の入江には風が起こつて水辺の草が翻る。北魏の文帝が文人吳季重と南皮（河南省南皮県）に遊んだ昔をしのいで、彼のことを語りたいとは思ふものの、その南皮の遊びも今日の行幸に比較すると言うに足らないほどだ。

〈説明・解釈〉

この作品は御製（作品番号「三」）に対して小野岑守が詠んだ応制である。

第二句「叡興幽尋太弟園」から、淳和院庭園は静かで幽深な様子であることと、また第四句「林池体勢絶煩喧」から、杯のような池が世間の煩わしさを遮っていることがわかる。そうした池の洲には、第六句「蘆浦生風水葉翻」とあるように、アシの群生が広がり、風が吹く度にざわざわと音をたてて揺れていたことがわかる。このように池周辺の植栽はやや鬱蒼とした様子である。飛田は、淳和院の池が「沼様」と称される意匠であった可能性を指摘しているが、詩中の様子から見ても妥当な解釈であろう。また、第五句「梨庭帶露冷菓落」から、園内には梨庭と詠まれる、ナシを中心とした一画があったと推測できる。飛田は、平安時代前半の貴族邸宅において建物近くにナシやノイバラが植栽されたことを指摘しているが、この漢詩の場合「梨庭」に近似した語句である「梨園」を指す可能性も指摘しておきたい。「梨園」^{一九七}とは、唐の玄宗皇帝が音楽や舞踊を教えた場所にナシが植栽されていたことから音楽や舞踊を学ぶ者を「梨園の弟子」といい、転じてその世界を指すよ

うになった。平安時代の漢詩文で「梨園」が出てくるのは五首、「梨庭」は当詩一首のみで、近似する語句「梨園」を含む漢詩はこの故事にもとづき、全てが音楽や舞踊に関連している。実際に、弘仁・天長年間のいくつかの淳和院行幸では雅楽寮による演奏が行われたことが記録に残っており、西山が指摘したように淳和院は雅楽との関連が深い。そうしたことから、詩中の「梨庭」は「梨園」の意味を内包し、それが意匠に反映されていた可能性もある。さらに、第七、八句「憶昔欲論吳季重、南皮不足言」にある「南皮」とは、魏文帝が文人・吳季重と遊んだという文学上名高い土地であり、その遊びよりも今日の南池行幸の方が意義深いと結び、淳和院行幸を称賛している。

作品番号「五」

「秋夕南池亭子臨眺。一首。」 令製

池亭氣冷秋風度

池亭氣冷やかにして秋風度り、

吹入二波心二乱二水文二

吹波心に入りて水文を乱す。

明月東山看漸出

明月東山に看漸くに出づ、

莫愁白日巖頭曛

愁ふること莫れ白日巖頭に曛るるを。

〈大意〉

池に臨んだあずまやは、秋の気が冷やかで秋風が吹き渡る。風が池の波の中心に入って水紋を乱す。明月が東の山に次第に昇ってきて、照り輝く太陽が巖のほとりに暮れてゆくのを憂えるには及ばない。

〈説明・解釈〉

作品番号「五」は大伴親王（淳和天皇）による漢詩で、秋夕の池亭からの眺望を詠んだものである。秋の淳和院行幸は、弘仁四年八月乙未（十六日）と弘仁五年八月甲寅（十一日）がある。第一句「池亭氣冷秋風度」から池亭があり、ここで観月が行われていることから、満月であった弘仁四年八月乙未（十六日）に詠まれた漢詩とも推測できる。

第三、四句「明月東山看漸出、莫愁白日巖頭曛」では、作者らのいる池亭の前に池の水面が広く展開し、太陽が西の巖のほとりに沈みゆき、月が東山から昇る様子が映り込んでいようである。第二句「吹入波心乱水文」では、風が水文を起す様子が詠まれ、池亭から池の水面に映る景色の移り変りを眺めている。平安時代、月を直視することは忌むべき事であると考えられており、この漢詩の第一句もそうした事情に通じると推測できるのである。ここで平安時代の観月に関していくつかの例をみていきたい。古くは『竹取物語』のなかに「月の顔見るは忌むこと」^{一九八}、あるいは「月な見たまひそ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ。」とあり、月を直視することと避けるべき事柄であったことがわかる。また、『源氏物語』（「宿木」）のなかに「おい人どもなんと今は入らせたまひね、月みるはいみはべるものを、あさましうはかなき御くだものをだに、御らんじ入れねば、いかにならせ給はむ」^{一九九}という一節がある。このような見方の一端には『白氏文集』の影響があったとする説^{二〇〇}もあるが、現在のところ、この時代において何故月を直接見ることが忌むべきことであったのかという問いに応える明確な回答は得られていない。一方で、平安時代初期には観月の宴が催され、宮廷行事として定着した一面もある。醍醐朝の延喜九年（九〇九）閏八月己巳（十五日）には観月の詩宴が催され、このときの漢詩「夜、太上法皇召文人於亭子院。令賦月影浮秋池之詩。」（菅淳茂）のなかでも、池に映る月影が詠まれている。作品番号「五」が詠まれた嵯峨朝において、観月は宮廷行事としてはまだ成立していないが、この行幸は、仲秋の月の興趣を味わうための、平安時代における最も初期の行幸のひとつであったとも推測できる。

作品番号「六」

「春日大弟雅院。一首。」 御製

詩家有興來雅院

詩家興有りて雅院に来る、

雅院由来絶世閑

雅院は由来世を絶ちて閑けし。

陽砌雖看新柳色

陽砌新柳の色を見ると雖も、

陰階常点旧苔斑

陰階常に旧苔の斑を点く。

就_レ暖晴花開_二簾外_一 暖けきに就く晴花簾の外に開く、
欲_レ巢時鳥啄_二庭間_一 巢はむとする時鳥庭の間に啄む。
此地端居_レ翫_二風景_一 此の地に端居して風景を翫ぶに、
寂寥人事暫無_レ関 寂寥にして人事暫くも関ることなし。

〈大意〉

詩人は春の興趣に誘われてこの雅院にやってきた。この雅院はもともと世間との交渉を断ち切って閑静である。南に面した軒下の石畳の辺りには柳が新鮮な色を見せているが、北に面した階の辺りには古びた苔がまだらに点々とほりついている。暖かく晴れた日の花は簾の外に咲き、巢を作ろうとする春の頃の鳥は庭の中でものを啄む。この雅院に住まいを正して居て春の日の風光を賞美するにつけて、静寂なこの地は煩わしい世間俗事との交渉にも無関係である。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、嵯峨天皇によって詠まれたもので、春の淳和院行幸の際の作である。

第一句「詩家有興来雅院」から、詩人らは春の興趣を求めて淳和院に行幸した。第二句「雅院由来絶世閑」は、淳和院が京内にありながら、世間との交渉を断つたような静かな邸宅であることを示している。また、第三、四句「陽砌雖看新柳色、陰階常点旧苔斑」では、南に面した軒下の石畳辺りに植栽されたヤナギが葉を伸ばし始める様子と、北向きの階に生えるコケの様子が対句で描写され、淳和院の春の訪れを詠む。さらに、「就暖晴花開簾外、欲巢時鳥庭間」には、淳和院の庭において、春の日差しを浴びて花が咲き、鳥が巢作りの材料を啄む様子が対句で詠まれている。最後に、第八句「寂寥人事暫無関」では、第二句に続き、淳和院が俗世を離れた静寂な邸宅であることが再度強調されている。

以降にみていく作品番号「七」～「九」は平安後期に成立した『本朝無題

詩」収録の漢詩、作品番号「十」は『本朝文粹』に収録された賦である。これらの漢詩が詠まれた頃、淳和院には公卿別当が設置されていた。平安時代後期になり、嵯峨朝に造営された庭園の形態が必ずしも保たれていたとは限らないが、漢詩に詠まれた庭園の様相について検証していきたい。

作品番号「七」

「秋日淳和院即事」

菅原在良

季商九月興難_レ関

季商九月興闌き難く

偶伴_二詩朋_一動_レ筆端_二

偶詩朋を伴ひて筆端を動かせり

仏閣年深香火旧

仏閣年深くして香火旧り

禅窓秋暮衲衣寒

禅窓は秋暮れて衲衣寒し

荒籬逼_レ砌对_二東菊_一

荒籬砌に逼りて東菊に対かひ

遠岫繞_レ牆望_二上闌_一

遠岫牆を繞りて上闌を望む

山名也

今到_二勝形仙洞地_一

今勝形仙洞の地に到り

放遊終日感_二心肝_一

放遊して終日心肝を感ましむ

〈大意〉

秋も末の九月は興趣尽き難く、こうしてひよっこ詩友と詩作を共にすることになった。この仏閣は歳月を重ね、香を焚くにも風情があり、窓辺に秋も暮れ、墨染の衣も寒く感じられる。捨て置かれたまがきは東の軒先にあり、菊が望まれる。遠くの山は垣根を囲む様で、上闌山が眺められる。今こうして優れた仙境ともいふべき地に来て、思うままに遊び、一日中哀れを噛みしめたのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「七」は、菅原在良の漢詩で、九月の西院（淳和院）を詠んだものである。作者である菅原在良（一〇四一～一一二二）は平安時代中期の歌人である。文章博士、撰津守、鳥羽天皇侍読などを経て従四位上式部大輔に至り死後

に従三位が贈られている。当詩が収録されている『本朝無題詩』のほかに、『本朝統文粹』、『本朝小序集』に漢詩が収録されている。

まず第三句「仏閣年深香火旧」から、この漢詩が詠まれたときは、淳和院はすでに仏閣になっていたことがわかるが、第七句「今到勝形仙洞地」は淳和院を仙境にも匹敵する勝地であると称賛する表現であり、往時の庭園の趣を残していると考えてよいだろう。第五、六句「荒籬逼砌对东菊、遠岫繞牆望上闌」は、古い籬が東の軒下に捨て置かれ、そこにキクが生えており、遠くには山並みが囲むように見える様が詠まれているが、これは陶淵明の「采菊東籬下、悠然見南山」〔飲酒 其五〕の一節を原典に引き詠まれたものと考えられる。そのため、文飾を差し引いて考えなければならぬが、森は、発掘調査において淳和院の門の位置が不明瞭であったことから、周囲には厳重な牆壁を築くことなく土塁または竹籬であった可能性を指摘しており^{二〇}、実景を織り交ぜた描写である可能性もある。

作品番号「八」

「淳和院眺望」

惟宗孝言

秋深眺望有「何事」

秋深き眺望何事か有る

酒は十分詩一篇

酒は是れ十分詩は一篇

日脚西低「寒野外」

日脚は西のかた寒野の外に低く

風情旁送「暮山前」

風情は旁く暮山の前に送る

遥村雲隔蔵猶見

遥村雲は隔つとも蔵れては猶は見れ

遠水流織断又連

遠水流は織くして断たれては又連なれり

性耄心傭雖「興少」

性は耄ひ心も傭く興少しと雖も

適逢「老友」涙潜然

適に老友に逢ひて涙潜然たり

江掃部会合。故云。

〈大意〉

秋深き景色を眺めつつ、何をするかといえ、たつぷりある酒を酌み、詩一首を成すことである。日は西に、秋の荒涼とした野の彼方に傾き、暮れゆく山

の前に風情が感じられる。遙かな遠くの村は雲に隠れては現われ、遠く望める川筋は細く見えたり隠れたりしている。この身は老いて気だるい気分だが、折しも大江佐国に逢うことができ、涙のこぼれるのをとめられない。

〈説明・解釈〉

作品番号「八」は惟宗孝言の漢詩で、秋夕の淳和院からの眺望を詠んでいる。作者である惟宗孝言は平安時代中後期の官吏で漢詩人でもある。平安期の優れた詩人として、大江佐国とならび称される人物である。「江掃部会合。故云。」から大江佐国が掃部頭となった延久年間から、生存が確認できる応徳三年（一〇八六）の間の作品であると考えられている^{二〇}。

第一句「秋深眺望有何事」は、作者が淳和院から秋景を眺望している様子を示し、第二、四句「日脚西低寒野外、風情旁送暮山前」から、秋の荒涼とした野とその向こうに見える山に日が傾く様子を趣深いものとして眺めている様子がわかる。第五句「遥村雲隔蔵猶見」は遠く雲に見え隠れして村落が見える様子を示し、第六句「遠水流織断又連」から、遙かむこうに川の細流が望めることがわかる。このように、平安時代後期の淳和院は遠く眺望が望め、遙か遠くの村落や小川の様子が漢詩中に具体的に詠まれている。その背景として、慶滋保胤が著した『池亭記』のなかの「：西京は人家漸くに稀らにして、殆ど幽墟に幾し。人は去ること有りて来ること無く、屋は壊ること有りて造ること無し。…」^{二〇三}という記述をみておきたい。これは十世紀後半の右京の様子である。人家はほとんどなく、ぼろぼろの廃墟のようになっていて、気もなない様子である。右京は土地が低く沼沢や小さな泉が多い湿地帯であったため、都市造営に適さなかつたのである。『今昔物語集』（巻第二十六・本朝付宿報）「兵衛佐上綾の主、西八条に於いて銀を見得る語、第十三」^{二〇四}には九世紀の淳和院周辺の様相を示す部分がある。ここでは、「：然て、西の四条よりは北、皇賀門依り西に、人も住まぬ浮のゆうゆうと為る、一町余の所有り。其こを「直幾許も為じ」と思ひて、直只少しに買ひつ。主は浮なれば、田畠にも否作るまじ、家も作るまじければ、不用の所と思ふに、直少しにても買ふ人の有れば、「者かな」と思ひて売りつ。…」と描写されている。ここで、「浮のゆうゆうと為

る」とは泥湿地でぶよぶよと水分を含んでいることを指す。この土地は田畑にも家を建てるにも適さない役に立たない土地であるから、売り手は「この土地を買うのはどんな物好きな人物だろう」と不審がついている、という一節である。この土地は、西田が検証した『海青楽』の記事にある「西ノ宮」のことで、この西ノ宮は淳和院の東四町の場所にあたる。この漢詩が詠まれた頃には、淳和院が立地した右京は衰退が一段と進んだことで、周辺の眺望が開けていたと考えられる。

作品番号「九」

大江佐匡

淳和旧院眺望日

淳和旧院にて眺望する日

日景悠揚欲暮中

日景悠揚として暮れなんとする中

古渡南横迷遠水

古き渡は南に横たわりて遠水に迷ひ

秋山西繞似屏風

秋の山は西に繞りて屏風に似たり

賓鴻出塞残雲薄

賓鴻は塞を出でて残雲薄く

鷹隼撃林一葉紅

鷹隼は林を撃ちて一葉紅し

宿癖難愈詩是業

宿癖愈し難く詩は是れ業

少年莫笑櫛頭蓬

少年笑ふこと莫かれ頭の蓬を櫛ることを

〈大意〉

この古い淳和院で眺望する秋の日、夕日は遠く光を弱め暮れようとしている。古い船着き場は南方に横たわり、そこから川はどこへ流れゆくのか遠く茫漠としている。秋山は西方にとりまき、屏風のような。空には薄く雲が残って、雁は辺塞の地から飛び来て、秋でも鷹隼は紅葉の林を襲っている。長年の詩作の癖はいかんともし難いことだ。年若き方々よ、こうして乱れ髪をとかず老人を、どうか笑わないでくれ。

〈説明・解釈〉

この作品の作者である大江佐匡（一〇四一〜一一二一）は平安時代後期の学者である。和歌、漢詩はもとより、歴史や兵学にまで通じていた。「江家次第」、「本朝神仙伝」など著書も多い。後三条、白河、堀河天皇の三代に信頼が厚かった。

第一、二句「淳和旧院眺望日、日景悠揚欲暮中」から、作者は夕暮れ時に淳和院から周辺を眺望している様子がわかる。また、第三句「古渡南横迷遠水」には、遠い川にかかる古い船着き場が眺望できることが詠まれている。

この「古渡」は、佐比川にあった「佐比渡」のことであると推測できる。当時、鴨川と桂川が合流する塔ノ森一帯は佐比河原と呼ばれていた。この河原の佐比川側には佐比橋があり、渡河地点を佐比渡と呼び、古来は交通の要衝でもあった。「中土京師内外地図」には淳和院の西側を西堀川がまっすぐに南流し、佐比川と合流する様子が描かれており^{二〇五}、当時の右京の様子と考え合せると、「遥村雲隔蔵猶見、遠水流織断又連（作品番号「八」）に詠まれた村落や河川の眺望が推測できる。また、第四句「秋山西繞似屏風」は院の西方が屏風のような山に圍繞されている様子を示している。これは、「遠岫繞牆望上闌（作品番号「七」）や「風情芳送暮山前（作品番号「八」）と同じ状況を示し、京都盆地の西限である愛宕山から天王山に続く山並みの眺望を指す。こうしたことから、平安時代中期の淳和院では、西方に連なる山並みが見どころのひとつであったと推測できる。さらに、第六句「鷹隼撃林一葉紅」はタカやハヤブサが獲物を捉えるために林へ急降下する様子を詠んでいる。ここで詠まれる林は作品番号「二」の「後林」と同じもので、「飯の山」を指すと考えてよいだろう。

作品番号「十」

「晚秋遊淳和院。同賦波動水中山。」 源順

淳和院者

淳和院は、

橘太后之別宮也

橘太后の別宮なり。

太后落鰭入道之日

太后鰭を落とし道に入りたまひしの日、

一掃椒庭之塵^一

一たび椒庭の塵を掃きて、

長住「蓮臺之月」

爾來人事雖レ訛

地勢如レ舊

軒檻重重

碧波亭之構不レ異

池塘眇眇

青草湖之様相同

雖「彼崐閬」

何以加レ之

矧亦水銜「山影」

山任「波心」

底深則山又深

波動則山又動

誰謂巖靜

轉「數仞於一池之秋」

誰謂嶺高

浸「青黛於綠潭之曉」

是以輕漾卷兮微微

崎嶇吐レ雲之色頻蕩

細文鋪兮瑟瑟

崔嵬戴レ石之勢不レ閑

則知強楚拔レ山之力

不レ如「季商吹レ水之風」

…(後略)…

長く蓮月の臺に住す。

爾來人事訛れりと雖も、

地勢舊のごとし。

軒檻重重たり、

碧波亭の構異ならず、

池塘眇眇たり、

青草湖の様同じ。

彼の崐閬と雖も、

何を以てかこれに加へん。

矧んや亦水は山影を銜み、

山は波の心に任せり。

底深ければ則ち山又深く、

波動けば則ち山又動く。

誰か謂ふ巖静なりと。

數仞一池の秋に轉ず。

誰か謂ふ嶺高しと。

青黛を綠潭の曉に浸せり。

是を以て輕漾卷きて微微たり、

崎嶇雲を吐くの色頻りに蕩く、

細文鋪きて瑟瑟たり、

崔嵬石を戴くの勢閑かならず。

則ち知りぬ強楚の山を抜くの力、

季商水を吹くの風にしかざるを。

…(後略)…

〈大意〉

淳和院は橘太后の別宮である。太后が落飴入道の日、俗世の塵を一掃し、仏門に入られた。その後人々の往来は少なくなつたとはいえども、地勢は昔と変わらない。軒檻は重壯で碧波亭の佇まいも昔のままである。池の堤は遙か遠く

に望め、青草湖の様子も変わらない。あの崐閬(仙人の住処)といえども、どうしてここに何を加えようというのか、いや加える必要はない。水は山影をふくみ、山影は水心に任せてゆらゆらと動く。池底が深ければ、水に映り込んだ山もまた高く聳え、波が動けば山が動く。誰が巖静などというのだろうか、數仞(中国古代の高き深さの単位)をころろと変えるのは池に映る秋の様子である。誰が嶺高だと言うのか、青黛(藍染めなどに使う青い染料)を侵すのは水を深く湛えた淵に浮かぶ暁である。さざ波が起こり、険しい山から様々な雲が湧く。風で細かい水文が起こり、靈妙な築山と石組がゆらめく。すなわち、山を貫くほどの力は水面を吹く風の力より弱いことを知るのだ。(以下略)

〈説明・解釈〉

作品番号「十」は源順による賦である。源順(九一一〜九八三)は平安時代中期の学者であり、漢詩人としても著名で、三十六歌仙の一人である。また、著書には『和名類聚抄』がある。

この賦は平安時代中期に詠まれたもので、「爾來人事雖訛、地勢如舊」とあるように、往時のような賑わいはないものの、淳和院の地勢は昔と変わらないことがわかる。この漢詩が詠まれた頃にはすでに寺院となり往時のような人々の往来もなくなっていたようである。なお、「橘太后之別宮也」に関しては、『拾芥抄』(中、宮城部、諸院)に「淳和院(天長ト三上皇離宮、今西院、或云橘太后宮)」と示されており、淳和院を指すと考えてよいだろう。文飾による誇張表現は差し引いて考えねばならないが、寺院となつても建築や庭園の様子は昔と変わらず(地勢如舊)、欄干を張り巡らせた重厚な正殿や堤が遙か遠くに見渡せる、大きな池も往時の姿を保っていたようである。「軒檻重重、碧波亭之構不異」から欄干が重壯にめぐらされ碧波亭の構えも、「池塘眇眇、青草湖之様相同」から池の堤は遠くまで続き青草湖の様子も往時のままである様子を詠んでいる。つまり、詩中では正殿を「碧波亭」、池を「青草湖」と呼ぶが、どちらも中国の名勝を引く^{二〇六}。前者は現在、浙江省湖州市にある。『白蘋洲五亭記』(白居易)のなかで「湖州白東南二百步、抵霽溪、溪連汀洲、一名白蘋、…至開成三年、弘農楊君為刺史、乃疏四渠、濬一池、樹三園、構五亭。」とある。

その五亭の内のひとつが碧波亭で、「狎清漣者、謂之碧波亭」と記されている。また、後者は『荊州記』のなかに「巴陵南有青草湖、周廻百里、日月出没其中。

湖南有青草山故因為名」とあり、太陽や月が昇り沈んでいく様子が映り込むほど広々とした湖であった。つまり、淳和院庭園は「青草湖」にも例えられる広大な池を中心としたものであったと詠まれているのである。正殿が五亭のなかから「碧波亭」に例えられたのも、正殿が池に接し、水面に起こるさざ波まで間近に見ることができると推測できることである。またこの池を描写したのもとして、作品番号「五」において西に沈む太陽と東から昇る満月が水面に映る様子（明月東山看漸出、暮愁白日巖頭曛）があり、これは中国の青草湖の様子とも共通点が見出だせる。淳和院の立地した右京は左京と比較して開発が遅れ人家が少なく、山々を始めとする周辺環境が眺望できる状況であったことも、この条件を満たす重要な要因であったと推測できる。さらに、こういった庭園景観が「崑閬」（仙人の住処）にも例えられ、仙境のごとくであったとも詠まれている。そのような庭園のなかで最も強調されているのは池に映り込む山影や庭園景観の妙である。「底深則山又深、波動則山又動」から、池が大変深く、そこに映り込む築山の影もまた高く見え、波の動きに合わせてゆらゆらと揺らめく様子を觀賞していることがわかる。「浸青黛於綠潭之曉」は夜の池の色を「青黛」（藍染に使う青い染料）に例え、だんだん空が白んでくるにつれて水色が変化する美しさを詠む。また、「是以輕漾卷兮微微、嶠嶠吐雲之色頻蕩」は、波が巻き起こると険しい築山の影から雲が湧くごとく水色が広がる様子を示している。さらに、「細丈鋪兮瑟瑟、崔嵬戴石之勢不閑」は、細かい水文が起こり、築山の影がゆらめく様子を示す。この「崔嵬戴石之勢」^{二〇七}とは、石組みが施された険しく高い山を示すと考えられ、「崎嶇」と合わせて考えても、峻険で切り立った築山だったと推測できる。この築山が映り込む池は「青草湖」に例えられたが、もともとの青草湖は湖の南にあった青草山が名の由来となっている。同様に、淳和院の池と築山も互いに補完し合う対の関係であったのかもしれない。

以上のことから、寺院となり人の行き来もまばらとなった淳和院においても、建築、庭園ともに形態が往時の趣をとどめていたことがわかる。また、具体的

な庭園構成としては、深く広がりのある池を中心として、険しく石組をほどにした築山があり、正殿も池のほど近くに建てられていたであろうことが窺える。

六 小括

弘仁・天長期の淳和院行幸は、ほとんど初夏から秋（四、八月）といった暑い時期にあったことが記録から見て取れる。漢詩の「納涼儲式南池裏」（作品番号「一一」）、「聖主追涼過小臣」（作品番号「一二」）といった表現からも、淳和院行幸の大きな目的の一つが「納涼」であったことが推測できる。嵯峨朝の淳和院行幸に際しては、弘仁四年（八一三）四月甲辰（二十三日）条、弘仁四年八月乙未（十六日）条の記録からも見えるように、雅楽寮による演奏が行われることもあった。また、池に映り込む月を眺める観月（作品番号「五」）も行われている。さらに、「院裡滿茶煙」（作品番号「三」）は行幸に際して「喫茶」が行われた可能性を示唆している。嵯峨朝の庭園に関連する漢詩のなかで「喫茶」に関して詠まれた例は少なく、淳和院のほかに関院に三例と嵯峨院に一例が詠まれている。これら喫茶が詠まれたすべての漢詩に接遇の意識が表わされており、淳和院においても同様である。つまり、嵯峨朝の淳和院庭園における最も重要な機能として、嵯峨天皇を接遇するための施設としての一面が挙げられる。次に、漢詩からわかる庭園の構成と意匠についてみておきたい。その中でもまず、最も重要な構成要素としては池である。この池は、「尽洗煩襟碧水灣」（作品番号「二」）から青々とした清水が湛えられていたことがうかがえ、広大な池として知られる中国の「青草湖」（作品番号「十」）にも例えられている。こうした池面の広がり、観月（作品番号「五」）や、水に映り込む築山や景物の影を觀賞すること（作品番号「十一」）に適していたのである。文献資料によると、嵯峨朝の淳和院ではしばしば雅楽が奏され、淳和院行幸において鶴首に向かつて演奏する『鳥向楽』が作られるなど、池の存在感は大きく、「南池」という呼称からも、池が庭園構成の中心をなしていたことは確かであろう。試掘・立会調査においても、具体的な池の規模や意匠はわかっていないが、池の埋土や流路を検出しているところもある。

また、飛田、西山も指摘するように正殿の背後には「後林」（作品番号「二」）があったと考えられる。「塞引聴林蟬」（作品番号「三」）や「鷹隼撃林一葉紅」（作品番号「九」）に詠まれる「林」も、この林丘が詠まれたものと推測できる。さらに、嵯峨朝より時代が下がる作品にしか現れないが、「崎嶇」（作品番号「十」）や「崔嵬戴石勢不閑」（同）と表現される、険しい石組をほどこした築山が創建当時から存在した可能性が高い。

次に建造物として、まず「池亭」（作品番号「五」）が挙げられる。その名のとおり池岸に建ち、観月などが行われたと考えられる。さらに、「院裡滿茶煙」（作品番号「三」）から、茗を搗いたり煮出したりする施設があった可能性もある。さらに、時代が下がる作品中には、「軒檻重重、碧波亭之構不異」（作品番号「十」）とあり、主殿は欄干が廻らされた重厚な構えであったことがわかる。この詩句にある「碧波亭」という呼称は、白居易の漢詩に「狎清漣者、謂之碧波亭」と詠まれた建物と同名であることから、それになぞらえられた淳和院の主殿も池近く、水際に近接して建てられていた可能性もある。

さらに植栽としては、飛田が指摘しているとおり、「岸影見知楊柳処」（作品番号「二」）、「陽砌雖看新柳色」（作品番号「六」）から池岸や南に面した軒下の石畳辺りにヤナギが植栽され、「蘆浦生風水葉翻」（作品番号「四」）から入江の付近にアシが生え、「梨庭帶露冷菓落」（同）からナシが植栽されていたことを確認した^{二〇八}。ちなみに、この「梨庭」と呼ばれるナシを主とした一面について、淳和院の場合、楽書にその名が現れるなど雅楽との関わりが考えられるので、歌舞に関連する「梨園」の意味を反映させた意図的植栽であった可能性を指摘しておきたい。また、漢詩のなかで詠まれる淳和院庭園の植栽の特徴は、池の入江に広がるアシの群生、池淵に生育するハス（「潭荷葉欲穿心」（作品番号「三」））やヒシ（「潭香聞得菱荷間」（作品番号「二」））の様子からわかるように、やや鬱蒼とした風情を醸し出していることにある。もともと淳和院の立地する場所は湿地帯で自然の池沼を池泉に造成したものであり、池辺の鬱蒼とした様子は造成前の植生環境をそのまま残しつつ庭園として整備した結果であらうと推測できる。

以上、主に漢詩からわかる機能および形態をみてきたが、淳和院庭園は「玄

圃秋云肅」（作品番号「三」）や「今到勝形仙洞地」（作品番号「七」）、「雖彼崑閩、何以加之」（作品番号「十」）などにみえるように、崑崙山に住む仙人の住処、つまり「仙境」というイメージ、あるいは春の淳和院行幸の漢詩には「雅院由来絶世閑」（作品番号「六」）、「寂寥人事暫無閑」（同）とあり、京中にありながら、世間との交渉のない人里離れた場所のイメージを有したようである。さらに、植栽をみると、自然風で秋にはアシやハスが枯れゆく様子を演出するなど、鄙びた「閑居的」な風情をも併せ持つ複数の面があったことがわかる。淳和院固有の閑居的風情を生むに至った一因は右京にある淳和院の立地にあると考えられる。淳和院の広大な池はもともあつた自然池と植生環境を生かした自然風の趣をもつもので、さらにあまり開発が進んでいない右京自体の状況が、その趣をより一層引き立てたことも推測できる。ところで、秋の枯れゆく様などの侘びた様子を趣深いものとして捉える心の在り方として、古今集以降に「山里」に価値を見出すという思想が登場する。「山里」は、「都」に対する仙境のイメージにもとづき、寂寥・孤独の地、浮世の逃避先として捉えられた^{二〇九}。淳和院庭園にみられる閑居の趣もこの感覚に近いものである。山里は和歌のモチーフのひとつであるが、単独で完成した概念ではなく、古今集以前に浮世の対比要素として主流であった仙境などのイメージを内包しつつ成立した概念であると考えられている^{二一〇}。こうしたことから、淳和院にみられる仙境的イメージと山里的風情は全く異質のものではなく、同じく都との対比、厭世感の中で両立し得るものである。つまり淳和院は、湿地が広がり衰退した右京にあるという立地上の悪条件をプラスに転化し、沼様の池や鬱蒼とした池辺などの寂れた風情の庭園環境を有するに至ったという独自の創意工夫が、結果として「山里」的イメージを備えるに至り、またそこを利用する人々のなかにも、後の山里観に繋がるような思想的萌芽を生みだしたと推測できるのである。その一方で、この庭園では船楽などをはじめとする華やかな宴が開かれたことも確かである。つまり、山里的なイメージを有する庭園形態をベースとしながらも、一定の場面では華やかなイメージが演出されており、そうしたことは行幸における接遇の一環であったということができよう。また、それを可能にする庭園意匠・構造を有していたと考えられる。

第六節 閑院の庭

一 閑院とは

閑院は、平安時代初期に嵯峨天皇の信任の厚かった公卿藤原冬嗣（七七五～八二六）が創建した邸宅である。平安京二条大路の南、西洞院の西に立地し、方一町を占めた。しかし、創建当時の閑院の領域に関しては、『拾芥抄（中）』に依拠した「平安京左京三条二坊南西洞院西一町」（十六町）であったとする見解の他にも、太田静六による十五、六町の二町であったという見解があり、議論の余地がある^{二二}。概ね現在の京都市中京区小川通二条下ル古城町にあたり、中京区押小路通小川西北角に「閑院址」の石標が建つ。

閑院は平安時代初期に創建されたから、二度の火災を経ながらも、鎌倉時代に至るまで長期に渡って栄えた稀少な貴族邸宅である。藤原冬嗣の没後は、藤原公季（九五六～一〇二九）が伝領した。平安時代中期までは専ら藤原氏の邸宅として使われてきたが、平安時代後期以後は天皇家との関わりが密接になり、



図[2-6-1] 閑院の位置図(国土交通省 国土地理院 数値地図2500に図示)

白河上皇の後院となった。その後、高倉天皇以降九代に渡って里内裏にも利用されることとなった。一二五九年（天正二年）五月に焼亡し、再建されることはなかった。

なお、一帯の発掘調査として立会調査が一九八二、八七年に行われているが、平安時代初期の遺構は検出されず、初期の閑院についての手掛かりは得られていない。

二 閑院に関する先行研究と課題

閑院に関する先行研究としては、管見の限り、以下の研究がある。まず、太田静六による建築史からの研究^{二二}。そして、野口孝子の歴史学からの研究^{二三}。さらに飛田範夫の造園史からの研究^{二四}、蘇明名の文学からの研究^{二五}である。また、茶の観点からの研究として村井康彦^{二六}、小川後楽^{二七}の二七が挙げられる。

太田は閑院を「第一期」平安時代初期から盛期、「第二期」平安時代末期、「第三期」平安時代末期から鎌倉時代初期、の三期に区分し、その上で閑院は著名な邸宅といえは皇室関係のものが大半であった平安時代初期において、臣下の邸宅中その随一として挙げられるほど優れたものだったことを指摘した^{二八}。『凌霄集』収録の「夏日左將軍藤原冬嗣閑居院」から、太田は初期閑院の院内の様子について次のように述べる。「池岸は曲折して変妙を極め、夏なお寒さを覚える清泉が湧くなど、猛暑を避けるには絶好の場所であった。…池亭が釣殿であることが解るし、庭内から清泉が湧いていたことも知られる。」

続く第二期、特に堀河天皇時代の閑院について復原図(図「2-6-2」)を示している。この時期の庭園形態に関して、太田は以下のような指摘をしている。一点目は舟遊びを楽しむことができる広い鳳池とそこに大きな中島が存在したこと、二点目は釣殿が中島や鳳池を眺めることができる絶好の場所であったこと、などである^{二九}。なお、第三期の閑院については本論の対象範囲では

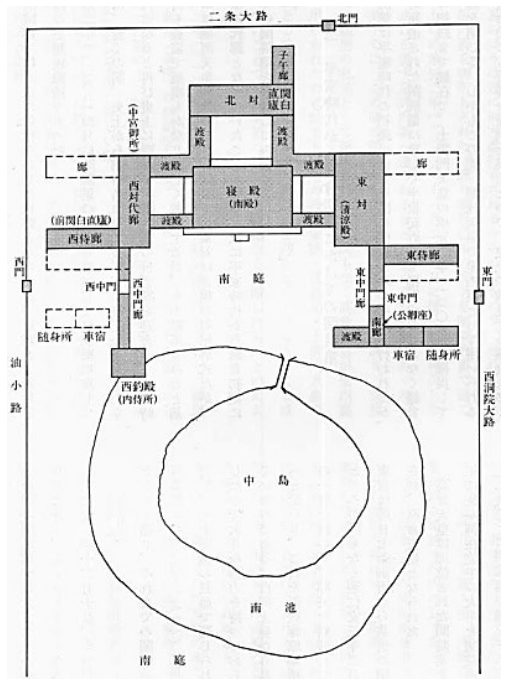


図 [2-6-2]
堀川天皇里内裏時代の閑院第推定復原図 (太田, 1987)

ないので省略する。

野口は、太田の研究ならびに飯淵康一の研究^{三〇}を下敷きにしなが、里内裏として機能するようになった後の閑院について、火災を契機として第一期と第三期^{三二}に分け、第一期では諸門とその機能についての考察、第三期では『吾妻鏡』の記事から領域の確定を行った。閑院の敷地について、太田は初期閑院から焼亡するまで一貫して南北二町とし、飯淵は藤原基房が新造した以後は一町としたが、野口は第三期の閑院が、一町よりも南北に八丈分広かったことを指摘している。

飛田は、閑院の位置および規模について『拾芥抄(中)』に「二条南西洞院西一町」と記載されていることから敷地は一町である、とした。また、植栽に関しては『文華秀麗集』収録の「夏日左大将軍藤原朝臣閑院納涼 探得閑宇心製一首」(淳和皇太弟)にタケ、ノイバラ、マツ、アオギリが詠まれていて、タケは水辺に植栽され、マツやアオギリはかなりの大きさであった、とする。また、閑院で特徴的なのはアオギリで、すでに『出雲国風土記』や『万葉集』に既出しており、平安時代初期においても、中国伝来の樹木として親しまれていたのではないかと指摘する。さらに、『凌雲集』の「夏日左大将軍藤原冬嗣閑居院」から、園池の岸にシダレヤナギやマツが存在していたことを明らかにした。

蘇は、平安時代初期の喫茶についての記載がある漢詩を抽出してそれらを詳細に考察している。閑院に関連する漢詩の中から、喫茶について言及した作品をとりあげ、当時の喫茶趣味や平安貴族の茶にまつわる漢詩が唐の茶詩から、修辭的な部分で大きな影響を受けたことを明らかにした。さらに、留学僧を含む遣唐使によって日本にもたらされた茶は精神的価値を持つ飲み物として平安人の心を捉え、唐風の喫茶趣味の代わりに日本的な喫茶の世界が次第に展開していく様子を示した。

村井は、弘仁期の茶趣を述べる上で、閑院の漢詩をとりあげている。茶が日本の宮廷貴族の間に広まったのは空海ら入唐帰朝僧の役割が大きく、嵯峨朝の詩趣をもたらしたのもこそ「茶」であると指摘している。また、弘仁期には、「茶」が音楽とともに幽興の世界をかもし出し、詩趣を盛り上げる不可欠な要素となっていたことも合わせ述べている。

小川は、平安時代の茶について、茶に関する記録と、閑院に関連する漢詩を始めとする喫茶にまつわる漢詩を分析した。平安時代、特に嵯峨朝において喫茶が流行した背景には、当時の為政者らが「茶」のもつ隠棲的・脱俗的雰囲気、心情的に共感する部分が大きかったこと、また、貴族や僧侶らにとって、「茶」が人間関係のパイプ役となっていたことを指摘している。

以上のように、初期閑院は発掘調査による遺構の検出例がなく、文献資料にあらわれる記録も少ないため、先行研究には漢詩を材料としたものも多い。しかし、その多くが一部の漢詩をとりあげるに止まっている。そこで、本研究では嵯峨朝を中心とした平安時代初期の閑院に関連する漢詩を全て抽出・検討することで、初期閑院の形態や機能をより詳しく考察していきたい。

三 文献に現れる閑院

閑院に関する記録は、平安時代中期以降には多くみられるが、平安時代初期に関しては以下に示す二例の記録のみである。

① 弘仁五年(八一四)四月乙巳(二十八日)

「幸左近衛大将正四位下藤原朝臣冬嗣閑院」。供張之宜、尋有雅致。天皇

染翰、群臣献レ詩。時人以爲 嘉会。授冬嗣從三位、无位藤原美都子從五位下。賜五位以上衣被。」(『日本後紀』二三三)

②弘仁十二年(八二二)九月乙亥(六日)

「幸于大臣閑院。命文人賦レ詩。」(『日本後紀』)

①では正四位であった藤原冬嗣が從三位へと、无位であった妻である藤原美都子が從五位下へと昇進し、その叙任式と宴のために天皇が閑院を訪れたことを示す。また、②は閑院に行幸し詩会を催したことを示す。この二例の記録を見ると、「侍宴」^{三三三}との記載がないことから、これらは天皇が私的に行った「密宴」であると考えられる。さらに、鈴木景二は「天皇が律令制の貫徹する宮から出離して臣下の邸第へ行幸すること自体が、宮内ではなしえないと思われる人格的結合関係を補完する役割を担った」と指摘した^{三四}。こうしたことから、二度の閑院行幸は嵯峨天皇が藤原冬嗣との関係をより堅固なものにするという狙いをもった行幸であったと考えられるのである。

四 漢詩からみた閑院の庭園

嵯峨朝において閑院が詠まれた漢詩は全部で六首ある(表「2-6-1」)。すべて嵯峨天皇による勅撰漢詩集に収められており、『凌雲集』に二首、『文華秀麗集』に二首、『経国集』に一首収められている。そのうち三首(作品番号「一」〜「三」)は同じ行幸の際に詠まれた漢詩で、嵯峨天皇が漢詩を詠み、大伴親王(淳和皇太弟)と滋野貞主がそれに応えて詩を賦したものである。作品番号「四」は、藤原冬嗣が閑院にて藤原吉野と甲斐の判官・藤原某に送った漢詩に、巨勢識人が和したものである。作品番号「五」は、作品番号「四」と同じ宴で大伴親王が詠んだものである。作品番号「六」は閑院にヤナギを移植した出来事について滋野貞主が詠んだ漢詩である。以上、六首について作品番号「一」から順番に漢詩に描かれた閑院庭園の構成や意匠に関わる要素を抽出し、整理・考察していきたい。

以下に示す漢詩について、原文、読み下し文、大意^{三五}、庭園に関する事項を各々示した上で、若干の説明と解釈を付す。

表[2-6-1] 閑院に関連する漢詩一覧

	題詞	作者	出典
一	夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字。応製。一首。	淳和皇太弟	文華秀麗集
二	夏日左大將軍藤原冬嗣閑居院	嵯峨天皇	凌雲集
三	夏日倍幸左大將軍藤原冬嗣閑居院、 応製	滋野貞主	凌雲集
四	敬和左神策大將軍春日閑院餞美州藤大守甲州藤判官之作。一首。	巨勢識人	文華秀麗集
五	餞美州掾藤吉野。得花字。一首。	淳和皇太弟	文華秀麗集
六	五言遥和播州淨長史丹治中得紫柳請植左大將軍閑院之作一首	滋野貞主	経国集

作品番号「一」

「夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字。応製。一首。」 令製(淳和皇太弟)

此院由来人事少
況乎水竹每成閑
送レ春薔棘珊瑚色
迎レ夏巖苔玳瑁斑
避レ景追レ風長松下
提レ琴搗レ茗老梧間
知貪レ鸞駕忘レ鬮処
日落西山不レ解還

此の院由来人事少なり、
況むや水竹毎に閑を成すをや。
春を送る薔棘珊瑚の色、
夏を迎ふる巖苔玳瑁の斑。
景を避けて風を追う長松の下、
琴を提げて茗を搗く老梧の間。
知りぬ鸞駕を忘るる処を貪りたまふことを、
日は西山に落つるも還らむことを解らず。

〈大意〉

閑院は世間との交渉が少なく、池際に植栽された竹が閑静な趣を醸し出している。春が去り、いばらの棘は赤く、夏を迎える巖の苔は海亀の甲羅のように斑になっている。暑い日差しを避けて、風が通る大きい松の下に行き、梧桐(ア

オギリ)の間で琴を掲げて、茶の芽を搗く。閑静な院で充分に楽しむことを知り、日が落ちたのにも気づかないのである。

〈説明・解釈〉

作品番号「一」〜「三」は、同じ行幸において詠まれた漢詩である。題詞に「夏日…」とあるように、夏のある日に閑院を訪れたことが分かる。記録と対照すると、先に示した①弘仁五年四月乙巳(二十八日)に当たると可能性が大きい。正四位下の藤原冬嗣に従三位を授ける目的で行われた行幸で、「…天皇染翰し、群臣詩を獻ず。」とあるように、嵯峨天皇が染翰した御製に群臣が詩を獻じた様子が分かる。作品番号「一」〜「三」にはちょうど春が去り、夏が始まった微妙な時節が詠まれているが、これは「一」の時期とも合致する。

大伴親王(淳和皇太子)は夏の閑院行幸に同行し、第一句「此院由来人事少」とあるように、閑院が静かで世間との交渉が少なく、日々の疲れを癒す場所であることを詠んでいる。これは閑院が平安京の中に立地しながら、まるで世間と隔絶されたかのような空間を造り出していることを示しており、第四句「迎夏巖苔瑠斑」にあるように苔生した庭園の様子がその趣を引き立てている。また、飛田が指摘しているように、第二句「況乎水竹每成閑」からタケ、第三句「送春薔棘珊瑚色」からはノイバラ、第五句「避暑追風長松下」からはマツの高木、第六句「提琴搗茗老梧間」からはアオギリの老木が植栽されていたことを確認した^{二二六}。

また、この漢詩の第六句には弾琴や茶に関する描写も見られる。蘇明明は、第五・六句「避暑追風長松下、提琴搗茗老梧間」が、六朝の叙陵「内園逐涼」あるいは、梁の庾肩吾「奉和太子納涼梧下應令詩」に大変似ており、同じ構造の語を組み合わせて句を成り立たせていることを指摘しつつ、叙陵「内園逐涼」なかの「提琴就竹條、酌酒勸梧桐」と比較すると、「酌酒勸梧桐」(酒)から「搗茗老梧間」(茶)への変化がみられることから、中国で唐代に初めて重視された「喫茶」の風雅な趣を、嵯峨朝でこそ取り入れたことは注目に値するとした^{二二七}。嵯峨朝では中国の詩文が食欲に取り入れられ、かつ日本の文化風土に合わせた作品が創作されたのである。作品番号「一」に描かれた内容は、どこ

までが修辭的な部分かという問題はあるが、「喫茶」が行われたことは確実にあると考えてよいだろう。

作品番号「二」

「夏日左大将軍藤冬嗣閑居院」 御製(嵯峨天皇)
避暑時來間院裏 暑を避けて時に來る間院の裏
池亭一把釣魚竿 池亭一たび把る釣魚の竿
廻塘柳翠夕陽暗 廻塘の柳翠夕陽に暗し、
曲岸松声炎節寒 曲岸の松声炎節に寒し。
吟詩不厭搗香茗 詩を吟じ香茗を搗くこと厭はず、
乘興偏宜聽雅彈 興に乗じ偏に雅彈を聴くこと宜し。
暫對清泉滌煩慮 暫し清泉に對ひて煩慮を滌く、
況乎寂寞日成歎 況むや寂寞なる日に歎を成すをや。

〈大意〉

暑さを避けて、閑院に時々やってくる。池のほとりのあずまや辺りで魚釣りの竿を試みに一度手に取る。曲がりくねった池の堤の緑は夕日に暗く沈み、曲折した池岸の松に吹く風の音は、この炎天の時候でさえ寒そうに聞こえる。詩を吟じ、香りのよい茶の芽を搗くことを厭わない。興趣にそそられて、ひたすら琴の類を優雅に奏でるのを聴くのはふさわしい。しばらくこの院の清らかな池泉に相對して日常の煩わしい思いを洗いますぐ。まして静寂な状態にある今日のような日に、歡樂を尽くすことは猶更必要ないのである。

〈説明・解釈〉

この作品は嵯峨天皇によるもので、作品番号「二」はこの漢詩の応制である。これら二作は同じ詩宴で詠まれたものである。

第一句「避暑時來間院裏」にあるように、夏に閑院を訪れると院内は涼しい。また、第二句「池亭一把釣魚竿」から池亭があることがわかり、そこから平安時代に釣竿として使われた竹條の類を垂らす様子が詠まれている。また、飛田

が指摘するとおり、第三句「廻塘柳翠夕陽暗」から池の堤にヤナギが植栽されていたことがわかる。第四句「曲岸松声炎節寒」には、入り組んだ岸辺にマツが植栽されていることが詠まれている。このマツに吹く風の音はこの炎天にあつても寒そうに聴こえる、とあり、暑い中にあつてもマツの緑陰が大きく茂り、人々に木陰を提供していたであろうことが推測できる。このマツは作品番号「二」の第五句に描かれた「避暑追風長松下」と同じものである。また、第五句「吟詩不厭搗香茗」では、作品番号「二」と同様に「喫茶」について言及されており、香りのよい茶の芽を搗いている様子が描写されている。さらに、第六句「乘輿偏宜聽雅彈」では「弹琴」に関する描写もある。作品番号「二」の第六句「提琴搗茗老梧桐」でも「提琴」について描写され、前述のように六朝詩からの引用であると思われるが、同じ詩宴で詠まれた作品番号「二」、「二」の描写の類似から、一概に修辭的な引用と決めつけるべきではない。ここから閑院行幸では、釣魚をし、詩を吟じ、茶を喫し、優雅な琴の演奏を聴くなど、多様な遊興が行われていることがわかる。さらに、第七、八句「暫対清泉滌煩慮、況平寂寞日成歡」とあり、ここでは反語表現が用いられているが、閑院庭園には様々な「飲」を行う施設が整っており、日々の煩わしさをそぐ場所であることが強調されている。

作品番号「三」

「夏日倍幸左大将藤原冬嗣閑居院、応製」 従七位上守少内記滋野宿禰貞主
寂然閑院当「馳道」 寂然なる閑院馳道に当る、
祇候「仙輿」灑「二路」 仙輿に祇候し一路に灑ぐ。
酌「茗菓堂」行徑入 茗を酌む菓堂徑を行きて入る、
横「琴玳席」倚「岸居」 琴を横へし玳席岸に倚りて居る。
松陰絶冷午時後 松陰絶だ冷やかなり午時の後、
花氣猶薫風罷餘 花氣猶し薫る風罷みし餘。
水上青蘋莫「赴」浪 水上の青蘋浪に赴くことなかれ、
君王少選愛「遊魚」 君王少選遊魚を愛でたまふ。

〈大意〉

もの静かな閑院の行幸路に当たり、謹んで鸞輿に侍り閑院に向かつて水を注ぐがごとく直行する。晩茶を酌む菓堂には庭の小路を通つて入り、琴を横たえた立派な遊びの席は巖に寄り掛かつて構えられている。昼下がりに、庭園の松陰の辺りは非常に冷ややかであり、風が吹きやんだ後までも花の香はなおも芳しく香っている。池の水の上に漂う青い浮草よ、波のゆれるままにあちこち漂うことのないように、天子がしばらく浮草に戯れる魚を御覧になるのだから。

〈説明・解釈〉

この漢詩は作品番号「二」と同様に、作品番号「二」（御製）に対する応制である。作者である滋野貞主（七八五〜八五二）は、弘仁五年（八一四）頃、少内記に就いており、文筆に優れた官人であった。淳和朝では『経国集』の編纂に関わっている。『凌雲集』に二首、『文華秀麗集』には六首、『経国集』には二十五首が収録されている。

作品番号「三」は、まず、第一句「寂然閑院当馳道」において、行幸の列が閑院へ続く静かな馳道を進む様子が詠まれている。作者は、天皇の鸞輿に侍り、まっすぐ閑院へと向かっている。第三句「酌茗菓堂行徑入」では、茶を酌む菓堂には庭の小道を通つていく様子が詠まれる。庭の奥の方に喫茶のための施設「菓堂（茶を搗いて精製する場所）」があったことがうかがえる。第四句「横琴玳席倚岸居」では、管弦を奏する宴席は巖に寄りかかるように構えられているとあり、こうした「弹琴」についての描写も作品番号「二」、「二」に見られたことから、信びよう性が高いと考えられる。村井は、茶が音楽とともに幽興の世界をかもし出し、詩趣をもち上げる不可欠の要素であったことを指摘しているが^{三六}、これは十分に説得力のある主張である。

第五句では「松陰絶冷午時後」でマツの木陰について描写されているが、こうしたマツの描写も、作品番号「二」、「二」においてみられた。また、第六句「花氣猶薫風罷餘」の「花氣」は花の芳香を意味し、園内には花の咲く樹木もしくは草本が植栽されていたことがわかる。第七、八句には「水上青蘋莫赴浪、君王少選愛遊魚」とあるが、臣下を遊魚に例え、魚を優しく眺める天皇に臣下

らへの恩恵の深さを重ねているのである。応制の尾聯として詠まれているのは、庭園の風景についてはないが、青く揺らめく水草とそこに泳ぐ魚の様子が見えるという描写の背景には、実際の閑院の池の様子を反映させていたと推測できる。

作品番号「四」

「敬和左神策大將軍春日閑院餞美州藤大守甲州藤判官之作。一首。」巨識人

（巨勢識人）

杜鵑啼序春將闌

杜鵑啼序春將に闌けむとし、

閑院花亭餞二官

閑院の花亭二官を餞す。

飛鳥始乗鳥翼去

飛鳥始めて鳥翼に乗りて去り、

離絃頻送鶴声二彈

離絃頻りに鶴声を送りて弾く。

郷心遠樹孤雲跡

郷心の遠樹孤雲の跡、

客路辺山片月寒

客路の辺山片月寒し。

一別情期勿二慳忘

一別情に期る暫くも忘るること勿れと、

音書屢寄往来看

音書屢寄せよ往來を看む。

〈大意〉

杜鵑（ホトトギス）の鳴く頃がやってきて、春も盛りを過ぎようとしている。閑院の花を愛でるあずまやで二人の官人の送別を行う。王喬は初めて履物を残したまま鳥の翼に乗って天上に去ったが、二君も初めて役人となって任国に行く。別れを惜しんで弾く絃は、鶴に乗って飛び立つ仙人、つまり二官を見送ってしきりに演奏される。故郷の遠い彼方の木々を見やると一片の雲の跡が見られ、旅路の辺地にある山には弦月が寒くかかる。一度別れても、忘れることがないようにと誓う。便りをしばしば寄せなさい、お互いに便りを交わそう。

〈説明・解釈〉

作品番号「四」は、巨勢識人の作である。巨勢識人は、三大漢詩文集すべてに作品が収録されている平安時代初期の漢詩人である。この漢詩は、春日に美

濃の判官である藤原吉野と甲斐の判官である藤原某に藤原冬嗣が送った餞別の作に、巨勢識人が唱和したものである。記録が残っていないため詩宴の詳細を知ることが出来ないが、藤原吉野が、弘仁四年（八一三）に美濃少掾となることから、弘仁四年春、送別の宴において詠まれた作品である^{三二九}。

この漢詩は、閑院の庭園についての描写が少ないが、第二句「閑院花亭餞二官」から「花亭」と詠まれる亭で宴を催した様子が分かる。第四句「離絃頻送鶴声彈」では、二官の別れを惜しんで、しきりに別れの琴が演奏される場面が詠まれている。

作品番号「五」

「餞美州掾藤吉野。得花字。一首。」令製

今宵儻忽言離別

今宵儻忽ちに言に離別す、

不慮分飛似落花

慮らずありき分れ飛びて落花に似むとは。

莫怨白雲千里遠

怨むこと莫れ白雲千里の遠きを、

男兒何処是非家

男兒何れの処か是非家に非ぬ。

〈大意〉

今宵ゆくりなくもここに君と離別する。お互いに別れ飛んで、あたかも飛び散る落花のようになろうとは思いがけないことである。君と私との間には、白雲が千里に渡って立ち込めていて遠く離れているが、それを恨んではならない。男子たる者は何処にいても住むべき家があるのだ。

〈説明・解釈〉

この漢詩は、作品番号「四」と同じ宴の場で詠まれた漢詩である。残念ながら、閑院の庭園形態の詳細についての描写はないが、第二句「不慮分飛似落花」とある。これは、藤原吉野ら二官との突然の別れが落花に例えられているのであり、落花自体を詠んでいるのではない。しかし、春の閑院において詠まれたこの詩では、韻字として「花」が用いられており、韻字として用いるほどに、春の閑院は花の景観が見事だったと考えるのが自然であろう。作

品番号「四」の第二句「閑院花亭餞両官」と合わせ考えると、春の閑院には花々が咲き乱れていた様子がうかがえる。また、唐詩では別れの悲しみ、あるいは女性の涙などを表現するときにナシの花が散る様子が詠われる。中唐の詩人である白居易（七七二〜八四六）の『長恨歌』にもナシが登場する。日本では平安時代の僧・惠尊によって『白詩文集』が伝来し、平安時代の漢文学に大きな影響を与えた。平安時代中期の『枕草子』でも『白詩文集』を称賛する部分がある。「長恨歌」では、ナシの花は「…玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨…」(大意：玉のように美しい顔は寂しげで涙がこぼれる。一枝のナシの花が雨に濡れたような風情である。)と詠われている^{三〇〇}。

作品番号「四」、「五」が詠まれた季節は春で、まさにナシの花が満開になる時期である。仲隆裕は、『枕草子』で間近で觀賞するには魅力がない花だと評されるように、平安時代の日本の感覚ではナシは鑑賞の対象となる花ではなかったものの、一方で中国のナシの文学的イメージを受容し、かつその感覚にまで近付こうとしていた平安人の意識を指摘している^{三〇一}。また、飛田は建物の近くにはナシやノイバラが植栽されたとする。つまり、ナシは文学的イメージと共に日本に受容され、中国的感覚のままに庭園に植栽されたと考えられる。閑院の亭の周辺にもナシが植栽され、春にもなればナシの花が咲き乱れ、餞別の宴をするには相応しい舞台となったとも考えられる。

作品番号「六」

「五言遥和播州浄長史舟治中得紫柳請植左大将軍閑院之作一首」 滋貞主
(滋野貞主)

柳條八許尺

柳條八許尺、

截取寄情人

截取して情人に寄す。

根断葉焦卷

根断ち葉焦けて巻く、

紛空絮落頻

紛空しく絮落ちて頻る。

星躔移「夕建」

星躔夕建に移る、

龍路送「朝鱗」

龍路朝鱗に送る。

挿「地日猶淺」

地に挿す日猶し淺し、

須く看後歳春

須く看るべし後歳の春。

〈大意〉

柳の枝は八尺ばかり、伐つて左大将軍の君に贈る。根は断たれ、焼け枯れた葉裏が逆さまに巻き、白い絮がむなしく散りしきっている。北斗星の宿りは夕方の方向へ傾き、青龍星の進路は朝の方向へ向かう。土に移し植えてからまだ日は浅いが、来年の春を必ず御覽あれ。

〈説明・解釈〉

作品番号「六」は、播磨の少掾であつた多治比清貞(たじひのきよさだ)の漢詩に唱和した滋野貞主による作品である。

これは、多治比清貞が藤原冬嗣にヤナギを贈り、それを閑院に移植した時のもので、記録が残らず詳細は不明である。ヤナギの根は移植するにあたって断ち切られ、第一句「柳條八許尺」から枝は八尺ほど(約二・四メートル)で、第二句「根断葉焦卷」から葉はしおれて巻いており、第三句「紛空絮落頻」にあるように、しきりに柳絮が舞っている。柳絮が飛ぶのは春なので、移植された時期や漢詩が作られた時期も、春であると考えられる。第八、九句「挿地日猶淺、須看後歳春」には、ヤナギは移植して日が浅いために弱々しいが、来年の春には生き生きと新芽を出すだろう、と結ばれている。例えば、閑院の他の作品でヤナギが登場したのは作品番号「二」の三句「廻塘柳翠夕陽暗」で、池の堤のヤナギが詠まれている。作品番号「六」からは、庭園のどこにヤナギを植栽したかについて判断できないが、飛田は園池の岸にはシダレヤナギやマツ、園路に沿ってシダレヤナギやタケが植栽されていたと指摘する^{三〇二}。

五 小括

これまでに示してきた閑院の漢詩のなかで、作品番号「一」〜「三」は、藤原冬嗣などの叙任に際して嵯峨天皇が行幸し宴を賜った密宴、作品番号「四」、「五」は藤原吉野、藤原某を送別するための餞別の宴、作品番号「六」は閑院

のヤナギの移植についての漢詩への唱和詩というように、それらが詠まれた場面は多様である。

次に漢詩からわかる庭園の構成についてみておきたい。閑院庭園において詠まれた漢詩には、池や築山といった庭園を構成する大きな要素についての描写は少なく、植栽や施設について比較的多くの情報が含まれている点が特徴的であった。

植栽については、作品番号「二」〜「三」にマツの高木が登場する。このマツは三つの漢詩に詠まれていることから、その存在の信憑性は高いと考えられる。このマツの高木は屈曲する池の岸辺に植栽されており、常に葉は青々としていたので、暑い夏の日には池岸の木陰で人々は涼風を得ていたものと考えられる。飛田が指摘するとおり、前述のマツ、タケ、ヤナギ、アオギリ、ノイバラを漢詩から確認した^{二三〇}。アオギリの古木の下では茶の芽を搗く様子が詠まれるが、アオギリは六朝詩の引用であるとの指摘もあり、他の樹種の木をアオギリと呼んだ修辭的な表現である可能性もぬぐい切れない。ヤナギについては、作品番号「六」にヤナギの移植について詠まれているので、閑院にヤナギが植栽されていたことは確実であろう。さらに、作品番号「四」「五」で詠まれる亭を彩る「花」は、季節や情景からナシの花である可能性が高い。特に、散りゆく様を詠むのは、唐詩でのナシの用法にも合致し、閑院の亭のそばにはナシが植栽されていた可能性を指摘しておきたい。

園内に点在する施設についても漢詩に複数詠み込まれている。作品番号「二」の第二句に「池亭」という語があり、作品番号「三」の尾聯の表現「水上青蘋莫赴浪、君王少選愛遊魚」とも合わせ、閑院には釣殿があったことがわかる。また、作品番号「四」「五」の舞台となったのが、二人の官人を饞別する宴が催された「花亭」という建物である。さらに、「酌茗菓堂行径入」（作品番号「二」）とあるように、庭内の小道を入ったところには「菓堂」が設えられていた。蘇は、「菓堂」の「菓」という語が中国的神仙思想と関わるもので、中国では文人らが道家的隱遁志向を表わす時に、その語を詩に詠み込んだことから、同じく平安貴族の喫茶にも神仙思想と関わりがあったことが推測できるとする^{二三四}。また、仲はアオギリの下で菓たる茶を飲むことは、神仙の境地へ達しようとする

る行為であったと推測した^{二三五}。つまり、小川も述べるように、喫茶自体が隱棲的・脱俗的雰囲気をもつ特別な行為であることから^{二三六}、それを行うための設えという意味で、「菓堂」と表現されたと考えられる。

次に、閑院庭園の機能についてみておきたい。漢詩中には庭園内で行われた遊興に関して多く詠み込まれており、具体的には「釣」、「彈琴」、「喫茶」、「詩歌」がある（表「2-6-2」）。特に、「彈琴」は作品番号「二」〜「三」の一連の漢詩だけではなく、「離絃頻送鶴声彈」（作品番号「四」）とあり、饞別の宴における情景としても詠まれている。また、「喫茶」に関して、仲は作品番号「二」〜「三」の漢詩が詠まれた季節は新茶の時期とも合致するので、庭園の中で餅茶（団茶）を作り、それを煮出して飲むまでの一連の過程を楽しんだのではないかと指摘した^{二三七}。また、小川は「茗を搗く」という表現は団茶の粉末をかき混ぜることの表現であり、茗とは団茶の粉末ではないかと指摘している^{二三八}。つまり、閑院庭園で行われた行幸時の喫茶は、天皇が臣下と共に、団茶を搗きほぐして、菓堂で煮出し、味わうといった一連の過程を行い、その合間に詩作や彈琴に興じながら、ゆったりとした時間を心ゆくまで楽しむものであったと推測できる。

このように、閑院の庭園を詠んだ漢詩は全部で六首であるが、その中には表「2-6-2」に示すように「遊興」などに関する事柄が多く表現されている。これは、離宮に関する漢詩と比べ、際立った特徴である。閑院は、臣下の邸宅でありながら行幸があり、天皇の離宮などに匹敵するほどの漢詩が残されている。嵯峨朝において、文事の場合は、宮廷から天皇の離宮へ、さらには上層貴族の邸宅へと賦詩の場を拡大していった^{二三九}。そうした中で、冬嗣の閑院や清原夏野の双ヶ岡山荘などは、臣下の邸宅でありながら、趣向を凝らした庭園が造成されたのである。

以上、漢詩からわかる閑院庭園の形態と機能をみてきた。閑院は池などを構成要素とする庭園を有していたが、本稿で対象とした離宮・邸宅のなかでも、場面に応じて各種遊興に対応できる設備が備えられ、なおかつ、実際にそれらが遊興の場として用いられた時の様子を漢詩中から明らかにすることができた。特に、藤原冬嗣は臣下という立場であったが故に天皇の「接遇」という側

表〔2—6—2〕 漢詩中で遊興に関して詠まれた箇所とその遊興の種類

離絃頻送鶴声弹	閑院花亭餞兩官	水上青蘋莫赴浪、 君主少選愛遊魚	橫琴玳席倚岸居	酌茗菓堂行徑入	乘興偏宜聽雅弹	吟詩不厭搗香茗	池亭一把釣魚竿	提琴搗茗老梧間	遊興等に関連する句
弹琴	宴	釣魚	弹琴	喫茶	弹琴	賦詩 喫茶	釣魚	弹琴 喫茶	遊興等の種類
四	四	三	三	三	二	二	二	一	作品番号

面が非常に意識され、それが遊興に対応する施設の充実につながったのではないかと推測できる。また、このような庭園を備えた閑院への行幸は、邸宅の主人である冬嗣やその家人に対する叙任など、より私的な色合いが強いものであり、そこでの宴は天皇が臣下との関係をより親密にするための場である「密宴」的な色合いの濃いものであったと考えられる。

第三章 考察

第一節 漢詩からみた「平安京内の庭」と「平安京外の庭」

本節の目的は、対象とする庭園が平安京内・京外のいずれにあるかという立地の違いにより、主としてその形態にどのような差異があるのかについて前章までの成果をもとに漢詩の観点から明らかにすることである。

一 平安京内の庭

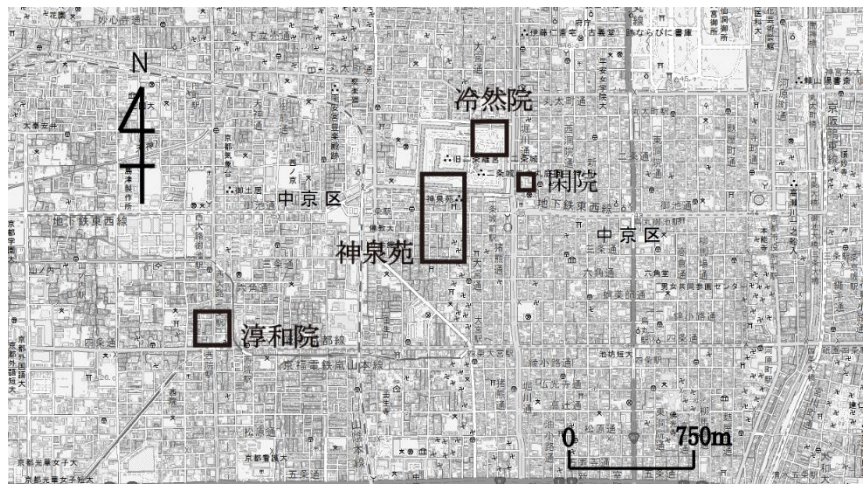
― 神泉苑・冷然院・淳和院・閑院の庭 ―

まず、本研究で対象とする邸宅の内、京内にあつたのは、京内離宮の神泉苑、冷然院、そして大伴親王（淳和皇太弟）の邸宅であつた淳和院（南池）と藤原冬嗣の邸宅であつた閑院の四つである。

それらは、以下に示す場所に立地していたことがわかっている。

- 神泉苑（累代の離宮）……………平安京左京三条一坊九く十六町
- 冷然院（嵯峨天皇の離宮）……………平安京左京二条二坊三く六町
- 淳和院（大伴親王の邸宅）……………平安京右京四条二坊十一く十四町
- 閑院（藤原冬嗣の邸宅）……………平安京左京四条二坊十六町

すなわち、神泉苑、冷然院、閑院は左京に、淳和院は右京に立地していた。また、最大の敷地を有するのは八町を有する神泉苑で、次に、冷然院と淳和院が四町を占め、閑院は一町を占めている（図「3-1-1」）。以下、主に描く庭園の形態に注目しながら、漢詩の分析・検討からの成果をとりまとめしておく。まず、累代の離宮であつた神泉苑は、敷地面積が最大で、水に恵まれた地勢



図「3-1-1」

平安京内の邸宅の位置図（国土交通省 国土地理院 数値地図 2500 に図示）

を有した。延喜十七年十二月乙丑（二十日）には『醍醐天皇御記』のなかに「冷然院池水又枯、勅開神泉苑東北門令下人斎汲中泉水」とあり、その湧水の抜きん出た潤沢さが見て取れる。もともとあつた自然池を造成した園内の池は、「靈沼秋蓮過半黄」（第二章・第一節・作品番号「七」）や「洞庭波色乏映」（同・作品番号「十二」）、つまり「靈沼」（周・文王の離宮にあつた沼）や「洞庭湖」に例え評すように、広大で意匠性に優れたものであつたと推測できる。つまり、神泉苑の立地した土地は、累代の離宮として、天皇の権威を象徴する庭園を造成するのに相応しい場所であり、他の離宮や邸宅と比較しても別格の条件を備

えていたと言えよう。漢詩からは、池のほか遣水（「眼沸清泉一細流」（同・作品番号「二十」）や布落の瀑布（「落泉瀑布懸飛鶴」（同・作品番号「九」）、穩やかな様相を見せる築山（「玉樹長堆跨帝園圃」（同・作品番号「二十五」）の存在がうかがえる。建造物としては、主殿である乾臨閣をはじめとして、龍池閣や秋蕙樓、山亭、琴台を備えた水亭があり、花宴の舞台となるウメやモモを植栽した一画があったことが読み取れる。嵯峨朝において神泉苑が主に季節の節目に行われる年中行事の儀場とされたこともあり、庭園内の構成要素の多様さは群を抜く結果となった。こうしたことから、神泉苑の庭園の特徴は、美しい時期や見所が多彩で、春の花、夏の納涼、秋の紅葉やキク、あるいは冬の鷹狩りなど、京内にありながら、四季折々の庭園景観の見所や遊興的要素を豊富に備え、様々な利用を想定した造りであったことが挙げられる。

次に、冷然院は、漢詩のなかで「泉石初看此地奇」（第二章・第二節・作品番号「一」）という評価に象徴されるように、その意匠の靈妙さが強調されている。ここは、神泉苑ほどの敷地面積はないものの、湧水も豊富で地勢に恵まれていた。そうしたことから、漢詩に詠まれた池は「積水全含湖裏色」（同・作品番号「一」）とあるように、深く掘り込まれ、水質も美しい様子が見て取れる。遣水の傍にはマツが植栽され、「つごつとした石組みが配され、「一道長泉曳布開」（同・作品番号「三」）、「驚鶴偏隨飛勢至、連珠全逐逆流頻」（同・作品番号「二」）と詠まれる瀑布が一直線に水しぶきをあげながら流れ落ちる様子がわかる。このように冷然院庭園は水景を中心に庭園景観を構成しており、その先端的な美しさが強調されている。つまり、冷然院の庭園の特徴としては、限られた敷地面積のなかで、湧水の豊富さを存分に活かすために、極めて人工的で造形的な水景を創り出したことが挙げられる。このことは、冷然院を嵯峨天皇がどちらかと言えば私的に用いることが多かったことと無関係ではないだろう。

唯一右京に立地した淳和院の庭園は自然の湿地性池沼を基盤に造成した広大な池があったと推定されており、漢詩からその池の傍に「池亭望爽天」（第二章・第五節・作品番号「三」）と詠まれた池亭が設えられていたと考えられる。また、「潭香聞得菱荷間」（同・作品番号「一」）と詠まれるように、池にはハスやヒシが群生し、「蘆浦生風水葉鱗」（同・作品番号「四」）から、池周辺も造成

前の植生環境であるアシの洲や草叢が残り、鬱蒼としていた様子が詠まれている。池の北側に正殿が南面し、その背後には林丘状の後林があった。さらに、「梨庭」と呼ばれる一画や「崔嵬戴石之勢不閑」（同・作品番号「十」）と賞される険しい築山があった。こうした庭園の在り方は右京の土地条件に由来していると推測できる。平安京遷都当初から、概して左京が盛んに利用され、右京は衰退している状況にあった。なぜなら、湿地帯であった右京はその土地条件の悪さから土地の区画造成が進まず、衛生状態が良くなかったことが疫病などの広がる原因となり、居住者が去っていったからである。こうしたことから、淳和院ではその土地条件の悪さを逆手に取り、あまり人工的に造り込むことをせず、もともとの景観を活かすことで、「寂寥感」を演出したと考えられる。すなわち、淳和院の庭園の特徴としては、地勢の悪条件をプラスに転化し、自然池と湿地帯の植生を活かすことで閑居的情趣を備えるに至り、当時としてはあまり例のない庭園の見せ方を創出したことが挙げられる。

最後は閑院である。ここは四例の中で最も敷地面積が狭く、一町を占めた邸宅である。ここには、「池亭一把釣魚竿」（第二章・第六節・作品番号「二」）とあるように、池を有し、ここでは釣魚などをしたようである。漢詩中には池の具体的な描写は見当たらないが、「曲岸松声炎節寒」（同・作品番号「二」）とあるように池の屈曲した汀にはマツ、「廻塘柳翠夕陽暗」（同・作品番号「二」）から堤にヤナギが植栽されていたことがうかがえ、その他にタケやアオギリ、ナシ、ノイバラなど、多彩な植栽が漢詩中に詠まれている。一方で、臣下の邸宅であったが故に天皇の行幸の際の接遇を意識した、釣台や池亭、花亭、葉堂などの多様な施設が充実していたことも特徴的である。なお、園内に築山もあったと考えられるが描写はないことから、あまり目立った意匠ではなかった可能性が高い。つまり、閑院は敷地が比較的狭かったため、池や築山といった大規模な要素よりも、植栽の多様性や施設の充実に関心が置かれた点が特徴であるう。

以上から、平安京内に立地する各邸宅の庭園の形態にはそれぞれ特徴があることがわかる。総じて、京内に造営された邸宅の庭園は、限定された土地条件

のなかでどれだけ充実した庭園景観あるいは利用方法を創出できるかという前提に立って造られたことが指摘できる。つまり、地勢あるいは敷地面積といった制約を逆手に取り、独自の庭園景観や独自の雰囲気を生み出したのである。嵯峨朝の庭園のなかでも特に平安京内の離宮、邸宅は池や築山、遣水など、平安時代庭園の一般的な特徴を以て総括されがちな側面があるが、京内での立地の差異とそれに伴う意匠の多様性と独自性は漢詩の中から明らかに読み取ることができ、各々が異なる着想のもとに、特徴的な庭園景観を創出したことがわかった。そして、こうした特性は、神泉苑と冷然院は離宮として、淳和院と閑院は皇太弟あるいは天皇に極めて近い臣下の邸宅として、しばしば行幸の場となったことと大きく関係することも確かであろう。

二 平安京外の庭

— 嵯峨院・河陽離宮の庭 —

本研究で対象とする離宮、邸宅のなかで、京外に造営されたものは二つある。一つは嵯峨天皇の離宮で嵯峨野に造営された嵯峨院、いま一つは同じく嵯峨天皇の離宮で山崎に造営された河陽離宮である。

○嵯峨院（嵯峨天皇の離宮）……現・大覚寺内（旧・山城国葛野郡）

○河陽離宮（嵯峨天皇の離宮）……現・離宮八幡宮付近（旧・山城国乙訓郡）

嵯峨院が立地した嵯峨野は平安京の西郊、保津川が京都盆地に流れ出て桂川となる地の西岸一帯にあたり、東は太秦、西は小倉山の山麓、北は丹波高地の一部をなす西山山地に囲まれる。嵯峨院は、現在も残る大沢池、名土曾滝と、池に流れ込む大規模な遣水が配置されていたと考えられている。そうした庭園の水景を詠んだものとして、「深水尋常対簾帷」第二章・第三節・作品番号「二」が挙げられ、遣水が簾帷の方へ流れてくる様子が詠まれている。築山の描写はなく、院を囲う山並みを借景し、庭園景観の一部と捉えることで広々とした眺望を確保したと考えられる。嵯峨院に関する漢詩の特徴として、「音」の描写が



図 [3-1-2] 平安京外の離宮位置図（国土交通省 国土地理院 数値地図 2500 に図示）

挙げられる。例えば、「絶澗流中石作雷」（同・作品番号「三」）、「鳥轉遙聞縁階壑」（同）などから、自然の音が遮られることなく耳に入る嵯峨院の静けさや、喧噪とは無縁の清浄さが窺える。また、「此池幽閑人事少」（同・作品番号「二」）といった句から、世俗を離れた場所である様子も読み取れる。つまり、嵯峨院の庭園の特性は、嵯峨野の幽閑な空間特性を活かし、いかに世俗から離れた塵外の景観を創出するか、という観点で造営が行われたことである。そうしたことから、園池造営のための築堤などの大規模な土木工事を行いながらも、人工的要素をまるで感じさせない自然風の庭園が造り出されることとなったのである。

河陽離宮の立地した山崎は、現在の京都府の西南端で京都市の中心から南南西十五キロに位置する。東には山城盆地一帯、南には淀川と対岸の男山を臨む風光明媚な土地柄である。また、桓武朝の長岡京遷都以来、水陸交通の要衝としても著名であった。河陽離宮の敷地はそれ自体独立したのではなく、山崎駅の一区画を占めていたと考えられている。漢詩中には、オシドリが生息する池（「日煖鴛鴦水」第二章・第四節・作品番号「十二」）やヤナギの植栽（「風和楊柳煙」（同））など、離宮内の庭園についていくつか具体的な描写が挙げられ

るものの、ほとんど詠まれていない。一方で、周辺環境の描写は非常に多く、その大半を占めるのは淀川や男山である。なかでも特徴的なのは民衆生活を詠んだ部分である。例えば、「棹唄全聞辺俗語、漂歌半雜上都音」（同・作品番号「五」）や「老圃鋤遲日、商帆艤早霞」（同・作品番号「十」）などが挙げられる。もともと嵯峨朝の河陽離宮行幸は水生野遊獵、交野行幸といった目的を伴うもので、離宮に数泊することが多かった。嵯峨文壇の文学境としても機能した河陽は、都から隔絶されたある種の異境空間でもある。複数の漢詩中で、天皇らは自身を旅人になぞらえ、河陽離宮に宿泊した様子を詠んでいる。その中には、窓の外を吹く松風の音、サル鳴き声により旅愁がかきたてられる描写が複数みられ、都から離れた非日常的空間へ身を置く、心もとなさや侘しさこそが河陽離宮の有する独自のイメージであったと考えられる。そうした異境空間では、離宮内に囲い込まれた庭園よりはむしろ、淀川と男山を望む明媚な山崎の景観と、そこで活発に営まれた民衆生活こそが天皇にとって得難い興趣を誘い、詩宴の舞台、つまり他の離宮や邸宅の庭園と同等の機能を有していたといえることができる。

以上からわかるように、総じて平安京外の庭園は環境に依存した庭園造営が行われたといえる。嵯峨院、河陽離宮ともに遊獵の拠点という機能を有する京外離宮ではあるが、その庭園イメージは全く異なる。嵯峨院は幽深な環境で、そこに「仙境的空間」を築こうとしたものである。一方、河陽離宮はその景色の雄大さとともに、交通の要衝として非常に活発な市井の人々やその生活も眺め得る環境であり、天皇自身の統治世界を縮図的に見る構造であった。そうしたなか、両者に共通するのは、特徴的で魅力的な環境を生かして、庭園の内部意匠のみにとどまらない開かれた庭園を造成し、非日常的な空間を創り上げている点である。

三 小括

一般に、庭園は立地する土地の地勢や敷地面積といった外的要因に大きく左右されるものである。そこで本節では、立地の観点から京内の庭園と京外の庭

園に分類し、それぞれの特性を見てきた。その結果、両者には大きく違う点が見られた。

一点目は、神泉苑、冷然院、淳和院、閑院といった京内の庭園は、土地条件の制約のもとで創意工夫が試みられ、多様で個性的な庭園形態を生み出すに至ったことである。例えば、冷然院では湧水を活かして優れた水景を造成し、淳和院では湿地性池沼とその周辺植生を活かして閑居的な庭園景観を創出した。一方、嵯峨院、河陽離宮といった京外の庭園では、人工的要素はその環境をより引き立たせ、理想化するために用いられる傾向があり、庭園形態は環境依存的であったことが指摘できる。

二点目は、京内の庭園は条坊に規定された敷地内で完結し閉じられた空間であったのに対し、京外の庭園は開放的で開かれた空間であった点である。すなわち、京内の離宮・邸宅に関連する漢詩の中にはそれぞれの庭園の形態やそこで行われた遊興に関して具体的描写が多数ある。例えば、冷然院では庭園内の石組みや瀑布の様子について「兼山傑出院中陰、一道長泉曳布開」（第二章・第二節・作品番号「三二」）などと描写され、閑院では園内で行われた遊興について「吟詩不厭搗香茗、乘輿偏宜聽雅彈」（第二章・第六節・作品番号「二二」）と詠まれている。一方で、京外の離宮では、庭園内の景観を詳細に詠み込むのではなく、周辺環境にちなげ一体化させて詠み、むしろ周辺環境について詳細に詠み込む場合すらあった。このように漢詩に表された作者らの意識のあり方は、京内の閉じられた庭園と京外の開かれた庭園の違いを端的に表していると考えられる。

それぞれの庭園に関連する漢詩の分析から、平安時代初期の庭園形態においてそれぞれの庭園が固有の特徴を有していたことは明らかで、併せてその形態上の個性は京内・京外のいずれかに立地するかによるものが大きかったといえる。つまり、京内の庭園は限定された敷地と土地条件のもと、創意工夫により個性が生み出されたのに対し、京外の庭園は周辺の自然環境の特性に依存する開かれた構造を持つことにより個性が生み出されていたと考えられるのである。

第二節 漢詩からみた「天皇の庭」と「臣下の庭」

本節では「天皇」が所有する離宮と「臣下」が所有する邸宅に分類し、両者の間にはどういった違いがあるのかについて、漢詩のなかに詠み込まれた各々の庭園の使われ方、すなわち機能の違いを検討することにより明らかにしたい。

一 天皇の庭

— 神泉苑・冷然院・嵯峨院・河陽離宮の庭 —

まず、本研究で対象とする天皇の離宮は神泉苑・冷然院・嵯峨院・河陽離宮の四つである。これらを詳しく述べると、神泉苑は桓武天皇創始の累代の京内離宮、冷然院は嵯峨天皇創始の京内離宮、嵯峨院、河陽離宮も嵯峨朝に造営された京外離宮である。

- 神泉苑……………累代の京内離宮
- 冷然院……………嵯峨天皇の京内離宮
- 嵯峨院……………嵯峨天皇の京外離宮
- 河陽院……………嵯峨天皇の京外離宮

神泉苑は他の離宮と異なり、嵯峨朝では年中行事とそれ以外の行幸の二種類の利用があった。神泉苑には四季折々の自然の美しさが各所に備えられており、「釣魚」（軒低竿直臨）第二章・第一節・作品番号「二十六」や「観月」（春日侍神泉苑。賦得春月。応製。一首。）同・作品番号「二十九」、「避暑」（追涼天澤幸）同・作品番号「二十四」など、漢詩中には庭園で行われた遊興が描写される。さらに、庭園のなかには花宴の場となるウメやモモを植栽した一画、重陽節におけるキクの植栽や「登高」に利用した築山など、年中行事に利用した各種の要素も備えられており、神泉苑が多面的な利用方法に対応する構成となっていたことがわかった。つまり、天皇の累代の離宮である神泉苑は、豊富な湧

水など抜群に恵まれた立地と潤沢な経済力を駆使し、群を抜いた庭園規模に加え、多様な利用に対応する構成とすぐれた意匠を持ち合わせていたことがわかる。そして、第二章でも述べたとおり、複数の離宮を有する天皇にとってもこの離宮こそが天皇の権威の象徴としての役割を担っていたと言つてよいだろう。

同じく京内離宮である冷然院は、庭園形態のなかでも、特に多彩で工夫を凝らした「水景」を有した。そうしたことから、避暑などに利用されたようである。京内にありながら、深く掘り込まれた池には「兼山傑出院中險」（第二章・第二節・作品番号「三」）とあるように険しい石組が配され、「一道長泉曳布開」（同）とあるように一直線に水が落ちる瀑布を造るなど、造り込まれた景観を創出していた。冷然院に関連する漢詩には庭園内で遊興的行為を行っている描写はみえず、「泉石初看此地奇」（同・作品番号「二」）あるいは「景趣幽奇、煙霞勝絶」（同・作品番号「六」）と表現されるように、人々は靈妙で目新しい庭園意匠に感銘を受けている。すなわち、この庭園は主に眺めて楽しみながら詩を詠むという静的な使われ方がされていたといえる。それは、この離宮が嵯峨天皇の讓位後に後院として利用されたことからわかるように、神泉苑と比べてやや私的な趣をもつ離宮であったためと考えられる。

嵯峨院の利用に関しては、「君主倦熱来兹地、兹地清閑人事稀、池際追涼依竹影、巖間避暑隱松帷」（第三章・第三節・作品番号「二」）から、「避暑」に訪れたこと、「香茶酌罷日云暮」（同・作品番号「四」）から「喫茶」をしたことがわかる。しかし、漢詩中には利用に関する具体的な描写は少なく、「山院幽深無所有」（同・作品番号「二」）や「此地幽閑人事少」（同・作品番号「二」）といった表現が多くみられ、作者らは嵯峨院の人工的要素が極力排された、静かで清浄な様子を趣深く感じていることがわかる。嵯峨院に関連する漢詩中に、遊興についての描写がほとんどないことも、庭園のそうした在り方を示している。つまり、天皇は嵯峨院独自の庭園環境を求めて行幸し、そこで臣下と詩を詠み合い、嵯峨院庭園自体の空間や趣を楽しんだ。また、ここは北野遊獵の拠点であったが、嵯峨天皇の皇太子時代からの別荘でもあり、嵯峨天皇が晩年を過ごした場所でもある。この離宮は嵯峨天皇が最も好み、安らぎを得る場であった

とも考えられよう。すなわち、日常から離れ、癒しと安らぎを得る場所として、嵯峨野の環境を基盤として理想的な自然を再構成したのである。

河陽離宮に関連する漢詩には、遊獵の様子（「逐兔馬蹄承落日、追禽鷹翻弘輕風」〔第二章・第四節・作品番号「一六」〕）や民衆生活の様子（「老圃鋤遲日、商帆艤早霞」〔同・作品番号「一七」〕）、あるいは淀川や男山などの周辺環境（「水流長製天然帶」〔同・作品番号「四四」〕）が多く詠まれている。嵯峨文壇の文学境としても機能した山崎は、都から隔絶されたある種の異境空間で、河陽離宮行幸において、そうした非日常的環境に身を置く天皇らの視線の先には、自然環境だけでなく、淀川を往来する船乗りや周辺の田畑を耕す農夫など、常に民衆の姿があった。つまり、天皇は河陽自体を自身の統治世界の縮図として箱庭的に眺めており、河陽離宮は自らの統治世界を視覚的に再確認する場としての機能を担っていたと言えよう。

以上、天皇の所有した離宮の共通点としては、立地的にも恵まれ、経済的にも大規模な造営が可能であったため、規模が大きく庭園形態も個性的であったことが挙げられる。しかし、同じ天皇の離宮といえども、それぞれ異なる機能を有し、それに見合った構成と意匠を有していた。神泉苑は年中行事の儀場や臣下に宴を賜る場として使われ、天皇の権威の象徴でもあった。冷然院は京内の私的な離宮として先端的で人工的な水景を中心とした庭園構成を有し、嵯峨院は京外の私的な離宮として周辺環境を取り込んだ幽閑な自然風の庭園が造成された。河陽離宮は「河陽十詠」に象徴されるように嵯峨文壇の文学境であるとともに、統治世界を視覚的に再確認する場として整備された。これらの離宮においては、庭園を鑑賞し、感銘を受け、それ自体を漢詩に詠むといった、庭園自体の特性を、天皇やそこに招かれた臣下らが享受するのがその主たる使われ方であり、漢詩中には遊興に関連する描写がないことが指摘できる。なお、神泉苑は臣下に宴を賜る場としての機能を有したため、一部の漢詩において観月などの遊興的要素が詠み込まれている。

二 臣下の庭

— 淳和院・閑院の庭 —

次に、臣下の所有する邸宅として淳和院と閑院について見ていきたい。これらは臣下の邸宅として一括したものの、淳和院の所有者である大伴親王は嵯峨天皇の弟で第五十三代天皇となる人物なので、邸宅は土地条件の劣る右京にあっても、面積は四町あり、天皇の離宮である冷然院と変わらない規模を有する。一方で、閑院は藤原冬嗣の邸宅で平安京内左京において一町の敷地で造営された。

○淳和院……………大伴親王(淳和皇太弟)の邸宅

○閑院……………藤原冬嗣の邸宅

淳和院に関連する漢詩を見ると、「納涼儲式南池裏」〔第二章・第五節・作品番号「二一」〕からは「避暑」、「院裡滿茶煙」〔同・作品番号「二二」〕からは「喫茶」が行われたことがうかがえる。さらに「明月東山看漸出」〔同・作品番号「二五」〕は「観月」が行われたことを示す。なお、同・作品番号「二五」が詠まれた行幸があったのは弘仁四年八月乙未(十六日)であると考えられ、秋の月の興趣を味わうために行われた、平安時代における最も初期の行幸のひとつであったと推測できる。また、記録には船樂の記事が多く残り、行幸の際には大池で船樂が行われたことがわかる。つまり、淳和院行幸においては種々の遊興が行われ、訪れた天皇の接遇に重点が置かれていたことが推測できる。

閑院では、淳和院よりもさらに多くの遊興的描写がみられる。例えば、「夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字。忘製。一首。」〔第二章・第六節・作品番号「二一」〕から「納涼」、「提琴搗茗老梧間」〔同・作品番号「二二」〕から「喫茶」と「弹琴」が行われたことがわかる。また、「池亭一把釣魚竿」〔同・作品番号「二二」〕は、池亭において「釣魚」をしたことを表わしている。さらに「吟詩不厭搗香茗」〔同・作品番号「二二」〕では「喫茶」と「賦詩」が詠まれて

表 [3-2-1] 各邸宅の漢詩中における遊興の種類と回数 (神泉苑の年中行事に関連する漢詩を除く)

	神泉苑	冷然院	嵯峨院	河陽離宮	淳和院	閑院
納涼	1	0	1	0	2	3
喫茶	0	0	1	0	1	3
観月	1	0	0	0	1	0
弹琴	1	0	0	0	0	4
釣魚	1	0	0	0	0	3
計	4	0	2	0	4	13

※河陽離宮に関連する漢詩には河陽の景物である「河陽月」を詠み込んだものが複数あるが、観月に関する漢詩ではないため除外した。

いる。漢詩の中には他にも例があり、閑院に関連する漢詩で詠まれた遊興的要素の数は群を抜いている。また、そうした利用に応じて遊興に関連する施設も漢詩に詠まれている。例えば「横琴玳席倚岸居」(同・作品番号「三二」)にある釣台、「閑院花亭餞両官」(同・作品番号「四二」)にある花亭、「酌茗葉堂行径入」(同・作品番号「三二」)にある葉堂などである。特に、閑院においては、そこで行われる遊興に重きが置かれ、庭園がそれらに対応する接遇のための施設として造営されたことがわかる。

以上、臣下の邸宅を見てきたが、共通してみられたのは天皇に対する「接遇」の意識である。淳和院、閑院の漢詩から抽出した遊興に関連する箇所は

天皇の離宮と比べて多く、具体的には①納涼(淳和院・閑院)、②喫茶(淳和院・閑院)、③観月(淳和院)、④弹琴(閑院)、⑤釣魚(閑院)である(表「3-2-1」)。こうした臣下の庭園では、行幸に際して天皇を「接遇」することに重きが置かれ、そのための遊興的要素を園内各所に備えていたことが明らかになった。

三 小括

以上、嵯峨朝における天皇の離宮と臣下の邸宅の庭園について、漢詩に詠まれた要素をもとに、特に機能の観点から検討した。

天皇の離宮は、年中行事の儀場や臣下に宴を賜る場として利用した神泉苑、やや私的な趣を持ち讓位後に後院として使われる冷然院、嵯峨天皇が最も親しみ心安らぐ離宮であった嵯峨院、周辺環境を統治世界の箱庭的空間としてみる河陽離宮と言いつつ表せるように、それぞれの離宮が異なる特質と役割を有し、時節や目的に応じて使い分けられていたことが推測できる。つまり、天皇の離宮は、潤沢な経済基盤のもとに、恵まれた地勢を十二分に生かした造営が行われ、それぞれ個性的な庭園景観を創出することにより、天皇による各種の利用目的を満たしていたのである。

こうした多様な利用のあった天皇の離宮であるが、概して関連する漢詩には遊興的行為がほとんど詠まれていないことが興味深い。神泉苑では臣下に宴を賜る場としての機能を有していたことから遊興的描写が一部みられるものの、むしろ庭園を眺め、雰囲気に浸り、漢詩を詠み合うといった庭園固有の特性を、天皇自身、あるいはそこに召された臣下らが享受する使われ方をしたことが明らかになった。

一方で、臣下の邸宅では天皇の離宮に比べて「弹琴」や「釣魚」など、遊興的要素が圧倒的に多く詠み込まれており、園内にはそれに必要な施設も備えられていたことが明らかである。嵯峨朝において、文事の場合は、宮廷から天皇の離宮へ、さらには上層貴族の邸宅へと拡大していった^{二四〇}。そうしたなかで、行幸に際しては、臣下の邸宅の庭園は天皇を「接遇」するための装

置として機能していたことがわかり、庭園内には天皇に対する接遇を念頭におき、複数の施設が設えられていたと推測できる。こうした意識は、「林泉の花もまた春（天皇の恩恵）に与ることができた」という意の詩句「林花再得遇陽春」（第二章・第五節・作品番号「二二」）に象徴されるように、臣下邸宅に通底するものであったと考えられる。また、こうした接遇意識を端的に表しているのが「喫茶」である。例えば、「院裡滿茶煙」（同・作品番号「三三」）などが挙げられ、臣下の邸宅に関連する漢詩中には淳和院において前述の一度、閑院においては「提琴搗茗老梧間」（第二章・第六節・作品番号「二一」）や「吟詩不厭搗香茗」（同・作品番号「二二」）、「酌茗菓堂行徑入」（同・作品番号「二三」）といった記述がある。ちなみに、天皇の京内離宮である神泉苑においても、天皇が空海を招いた際の漢詩に「喫茶」が一度詠まれており、この当時、喫茶は重要な客人を接遇する際に行われるものであったことから、臣下の邸宅においてより「喫茶」について詠まれたと考えられる。

以上より、天皇の所有する複数の離宮はそれぞれが異なる役割を有しており、例えば、神泉苑は年中行事の儀場として、あるいは唯一の「苑」として別格の存在感を有していた。平安京内の「院」である冷然院の庭園は、人工的に造り込まれた先端的な水景を有し、庭園形態に重点が置かれた庭園であったと考えられる。平安京外の「離宮」であった河陽離宮は離宮内の庭園は必ずしも重要ではなく、統治世界を視覚的に再確認する拠点として利用された。恵まれた土地条件や豊富な財政基盤のもとに、そうした役割に適した形態が練られ、それぞれ個性的な庭園を有するに至ったと考えられる。これらの庭園では遊興的行為はあまり行わず、主にそれぞれの庭園固有の特性を天皇自身、あるいはその場に招かれた臣下らが享受する使われ方をした。一方で、臣下の邸宅では天皇の離宮と比較すると狭小な敷地規模でありながら、行幸に備えて、内部には接遇を意識した施設や意匠が多く設えられた。天皇の離宮に関連する漢詩よりも遊興に関連する描写（喫茶、観月、釣魚など）が明らかに多く詠み込まれている。同じく臣下の邸宅といえども、皇太弟の所有する淳和院よりも、より身分の低い臣下である藤原冬嗣の閑院において遊興に関連する描写が多く見られたことは、天皇に対する接遇意識がより強か

った結果といえよう。

すなわち、天皇の離宮と臣下の邸宅の庭園の間には、土地条件や経済基盤などの格差から庭園形態に差異が生まれたことはもちろんであるが、天皇に対する接遇機能の有無に起因する庭園の構成や意匠の差異こそがその本質であったのである。

終章

本研究では、平安時代初期の平安京の自然環境や政治社会状況ならびに発掘調査や文献資料からみた平安京の邸宅庭園の概要を整理したうえで、同時代、特に嵯峨朝の庭園について、関連する漢詩の読解・検討を中心として個別的な特性を明らかにした。さらにその成果に基づいて、当時の庭園の形態・機能について、立地および所有者属性の観点から比較検討し、平安時代初期庭園の在り方について考察した。本章ではそれらの成果をとりまとめ、研究の課題と展望を示したい。

本研究で対象とする嵯峨朝から淳和・仁明朝にかけて、嵯峨天皇の領導のもと唐風文化が隆盛し、漢詩文の全盛期を迎えた。そうしたなかで、嵯峨朝では文学の意義を国家経営に結びつけ、そこに価値と不朽性を見出そうとする経國的文学観を基盤として、政治と文遊は同質のものと考えられていた^{二四}。こうした嵯峨朝の行幸では天皇と臣下が詩歌を詠み交わす「君臣唱和」と、それにより互いの関係性を確認・補完する「君臣和楽」が実現されており、天皇の離宮や貴族の邸宅の庭園はその舞台として多くの漢詩に詠み込まれた。平安時代初期の庭園は、高位貴族が造営した庭園もいくらか含まれるものの、その中心を成すのは天皇に関連するものであった。また、平安京は河川の流域面積が大きい扇状地であったため地下水量がかなり多く、豊富な湧水を有したという環境特性も、平安時代初期の庭園の構成に大きな影響を与えたと考えられる。以上のような平安時代初期の諸相を踏まえたいうえで、主に漢詩の分析に基いて得られた神泉苑、冷然院、嵯峨院、河陽離宮、淳和院、閑院の庭園の個別的な特性は以下のとおりである。

神泉苑は平安遷都直後から桓武天皇が造営を開始し、累代の禁苑として別格の存在感を有していた。平安京大内裏の東南隅に近接し、水に恵まれた平安京の中でも特に豊かな湧水を有する恵まれた地勢のなか八町という最大の規模を誇ったこの庭園は、公的な年中行事の儀場ならびに臣下に宴を賜るなどの私的な行幸の舞台という二つの役割があり、どちらにも十分に対応できる多様な

形態を有した。いずれも漢詩に詠まれた、年中行事たる花宴の儀場としてウメやモモを植栽した一画や、重陽節の儀式の一部である登高に利用した低い築山などは、神泉苑の特徴的な構成要素といえる。四季を通じて美しく、必要な機能に対応する施設・植栽を各所にほどこし、それらを綿密に管理していたと考えられる。この庭園の造営や維持にこれほどまでに注力したのは、神泉苑自体が天皇の権威の象徴であったからに他ならない。

冷然院は、嵯峨天皇が平安京左京に造営した京内離宮で、讓位後には後院として利用されたことからわかるように、嵯峨天皇自身の私的な離宮の側面が強かった。神泉苑に次ぐ水条件に恵まれた土地に造営されたことから、多様な水景を備えていた。瀑布や遣水、澄んだ水を湛えた深い池があり、ほとりには険しい岩場を思わせる石が立てられていた。このように、冷然院の庭園は、地勢を活かしつつ、水景を中心とした意匠を人工的につくり込み、京内にありながら神仙世界をみるような霊妙な庭園景観を実現したものであった。

嵯峨院は嵯峨天皇の東宮時代から、平安京西郊の嵯峨野に営まれた離宮で、在位中は北野遊獵の拠点、あるいは密宴の場となり、最晩年には後院となった。嵯峨野は平安京郊外の「野」の名所として名高く、なかでも嵯峨院の立地する北嵯峨の一面は東・北・西の三方を山並みに囲まれ、山中から流れだす谷水に恵まれた地勢であった。そこに築堤を中心とする大規模な造成工事を行い、神仙郷とも呼ぶべき理想的な空間を実現しようとしたと考えられる。嵯峨院を詠んだ漢詩には、遊興的要素を示す表現は少なく、自然に恵まれたこの地の静けさや脱俗的な雰囲気が強調される。それを端的に表しているのは、漢詩中の「音」の描写である。嵯峨院の幽深で静かなイメージは、漢詩の中で、しんとした静けさのなか、そこに響く音に耳を澄ませる姿勢によって示され、より強調されていた。すなわち、嵯峨院は嵯峨野の環境を基盤に人工的要素を排除し、嵯峨天皇にとつての理想的な自然を再構成した庭園であったということができよう。

河陽離宮は、平安京の西南郊の山崎に営まれた京外離宮で、水生野遊獵および交野行幸の拠点でもあった。河陽離宮の敷地はそれ自体独立したものはなく、山崎駅の一区画を占めていたと考えられている。漢詩中にはオシドリを生

息する池など、離宮内の庭園について、いくつかの具体的な描写がみられるもののほとんど詠まれていない。一方で、周辺景観の描写は豊かで、その大半を占めるのは眼前の淀川や対岸の男山であり、なかでも特徴的なのは、船の往来や市井の人々の営みを詠んだ部分であった。すなわち、河陽離宮は敷地内に意匠を凝らした庭園を造営するというよりむしろ、周辺景観を含めた庭園とみなすことができ、活発な市井の生活をもその一部として取り込み、天皇自身の統治世界を縮図的に見るといった構造を有する庭園であったと考えられる。

淳和院は、低湿な地形ゆえに都城造営があまり進まなかった平安京右京に立地した大伴親王（淳和皇太弟）の邸宅で、親王が淳和天皇として即位した後離宮となった。その庭園について、漢詩中には広大な池、険しい築山、梨庭などの構成要素が詠み込まれている。また、池にはハスやヒシが群生し、水辺はアシや草叢が広がるなど鬱蒼とした風情であったことも漢詩から読み取れ、非常に特徴的である。すなわち、淳和院は低湿な右京の土地条件の悪さを逆手に取り、自然池と湿地帯の植生を活かすことで、当時としては例をみない閑居的情趣を漂わせた庭園景観を創出したことがわかった。また、漢詩中には喫茶、観月など、遊興に関する事項が比較的多く詠み込まれ、記録中にはきらびやかな船楽の記事が多く残ることから、行幸に際して、天皇に対する接遇が強く意識されたことが明らかとなった。つまり、閑居的なイメージを有する庭園形態を基盤としながらも、一定の場面では舟楽などの華やかなイメージが演出されており、そうしたあり方も接遇の場としても機能したこの庭園の特質であったといえよう。

閑院は、平安京左京に営まれた藤原冬嗣の邸宅である。釣魚などをする池を有したことが漢詩からわかるが、池の具体的な描写がないことから、池の意匠については特筆すべきものがなかったのではないかと考えられる。一方で、マツ、ヤナギ、タケ、アオギリ、ノイバラ、ナシの植栽、釣台や池亭、花亭、薬堂などの施設について多く詠み込まれており、閑院は一町という敷地の狭さから、池や築山といった大規模な構成要素よりも、植栽の多様性や施設の充実な重点を置いて造営されたことがうかがえる。また、納涼、喫茶、観月、弹琴、釣魚などの遊興について、最も多く詠み込まれている。閑院は比較的狭小な敷

地でありながら、行幸に際しては、多様な遊興を提供できる庭園の在り方が模索されたと考えられる。

以上のとおり、漢詩を中心に平安時代初期の離宮・邸宅の庭園を読み解いた結果、一括して語られがちな平安時代初期の庭園でも、形態や機能にそれぞれ差異があり、庭園の特徴や見どころについても全く異なることが明らかになった。そして、そうした差異は立地する土地の特性、並びに所有者の立場に基づく造営目的などが複合的に関わりあって生み出されるものであったと考えられる。そうした点に着目した比較検討の結果は以下のとおりである。

まず立地条件、すなわち京内か京外かの観点から比較すると、京内に立地する庭園は、漢詩中に庭園内の形態や庭園の使われ方に関する具体的な描写が多くみられ、敷地内で完結する閉じられた空間であったことがうかがえる。また、所与の土地条件のもとで創意工夫する傾向が生じ、結果的に多様な個人的な庭園形態を生み出していったと考えられる。一方、京外に立地する庭園を詠んだ漢詩を見ると、嵯峨院における庭園内の景観を周辺景観につなげ一体化させた描写のほか、河陽離宮においては周辺景観を主体に詠んでおり、庭園が敷地内にとどまらず開かれた空間であったことが明らかになった。庭園としての人工的な整備はその環境をより引き立たせ、理想化するために用いられる傾向があり、京外の庭園の形態は環境依存的であったといえる。すなわち、京内の庭園の場合、神泉苑や冷然院、淳和院や閑院では立地条件の利点を活かすとともに、その制約を創意工夫することによって、プラスに転化して個性を生み出し、平安京外に立地する嵯峨院と河陽離宮の庭園では、周辺景観をはじめとした立地する場所の個性を際立たせる環境依存的な庭園を創出したといえる。

次に、所有者の側面、すなわち邸宅を天皇の離宮と臣下の邸宅に分類して庭園を考えてみると、年中行事の儀場あるいは臣下に宴を賜る空間としても機能した神泉苑で詠まれた漢詩に若干の例外はみられるが、天皇の離宮では遊興的行為の描写がなく、むしろ庭園を眺め、その庭園景観に感銘を受け、漢詩を詠み合うといった庭園固有の特性を天皇自身、あるいは召された臣下らが享受する使われ方をしたことがわかった。一方で、臣下の邸宅では天皇の離宮に比べて、弹琴や釣魚など、遊興的要素が圧倒的に多く漢詩のなかに

表 [終章—1] 対象邸宅それぞれの特徴 (形態・機能) 一覧

	立地	所有者属性	性格	漢詩からみえる特色 (上:形態/下:機能)	発掘調査成果など
神泉苑	京内 (左京)	天皇	桓武天皇からの累代の禁苑	①自然池を造成した池(州浜を有す) ②小高く連なるような築山・遣水・瀑布 ③充実した施設(水亭・龍池閣・秋恵楼・釣台) ④年中行事に合わせた花木やキク・フジバカマなどの植栽 ①年中行事の儀場(花宴・重陽節など) ②密宴の舞台 ③天皇の権威を象徴する場	苑池の一部(自然池を造成)・礫敷きの州浜・北東から池に流れ込む流路・クヌギの厚板を水平に固定した船着き場とみられる施設・東西方向の掘立柱列
冷然院	京内 (左京)	天皇	嵯峨天皇の私的な趣の離宮⇒退位後の後院	①豊かな湧水を有し、池・瀑布・遣水などを有した ②優れた水景を中心とした庭園構成 ③人工的な意匠を有した ①密宴の舞台 ②嵯峨天皇の趣向を反映させた私的な離宮の側面が強い京内邸宅	景石を伴う池状遺構(水の落口や汀線、洲浜)・遣水遺構・遣水の一部と思われる溝(SD90)
嵯峨院	京外 (西郊)	天皇	東宮時代からの離宮⇒京外離宮⇒晩年の後院	①池・遣水・瀑布などの水景、山並み(借景)を有した ②幽深、静寂、脱俗のイメージを有した庭園であった ①遊猟の拠点 ②密宴の舞台 ③日々の癒しを得るための私的な側面の強い京外離宮	大沢池・名古屋池・遣水遺構とみられる素堀蛇行溝(大沢池合流地点付近のみに石材を用いた修景)・石組柵や植床などの施設
河陽離宮	京外 (西南郊)	天皇	京外離宮	①園内…マツ・ヤナギ・花が植栽され、池にはオシドリがいる ②園外…淀川、男山などの自然環境、山崎の市井の人々の生活ぶり ⇒①は必ずしも重要ではなく、②を含めた庭園であった ①河陽行幸 ②交野行幸 ③水生野遊猟の拠点 ④統治世界を縮図的に確認する場	礎石建物跡(SB43)・石組み溝(SD42)・流路(SR01)・流路の橋跡(SX16)
淳和院	京内 (右京)	臣下	大伴親王の邸宅⇒淳和天皇即位後の離宮	①自然植生を活かした庭園であった ②湿地性池沼を整備した池・険しい築山・林丘状の後林・梨庭などを有した ③庭園意匠は人工的に造り込まず、地勢を活かし、寂寥感を演出した ①行幸(主に四・八月の納涼が主) ⇒行幸においては天皇の接遇が意識され、喫茶・観月などの遊興が行われた。	池から道祖大路に水を流す木桶・西廂付南北棟の大型建物・鑄造施設・池の埋土・流路
閑院	京内 (左京)	臣下	藤原冬嗣の邸宅	①池を有し、釣魚などが行われた ②狭小な敷地のため、大規模構成要素(池・築山など)よりも、植栽の多様性や施設の充実が重点が置かれた ③薬堂、花院、池亭が設えられていた。 ①行幸(例:冬嗣とその家人の叙任)⇒天皇の接遇が意識され、釣魚、弹琴、喫茶、詩歌などの遊興が行われた ②その他詩宴	なし

詠み込まれており、園内にはそれに必要な施設が備えられていた。これは、庭園が行幸に際しての天皇を接遇するための装置として意識され、造営されていたことを示す。すなわち、天皇の離宮と臣下の邸宅の庭園の形態の違いは、前者が天皇自らによる空間と時間の享受を目的としていたのに対し、後者は天皇に対する接遇を強く意識したことによる。換言すれば、庭園に課された機能の差異が構成や意匠といった形態を規定していたのである。

本研究では、主に漢詩の読解・検討を通じて、平安時代初期、特に嵯峨朝の庭園は決して画一的なものではなく、それぞれが個性的な形態と固有の機能を有していたこと、ならびにそうした個性は、京内と京外のいずれに立地するか、また、天皇の離宮か臣下の邸宅かという所有者の属性によって規定されることを明らかにすることができた。こうした本研究の成果が、研究の蓄積が十分とは言えなかった平安時代初期庭園史に一定の貢献をできたと思えば望外の喜びである。一方で、本研究では平安時代初期の庭園の姿を探るにあたって、概ね嵯峨朝に絞って研究を進めたが、同様の手法で、その前後の時代における庭園の形態・機能を検討することが今後の課題である。前後の時代の庭園との比較によって、当該時代の庭園の特質がより明らかになることが期待されるからである。本研究がより意義深いものとなるよう上記のような観点で研究を進めていきたいと考えている。

- 一 森蘊、『平安時代庭園の研究』、桑名文星堂、一九六四年
- 二 本研究では、平安時代前期（桓武朝～醍醐朝）の内、桓武朝（七八一―一八〇六）～仁明朝（八三三―八五〇）を平安時代初期とおく。
- 三 森蘊、『寝殿造庭園の立地的考察』、養徳社、一九四五年
- 四 森蘊、『日本庭園史話』、NHKブックス（カラー版）C15、日本放送出版協会、一九八一年
- 五 小野健吉、『平安時代庭園史の概観と研究の現状』、三〇四頁、『研究論集一七 平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―（奈良文化財研究学報第八六冊）』、独立行政法人国立文化財機構、二〇一一年
- 六 小野健吉、『平安時代初期における離宮の庭園―神泉苑と嵯峨院をめぐる―』、一三四―一四二頁、『研究論集一七 平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―（奈良文化財研究学報第八六冊）』、独立行政法人国立文化財機構、二〇一一年
- 七 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版、二〇〇二年
- 八 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年
- 九 後藤昭雄、『平安朝漢文学論考』補訂版、勉誠出版、二〇〇五、三〇〇～四九四頁
- 一〇 後藤昭雄、『平安朝漢文学論考』補訂版、勉誠出版、二〇〇五、三〇〇～四九四頁
- 一一 後藤昭雄、『平安朝漢文学論考』補訂版、勉誠出版、二〇〇五、三二頁
- 一二（財）古代学協会・古代学研究所、『平安京提要』、角川書店、一九九四年
- 一三 北村優季、『都の民衆と災害・都市問題』、一五八―一八二頁（西山良平、鈴木久男〔編〕、『恒久の都平安京（古代の都3）』、吉川弘文館、二〇一〇年所収）
- 一四 寒河旭、『地震の日本史』、中公新書、二〇〇七年
- 一五 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版、二〇〇二年
- 一六 『下鴨神社 糺の森』、四手井綱英〔編〕、ナカニシヤ出版、一九九三年
- 一七 『京都の歴史』（第1巻平安の新京）、京都市（編）、京都市史編纂所、一九二〇年
- 一八 村尾次郎、『（人物叢書）桓武天皇』、吉川弘文館、一九八七年
- 一九 春名宏昭、『（人物叢書）平城天皇』、吉川弘文館、二〇〇九年
- 二〇 川崎庸之、『平安の文化と歴史（川崎庸之歴史著作選集・第三巻）』、東京大学出版、一九八二年
- 二一 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年
- 二二 小野健吉、『岩波日本庭園辞典』、岩波書店、二〇〇四年
- 二三 檀原考古学研究所〔編〕、『発掘された古代の苑池』、学生社、一九九〇年
- 二四 河角龍典、『歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化―遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築―』、京都歴史災害研究第一号、一四〇～一六頁
- 二五 塚本常雄、『京都市域の変遷と其地理学的考察』、地理論叢一輯、一九三二年、一五五～二一九頁
- 二六 卯田強、『GISで見た平安京の原地形』、新潟大学災害復興科学センター年報、二〇〇七年
- 二七 山田邦和、『前期平安京』の復元、『都市・前近代都市論の射程（仁木宏編）』、青木書店、二〇〇二年
- 二八 卯田強、『GISで見た平安京の原地形』、新潟大学災害復興科学センター年報、二〇〇七年
- 二九 北村優季、『平安京の災害史 都市の危機と再生』、吉川弘文館、二〇一二年、四〇〇～四八頁
- 三〇 森蘊、『寝殿造庭園の立地的考察』、養徳社、一九四五年、一〇二頁
- 三一 山本武夫、『気候の語る日本の歴史 そして文庫四』、アイノア、一九七九年
- 三二 吉野正敏、『歴史に気候を読む』、学生社、二〇〇六年、四六～五〇頁
- 三三 保立道久、『歴史のなかの大地動乱―奈良・平安の地震と天皇―』、岩波書店、二〇一二年八月、四～六頁
- 三四 谷岡能史、『近畿地方の文献史料から見た七～一〇世紀の暖候期における気候』、地理学評論八三一、二〇一〇年、四四～五九頁
- 三五 北村優季、『都の民衆と災害・都市問題』、一五八～一八二頁（西山良平、鈴木久男〔編〕、『恒久の都平安京（古代の都3）』、吉川弘文館、二〇一〇年所収）、一五八～一八二頁

三六 保立道久、『歴史のなかの大地動乱―奈良・平安の地震と天皇―』、岩波書店、二〇〇二年八月、四七～九七頁

三七 保立道久、『歴史のなかの大地動乱―奈良・平安の地震と天皇―』、岩波書店、二〇〇二年八月、四七～九七頁

三八 保立道久、『歴史のなかの大地動乱―奈良・平安の地震と天皇―』、岩波書店、二〇〇二年八月、四七～九七頁

三九 中堀謙二、『深泥池の花粉分析』（深泥池池学術調査団編、『深泥池の自然と人』、京都市文化観光局、一九八一年所収）

四〇（財）古代学協会・古代学研究所、『平安京提要』、角川書店、平成六年、二七―四八頁

四一 吉田博宣、『京の森』、『下鴨神社 糺の森』、四手井綱英（編）、ナカニシヤ出版、一九九三年

四二 森本幸裕、『糺の森の樹木学』、『下鴨神社 糺の森』、四手井綱英（編）、ナカニシヤ出版、一九九三年

四三 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版、二〇〇二年

四四 仲隆裕、藤井英二郎、浅野二郎、『寝殿造庭園における植栽の特性に関する一考察』、千葉大園学報四十四、一九九一年、一七三～一七九頁

四五 仲隆裕、藤井英二郎、浅野二郎、『寝殿造庭園における植栽の特性に関する一考察』、千葉大園学報四十四、一九九一年、一七三～一七九頁

四六 川崎庸之、『平安の文化と歴史（川崎庸之歴史著作選集・第三巻）』、東京大学出版、一九八二年、六九―七〇頁

四七 古代学協会、古代学研究所（編）、『平安時代史事典（上）』、角川書店、一九〇〇―一九九一年

四八 蘇我馬子の邸宅に関しては、『日本書記』の推古三十四年五月戊子の朔丁未（二十日）に、『夏五月戊子朔丁未。大臣薨。仍葬于桃園墓。大臣則稻目宿禰之子也。性有武略、亦有辨才。以恭敬三寶。家於飛鳥河之傍。乃庭中開小池。仍興小嶋於池中。故時人曰嶋大臣。』との記録がある。

四九 小野健吉、『岩波日本庭園辞典』、岩波書店、二〇〇四年、一三三～一三四頁

五〇 ①「飛鳥京跡苑池遺構―飛鳥京跡第140次調査―」現地説明会資料、二〇〇一年三月 ②「飛鳥京跡苑池遺構第2次調査―現地説明会資料、二〇〇一年三月 ③「飛鳥京跡苑池遺構第3次調査―飛鳥京跡第145次調査―」現地説明会資料、二〇〇一年七月 ④「京跡苑池遺構第4次調査―飛鳥京跡第147次調査―」現地説明会資料、二〇〇二年二月

五〇 小野健吉、『岩波日本庭園辞典』、岩波書店、二〇〇四年、二六五～二六七頁

五一 小野健吉、『岩波日本庭園辞典』、岩波書店、二〇〇四年、六七三～六七四頁

五二 高瀬要一、『平城京の古代庭園』、日本庭園学会誌11、二〇〇三年、二七～四三頁

五三 田中哲雄、『平城京、宮の苑池』、六七～九二頁（榎原考古学研究所「編」、『発掘された古代の苑池』、学生社、一九九〇年）

五四 双ヶ岡山荘の記事としては、以下の①②が挙げられる。これらの記事から、双ヶ岡山荘には淳和天皇、あるいは嵯峨上皇の行幸があった。また、②「愛―賞水木。―」から庭園が造営されていたことがわかる。

①天長七年（八三〇）閏十一月壬申（二日）「天皇幸北野。便幸天納言清原真人夏野之雙岡宅。主人率親屬二拜舞。侍臣已下山城国掾已上、賜祿有差。」（『日本後紀』）

②承和元年（八三四）四月辛丑（二十一日）「先太上天皇降臨右大臣清原真人夏野双岡山荘。愛―賞水木。大臣奉獻殷勤。用展情禮。是日勅増―授大臣男息三人榮爵、從五位下瀧雄從四位下、正六位上澤雄、秋雄並從五位下。」（『続日本後紀』）

五五 長岡之第（小野石子邸）については、次のような記事が挙げられる。弘仁七年（八一六）二月辛酉（二十五）「幸典待從三位小野朝臣石子長岡之第。命文人賦詩。授石子正三位。无位高賀茂朝臣伊豫人從五位下、即石子之女也。賜五位已上衣被。」（『日本後紀』）

五六 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年、四二～四五頁

五七 鈴木久男、『平安京の邸宅と庭園』、二二～三三頁（西山良平、鈴木久男（編）、『恒久の都平安京（古代の都3）』、吉川弘文館、二〇一〇年所収）

五八 白川静、『字統』、平凡社、二〇一〇年、七三頁

五九 森蘊、『日本庭園史話』、NHKブックス（カラー版）C15、日本放送出版協会、一九八一年

六〇 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年

六一 ①森蘊、『寝殿造系庭園の立地的考察』、奈良国立文化財研究所編、一九六二年。

六二 森蘊、『平安時代庭園の研究』、桑名文星堂、一九四五年

六三 村井康彦、『平安京と京都』、三一書房、一九九〇年十二月、六十五～六十九頁。

六三 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

六四 小野健吉、『平安時代初期における離宮の庭園―神泉苑と嵯峨院をめぐって―』、『奈良文化財研究所学報八六冊 平安時代庭園の研究』、二〇一一年、一三四～一四二頁

六五 林屋辰三郎、『IV 都城文化の成立 3 神泉苑と嵯峨院』、『京都の歴史―平安の新京』京都市「編」、学芸書林、一九七〇年、三八〇～三八七頁

六六 吉野秋二、『神泉苑の誕生』、『史林』八八―六、史学研究会、二〇〇五年

六七 ①井実充史、『初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―』、『福島大学教育学部論文集』七三、福島大学教育学部、二〇〇二年、六八～七六頁。②井実充史、『嵯峨賦詩に描かれた神泉苑の自然―君臣和楽の象徴としての風景―』、『古代研究』34、早稲田古代研究会、二〇〇一年、八一～九二頁

六八 悲秋文学とは、楚で成立し自然の移ろいに人生の悲哀を詠む文学のこと。六九表「2-1-1」の記録の出典は以下の①②である。

①『日本後紀』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

②『続日本後紀』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 続日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

七〇 吉野秋二、『神泉苑の誕生』、『史林』八八―六、史学研究会、二〇〇五年十一月、一九～二二頁。

七一 吉野秋二、『神泉苑の誕生』、『史林』八八―六、史学研究会、二〇〇五年

七二 滝川幸司、『天皇と文壇―平安前期の公的文学』、和泉書院、二〇〇七年二月、一六～一七頁

七三 漢詩の原文、読み下し文、大意については「序―2―2」に記した文献から引用する。

七四 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一三七五頁。

七五 後藤昭雄「王朝の漢詩」、『日本文学講座9 詩歌1（古典編）』大修館書店、一九八八年

七六 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

七七 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一三六七頁

七八 「五言。春日侍宴。応詔。一首。」（正五位近江守采女朝臣比良夫）論道興

唐儻。語徳共虞隣。冠周埋尸愛。駕殷解網仁。淑景蒼天麗。嘉氣碧空陳。葉緑園柳月。花紅山桜春。雲間頌皇澤。日下沐芳塵。宜獻南山壽。千秋衛北辰。『懷風藻』

七九 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一八四五頁

八〇 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一三八四頁

八一 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一三九〇～一三九一頁

八二 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一八四四～一八五五頁

八三 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一七二四頁

八四 井実充史、『初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―』、『福島大学教育学部論文集』七三、福島大学教育学部、二〇〇二年、六八～七六頁

八五 莊子が夢に胡蝶となり、さめて後に人間である自分が夢に胡蝶となったのか、それとも胡蝶である自分が夢に人間となったのか、判断に苦しんだという故事をさす。『日本古典文学大系69（懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹）』、小島憲之（校注）、岩波書店、一九六四年、四八六頁

八六 後漢の郭泰が朋友の季膺と同舟した故事を指す。（懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹）『小島憲之校注、岩波書店、一九六四年、四八六頁』

八七 第二章・第五節・作品番号「五」を参照のこと。

八八 井実充史、『嵯峨賦詩に描かれた神泉苑の自然―君臣和楽の象徴としての風景―』、『古代研究』34、早稲田古代研究会、二〇〇一年、八一～九二頁

八九 太田静六、『寢殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年、五十八～五十九頁

九〇 村井康彦、『平安京と京都』、三一書房、一九九〇年十二月

九一 太田静六、『寢殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年、六十頁

九二 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

九三 「萩の花 尾花葛花 なでしこの花 をみなえし また藤袴 朝顔の花」（山上憶良『万葉集』）から、フジバカマは秋の七草に数えられる。

九四 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

九五 村井康彦、『平安京と京都』、三一書房、一九九〇年十二月、六十二頁

九六 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年、六七～八四、一一五～六頁

九七 離宮の一種。内裏の本宮に対する予備的な別宮。のちには讓位後の御所に充てられることが多くなり、更に江戸時代以降、禁裏・仙洞が固定するに伴い、上皇不在の間の仙洞の称となった。『日本国語大辞典』

九八 宮中で天皇などが主催される遊び。天皇や宮廷の高級貴族によつて奏せられる管弦と歌（催馬歌）や朗詠を指すことが多い。おんあそび。『日本国語大辞典』

九九 興慶宮とは、中国唐代に長安の東のはずれにあつた離宮の名。玄宗（六八五～七六二）が親王時代の住居あとに造営した宮殿である。『日本国語大辞典』

一〇〇 太田は『寝殿造の研究』のなかで、第一期（創建年（嵯峨朝）～一回目の罹災（貞観一七年一月二八日）・第二期（再建（元慶四年頃）～二回目の罹災（天曆三年一月一四日）・第三期（再建（天曆八年頃）～三回目の罹災（天禄元年四月二日）・第四期以降（再建（不明）～四回目の罹災（長和五年七月二〇日）の四期に分けて考察した。なお、冷然院（冷泉院）は四回目の罹災後にも再建され、鎌倉時代なつても存続するが、重要施設とはいえず、規模も縮小している。

一〇一 承和九年七月庚戌（一八日）「是日冷然院西釣台東山辺松樹一株、其高丈五尺許者、無故自折。」

一〇二 仁寿二年一月庚午（三日）「帝朝中宮於冷然院 群臣扈從者、賜宴於東釣台、五位已上尽云」

一〇三 『日本紀略』応和元年（九六一）三月庚辰（五日）「天皇御釣台、召文人有桜花宴、花光水上浮、召擬文章生於池中嶋奉試、題流鶯遠和琴、勅題也。」

一〇四 所京子、「平安前期の冷然院と朱雀院」「御院」から「後院」へ、「史窓」二八、京都女子大学史学、一九七〇年、一～一七頁

一〇五 井実充史、「初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―」、「福島大学教育学部論文集」73、福島大学教育学部、二〇〇二年十二月、六八～七六頁

一〇六 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年十一月、六二頁

一〇七 承和九年七月庚戌（一八日）「是日冷然院西釣台東山辺松樹一株、其高丈

五尺許者、無故自折。」

一〇八 表「2―2―1」の記録についての出典は以下の①②である。

①『日本後紀』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

②『続日本後紀』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 続日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

一〇九 従来の説では平安京遷都後に桓武天皇が行幸を行った離宮「近東院」が冷然院の前身であつた可能性が高く、嵯峨朝に冷然院として拡張・整備が進められたと考えられている。しかし、太田は「近東院」の名称が消えた直後から「神泉苑」の名称が現われることや、唐風名への改称が不自然ではない時代背景から鑑みると、近東院は神泉苑の前身であるという説を提示している。

一一〇 弘仁一四年（八二三）四月甲午（二〇日）「帝遷冷然院。」（『類聚国史』）

一一一 室松岩雄（校訂編輯）、『河海抄・花鳥餘情・紫女七論』、國學院大學出版部、一九〇八年

天曆八年（九五四）三月乙酉（二一日）「冷然院、大炊御門南、一條北、堀河西、大宮東四町、累代後院也。：八年三月十一日、改冷然院為冷泉院。」

一一二 漢詩の原文、読み下し文、大意においては「序―2―2」に記した文献から引用する。

一一三 小島憲之、『日本古典文学大系（六九）』、岩波書房、一九六四年、二〇六頁

一一四 井実充史、「初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―」、「福島大学教育学部論文集」73、福島大学教育学部、二〇〇二年十二月、六八～七六頁

一一五 「題画詩の発生」、蔵持しのぶ、「国語と国文学」六五（一一）、一九八八年十二月、一七～三六頁

①本朝題画詩の嚆矢である「青山歌」「清涼殿画壁山水歌」との間に類似性があること。

②題画賦である「遊天台山賦」孫綽（『文選』）との間に表現的類似性があり、「潤底松」、「瀑布水」、「水中影」の詩題も「遊天台山賦」から創出されたとみられること。

一一六 井実充史、「初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―」、「福島大学教育学部論文集」73、福島大学教育学部、二〇〇二年十二月、六九～七〇頁

- 二七 滝川幸司、『天皇と文壇―平安前期の公的文学』、和泉書院、二〇〇七年二月
- 二八 滝川幸司、『天皇と文壇―平安前期の公的文学』、和泉書院、二〇〇七年二月
- 二九 井実充史、『初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―』、『福島大学教育学部論文集』73、福島大学教育学部、二〇〇二年十二月、六九―七〇頁
- 三〇 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年
- 三一 二〇〇一～二〇〇二年度の二条城内試掘・発掘調査で、平安時代前期から後期に至る景石群を伴う池状遺構と遣水遺構が発掘された。(出典は「史跡旧二条離宮(二条城)」、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概要、二〇〇一年―一五)
- 三二 『増補史料大成(一) 歴代宸記』、臨川書店、増補史料大成刊行会編、一九六五年
- 三三 井実充史、『初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―』、『福島大学教育学部論文集』73、福島大学教育学部、二〇〇二年十二月、七〇頁
- 三四 『嵯峨王朝の文学―『文華秀麗集』の位置―』、後藤昭雄、『国文学 解釈と教材の研究』二〇(七)、学灯社、一九七五年六月、四二―七頁
- 三五 『日本歴史地名辞典』、藤岡謙二郎(編)、東京堂出版、一九八一年、一五三頁
- 三六 井上満郎、『葛野大堰と賀茂改修』、古代文化23―1、一九七一年
- 三七 井上満郎、『葛野大堰と賀茂改修』、古代文化23―1、一九七一年
- 三八 金田章裕、『平安初期における嵯峨野の開発と条里プラン』、追手門学院大学文学部紀要 12、一九七八年、四十七―六十七頁
- 三九 『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告―大沢池北岸池域復原整備事業に伴う調査―』、舊嵯峨御所大覚寺、一九九七年三月、一五七頁
- 四〇 春名宏昭、『院』について―平安期天皇 太上天皇の私有財産形―、『日本歴史』538、一九九三年三月、一―十八頁
- 四一 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年
- 四二 森蘊、『寝殿造系庭園の立地的考察』、奈良国立文化財研究所編、一九六二年
- 四三 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年
- 四四 小野健吉、『平安時代初期における離宮の庭園―神泉苑と嵯峨院をめぐる―』、『奈良文化財研究所学報八六冊 平安時代庭園の研究』、二〇一一年3

月、一三四―一四二頁

- 三五 仲隆裕、藤井英二、浅野二郎、『寝殿造住宅における植栽の特性に関する一考察』、千葉大学園芸学部学術報告44、一九九一年、一七三―一七九頁
- 三六 井実充史、『初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―』、『福島大学教育学部論文集(人文科学部門)』73、二〇〇二年十二月、六七―七六頁

三七 山口敬太・川崎雅史、『平安京周辺部の別業における地形的圍繞の空間的特性』、土木学会論文集D、64(4)、二〇〇八、五九八―六〇七頁

三八 『今昔物語集(本朝世俗部) 一』、阪倉篤義、本田義憲、川端善明(校注)、新潮社、二〇〇二年、一一四―一一八頁

三九 表「2―3―1」については以下の①②から出典する。

① 『日本後紀』：黒板勝美(編)、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

② 『続日本後紀』：黒板勝美(編)、『新訂増補国史大系 続日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

③ 『日本紀略』：黒板勝美(編)、『新装版新訂増補国史大系 日本紀略』、吉川弘文館、二〇〇七年七月

④ 漢詩の原文、読み下し文、大意については「序―2―2」に記した文献から引用する。

⑤ 『日本古典文学大系69(懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹)』、小島憲之(校注)、岩波書店、一九六四年、二〇五頁

⑥ 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

⑦ 仲隆裕、藤井英二、浅野二郎、『寝殿造住宅における植栽の特性に関する一考察』、千葉大学園芸学部学術報告44、一九九一年、一七五頁

⑧ 井実充史、『初期平安京の文学空間―神泉苑・嵯峨院・冷然院と嵯峨朝文壇の表現―』、『福島大学教育学部論文集(人文科学部門)』73、二〇〇二年十二月、六七―七六頁

⑨ 中国古典選26『唐詩選(二)』、高木正一、朝日新聞社、一九七八年二月、二七七―二七八頁

⑩ 『日本歴史地名大系(二六)―京都府の地名―』、平凡社、一九八一年、二六八―二六九頁

⑪ 『国風暗黒時代の文学』中(下) 1、小島憲之、塙書房、一九八五年、一九六―一九七頁

⑫ 『国風暗黒時代の文学』中(中)、小島憲之、塙書房、一九七九年、一四

二四頁ノ『日本古典文学大系69 (懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹)』、小島憲之(校注)、岩波書店、一九六四年、二七八頁

一四九 吉川一郎、『大山崎叢考』、創元社、一九五三年、一〇四一、一一一、三五五頁

一五〇 高橋美久二、『古代交通の考古地理』、大明堂、一九九六年、一五五〜一六六頁

一五一 吉川一郎、『大山崎叢考』、創元社、一九五三年、一〇四一、一一一、三五五頁

一五二 古閑正浩、『京外離宮の造営と都城制―竹原井頓宮と山崎駅・河陽離宮をめぐって』、『都城 古代日本のシンボリズム 飛鳥から平安京へ』、青木書店、二〇〇七年、二九九〜三〇一頁

一五三 井実充史、『河陽文学の初発 『凌雲集』河陽関連作品の考察』、福島大学教育学部論集(人文科学部門) 71、二〇〇一年十二月、五九〜七二頁

一五四 古閑正浩、『京外離宮の造営と都城制―竹原井頓宮と山崎駅・河陽離宮をめぐって』、『都城 古代日本のシンボリズム 飛鳥から平安京へ』、青木書店、二〇〇七年、二九九〜三〇一頁

一五五 大山崎町埋蔵文化財調査報告書第20集 山城国府跡第49次調査 (TYMS-NT5地区) 発掘調査報告、大山崎町教育委員会、二〇〇〇

一五六 表「2-4-1」の記録については以下の①②から出典する。

①『日本後紀』：黒板勝美(編)、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

②『続日本後紀』：黒板勝美(編)、『新訂増補国史大系 続日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

一五七 高橋美久二、『古代交通の考古地理』、大明堂、一九九六年、一五五〜一六六頁

一五八 木下良、『古代道路研究の現況―道路調査ハンドブック』特集に寄せ

て、『古代交通研究』第十号、二〇〇〇年、十七頁

木下は、「(前略)：例えば、山城国山崎駅を転用した河陽離宮・山崎国府の建物に楼があったのは知られているが、『菅家文草』によれば陽道明石駅や讃岐国河内駅にも駅楼は在った。河内駅では楼上に「三通の鼓」があったので

鼓楼であると考えられているが、(後略)」と述べており、駅楼は山崎駅に特有の建築様式ではなく、当時のその他の駅にも造られたことが指摘されている。

一五九 『日本歴史地名大系(二八)―大阪府の地名―』、平凡社、一九八六年二

月

一六〇 漢詩の原文、読み下し文、大意については「序―2―2」に記した文献から引用する。

一六一 井実充史、『河陽文学の初発 『凌雲集』河陽関連作品の考察』、福島大学教育学部論集(人文科学部門) 71、二〇〇一年十二月、五九〜七二頁

一六二 井実充史、『河陽文学の初発 『凌雲集』河陽関連作品の考察』、福島大学教育学部論集(人文科学部門) 71、二〇〇一年十二月、六七頁

一六三 榎村寛之、『野行幸の成立―古代の王権儀礼としての狩猟の変質―』、ヒストリア141、大阪歴史学会、一九九三年、一一四〜一三三頁

一六四 榎村寛之、『野行幸の成立―古代の王権儀礼としての狩猟の変質―』、ヒストリア141、大阪歴史学会、一九九三年、一一四〜一三三頁

一六五 井実充史、『河陽文学の初発 『凌雲集』河陽関連作品の考察』、福島大学教育学部論集(人文科学部門) 71、二〇〇一年十二月、五九〜七二頁

一六六 中国戦国時代の齊の公族であった孟嘗君が、秦・昭王に殺されそうになった時、狗盗と鶏鳴を得意とする二人の食客の働きで帰ることができた故事を踏まえて詠まれている。(『日本国語大辞典』参照)

一六七 『日本古典文学大系69 (懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹)』、小島憲之(校注)、岩波書店、一九六四年、四八三頁

一六八 吉川一郎、『大山崎叢考』、創元社、一九五三年、一〇四一、一一一、三五五頁

一六九 『日本古典文学大系69 (懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹)』、小島憲之(校注)、岩波書店、一九六四年、四八四頁

一七〇 嘉祥三年(八五〇)九月丁酉(二十三)

『進参議左衛門督正四位下藤原朝臣長良階從三位、先是、七月の大水により山崎橋断つ、帝以爲らく、河橋壞れ易し、水に依りて浸齧す。害無き所より、其

れ便地を得る。詔す中納言安倍朝臣安仁、源朝臣弘、参議滋野朝臣貞主、伴宿

祢善男等に遣はし、山崎に就き以て利害を察する。其れ便地を求む。乃ち橋を

置くを定む。』(『日本文徳天皇実録』)

一七一 『国風暗黒時代の文学』中(下) I、小島憲之、塙書房、一九八五年、一九六二〜一九六八頁

一七二 『国風暗黒時代の文学』中(下) I、小島憲之、塙書房、一九八五年、

二二〇六～二二〇七頁

一七三 井実充史、「河陽文学の初発 『凌霄集』河陽関連作品の考察」、福島大学教育学部論集（人文科学部門）71、二〇〇一年十二月、五九～七二頁

一七四 井実充史、「河陽文学の初発 『凌霄集』河陽関連作品の考察」、福島大学教育学部論集（人文科学部門）71、二〇〇一年十二月、五九～七二頁

一七五 ①山本崇、『淳和院考―平安前期の院について―』、立命館史学（二一十）、一九九九年、一～二十六頁

②太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年

一七六 ①西田直二郎、『京都史蹟の研究』、吉川弘文館、六四―一〇二頁、一九六一年

②山本崇、『淳和院考―平安前期の院について―』、立命館史学（二一十）、一九九九年、一～二十六頁

③太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年

一七七 『淳和院跡発掘調査報告 平安京右京四条二坊』、関西文化財調査会編、関西文化財調査会、一九九七年

一七八 大江篤、『日本古代の神と霊』、臨川書店、二〇〇七年

一七九 ①『国史大辞典』、国史大辞典編集委員会編、ネットアドバンス、二〇一〇年

②『日本歴史地名大系』、平凡社（編）ネットアドバンス、二〇〇六年

一八〇 太田静六、『寝殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年

一八一 森繹、『寝殿造系庭園の立地的考察』、奈良国立文化財研究所編、一九六二年

一八二 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

一八三 西田直二郎、『京都史蹟の研究』、吉川弘文館、一九六一年

一八四 西山良平・藤田勝也〔編・著〕、『平安京と貴族の住まい』、京都大学学術出版、二〇一二年

一八五 『作庭記』より

「沼様は石をたつるをはまれにしてここかしこの入江にあしかつみあやめかきつはたやうの水草をあらしめてとりたてたる島などはなくて水のおもてを眇々とみすへきなり沼といふは溝の水の入集れるたまり水也しかれば水の出入の所あるへからず水をおもひかけぬところよりかくしいるへきなり又水おもてをたかくみすへし」

一八六 西山良平、『西三条第と淳和院（南池院）』発表資料、二〇一二年十一月二十日に実施された「平安京の〈居住と住居〉研究会」において発表され

た資料による。

一八七 『平安京 附第31回京都市指定・登録文化財』、京都市文化財ボックス第28集、七十六～七十七頁

一八八 抽出した記事はそれぞれ以下の文献から出典する。

①『日本後紀』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

②『続日本後紀』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 続日本後紀』、吉川弘文館、一九七二年四月

③『文徳天皇実録』：黒板勝美（編）、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七二年四月

④『日本紀略』：黒板勝美（編）、『新装版新訂増補国史大系 日本紀略』、吉川弘文館、二〇〇七年

一八九 漢詩の原文、読み下し文、大意については「序―2―2」に記した文献から引用する。

一九〇 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一四〇三頁

一九一 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一四〇三～一四〇七頁

一九二 西山良平・藤田勝也〔編・著〕、『平安京と貴族の住まい』、京都大学学術出版、二〇一二年／飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年

一九三 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一五〇一頁

一九四 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一五一～一五二頁

一九五 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一四〇八頁

一九六 『国風暗黒時代の文学』中（中）、小島憲之、塙書房、一九七九年、一四〇一～一四〇二頁

一九七 唐の玄宗が梨の木を植えてある庭園で、自ら音楽を教えたという故事から、俳優の社会。劇壇。演劇界。特に歌舞伎役者の世界。『日本国語大辞典』より

一九八 『新日本古典文学大系（17） 竹取物語・伊勢物語』、岩波書店、一九九

七年一月

一九九 『新釈漢文大系(99) 白氏文集(三二)』岡村繁 明治書院 一九八八年、一八五～一八六頁

二〇〇 『新釈漢文大系(99) 白氏文集(三二)』岡村繁 明治書院 一九八八年、一八五～一八六頁『贈内』「漠漠蘭臺新雨地、微微涼露欲秋夫、莫對月明思往事 損君顔色減君年」(通釈：雨上がり地の一面に、苔が覆い広がり、秋になろうとする時節に、白露がうつすらとおりにいる。ところで、そなたは月光にやたら往時を偲はない方がよい。物思いは、そなたの容色を損ない、そなたの寿命を縮めるものだから。)

二〇一 森蘊、『寢殿造系庭園の立地的考察』、奈良国立文化財研究所編、一九六二年

二〇二 『本朝無題詩全釈二』、本間洋一「注釈」、新典社、一九九三年、三七八～三七九頁

二〇三 『日本古典文学大系69(懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹)』小島憲之(校注)、岩波書店、一九六四年、四一七頁

二〇四 『新潮日本古典集成(第二九回)「今昔物語集」本朝世俗部二』坂倉篤義 本田義憲、川端善明「校」、新潮社、一九八九年、一七六～一八〇頁

二〇五 国際日本文化研究センターのデータベース「中古京師内外地図全」より引用

二〇六 柿村重松「註」、『本朝文粹註釈』下冊、内外出版、一九二三年、一六二〇～一六三三頁

二〇七 『新釈漢文大系110(詩経 上)』石川忠久、明治書院、一九九七年、二二～二三頁「卷耳」より「陟彼崔嵬 我馬虺隤 我姑酌彼金罍 維以不永懷」(通釈：彼の険しく高い山に登れば、我が馬は疲れ果てる。我しばし彼の金の樽に酒を酌み、尽きぬうれいを忘れよう。)

二〇八 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年、六三頁

二〇九 高橋知奈津、「屏風絵にみる平安時代の「山里」、奈良文化財研究所学報、二〇一一年

二一〇 高橋知奈津、「屏風絵にみる平安時代の「山里」、奈良文化財研究所学報、二〇一一年

二一一 (財)古代学協会・古代学研究所、『平安京堤要』、角川書店、一九九四年、一三〇～一三二頁

三二 太田静六、『寢殿造の研究』、吉川弘文館、一九八七年、五三〇～六十頁

三三 野口孝子、『日本歴史』六七四、「閑院内裏の研究」、二〇〇四年七月、一～十六頁

三四 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年十二月、六三～四頁

三五 蘇明明、「唐の文人喫茶と平安王朝の喫茶趣味 唐の茶詩と平安漢詩に見える喫茶を通じて」、『日本環境論講座』第五号、京都大学大学院人間・環境学研究科日本文化環境論講座、二〇〇三年三月

三六 ①村井康彦、『茶の湯の歴史』、淡交社、一九六九年七月、四〇～六四頁

②村井康彦、『茶の文化史』、岩波書店、一九七九年六月、十一～六頁

三七 小川後楽、『茶の文化史—喫茶趣味の流れ』(株)文二総合出版、一九八〇年三月、七三～一九頁

三八 太田は次の史料を例に挙げている。
『中歴』「閑院 三 二条南、西洞院西、冬嗣大臣家、又右大将朝光家、金岡暈水石云云、公季卿伝領、本主備後守至忠、」

三九 太田は、以下の記録から第二期閑院の庭園について推察した。
『中右記』嘉保二年(二〇九五)十一月庚午(七日)

「主上釣殿に御す。箏を弾くを予しむ。余興未だ尽かず。依りて船に乗らむと仰せらる。箏を吹くを予しむ。藏人宗仲笛を吹く。東馬頭師隆朝臣童舟に棹さす。鳳池中島を廻る。一廻の間に急ぎ蘇合を七遍吹く。又一廻、秋風楽を二遍、」

三〇 飯淵康一、『平安時代貴族邸宅の研究』、中央公論美術出版、二〇〇五年二月

三一 区分の詳細を以下に示す。

第一期：【仁安二年(一一六七)～承元二年(一一〇八) 焼亡】

第二期：【順徳朝～後深草朝(建長元年(一一四九) 焼亡】

第三期：【後深草朝～正元元年(一一五九)】

三二 黒板勝美(編)、『新訂増補国史大系 日本後紀』、吉川弘文館、一九七一年四月

※以下『日本後紀』を参考とする記事は、同書から引用する。
三三 滝川幸司、『天皇と文壇 平安前期の公的文学』、和泉書院、二〇〇七年二月、一四頁

三四 鈴木景二、『日本古代の行幸』、『ヒストリア』125、大阪歴史学会、一

九八九年十二月、二六六～五十五頁

三三三 漢詩の原文、書き下し文、大意については「序―2―2」に記した文献から引用する。

三三六 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年十二月、六三～六四頁

三三七 蘇明明、「唐の文人喫茶と平安王朝の喫茶趣味―唐の茶詩と平安漢詩に見える喫茶を通して」、『日本環境論講座』第五号、京都大学大学院人間・環境学研究科日本文化環境論講座、二〇〇三年三月五十八～九頁

三三八 村井康彦、『茶の文化史』、岩波書店、一九七九年六月、十四～六頁

三三九 『日本古典文学大系69（懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹）』、小島憲之（校注）、岩波書店、一九六四年、二一四頁

三三〇 川合康三（訳）、『白楽天詩選（上）』、岩波文庫、二〇一二年七月

三三一 仲隆裕、「庭園史からみた王朝文学―寝殿造庭園における植栽」、『平安文学と隣接諸学―王朝文学と建築・庭園』、竹林舎、二〇〇七年五月

三三二 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年十二月

三三三 飛田範夫、『日本庭園の植栽史』、京都大学学術出版会、二〇〇二年、六三～六四頁

三三四 蘇明明、「唐の文人喫茶と平安王朝の喫茶趣味―唐の茶詩と平安漢詩に見える喫茶を通して」、『日本環境論講座』第五号、京都大学大学院人間・環境学研究科日本文化環境論講座、二〇〇三年三月五十八～九頁

三三五 仲隆裕、「茶の湯と庭園 第一回嵯峨天皇と喫茶の宴」、『茶道雑誌』、二〇一〇年一月、一一九～一二八頁

三三六 小川後楽、『茶の文化史―喫茶趣味の流れ』、(株)文二総合出版、一九八〇年三月、七三～一二九頁

三三七 仲隆裕、「茶の湯と庭園 第一回嵯峨天皇と喫茶の宴」、『茶道雑誌』、二〇一〇年一月、一一九～一二八頁

三三八 小川後楽、『茶の文化史―喫茶趣味の流れ』、(株)文二総合出版、一九八〇年三月、九十二頁

三三九 後藤昭雄、『平安朝漢文学論考』補訂版、勉誠出版、二〇〇五年、三一頁

三四〇 後藤昭雄、『平安朝漢文学論考』補訂版、勉誠出版、二〇〇五年、三一頁

三四一 後藤昭雄、『平安朝漢文学論考』補訂版、勉誠出版、二〇〇五、三〇～四九頁

謝辞

本研究をまとめるに当たり、多くのご指導とご支援を頂きました、指導教官の和歌山大学環境学部教授 小野健吉先生に深謝致します。単位取得退学後も、親身にご指導頂きまして誠に有難うございました。

そして、博士論文を提出するにあたり、主査を引き受けて頂きました京都大学大学院人間・環境学研究科教授 玉田芳英先生に厚く御礼申し上げます。さらに、副査を引き受けて頂きました京都大学大学院人間・環境学研究科教授 増井正哉先生、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授 馬場基先生に感謝致します。

また、多くの資料を見せていただき、漢文のご指導を頂きました前京都大学大学院人間・環境学研究科教授 西山良平先生に深く感謝致します。

また、お時間を割いて公聴会にお越しいただいた先生方にもお礼申し上げます。たくさんのご指導をいただき誠に有難うございました。